

高槻市

井 尻 遺 跡

一般国道170号(十三高槻線)道路築造事業に伴う埋蔵文化財調査

2015年3月

公益財団法人 大阪府文化財センター

高槻市

井 尻 遺 跡

一般国道170号(十三高槻線)道路築造事業に伴う埋蔵文化財調査



1 753 溝 土器出土状況 東から



2 78 土墳墓 南東から

卷頭カラー2



3 77 土墳墓出土 白磁皿・青白磁盒子



4 78 土墳墓出土 青磁碗

序 文

本書は、当センターが高槻市井尻1丁目にて平成25年度から平成26年度に行った、一般国道170号（十三高槻線）道路築造事業に伴う埋蔵文化財調査の発掘調査報告書です。

周辺の高槻市東部は、北に北摂山地が迫り、南に淀川が流れる狭小な平野ながら、古くから山陽道・西国街道などの幹線道が通り、淀川の水運と共に交通の要衝として知られていました。

紀貫之が「土佐日記」の中で、土佐から京への途次で宿泊したと記す「鞠殿」は高槻市道鶴町にその名を留め、淀川の河原の「鞠殿の葦原」は、長らく宮内庁雅楽部へ楽器の材料として納める葦の産地でした。

北の山裾には古代寺院の梶原寺跡や、東大寺の創建瓦を供給した梶原瓦窯跡があり、東隣には中世の瓦器の編年の基本資料が出土した事で知られる上牧遺跡があります。

現在も国道171号や名神高速道路、東海道新幹線、JR京都線、阪急電車など、交通の大動脈が通る地ですが、高槻市中心街を通る国道171号が慢性的な渋滞を引き起こしていることから、その解消のため、一般国道170号のバイパスである十三高槻線の築造が計画されました。

それに先立ち、井尻1丁目から道鶴町5丁目にかけての試掘調査がなされ、結果として井尻1丁目の範囲内で豊富な遺構・遺物が発見され、遺跡の存在が確認されました。その結果を受け、平成25年度に新規発見の遺跡として、「井尻遺跡」と命名されました。

そして同年11月から、井尻遺跡として初の本調査が行われました。

その結果、平安時代後期から鎌倉時代の土器が大量に出土し、中世土器研究に欠かせぬ資料を提供する事となりました。また、それらを残した人々は、いまだ低湿で耕地開発も不十分であったこの地に居住しながら、中国産の青磁や白磁を所有する財力を有していたようです。

立地から見て、その財力は、淀川での水運により培われたのではないかと想像も膨らみます。

また、度重なる洪水に見舞われながらも、弥生時代中期には人々がこの地に進出し、古墳時代には水田も造成し、徐々に灌漑や排水のシステムを整備しながら、鎌倉時代には現代に残る水路・耕地につながる耕作地を開発していた事も明らかにできました。

今回の調査の成果が、学問的に重要な資料となるにとどまらず、そうした人々の努力の歴史を現代に伝えるものとなれば幸いです。

最後に、調査にあたり、大阪府茨木土木事務所、大阪府教育委員会、高槻市教育委員会などの関係諸機関ならびに、ご指導・ご助言を賜った多くの方々に感謝申し上げるとともに、今後とも当センターの調査事業に、より一層のご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成27年3月

公益財団法人 大阪府文化財センター
理事長 田 邊 征 夫

例 言

- 1、本書は、大阪府高槻市井尻1丁目に周知された井尻遺跡で「井尻遺跡13-1」として行われた調査の発掘調査報告書である。
- 2、発掘調査は「一般国道170号（十三高槻線）道路築造事業に伴う井尻遺跡埋蔵文化財調査業務委託（その1）」として、大阪府茨木土木事務所と公益財団法人大阪府文化財センターとの間で、平成25年10月8日付で委託契約を締結し、平成25年10月8日から平成26年6月30日の委託期間で、平成25年11月1日から平成26年5月30日まで現地調査を行った。
遺物整理事業は「一般国道170号（十三高槻線）道路築造事業に伴う井尻遺跡埋蔵文化財発掘調査業務委託（その1）遺物整理」として平成26年6月2日に委託契約を締結し、平成26年6月2日から平成27年3月20日の委託期間で、平成26年6月2日から平成26年12月26日まで行い、平成27年3月の本報告書刊行をもって作業を完了した。
- 3、調査は以下の体制で実施した。
[発掘調査] 平成25年度～平成26年度
事務局次長 江浦洋、調整課長 岡本茂史、調査課長 岡戸哲紀、調査第一課長補佐（平成25年度）
調査第二課長補佐（平成26年度） 金光正裕、副主査 岡本圭司（平成25年11月～平成26年4月）、
副主査 三宮昌弘
[遺物整理] 平成26年度
事務局次長 江浦洋、調整課長 岡本茂史、調査課長 岡戸哲紀、調査第二課長補佐 金光正裕、
副主査 三宮昌弘、専門員 片山彰一 [写真担当]
- 4、本書で用いた現場写真は調査担当者が撮影した。遺物写真撮影に関しては、写真室が担当した。
- 5、現地調査の実施及び遺物整理にあたっては、大阪府教育委員会、高槻市教育委員会など関係諸機関、大阪府茨木土木事務所など関係各位をはじめ、多くの方々からご指導ならびにご協力を賜った。記して謝意を表したい。
- 6、調査の実施にあたっては、自然科学分野からの分析として、植物珪酸体・珪藻・花粉分析を株式会社古環境研究所に、蛍光X線法・薄片法胎土分析を株式会社パレオ・ラボに委託した。その結果は第4章に掲載した。
- 7、本書の編集・執筆は三宮が行った。
- 8、調査に関わる資料は、公益財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用される事を希望する。

凡 例

- 1、本書で用いる標高は全て東京湾平均海面（T.P. 値）を使用している。単位はmで表記している。
- 2、本書に掲載した全体図・遺構図などの座標は全て世界測地系に基づく平面直角座標系第VI系を使用している。単位は全てmで、表記は省略してある。
- 3、方位は全て座標北で表示する。真北は座標北より西に $6^{\circ}49'$ 、磁北は東に $0^{\circ}12'$ 振っている。
- 4、発掘調査及び遺物整理については当センターの『遺跡調査基本マニュアル』に準拠した。
- 5、土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2007年度版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人 日本色彩研究所色彩監修を使用した。
- 6、遺構番号・出土状況の土器番号は種類に関係なく通し番号で付け、現地調査時点から変更していない。種類名はその後変更したのものもある。挿図・表内と、写真図版キャプションでは「トレンチ」の略称として「tr.」を使用する。
- 7、挿図の縮尺は、基本、全体図が400分の1、遺構平面図が $200 \cdot 50 \cdot 20$ 分の1、遺構断面図が40分の1、調査区壁土層断面図は縦40分の1、横200分の1、遺物は4分の1である。遺物断面は、須恵器・黒色土器が黒色、瓦器・瓦質土器が灰色、他は白抜きとした。
- 8、遺物実測図に関しては、強い屈曲は実線、弱い屈曲は開け幅1mm以上の二つ開き破線で、調整境は、開け幅0.5mmで、異種調整境は一つ開き破線、同種調整境は二つ開き破線で示す。軸・煤などの範囲は点線で示す。推定ライン・断面の粘土接合痕なども点線で示す。
- 9、写真図版の遺物写真は、縮尺は合わせていない。写真右下の番号はその遺物の挿図番号である。
- 10、参考文献は第5章「総括」の末尾に記した。

目 次

巻頭カラー図版

序文

例言

凡例

目次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 経緯と経過	1
第2節 調査の方法	1
第2章 位置と環境	8
第1節 地理的環境	8
第2節 歴史的環境	8
第3章 調査成果	10
第1節 基本層序	10
第1項 堆積状況の概要と問題点	10
第2項 各層の様相	10
第3項 基本層序まとめ	16
第2節 各遺構面の成果	16
第1項 土器の分類基準	16
第2項 第2-1面	24
第3項 第3-1面	24
第4項 第3-3・4面	29
第5項 第4-1・2面	54
第6項 第5・6面	93
第7項 第8・9面	102
第4章 自然科学分析	104
第1節 分析の目的と成果	104
第2節 井尻遺跡(その1) 発掘調査に伴う花粉・珪藻・植物珪酸体分析	105
第3節 井尻遺跡(その1) 発掘調査に伴う蛍光X線・薄片法胎土分析	115
第5章 総括	123

挿図目次

図1 遺跡分布図	2	図31 第4-2面新 4トレンチ全体図	56
図2 試掘トレンチ配置図	3	図32 第4-1・2面(1~3トレンチ)、 第4-2面(4~7トレンチ) 全体図	57
図3 調査区位置図	4	図33 753溝 土器群3	59
図4 トレンチ割図	5	図34 753溝土器群3 瓦器	65
図5 地区割図	6	図35 753溝 土器群3 黒色土器	66
図6 調査区断面模式図	11	図36 753溝 土器群3 土師器小皿・坏	68
図7 1・3トレンチ北東壁・南西壁、 1・2トレンチ境 断面	14	図37 753溝 土器群3 須恵器・白磁・ 緑釉陶器	69
図8 3・5トレンチ北西壁 断面	17	図38 753溝 土器群3 土師器甕・羽釜・他	71
図9 4・5トレンチ北東壁・南東壁、 6トレンチ東~南東壁、6・7ト レンチ境 断面	19	図39 753溝 土器群1	72
図10 7トレンチ筋掘 断面	22	図40 753溝 土器群1・2・他 出土遺物	73
図11 第3-1面 全体図	25	図41 753溝 土器群2	74
図12 第3-3・4面 全体図	27	図42 753溝 下層	74
図13 80ピット・81土坑	30	図43 753溝 下層 出土遺物	75
図14 80ピット・81土坑・877溝 出土遺物	31	図44 283溝	76
図15 44~46溝	32	図45 283溝 出土遺物	77
図16 44~46溝 断面	33	図46 768溝 断面	78
図17 877・878溝	35	図47 768溝 土器群1	78
図18 1143・1144溝	36	図48 768溝 土器群1 出土遺物	80
図19 77土墳墓	37	図49 771溝	81
図20 77・78土墳墓 出土遺物	38	図50 771溝 出土遺物	82
図21 78土墳墓	39	図51 401・408溝	83
図22 930溝	40	図52 401・408溝 断面	84
図23 930溝 土師器	44	図53 950~955溝	86
図24 930溝 黒色土器・瓦器・瓦質土器	45	図54 950~955溝 断面	87
図25 1161土坑	47	図55 第4-2面541ピット・709ピット・ 1373土坑・952溝・954溝 出土遺物	88
図26 1161土坑 出土遺物	47	図56 709ピット	88
図27 1339井戸	49	図57 1178土器1	89
図28 1339井戸 土器	50		
図29 1339井戸 木製品	52		
図30 第4-1面(4~7トレンチ) 全体図	55		

図 58	1373 土坑	90	図 66	1071 土坑	100
図 59	第 5・6 面 (1~3 トレンチ)、 第 6 面 (4~7 トレンチ) 全体図	91	図 67	1071 土坑 出土遺物	101
図 60	1105 土坑	94	図 68	第 9 面 4 トレンチ全体図	103
図 61	1105 土坑 出土遺物	95	図 69	サンプリング地点図	105
図 62	第 6 面古 1 トレンチ全体図	96	図 70	井尻遺跡における主要珪藻ダイア グラム	113
図 63	1475・1476 溝合流部	97	図 71	井尻遺跡における植物珪酸体分析結果	114
図 64	1475・1476 溝合流部 出土遺物	98	図 72	井尻遺跡における花粉ダイアグラム	114
図 65	1475・1476・1477 溝 出土遺物	99	図 73	元素分布図	122

表目次

表 1	図 7 土色・土質	15	表 14	768 溝 土器群 1 土師器小皿属性表	79
表 2	図 8 土色・土質	18	表 15	図 52 401・408 溝 土色・土質	85
表 3	図 9 土色・土質	20	表 16	分析対象一覧	105
表 4	図 10 土色・土質	22	表 17	井尻遺跡における植物珪酸体分析結果	110
表 5	930 溝 全体破片数集計表	41	表 18	井尻遺跡における花粉分析結果	111
表 6	930 溝 黒色土器・瓦器属性表	41	表 19	井尻遺跡における珪藻分析結果	111
表 7	930 溝 「精良な胎土」の土師器 属性表	43	表 20	分析対象一覧	116
表 8	1161 土坑 破片数集計表	48	表 21	胎土中の微化石類と砂粒物の特徴	119
表 9	1339 井戸 瓦器属性表	50	表 22	胎土中の粘土および砂粒組成の特徴	119
表 10	753 溝 土器群 3 破片数集計表	60	表 23	岩石片の起源と組み合わせ	120
表 11	753 溝 土器群 3 黒色土器・瓦器 属性表	61	表 24	蛍光 X 線分析結果	120
表 12	753 溝 土器群 3 「精良な胎土」 の土師器 属性表	62			
表 13	283 溝 破片数集計表	75			

図版目次

図版 1

- 1 4 tr. 第 2-1 面 北東から
- 2 1 tr. 第 3-1 面 南西から

図版 2

- 1 2 tr. 第 3-1 面 南西から
- 2 3 tr. 第 3-1 面 南から

図版 3

- 1 4 tr. 第 3-1 面 北東から
- 2 5 tr. 第 3-1 面 南西から

図版 4

- 1 6 tr. 第 3-1 面 北東から
- 2 7 tr. 第 3-1 面 南西から

図版5

- 1 1 tr. 第3-3面 南西から
- 2 2 tr. 第3-3面 南西から

図版6

- 1 3 tr. 第3-3面 北東から
- 2 3 tr. 第3-3面 南西から
- 3 4 tr. 第3-4面 南西から

図版7

- 1 5 tr. 第3-4面 南西から
- 2 6 tr. 第3-4面 北東から

図版8

- 1 7 tr. 第3-4面 南西から
- 2 3 tr. 第2-1面 北東から
- 3 6 tr. 第1-2面 1125大型土坑
東から
- 4 2 tr. 第3-3面 43侵食痕内
第3-4面 北東から

図版9

- 1 4 tr. 第3-4面 77土墳墓 南東から
- 2 4 tr. 第3-4面 78土墳墓 南東から

図版10

- 1 3 tr. 43侵食痕内 第3-4面 東から
- 2 3 tr. 43侵食痕内 第4-2面 東から
- 3 4 tr. 77土墳墓 断面 南東から
- 4 4 tr. 77土墳墓 遺物出土状況 南東から
- 5 4 tr. 78土墳墓 断面 北西から
- 6 4 tr. 81土坑 南東から
- 7 4 tr. 46溝 断面 北東から
- 8 4 tr. 45溝 断面 南西から

図版11

- 1 5 tr. 930溝 北東から
- 2 930溝 土器群1~3出土状況 北東から
- 3 930溝 土器群1 北東から
- 4 930溝 土器群3 南東から
- 5 5 tr. 44溝 断面 南西から

図版12

- 1 4 tr. 46溝 断面 南西から
- 2 6 tr. 1161土坑 南東から

- 3 6 tr. 1339井戸 上層断面 南から

- 4 1339井戸 上層 遺物出土状況 南から

- 5 1339井戸 上層 遺物出土状況 南から

- 6 1339井戸 下層 断面 南から

- 7 1339井戸 下層 遺物出土状況 南から

- 8 1339井戸 完掘状況 南から

図版13

- 1 7 tr. 第3-4面 877溝土器群1
南から
- 2 7 tr. 877・878溝 断面 南東から
- 3 3 tr. 第4-2面 北東から
- 4 1 tr. 第4-2面 768溝土器群1
南東から
- 5 2 tr. 第4-1面 771溝土器1~3
南東から

- 6 2 tr. 771溝 土器4 北西から

- 7 2 tr. 771溝 土器5 北東から

図版14

- 1 1 tr. 第4-2面 南西から

- 2 2 tr. 第4-1・2面 西から

図版15

- 1 4 tr. 第4-1・2面 東から

- 2 4 tr. 第4-2面古 東から

図版16

- 1 5 tr. 第4-1面 南西から

- 2 5 tr. 第4-2面 南西から

図版17

- 1 6 tr. 第4-1・2面 北東から

- 2 7 tr. 第4-1面 南から

- 3 7 tr. 第4-2面 南から

図版18

- 1 1 tr. 第4-2面 753溝土器群3
北東から

- 2 753溝土器群3北東半 東から

図版19

- 1 753溝土器群3南西半 東から

- 2 753溝土器群3 南西から

図版20

- 1 1 tr. 753 溝 断面 南西から
- 2 753 溝土器群 3 部分 南東から
- 3 753 溝土器群 3 部分 北東から
- 4 753 溝土器群 3 鉄器 1 出土状況 南西から
- 5 753 溝土器群 3 土器 18 周辺 東から
- 6 753 溝土器群 3 検出 2 回目 北東から
- 7 753 溝土器群 3 検出 2 回目 南西から
- 8 1 tr. 753 溝 下層 遺物出土状況
南西から

図版 21

- 1 2 tr. 753 溝土器群 1 南西から
- 2 2 tr. 753 溝土器群 2 西から
- 3 3 tr. 第 4-2 面 283 溝 南東から
- 4 283 溝 断面・土器 4・5 南東から
- 5 283 溝 土器 4・5 埋納ピット 南東から
- 6 4 tr. 第 4-2 面古 401 溝断面No.1
北東から
- 7 4 tr. 401 溝 断面No.2 北東から
- 8 4 tr. 401 溝 断面No.3 北東から

図版 22

- 1 4 tr. 408 溝 断面 北東から
- 2 7 tr. 950 溝 断面 南西から
- 3 7 tr. 954 溝 断面 南西から
- 4 2 tr. 709 ピット 南東から
- 5 1 tr. 1178 土器 1 南東から
- 6 1 tr. 1179 土器 2 南東から
- 7 1 tr. 1373 土坑 南西から
- 8 3 tr. 236 落込み礫群 1 東から

図版 23

- 1 1 tr. 第 6 面 南西から
- 2 2 tr. 第 6 面 南西から

図版 24

- 1 3 tr. 第 5・6 面 北東から
- 2 7 tr. 第 6 面 南から
- 3 4 tr. 第 6 面 (左側のみ) 北東から

図版 25

- 1 5 tr. 第 6 面 南西から
- 2 6 tr. 第 6 面 北東から

図版 26

- 1 2 tr. 第 6 面 1105 土坑 西から
- 2 3 tr. 第 6 面 106 土坑 北西から
- 3 4 tr. 第 6 面 193 ピット 南東から
- 4 4 tr. 第 6 面 191 土坑 北西から
- 5 4 tr. 第 6 面 395 土坑 西から
- 6 5 tr. 第 6 面 1030 ピット 北西から
- 7 1 tr. 第 6 面古 1475 溝土器 1 北西から
- 8 1 tr. 第 6 面古 1475・1476 溝 合流部
北から

図版 27

- 1 4 tr. 第 8・9 面 東から
- 2 6 tr. 第 6 面 1335 溝 断面 南西から
- 3 6 tr. 第 6 面 1336 溝 断面 南西から
- 4 2 tr. 第 7 面 1071 土坑 北西から
- 5 1 tr. 北東壁

図版 28 3-3 層・77・78 土壇墓 出土遺物

図版 29 81 土坑・877 溝 出土遺物

図版 30 877・930 溝 出土遺物

図版 31 930 溝 出土遺物

図版 32 1161 土坑・1339 井戸 出土遺物

図版 33 1339 井戸 出土遺物

図版 34 1339 井戸・753 溝 (全体)・753 溝
(土器群 1) 出土遺物

図版 35 753 溝土器群 1・土器群 2 出土遺物

図版 36 753 溝土器群 3 出土遺物

図版 37 753 溝土器群 3 出土遺物

図版 38 753 溝土器群 3 出土遺物

図版 39 753 溝土器群 3 出土遺物

図版 40 753 溝下層・753 溝 (試掘 108 溝)・
283 溝 出土遺物

図版 41 283 溝・768 土器群 1 出土遺物

図版 42 768 溝土器群 1・709 ピット・
541 ピット・106 土坑 出土遺物

図版 43 1373 土坑・395 土坑・419 土坑
出土遺物

図版 44 420 土坑・1105 土坑 出土遺物

図版 45 422・455・1475・1476 溝 出土遺物

図版 46 1476 溝・1475・1476 溝合流部
土器群 1 出土遺物

図版 47 1475・1476 溝合流部土器群 1
出土遺物

図版 48 1477 溝 出土遺物

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 経緯と経過

本報告書では、井尻遺跡（図1）において平成25年11月から平成26年6月まで行った「一般国道170号（十三高槻線）道路築造事業に伴う井尻遺跡埋蔵文化財調査業務委託（その1）」の調査成果を報告する。

井尻遺跡は、大阪府茨木土木事務所による一般国道170号（十三高槻線）道路築造事業に先立ち、平成25年4月8日から同年5月22日にかけて実施した試掘調査（以下『試掘調査』と略す）によって新たに発見・周知された遺跡である。

試掘調査では、道路予定範囲のうち、上牧遺跡の南西に隣接する範囲での遺跡の有無を確認するため、井尻1丁目で国道171号から分岐する地点より南西に約1.2kmの長さの範囲に12ヶ所のトレンチを設定した（図2）。

試掘調査の結果、調査区域の北東部に設置した10～12トレンチの3ヶ所のトレンチにおいて溝、土坑、小穴とともに中世を主体とする多量の遺物が出土し、井尻1丁目地内にて当該期の遺跡の所在が明らかとなり「井尻遺跡」と命名された（図3）。

この結果を受け、大阪府茨木土木事務所は大阪府教育委員会文化財保護課との協議に基づき、10月8日付けで当センターと委託契約を締結し、当センターは「井尻遺跡13-1」とする発掘調査を行った。現地での調査は、調査範囲を1～7トレンチに分割し（図4）、11月18日より機械掘削を4トレンチから開始した。以下に各トレンチの調査期間、機械掘削開始から埋戻し終了までを調査開始の早い順に記す。なお、各トレンチの調査中にも遺物洗浄・図面整理などの基礎整理作業を行った。

4トレンチ（350㎡）：平成25年11月18日～平成26年2月17日

3トレンチ（294㎡）：平成25年11月27日～平成26年2月5日

7トレンチ（335㎡）：平成26年1月7日～平成26年3月31日

2トレンチ（307㎡）：平成26年1月30日～平成26年4月10日

5トレンチ（313㎡）：平成26年2月13日～平成26年4月3日

6トレンチ（601㎡）：平成26年4月1日～平成26年5月27日

1トレンチ（280㎡）：平成26年4月10日～平成26年5月30日

調査面積の合計は2480㎡である。各トレンチは大阪府教育委員会文化財保護課の立会にて、調査終了の確認を受け、その指示に基づき埋戻した。平成26年5月30日に調査を終了した。

遺物整理作業は平成26年6月2日より開始し、平成26年12月26日まで行い、平成27年3月20日の本報告書刊行をもって作業を完了した。

第2節 調査の方法

調査は、現代盛土から現代耕作土層、その直下の貼り床や確実に近世以降の層と思われるものはバックホウによる機械掘削で除去した。

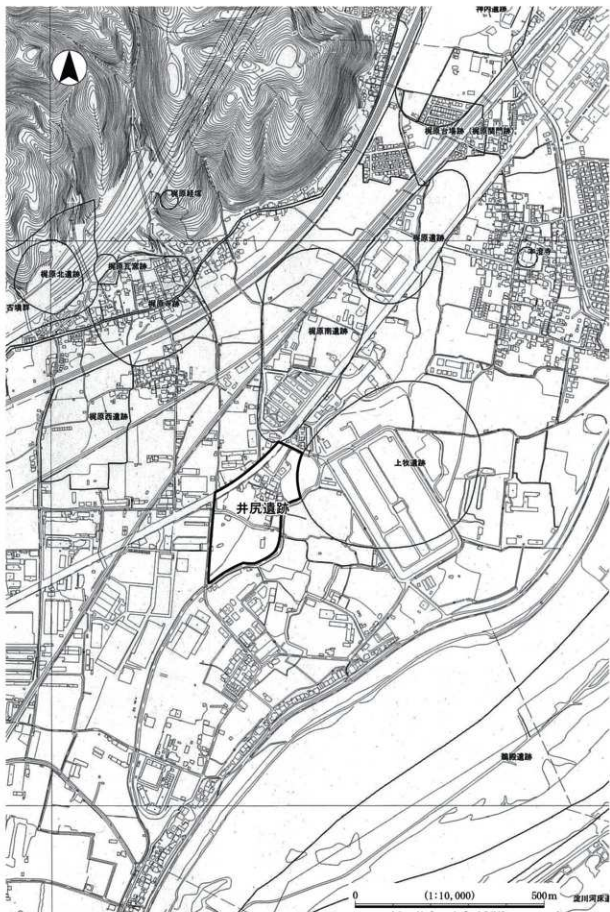


図1 遺跡分布図

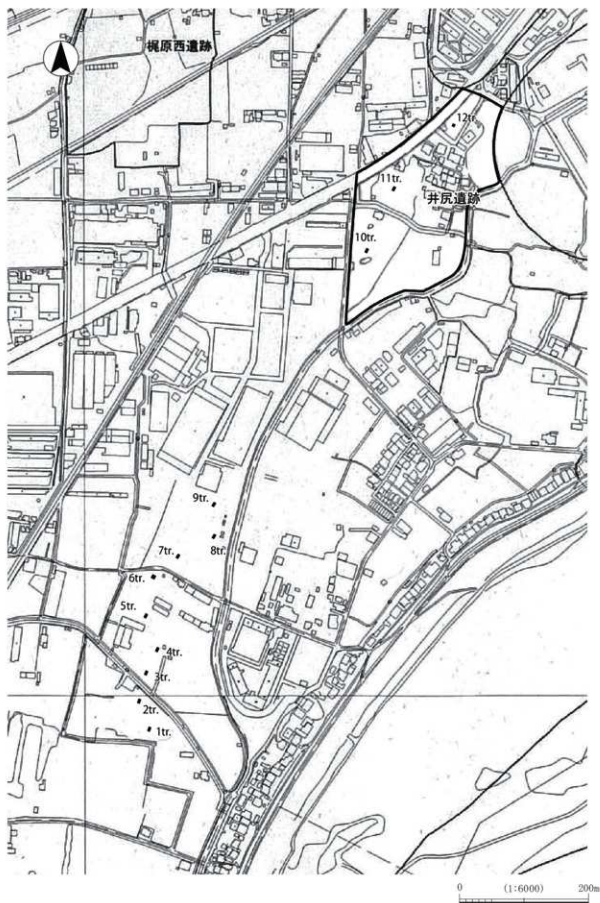


図2 試掘トレンチ配置図

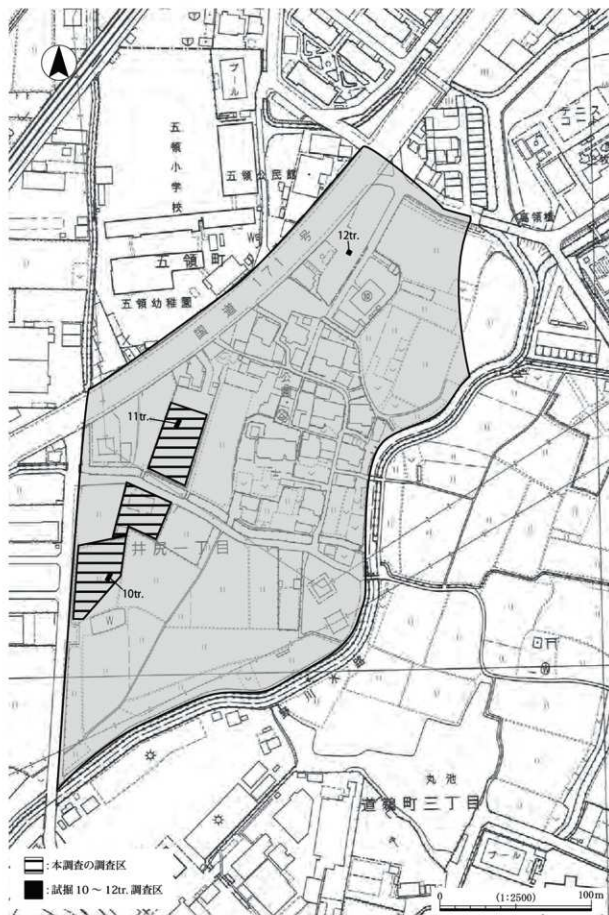


図3 調査区位置図

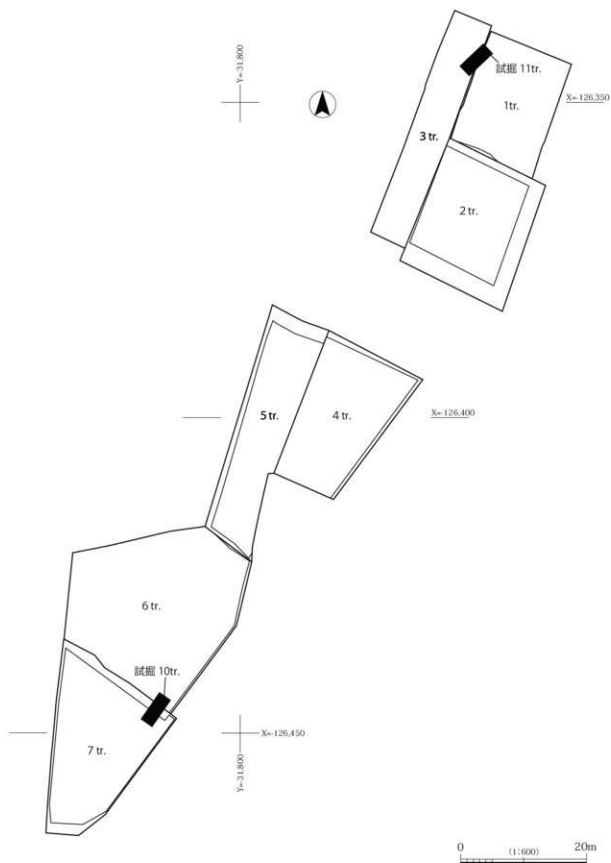


図4 トレンチ割図

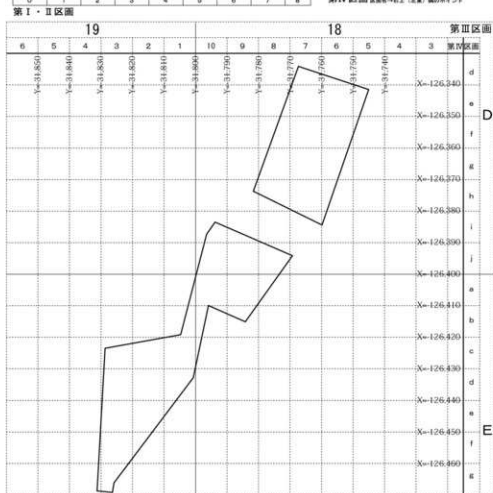
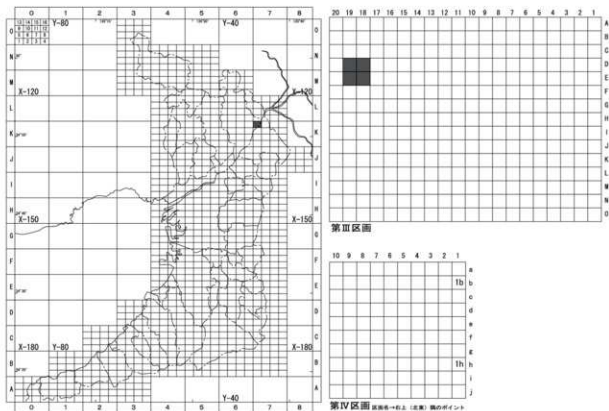


図5 地区割図

第I・II区画 K7-13

人力掘削は、スコップ・鋤簾・手ガリなどを用いて慎重に行い、遺構の検出および遺物の収集に努めた。機械掘削した層も、現代耕作土層直下の層から順に番号を振り、土壌層とその基盤層、ひとまとまりの耕作土層の重なりなどは枝番号を付けた(例:第3-2層など)。各層の上面を同じ番号の面とした(例:第3-1層上面が第3-1面)。基本的に、中世以前の、遺構面と認定できる面の精査を行い、遺構を検出・掘削した。

遺物の取り上げにあたっては、当センター共通の地区割を適用した。地区割は、国土座標軸(第VI座標系)を基準とし、I~VIの大小6段階の区画を設定したもので、大阪府全域に共通する地区割である(図5)。第I区画は大阪府の南西端 $X=-192,000\text{m}$ ・ $Y=-88,000\text{m}$ を起点に、府城を南北15(A~O)、東西9(0~8)区画に分割したもので、一区画は南北6km、東西8kmとなる。第II区画は第I区画を東西、南北各4分割の、計16区画(1~16)に分けたもので、一区画は南北1.5km、東西2.0kmとなる。第III区画は第II区画をさらに東西20(1~20)分割、南北15(A~O)分割する一辺100mの区画である。第IV区画は第III区画をさらに東西、南北ともに10(東西1~10、南北a~j)分割した一辺10mの区画である。

遺構面は写真撮影と共に平面図を作成し、高さも記録した。図面の作成は、トレンチごとに国土座標と水準の測量が成された3級基準点および4級基準点を元に行った。標高は全て東京湾平均海面(T.P.値)を使用し、国土座標は、平面直角座標系第VI系(世界測地系)を基準とした。

全トレンチにおいて最も遺構の集中する第4-2面に関してはヘリコプターによる航空写真測量を行った。遺構によっては必要と思われる場合、断面図、遺物出土状況図などの図面を適宜作成した。調査区全体の堆積状況を記録するため、トレンチ壁面でも適宜断面図を作成した。土質・土色の記載のうち、土色は「小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2007年度版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人 日本色彩研究所色彩監修」を使用した。

なお、記録用の写真撮影は、6×7モノクロフィルム・リバーサルフィルム、35mmモノクロフィルム・リバーサルフィルムを用いて行い、台帳作成およびメモ写真撮影用としてデジタルカメラも使用している。撮影後のフィルムは現像し、当センター所定のアルバムに収納した。

出土遺物は、各トレンチの各層・各遺構で取り上げた。遺物には、トレンチ名・層位名・遺構名・出土年月日・登録番号などを記したラベルを添付し、順次洗浄、注記、接合を行った。

写真、出土遺物、図面は、台帳を作成し登録作業を行った。

今回の調査中、平成26年5月10日(土)に地元住民を対象とした現地公開を行い総数89名の参加者を得た。

その後、平成26年6月2日から遺物整理事業に入り、平成26年12月26日まで行い、平成27年3月20日の本報告書刊行をもって作業を完了した。

日々の作業の内容は、週報を作成し、記録している。

なお、調査地での自然環境の変化や開発の状況を知るために、土層のサンプルを採取し、株式会社古環境研究所に花粉・珪藻・植物珪酸体の分析を委託した。平成26年4月8日に委託契約を行い、委託期間は平成26年4月8日から平成26年6月6日までである。

また、11世紀の遺物が多量に出土した753溝土器群3の、分量・調整が類似する、黒色土器碗と瓦器碗に関して、生産地も同一かを確かめるために、サンプルとなる土器を選択し、株式会社パレオ・ラボに胎土分析を委託した。平成26年9月3日に委託契約を行い、委託期間は平成26年9月3日から平成26年11月28日までである。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

井尻遺跡は高槻市東部に位置し、北西には北摂山地が迫り、南東には淀川が北東から南西に流れる、幅1kmほどの狭い沖積平野に立地している(図1)。

北摂山地には小さな谷がいくつも切れ込み、そこから小河川が流下している。その小河川が形成した小規模な扇状地が山裾に連続し、傾斜地を形成している。そこには西国街道が通り、古くから寺院や集落が立地する環境となっていた。

沖積平野も、わずかに北から南に傾斜する傾向があるが、山地から流下した小河川が複雑に蛇行し、井尻遺跡や東隣の土牧遺跡などが立地する小規模な微高地を形成している。小河川のほとんどは現在では水路化しているが、今もその旧流路や微高地が不定形な耕地区画として痕跡を留めている。

井尻遺跡は、遺跡範囲の北東端で小河川が3本合流していた地点からの土砂供給によって形成された北東から南西に伸びた細長い微高地に立地している。

井尻遺跡の南隣、道鶴町には淀川沿いに径1kmほどの半月形の土地区画がある。これはその輪郭が元は細長い溜池であり、淀川の旧流路と考えられる。沖積平野でも淀川沿いの部分はこのような淀川の後背湿地的環境である。

第2節 歴史的環境

今から6400年前頃、縄文時代前期の縄文海進最盛期の頃は、この付近が河内湾(1期)に注ぐ淀川河口であったと考えられている。

弥生時代には1km程西方の絵尾川右岸に、安満遺跡があり、前期から後期まで存続する拠点集落として知られている。北東に接する梶原南遺跡(図1)では中期の土坑、後期の竪穴住居跡や溝が検出され、東に隣接する土牧遺跡にも中期の竪穴住居跡が検出され、後期の土器も出土している。さらに600m程西に位置する萩之庄南遺跡では弥生時代末から古墳時代初頭頃の竪穴住居跡や方形周溝墓が検出されている。今回の調査で井尻遺跡でも弥生時代中期の遺物が確認された。

古墳時代には前期の前方後円墳、萩之庄1号・2号墳が安満山尾根上にあるが、後期の群集墳が多く、北の山腹域に安満山古墳群・梶原古墳群・萩之庄古墳群・磐手杜古墳群などがある。平野部の古墳時代の遺構・遺物は梶原寺跡・土牧遺跡・梶原南遺跡で、庄内式～布留式期を中心に確認されている。

古代には梶原南遺跡で奈良時代の多数の建物群とともに「新屋首乙賣(にいやのおびとおとめ)」と記された木札が発見されている。山地裾では東大寺と関係の深かった梶原寺が創建され、東大寺に瓦を供給した梶原瓦窯跡・萩之庄瓦窯跡などが築かれる。

条里型地割は、梶原西遺跡周辺にその痕跡を認めるのみで、井尻遺跡の西端を画する道路に踏襲された土地区画のラインが、その条里型地割に含まれる可能性はあるが、それ以東の遺跡範囲にはその痕跡らしき土地区画は確認できず、条里型地割が施行された事はなかったと考えられる。

調査地から淀川の3km程上流である、水無瀬・山崎の地には水無瀬離宮・河陽離宮が造られ、その

淀川対岸には石清水八幡宮が鎮座し、水運・陸運の要の地となっていた。

9世紀末頃には淀川沿いには牧が散在していたらしい。「小右記」に見られる「楠葉牧」はこの付近までも含むという説もある。他に「鳥飼牧」の名や、応永4年(1397年)には「井尻牧」の名も見える。周辺には今も「上牧」の他、「三箇牧」「牧野」「牧田」「河原牧」などの地名が残る。淀川流域には摂関家相伝の楠葉牧の他、藤原氏の牧・荘園が多く、後に13世紀初頭頃、春日若宮に寄進されていくが、今も淀川沿いに春日系統の神社が多いのはその名残であろう。「御堂関白記」には楠葉牧に播磨の馬を放牧した記述があり、11世紀初頭頃までは、まだ耕地開発が進まない、実質的な牧であったと思われる。

南の淀川河川敷は「鶴殿の草原」として昭和20年まで宮内庁雅楽寮に葎を納めていた土地で、その地名は紀貫之の「土佐日記」にも宿泊地として見える。11世紀後半には藤原兼家の子孫が鶴殿・井尻に居住し鶴殿氏と称し、開発を進めたいらしい。15世紀頃には周辺は烏丸家の所領となっていた。

当遺跡の東隣の土上遺跡は大量の瓦器が良好な状態で発見され、瓦器碗編年の基準資料となった事で知られる日本中世考古学の研究史上著名な遺跡である。

さらに、淀川対岸にあたる枚方市楠葉は、「梁塵秘抄」に「楠葉の御牧の土器(かわらけ)作り」と語られたように、瓦器の主要な生産地の一つとして知られているが、今回の調査でも11世紀頃の黒色土器碗と共に、瓦器碗が多量に出土したことは興味深い。

中世には高槻市天川遺跡・島本町広瀬遺跡など淀川右岸の不安定な微高地に進出する集落が増加し、淀川水運に関係した集落と考えられる。北西側山裾には西国街道も走り、陸路の交通の要衝でもあった。

16世紀には高山右近が高槻に居城を構え、北摂地域にキリスト教が普及する。高槻城跡近辺である市街域の調査にて、十字を刻んだ木棺蓋や木製ロザリオが出土したキリシタン墓地が発見されているが、徳川幕府の禁制により、以降その痕跡は千提寺西遺跡のキリシタン墓など、山間部に残るのみである。

近世の考古学的遺物としては、淀川を行きかう船の乗客に食べ物売の際に使われた「くらわんか茶碗」が良く知られている。

遺跡周辺は現在でも国道171号や新幹線などが通る交通の要衝で、次第に住宅や工場も増えつつあるが、営々と整備されてきた水路網や複雑な形の耕地区画、そして近世以来の寺社や集落も残り、歴史的景観を留めている。

第3章 調査成果

第1節 基本層序

第1項 堆積状況の概要と問題点

遺跡の立地する微高地は、いまだ現地地形として確認できる。調査区より北東160mほどの五領橋付近で、元は自然河川であったらしい3本の水路が合流し、遺跡の南東側を南西へ流れる。微高地は、その合流部から破堤したクレバススプレーで形成されたものと思われる(図3)。

調査区北東隣の旧来の井尻の集落付近が最も高く、その部分を頭部として南西へ徐々に低くなる尾を伸ばす、長さ400m、最大幅200mほどの微高地である。調査区内でも各面で北東が高く、南西が低い。微高地の形成以来、その傾向は変わらないが、複雑な侵食と堆積を繰り返し、少しずつ規模を拡大させていったようである。

今回の調査での基本層序には、検討を重ねても不確定な要素が幾つか残った。

まず、調査区内で層が追跡できない部分が二か所存在する事がある。

北東部の1～3トレンチと4・5トレンチの間には現在、道路と水路が走り、15mほどの間が空く。そこから、2・3トレンチにかかる43侵食痕が伸びるので、微高地を分断した流路が存在していた可能性も考えられる。43侵食痕の中の洪水堆積層を第3～4層としたが、それが4・5トレンチ側での洪水系第3～3層であった可能性もある。

もう一つ、5・6トレンチ間にも断絶がある。この部分は西隣の耕地でも現在50cmほどの段差があり、第3～4層堆積以降に段差として整形された。さらに段落ち裾部に、大型の土坑が近世に掘られている。現代の掘削も多く、現地表から第6面まで、層のつながりが確実に追えない。ここでも6・7トレンチの第3～4層が、洪水系第3～3層である可能性を否定できない。

さらに、6・7トレンチでは北東側の第4～2面で遺構形成が始まった後でも、一定期間第6面が露出し、遺構形成後、第4～2層が堆積した可能性が充分考えられる。

他に、第3～4面から第6面にかけては、土色・土質の見極めが非常に難しいために、分層や遺構の検出に困難がともなった。見落とした遺構も多いと思われる。包含層遺物として取り上げた遺物群は、層位的な一括性を確保できなかった。

第2項 各層の様相(図6～10)

第1-1層 1～5トレンチでは、現代盛土直下の耕作土層である。ただし、現代遺物は含まず、近世後期から近代頃の耕作土層であろう。N4/0～5/0・5Y4/1～5/1 灰色、粘質土、シルト～細砂主体、中砂～極粗砂若干あり、Mnあり。

6・7トレンチでは、現代耕作土層直下にある、ブロック土の貼り床層である。「2.5Y6/6 明黄褐色、粘質土、シルト主体、中砂若干あり、Fe・Mnあり。」と「2.5Y5/1～4/2 黄灰～暗灰黄色、粘質土、シルト～細砂主体、中砂あり、Mn粒あり。」の3～12cmのブロック。

この層の下面には竹詰め暗渠が幾つも掘られている。現代まで残る耕作地が造成された時のもの、近代以降の貼り床であろう。

第1-2層 10YR6/2～4/2 灰黄褐色、6・7トレンチでは5Y5/1 灰色、粘質土、シルト主体、粗砂～小礫あり、Fe・Mn 若干あり。

試掘調査では中世までの遺物のみ出土していたが、本調査で、最初に着手した3・4トレンチで、近世前半頃の耕作土層と判明した。

第2-1層 2.5Y6/3～10YR5/2 にぶい黄～灰黄褐色、粘質土、シルト～細砂主体、6・7トレンチではシルト主体とやや細粒化、中砂～小礫あり、Fe あり、Mn 粒あり、第2-2層より相対的に暗色。

中世後半頃、15・16世紀頃の耕作土層である。削平されて薄い部分も多い。

第2-2層 2.5Y6/3～5/3 にぶい黄～黄褐色、粘質土、シルト～細砂主体、中砂～極粗砂あり、Fe あり、Mn 粒あり。

2～4層の薄い層の集まりであり、少量の土砂の供給が繰り返され、耕作床面が上昇して取り残されていき、形成された層と考えられる。第2-1層より明色を示す。中世後半頃の耕作土層である。

1～5トレンチにおいては、地表からこの層付近までは、地盤改良剤や表層水の滞留による土色の変化が激しく、オリーブ灰色から青灰色に変化した部分が多い。また、特徴的なMn粒も形成されていない事があり、層の分別・同定が困難な場合もあった。

第3-1層 2.5Y5/2～6/3 暗灰黄～にぶい黄色、粘質土、シルト～細砂主体、粗砂あり、Fe あり、Mn 粒多し（特に上部）。

基本層序の中で最もMn粒が多く、目立つ層である。ただし、先述のようにMn粒がほとんど形成されていない部分もある。第2-2層より暗色を示す。14世紀頃の耕作土層である。

第3-2層 2.5Y5/4～5/2 黄褐～暗灰黄色、粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂あり、Fe あり、Mn 粒あり。

第3-1層との層境は非常に見えにくい。自然地形の高い部分には遺存しておらず、第3-2層から第3-1層へ、高所の削平などの平坦化が進行した事が分かる。中世前半頃の耕作土層である。

第3-3層 第3-2層と第3-4層の間にあるが、部分により性格が異なり、耕作土系・整地土系・洪水堆積系の三種に分けられる。三種のうち二種以上が重なる部分はほとんどない。層位的には、洪水堆積系、整地土系、耕作土系の順に形成されている。

耕作土系第3-3層 2.5Y5/3 黄褐色、粘質土、シルト～細砂主体、中砂あり、Fe あり。

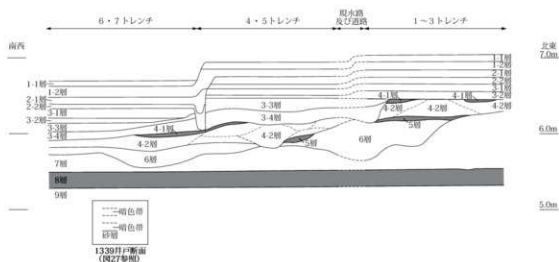


図6 調査区断面模式図

第4-1・2面上の耕地区画的な凹部に見られる。調査区全面耕地化の際、自然地形の凹部を整えて作られた耕地区画内の耕作土層である。第3-2層の形成の時点で埋められ、平坦化する。

整地上系第3-3層 25Y6/3～10YR5/2にぶい黄～灰黄褐色、粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂あり、Feあり、Mn粒若干あり。

2・3トレンチでは、43侵食痕内で第3-4層の上を覆う、「5Y5/1灰色、シルト」と第3-4層のブロック土で構成される層である。

3トレンチ以外でブロック状構造が見られる所は少ないが、下面にブロック土がめり込む凹凸が見られる、第3-4面の凹凸地形を埋めて上面は平坦である、部分的な色・質の違いが大きい、などから、整地土層と考えられる。層厚は薄い。調査区全体が耕地化される、13世紀末前後の頃の整地である。

洪水堆積系第3-3層 10YR5/2灰黄褐色、シルト、中砂若干含む、管状Feあり。

1・2トレンチでは第4-2面の1172道跡から南東側、4トレンチでは南隅付近、5トレンチのほぼ全面などに残る。第3-4層の上に、堆積単位の異なる洪水堆積層として乗る。層厚は0.2mを超す部分もあり、耕作土層とは区別できる。下面の凹凸・段差などを埋め、上面は平坦である。

第3-4層 上面付近は10YR5/3にぶい黄褐色、下部は5Y6/2～6/1灰オリーブ～灰色、ただし、下端部は下層を巻き上げ暗色、シルト、中砂～粗砂の降下激し、管状Feあり、上部にFe・Mnあり。

第3-1～3層と比較して、白っぽいシルト層に見える。層厚は0.3m前後と厚い。2・3トレンチ南西端から北東の高い部分には遺存していない。ラミナや緩化構造は認められないが、洪水堆積層と考えられる。上面に下面の第4-1・2面と同時期の11世紀後半の早い時期の遺構もあり、その頃の堆積と分かる。第3-4面の下限は13世紀後半頃である。

第4-1層 10YR4/2～5/3灰黄褐～にぶい黄褐色（部分的に10YR3/1黒褐色）、粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂あり、Fe・Mnあり。

第4-2層上部に形成された自然土壌層である。第3層系の侵食・削平を免れた凹地形・段差際などに遺存するのみの状況であるが、本来は全面に広がっていたのであろう。

第4-2面検出の遺構は、本来この層上面から切り込む。しかし、上面で検出できる遺構は第3-4層系土上の新しいもののみである。11世紀後半頃まで形成され続けたものであろう。

第4-2層 複数の堆積層によって構成される。個々の層は部分的な堆積で、調査区全体に広がるものはない。各々が異なる時期に微高地上に堆積した洪水堆積層と思われる。

1～3トレンチの範囲では大別すると以下の2種類にまとめられる。

25Y5/3～6/3黄褐～にぶい黄色、粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂あり、Fe・Mnあり。

10YR4/2～5/1灰黄褐～褐灰色、砂質土、細砂～シルト主体、粗砂～中砂あり、Fe・Mnあり、Mn粒わずかにあり。

全体的には前者が上位だが、どちらも広い範囲にはなく切れ切れに遺存する。4トレンチ南東部では、クレバスプレー堆積の砂層や、土砂流的な混濁状態で堆積した砂質土層などが両者の間に挟まる。

6・7トレンチには以下の層が均質性高く広がっている。

25Y5/2～4/2暗灰黄色、砂質土、細砂～シルト主体、中砂あり、管状Feあり、上部Feあり。

これは砂質土系の第4-2層に似るが、明らかに堆積時期が異なるのは上述したとおり。

全体で見れば、第4-2層は、1～5トレンチでは5世紀中葉以降から9世紀頃までに複数回に分けて堆積し、6・7トレンチではそれから11世紀後半までに一度に堆積した洪水堆積層の総称で、調

査区北東高所の堆積のほうがより古い傾向があると言える。

第5層 10YR3/2～4/2 黒褐～灰黄褐色、粘質土、中砂あり、Mnあり、下面に植物根痕多し。

第6層上面に形成された自然土壌層である。実際には上記の黒褐色系統のはっきりした層は、3トレンチと5トレンチの一部にしか残存していない。他の部分では、第6層上部でやや土壌化の強い部分がそれに相当するが、そういった所では下面に発達した植物根痕は認められない。

第5層が遺存しない部分でも、第6面検出遺構の埋土には暗色の土が混じり、本来この層上面切込みと推測できる。古墳時代初頭から中期、3世紀後半から5世紀中葉頃に形成されていたものである。

第6層 上面付近2.5Y6/4～5/2にぶい黄～暗灰黄色、他10BG4/1～10Y5/1青灰～灰色、中砂～シルト、粗砂若干あり、上部Feあり、縮り悪し、ラミナなし。

非常に軟弱な層で上面の酸化鉄の沈着以外は灰色系統である。洪水堆積層と思われるが、土壌化の度合いは高くないのに、ラミナも緩化構造も認められない。直下の第7層上面は侵食痕状の凹部が多いが、そこに堆積した第6層も特に粗粒ではなく、ラミナもない。

第6面遺構の最古の時期は古墳時代初頭で、第7面に弥生時代中期の遺構が確認できたので、1～3世紀の間の時期に堆積したと考えられる。上面遺構の最新の遺物群は5世紀中葉である。

今回、4トレンチのみは第9面まで平面調査を行ったが、遺物・遺構がほとんど見られなかったため、それ以外のトレンチは大阪府教育委員会の指示により、第6面を最終面としている。

第7層 上面付近10YR5/3～5/6にぶい黄褐～黄褐色、上部10Y5/1～5Y5/2灰～オリーブ灰色、下部10YR4/1褐灰色、シルト～粘土、中砂～粗砂の降下あり、Fe・Mnわずかにあり。

最上部は酸化鉄沈着、上半部は弱還元状態、下半部は第8層を巻き上げ、暗色を示す。上面は侵食痕状の凹部が多く、土壌化は弱い。調査後半に2トレンチ第6・7面重複部分で、弥生土器が出土する土坑が検出された。また調査期間の終わり頃、1トレンチで部分的に、第6層との間に土器片を含む間層が認められた。

層厚は、侵食のない部分では0.4mを超えるが、直下層の巻き上げなどから短期間の堆積と考えられる。今回の調査では包含遺物は土器小片1片のみで、堆積時期は弥生時代中期以前としか言えない。

第8層 5Y3/1～10YR4/2オリーブ黒～灰黄褐色、シルト～粘土、Fe・Mnあり、粗砂の降下わずかにあり、下面には植物根痕など生痕多し。

調査区内で、T.P.+5.6mほどの高さに層厚0.15mほどで広がる非常に平坦な層である。下面の生痕の状況から、陸化後に形成された土壌層と考えられる。

今回の調査では遺物は皆無であったが、4トレンチ東隅で、層上下面に溝らしきものが2本ずつ検出され、7トレンチ北東壁断面から、6トレンチ第6面の溝底部を斜めに横切り、トレンチ南東壁に抜ける、直線的な溝らしきものが確認されており、今後の調査においてさらなる検討を要する。

第9層 上部2.5Y6/6～5/3明黄褐～黄褐色、下部2.5GY6/1灰オリーブ色、粘土～シルト。

上面は第8層からの生痕に伴う粘土の降下や混濁が多いが、層厚0.6mを超える止水堆積層である。包含遺物は皆無である。

6トレンチ1339井戸の断面確認で(図27)、第9層以下の層も確認できた。T.P.+4.7mまで2帯の暗色帯を挟んで粘土層が続くが、それらの層境は不明瞭で堆積の途切れは認められない。水域で堆積が進行したものであろう。生痕のようなものも確認できない。

その下は中砂主体の砂層が見られる。粘土層との境に混濁が見られ、砂層自体もやや混濁したような

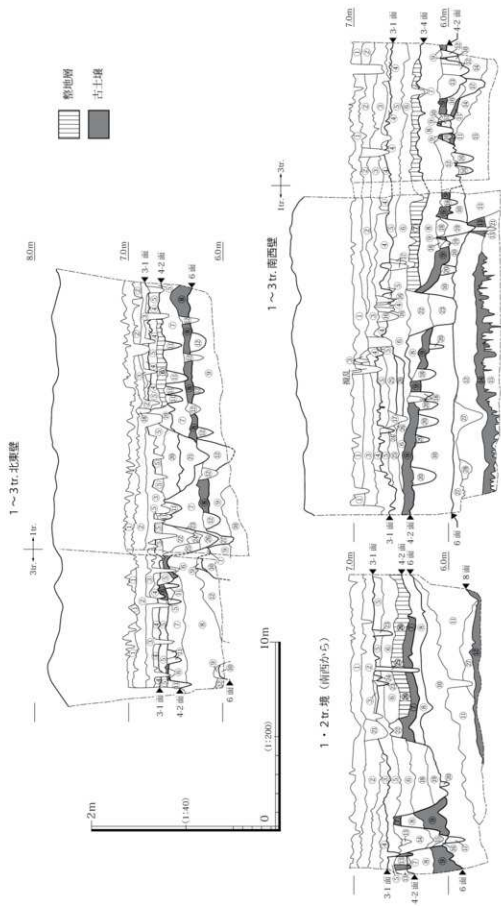


図7 1・3トレンチ北東壁・南西壁、1・2トレンチ境 断面

表1 図7土色・土質

1 tr. 北東壁

①N4/1 ~ 5B4/1 灰~青灰 粘質土、シルト~細砂主体、粗砂~極粗砂若干あり、

Mn 黄あり(1~1層)

②10YR6/2 灰黄褐 粘質土、シルト~細砂主体、粗砂わずかにあり、Fe・置状 Fe あり(1~2層)

③10YR5/2 灰黄褐 粘質土、シルト~細砂主体、粗砂~中砂あり、Mn 粘若干あり(2~1層)

④10YR5/2 灰黄褐 粘質土、シルト~細砂主体、中砂あり、Mn 粘わずかにあり(2~2層)

創し薬品の影響により土色は②~④の大部分が10Y5/2~4/2 オリーブ灰

⑤2.5Y5/2 暗灰黄 粘質土、シルト~細砂主体、中砂~粗砂・Mn 粘あり、特に上部に多し(3~1層)

⑥2.5Y6/3 濃い黄 粘質土、シルト~細砂主体、中砂~粗砂・Fe あり、Mn 粘若干あり(豊地上系3~3層)

⑦10YR5/2 ~ 4/2 灰黄褐 砂質土、細砂~シルト主体、中砂~粗砂・Fe・Mn あり(4~2層)

⑧10YR4/2 灰黄褐 砂質土、細砂~シルト主体、中砂・Fe・Mn あり、小礫わずかにあり(5層)

⑨2.5Y5/2 ~ 10BG4/1 暗灰黄~青灰 砂質土、細砂~シルト主体、中砂・置状 Fe あり、粗砂わずかにあり(6層)

⑩10Y5/1 ~ 5Y5/2 灰~灰オリーブ シルト、中砂~粗砂の降下あり、Fe 若干あり(7層)

⑪10YR4/2 ~ 5/2 灰黄褐 ②とほぼ同質、やや Mn 多し(4~1・2層の混濁分)

⑫10YR5/2 灰黄褐 ②と③の混濁

⑬②と③との混濁

⑭③と④のブロック

⑮③のブロックと中砂~粗砂

⑯2.5Y5/1 灰 砂質土、細砂~シルト主体、中砂~粗砂あり、Fe 若干あり

内「10Y5/1 灰 シルト~粗砂」の3~4cmのブロックわずかにあり

⑰2.5Y4/1 ~ 4/2 黄灰~黄褐 砂質土、シルト~細砂主体、粗砂わずかにあり、Mn 粘若干あり(6面古1475・1476溝)

⑱②内に③の2~6cmのブロック

⑲②内に「10G4/1 暗緑灰 シルト」の0.5~2cmのブロック若干あり、里道(横断)盛土

⑳10YR5/3 濃い黄褐 粘質土、シルト~細砂主体、粗砂若干あり、Mn・Fe あり(3~3層相当遺構埋土)(768清理土)

㉑10YR5/2 灰黄褐 粘質土、シルト~細砂主体、中砂~粗砂・Mn あり、炭化物わずかにあり(768清理土)

㉒10YR5/2 灰黄褐 ⑦に中砂多し(4~2層崩壊土)(上層)(753清理土)

2B2.5Y4/1 ~ 3/1 黄灰~黄褐 粘質土、シルト主体、細砂・炭化物あり、粗砂若干あり、腐り直し後埋積粘土(下層)(753清理土)

㉓2Bと同質、腐り直し前(4~2層崩壊土)(753清理土)

㉔上方2.5Y5/2 暗灰黄、下方2.5Y4/1 黄灰 粘質土、シルト主体、細砂~粗砂あり、Fe 若干あり(753清理土)

㉕5Y5/1 ~ N4/0 灰 細砂~粗砂 内に「N4/0 灰 シルト」の1~3cmのブロック若干あり(6面清理土)

3 tr. 北東壁

①N5/0 ~ 4/0 灰 粘質土、シルト~粘土主体、粗砂わずかにあり、置状 Fe あり(1~1層)

②10YR5/3 ~ 5/1 濃い黄褐~暗灰 粘質土、シルト主体、粗砂~極粗砂若干あり、Mn 黄あり(1~2層)

③2.5Y5/2 暗灰黄 粘質土、シルト主体、中砂~粗砂若干あり、小礫わずかにあり、Mn 粘あり、実際には2~4層の薄い耕作土層の重なり(2~1層)

④2.5Y6/4 濃い黄 粘質土、シルト~細砂主体、粗砂・Mn 粘若干あり、Fe あり(2~2層)

⑤10YR5/2 灰黄褐 粘質土、シルト~細砂主体、粗砂~極粗砂・Mn 粘あり(特に上部に多し)(3~1層)

⑥10YR5/2 ~ 4/2 灰黄褐 粘質土、シルト~細砂主体、粗砂・Fe 若干あり、Mn・Mn 粘あり(4~1層)

⑦10YR5/3 濃い黄褐 粘質土、シルト~細砂主体、中砂~粗砂・Mn 粘わずかにあり、Mn・Fe あり(4~2層)

⑧10YR4/2 ~ 5/2 灰黄褐 粘質土、細砂~シルト主体、中砂~粗砂・Mn あり(4~2層)

⑨10YR4/2 灰黄褐 粘質土、シルト~細砂主体、粗砂~小礫若干あり(粗面を

降下)、Mn・Mn 粘あり、自然土塊(5層)

⑩10YR5/2 ~ 5/1 灰黄褐~暗灰 細砂~シルト、Fe・Mn あり、土塊化(B層的)した流水堆積層分(6層)

⑪②と③の混濁、4~1面切り込み遺構埋土(4~2面検出)

⑫10YR5/1 ~ 4/2 暗灰~灰黄褐 中砂~細砂、わずかにシルトあり、Mn あり二次堆積? (5層系)

3 tr. 南西壁

①N4/0 灰 粘質土、シルト主体、中砂~粗砂若干あり、置状 Fe あり(1~1層耕作土)

②10YR4/2 灰黄褐 粘質土、シルト主体、粗砂~小礫・Mn あり(乾にはならず)(1~2層耕作土)

③10YR4/2 ~ 5/2 灰黄褐 粘質土、シルト~細砂主体、粗砂~小礫あり、中礫わずかにあり、Mn 粘あり、上部に多し(2~1層耕作土)

④2.5Y5/3 ~ 5/4 黄褐 粘質土、シルト~細砂主体、中砂~極粗砂・Fe あり、Mn 粘若干あり、部分的に2~4層の薄層に分かれる(2~2層耕作土)

⑤2.5Y5/3 黄褐 粘質土、シルト~細砂主体、粗砂~極粗砂あり、Mn 粘(特に上部に非常に多し)(3~1層耕作土)

⑥2.5Y5/4 黄褐 粘質土、シルト~細砂主体、中砂~粗砂・Mn 粘あり、Fe 若干あり(3~2層耕作土)

⑦5Y5/1 灰 シルト~細砂と赤のブロック、小~中礫若干あり(豊地上系3~3層)

⑧上部 Mn で10YR4/3 濃い黄褐、下部10YR4/1 暗灰 基本シルトだが、植物根痕での中砂~粗砂の降下懸しく、粘質土状、上平 Fe・Mn あり(3~4層水成堆積)

⑨10YR4/2 ~ 5/3 灰黄褐~濃い黄褐 粘質土、シルト~細砂主体、中砂~粗砂若干あり、Mn 多し(4~1層自然土塊)

⑩2.5Y5/3 ~ 6/3 黄褐~濃い黄、粘質土、シルト~細砂主体、中砂~粗砂・Fe・Mn あり(4~2層)

⑪10YR3/2 ~ 4/2 黒褐~灰黄褐 粘質土、シルト~細砂主体、中砂わずかにあり、Mn あり、植物根痕多し(5層自然土塊)

⑫②と③の混濁(遺構埋土)

⑬②に③の10~5cmのブロック若干あり(遺構埋土)

⑭N5/0 灰(上部2.5Y6/3 濃い黄) 細砂~シルト、部分的に中砂~粗砂のラミ(6層)

⑮2.5Y6/2 ~ 10YR6/1 灰黄~灰 細砂~シルト、部分的にラミ若干あり(6層)

⑯②と③の混濁(遺構埋土)

⑰2.5Y5/1 ~ 4/1 黄灰 細砂~シルト(遺構埋土)

1 tr. 南西壁

①10YR5/3 濃い黄褐 粘質土、シルト~粘土主体、粗砂~小礫若干あり、Fe あり(1~1層耕作土)

②10YR5/2 灰黄褐 粘質土、シルト主体、中砂~粗砂若干あり、Mn 多し(1~2層耕作土)

③10YR5/2 灰黄褐 粘質土、シルト~細砂主体、粗砂・Mn 粘あり、小礫わずかにあり(2~1層耕作土)

④10YR5/2 ~ 6/1 灰黄褐~暗灰 シルト~細砂主体 粗砂~小礫若干あり、Mn 粘・下部に Fe あり(2~2層耕作土の薄層の集まり)

⑤2.5Y5/2 暗灰黄 粘質土、シルト~細砂主体、粗砂~中砂あり、Mn 粘多し(3~1層耕作土)

⑥2.5Y5/2 暗灰黄 粘質土、シルト~細砂主体、中砂~粗砂・Mn 粘・部分的に下部に下部の1~3cmのブロックあり(3~2層耕作土)

⑦10YR5/2 灰黄褐 粘質土、シルト~細砂主体、粗砂~小礫・Mn あり、ややしまり悪(豊地上系3~3層)

⑧10YR5/1 ~ 6/1 暗灰 粘質土、シルト~細砂主体、粗砂~中砂あり、Mn・Fe 若干あり、ややしまり悪(3~4層流水堆積層)

⑨10YR4/3 ~ 5/3 濃い黄褐 粘質土、シルト主体、粗砂~中砂・Mn・Fe あり(4~1層自然土塊)

⑩10YR5/4 ~ 5/1 濃い黄褐~暗灰 粘質土、シルト~細砂主体、粗砂・Fe あり(4~2層)

⑪10Y5/1 灰 砂質土、細砂~シルト主体、中砂・部分的に Fe あり(6層流水堆積層)

⑫5Y5/1 ~ N4/0 暗オリーブ褐~灰(上面 Fe で2.5Y6/4 濃い黄) シルト、上部置状 Fe あり(7層)

⑬10YR4/4 褐 シルト、Mn・Fe あり、Fe 多め(8層自然土塊)

⑭N4/0 ~ 5Y5/1 灰~オリーブ黒 シルト、下面植物根痕など生痕多し(8層自然土塊)

⑮2.5Y6/6 ~ 5/4 明黄褐~黄褐 シルト~粘土(9層)

表1 つづき

※4と同質、切り合いのみ見える(2-2面遺構)	※2.5Y5/2 暗灰黄 粘質土、シルト～細砂主体、中砂・Fe・Mn 粘若干あり、粗砂
※10YR6/2 灰黄褐 質は※と同じ、Mn 粘少ない(3-2面遺構)※※と※の混層、	わずかにあり(3-2層)
※多め(4-1面遺構)	※2.5Y4/1 灰黄 粘質土、シルト～細砂主体、粗砂若干あり、小礫わずかにあり、
※10YR5/1 灰黄 細砂～シルト、土壌化の弱い4-1層由来?)と※のブロック	Mn あり(4.1層自然土層)
(4-1面遺構)	※2.5Y6/3～5/2 に※、黄～暗灰黄 砂質土、細砂～シルト主体、中砂～小礫わず
※※と※の混層、※多め(4-2面遺構本来の切り合いは4-1面)	かにあり、Fe あり(4.2層水埋堆積層)
※※と※の混層(8面遺構?)	※10YR4/1～4/2 灰黄～灰黄褐 砂質土、細砂～シルト主体、中砂若干あり、小
※10YR6/2～5/2 灰黄褐 粘質土、シルト～極細砂主体、中砂若干あり、炭化物	礫わずかにあり(5層自然土層)
わずかにあり(4-1～3-4面遺構埋土)	※7.5Y3/3～2.5Y6/2 オリーブ黄～灰黄、砂質土、細砂～シルト主体、中砂わず
※10YR5/1～5/2 灰黄～灰黄褐 粗砂～シルト、質状 Fe あり(4-1～3-4	かにあり、Fe 若干あり、しまりなし(6層洪水埋積層)
面遺構埋土)	※5Y5/1～10YR4/1 灰～灰黄(下部はど暗色)シルト、細砂若干あり(7層水成
※7と2.5の混層	堆積)
※2.5Y5/3 黄褐 粘質土、シルト～細砂主体、粗砂若干あり、Mn 粘・Fe あり(3	※N4/0～3/0 灰～暗灰 シルト～粘土、灰状 Fe 若干あり(8層自然土層)
～2層耕作土)	※※内に①の2～4cmのブロック
※2.5Y5/3 黄褐 粘質土、シルト～細砂主体、粗砂若干あり、Mn 粘わずかに・	※2.5Y3/1～4/2 黄褐～暗灰黄 粘質土、シルト主体、粗砂あり、小礫・炭化物
Fe あり(3-2層耕作土)	若干あり、人為的埋土か(4-2面遺)
※2.5Y5/2-5B4/1 暗灰黄～暗青灰 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂～中砂あり	※5Y4/1 灰 粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂あり、炭化物若干あり、し
(6層)	まり悪い、人為的埋土か(水中?)(4-2面遺)
※10YR5/2～5GY5/1 灰黄褐～オリーブ灰 粘質土、シルト主体、粗砂あり(6	※2.5Y6/2 灰黄 極細砂～中砂、ラミナあり、流水埋積
～7層間の間層遺物あり)	※5Y5/1 灰 細砂～中砂、わずかにラミナ残る(流水埋積6面埋理土)
1～2t.境	※10YR5/2～4/2 灰黄褐 粘質土、シルト主体、中砂～粗砂若干あり、Mn あり、
※N4/0～3/0 灰～暗灰(変色部10Y4/1 灰)粘質土、シルト～粘土主体、粗砂	人為的埋土?(4-2面768溝)
若干あり、小礫わずかにあり(1-1層耕作土)	※10Y5/1 灰 シルト～細砂、Fe 若干あり(止水埋積?4-2面768溝)
※10YR5/3 に※、黄褐 粘質土、シルト主体、粗砂・Fe あり(変色部7.5Y5/2	※N4/0 灰 シルト)内に※混層(6面埋理土)
灰オリーブ)(1-2層耕作土)	※※と※の間のブロック
※2.5Y5/2 暗灰黄(変色部5Y5/2 灰オリーブ)粘質土、シルト主体、粗砂～小	※2.5Y5/2～4/2 暗灰黄 質は※と同じ、①が若干混層か(3-2層埋土時粘質盛
礫あり、Fe・Mn 粘若干あり(2-2層)	土)
※2.5Y5/3 黄褐 粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂あり、Fe・Mn 粘若干	※※と※の混層
あり(2-2層)	※※と※の混層
※2.5Y5/3～5/2 黄褐～暗灰黄 粘質土、シルト～細砂主体、中砂・Fe・Mn 粘	※※と※の混層
あり(3-1層)	※10YR4/2 灰黄褐 粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂わずかにあり、Fe・
	Mn あり(耕土系3-3層)
	※7.5Y4/1 灰 粘質土、シルト主体、粗砂あり(7・8層間の間層)

感じてラミナは認められない。T.P. + 4 mまで確認したが砂層の下面には至らなかった。

第9層以下は水中での堆積と考えられ、湖沼のような環境が想像できる。その状況から変化し、初めて陸化した際に形成されたのが第8層なのであろう。

第3項 基本層序まとめ

今回の調査では第9層までは水域であり、第8層で陸化し、微高地形成開始は第7層である事が判明した。しかし、第7層上面侵食後、第6層が堆積するまでの過程は解明できていない。

また、第4-2層のありかたから予想できるが、調査区よりさらに地形的に高い遺跡北東部では、より粗粒の堆積層が不連続に存在すると思われ、遺構面もより細かく分かれる可能性が考えられる。

また先述のように、調査区内で層序の連続性が追えない部分が2か所あり、基本層序の変更が必要になる可能性があるのも課題である。5・6トレンチ間の断絶は、5トレンチ西隣の部分が調査対象となれば判明する可能性が高いであろう。2・3トレンチと4・5トレンチの間にある道路・水路部分も、攪乱が多いであろうが、何かしらの手掛かりが残っている可能性はある。

第2節 各遺構面の成果

第1項 土器の分類基準

各遺構面で、遺構出土物についてもふれるので、その前提としてまずここで、今回行った土器の分類基準を述べておきたい。

図8 3・5トレンチ北西壁 断面

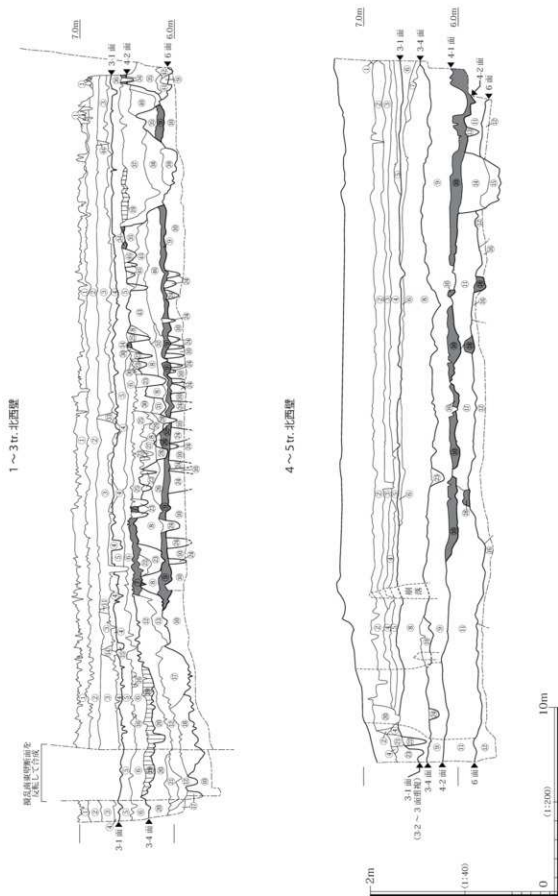


表2 図8土色・土質

3r.北西壁

- ①N4/0 灰 粘質土、シルト主体、中砂～粗砂若干あり、貫状Feあり(1-1層)
 ②10YR4/2 灰黄褐 粘質土、シルト主体、粗砂～小礫・Mnあり(転にはならず)(1-2層)
 ③10YR4/2～5/2 灰黄褐 粘質土、シルト～細砂主体、粗砂～小礫あり、中礫わずかにあり、Mn粒あり、土面に多し(2-1層細作土)
 ④2.5Y5/3～5/4 黄褐 粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂・Feあり、Mn粒若干あり、部分的に2～4層の薄層に分かれる(2-2層中粗作土)
 ⑤2.5Y5/3 黄褐 粘質土、シルト～細砂主体、粗砂～極粗砂あり、Mn粒多し、特に上面に非常に多し(3-1層細作土)
 ⑥2.5Y5/4 黄褐 粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂・Mn粒あり、Fe若干あり(3-2層細作土)
 ⑦10YR4/2～5/3 灰黄褐～近い黄褐 粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂若干あり、Mn多し(4-1層自然土層)
 ⑧2.5Y5/3～6/3 黄褐～近い黄褐 粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂・Fe・Mnあり(4-2層)
 ⑨10Y5/2～4/2 灰褐～灰黄褐 粘質土、シルト～細砂主体、中砂わずかにあり、Mnあり、植物根多し(5層自然土層)
 ⑩10YR4/3～5/1 近い黄褐～灰褐 細砂～シルト、Fe・Mn若干あり、植物根多し、8層的に土壌化、やや土壌化した水理堆積層(6層)
 ⑪③のブロック土、小礫少ない(2-1層中粗作土)
 ⑫10YR4/2～3/1 灰黄褐～黄褐 粘質土、細砂～シルト主体、粗砂～極粗砂若干あり、炭化物わずかにあり、凹地二次堆積土、土壌化した4-1層相当(43層食肉土層)
 ⑬10YR4/2 灰黄褐 細砂～シルト、Mnあり)内に「2.5Y5/3 黄褐 粘質土、シルト～細砂主体、粗砂若干あり」の3～7cmのぼやけたブロックあり、4-1層からの根張土、水中堆積物?(洪水時?) (43層食肉土層)
 ⑭③内に⑬の1-2cmのブロック若干あり(2-1層内粗作土)
 ⑮⑩と⑬の混濁(2層床面遺構埋土)
 ⑯⑩と⑬の混濁(3-1層床面遺構埋土)
 ⑰N3/0 褐灰 シルト 上面にMnと中砂の降下あり、下部に中砂～粗砂の巻き上げあり、炭化物・植物遺体若干あり、侵食面内(4-1～4-2面) 黒泥土層(43層食肉土層)
 ⑱5Y1/1 灰(Mn深あり)、2.5Y5/3 黄褐)細砂～粗砂、部分的に粗砂～ラミナ、やや上から土壌化したMn深あり、侵蝕面形成時の砂粘土(43層食肉土層下層)
 ⑲10YR1/1 灰 シルト～細砂)と⑬のブロック、小～中礫若干あり(侵蝕土系3-3層)
 ⑳上部Mnで10YR4/3に近い黄褐、下部10YR4/1 褐灰 基本シルトだが、植物根張での中砂～粗砂の降下混じり、粘質土状、上層Fe・Mnあり(3-4層水成堆積物)
 ㉑⑩と⑬の混濁(縦及内北東断面面)にあり
 ㉒⑩と⑬の10～2cmのブロック
 ㉓10YR4/2 灰黄褐 粘質土、シルト～細砂主体、中砂・Mnあり、粗砂～小礫・炭化物わずかにあり(遺構埋土)
 ㉔10Y5/3～5/1 近い黄褐～灰褐 シルト～細砂、Fe・Mnあり、⑩と⑬の混濁分(遺構埋土)
 ㉕5YR4/1 褐灰 粘質土、シルト～細砂主体、粗砂・Mn・炭化物あり、⑬の4～2cmのブロック若干あり、混濁込み人為的埋土?
 ㉖10YR4/2～5/1 灰黄褐～灰褐 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂～中砂あり、Fe・Mn若干あり、Mn粒わずかにあり(4-2層)
 ㉗⑩の6～3cmのブロック層に⑬(遺構埋土)
 ㉘10Y5/1 褐灰 粘質土、シルト～細砂主体、粗砂～中砂あり、Fe若干あり(遺構埋土)
 ㉙10YR4/1～4/2 灰褐～灰黄褐 粘質土、シルト～細砂主体、粗砂・炭化物・他もあり(遺構埋土)
 ㉚②内に③の1～3cmのブロック若干あり、炭化物あり(遺構埋土)
 ㉛⑩に⑦若干混濁(遺構埋土)
 ㉜2.5Y5/2 暗灰黄 粘質土 シルト～細砂主体、粗砂～中砂・Fe・Mnあり(4-2層)
 ㉝⑩と同層だが、ややしまり、ブロック状混濁成る(2-1層内粗作土)
 ㉞10Y5/2～4/2 灰黄褐 粘質土、シルト～細砂主体、粗砂若干あり、Mn・Mn粒あり、Fe若干あり(4-1層)
 ㉟10Y5/3 近い黄褐 粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂・Mn粒わずかにあり、Mn・Feあり(4-2層)
 ㊱⑩4と35の混濁(遺構埋土)
 ㊲7.5YR4/1 褐灰 粘質土、シルト～細砂主体、粗砂～極粗砂若干あり、炭化物若干あり、Mnあり(289層込み埋土層)

- ⑲7.5YR5/1 褐灰 粘質土、シルト～細砂主体、粗砂若干あり、Mnあり(289層込み埋土層)
 ⑳10YR4/3～4/2 近い黄褐～灰黄褐 砂質土、細砂主体、シルト・中砂・Fe・Mnあり(289層込み埋土層)
 ㉑10YR3/1～4/2 灰褐～灰黄褐 粘質土、シルト主体、中砂～細砂若干あり、炭化物わずかにあり、Mnあり(289層込み埋土層、293～295溝が流れ込み北西～南東になるか)
 ㉒2.5Y6/2 灰黄 粗砂～細砂、ラミナ等、部分的にFe・Mnあり
 ㉓2.5Y5/1～5/2 黄灰～暗灰黄 粘質土、ラミナなし、Feあり
 ㉔10Y5/2～5/1 灰黄褐～灰褐 砂質土、粗砂～極粗砂主体、シルト～細砂・Mnあり(4-2層)
 ㉕⑩と⑬の混濁(1-2層床面遺構(2-1面))
 ㉖⑩と⑬の混濁(遺構埋土)
 ㉗10Y5/3 近い黄褐 粘質土、シルト～細砂主体、中砂・Feあり、粗砂～小礫・Mn粒わずかにあり(4-2層)

4～5r.北西壁

- ①10Y4/1～2.5Y5/2 灰～暗灰黄 粘質土、シルト主体、粗砂～小礫・Fe・Mn混濁にあり(北東壁の1-1層)
 ②2.5Y6/4 近い黄 粘質土、シルト主体、炭化物わずかにあり、Fe若干あり(1-1層)
 ③2.5Y5/2 暗灰黄 粘質土、シルト主体、粗砂あり、Fe若干あり、Mn粒わずかにあり(1-2層)
 ④2.5Y6/3 近い黄 粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂・Fe・Mn粒あり(2-1層)
 ⑤10Y5/6～6/4 黄褐～近い黄褐 粘質土、シルト～細砂主体、中砂・Mn粒あり、粗砂わずかにあり、Fe多し(2-2層)
 ⑥2.5Y5/1～5/2 黄灰～暗灰黄 粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂あり、Feわずかにあり、Mn粒多し(特に上部)(3-1層)
 ⑦2.5Y6/3～5/2 近い黄～暗灰黄 粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂・Fe・Mn粒あり(3-2層)
 ⑧2.5Y6/3～5/3 近い黄～黄褐 粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂わずかにあり、Fe若干あり、Mn粒あり(洪水系3-3層)
 ⑨10YR6/2 灰黄褐(上部2.5Y6/3 近い黄、下部の還元5G5/1 オリーブ灰)シルト～極細砂、わずかに粗砂～小礫・貫状Feあり、上部Fe・Mn粒若干あり(3-4層洪水堆積物、5r.のみ上面土壌化痕跡確認)
 ⑩10YR4/1 褐灰 粘質土、シルト主体、中砂～粗砂わずかにあり、貫状Feあり、植物根を上層が降下(4-1層自然土層)
 ⑪2.5Y5/3～4/2 黄褐～暗灰黄 砂質土、細砂～シルト主体、中砂若干あり、Feあり(4-2層洪水堆積物)
 ⑫10YR6/1 灰(上部2.5Y6/4 近い黄)砂質土、細砂主体、シルト・貫状Feあり、しまり悪し(6層洪水堆積物)
 ⑬⑩に⑪の1～4cmのブロック若干あり(遺構埋土)
 ⑭2.5Y5/2 暗灰黄 粘質土、シルト～細砂主体、中砂・Fe・Mn若干あり、⑩と⑬の混濁分(遺構埋土)
 ⑮2.5Y5/1 黄灰(還元系N5/0)シルト～細砂、Fe・貫状Fe若干あり(水成堆積、遺構埋土)
 ⑯5Y3/5～5/1 灰オリーブ～灰 シルト～粘土、上部中砂～粗砂の降下・Fe・Mn若干あり(7層水成堆積)
 ⑰N4/0 灰 シルト～粘土、貫状Feあり、下部6層砂・5層泥を巻き上げ、粗砂～中砂あり、5Y5/1 灰を呈す(5面水田上流水堆積物)
 ⑱2.5Y5/2～4/2 暗灰黄 砂質土、細砂～シルト主体、中砂・Mn・貫状Fe若干あり(5層自然土層層とそれの粗砂層)
 ⑲「2.5Y5/6 黄褐 粘質土、シルト主体、中砂わずかにあり、Feあり」と
 ⑳「5Y4/1 灰 シルト、炭化物若干あり」の3～7cmのブロック
 ㉑2.5Y5/2 灰オリーブ 粘質土 シルト主体、粗砂～小礫若干あり、炭化物わずかにあり、Mn混濁あり
 ㉒⑩と⑬のブロック
 ㉓④内8のブロック
 ㉔5Y5/1 灰 粘質土、シルト主体、粗砂あり、炭化物わずかにあり(915層込み埋土層)
 ㉕10YR6/2 灰褐 粘質土、シルト主体、中砂・Mn粒・炭化物あり(930溝埋土)

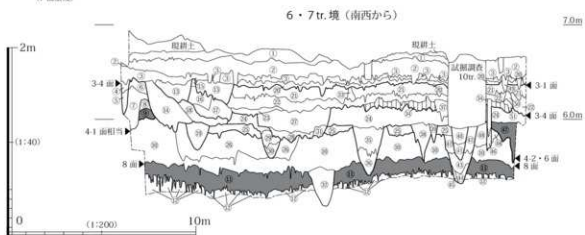
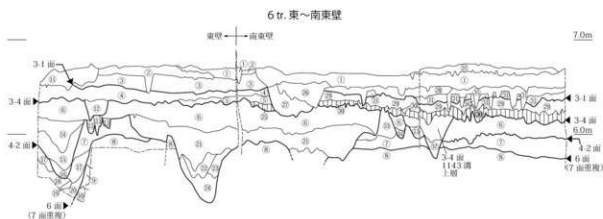
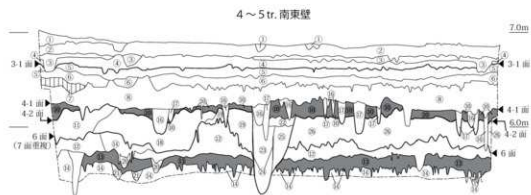
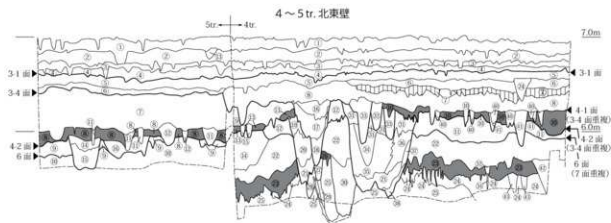


図9 4・5トレンチ北東壁・南東壁、6トレンチ東~南東壁、6・7トレンチ境 断面

表3 四ノ土色・土質
4～5t.北東壁の5t.部分

①10YR/1～2.5Y/2 灰～暗灰黄 粘質土、シルト主体、粗砂～小礫・Fe・Mn あり
 ②2 瓦東壁の1～1層
 ③10YR/2 暗灰黄 粘質土、シルト主体、粗砂あり、Fe 若干あり、Mn 粒わずかにあり(1～2層)
 ④2.5Y/3 近い黄 粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂・Fe・Mn 粒あり(2～1層)
 ⑤10YR/6～6/4 黄褐色に近い黄褐色、粘質土、シルト～細砂主体、中砂・Mn 粒あり、粗砂わずかにあり、Fe 多し(2～2層)
 ⑥2.5Y/1～5/2 黄灰～暗灰黄 粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂あり、Fe わずかにあり、Mn 粒多し(特に上部)(3～1層)
 ⑦2.5Y/3～5/2 近い黄～暗灰黄 粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂・Fe・Mn 粒あり(3～2層)
 ⑧2.5Y/3 黄褐色 粘質土、シルト主体、中砂～細砂若干あり、Mn 粒あり(3～4層)
 ⑨10YR/4/1 和灰 粘質土、シルト主体、中砂～細砂わずかにあり、貫状 Fe あり、粗粒を土層が厚く(4～1層自然土埋積)
 ⑩2.5Y/3～4/2 黄褐色～暗灰黄 砂質土、細砂～シルト主体、中砂若干あり、Fe あり(4～2層洪水埋積層)
 ⑪10YR/6/1 灰(上部2.5Y/6/4 近い黄) 砂質土、細砂主体、シルト・貫状 Fe あり、しまり直し(6層洪水埋積層)
 ⑫⑬と本の混濁
 ⑭⑮内面の2～6cmのブロック
 ⑯⑰と本の混濁
 ⑱10YR/5/3 近い黄褐色 シルト～細砂、Mn 多し、⑳の再堆積か(4～2面 102.1層)
 ㉑2.5Y/3～5/3 近い黄～黄褐色 粘質土、シルト～細砂主体、中砂若干あり、Fe・Mn あり(4～2面 102.1層)
 ㉒2.5Y/2 暗灰黄 粘質土、シルト主体、細砂～中砂あり、Mn 多し

4～5t.北東壁の4t.部分

①5Y4/1～5/1 灰 粘質土、シルト主体、粗砂・貫状 Fe あり(1～1層)
 ②10YR/2～5/3 灰黄褐色に近い黄褐色 シルト主体、粗砂・貫状 Fe あり、小礫・Mn 粒わずかにあり(1～2層)
 ③2.5Y/3～5/2 近い黄～暗灰黄 粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂・Fe・Mn 粒若干あり(2～4層の薄層の集まり)
 ④2.5Y/3～6/4 近い黄 粘質土、シルト～細砂主体、粗砂～中砂・Fe あり、Mn 粒若干あり(2～2層)
 ⑤2.5Y/3～5/3 近い黄～黄褐色 粘質土、シルト～細砂主体、粗砂・Fe 若干あり、Mn 粒あり、特に上部に多し(3～1層)
 ⑥2.5Y/3 黄褐色 粘質土、シルト～細砂主体、中砂・Mn 粒あり(3～2層)
 ⑦10YR/2 灰黄褐色 粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂・Mn 粒あり(惣地土系3～3層)
 ⑧10YR/5/2～5/3 灰黄褐色に近い黄褐色 粘質土、シルト～細砂主体、極粗砂～中砂・Fe あり、Mn 粒若干あり(洪水系3～3層)
 ⑨10YR/4/2～5/3 灰黄褐色に近い黄褐色 粘質土、シルト～極細砂主体、中砂～粗砂・Fe・Mn あり(4～1層)
 ⑩10YR/2～5/3 灰黄褐色に近い黄褐色 粘質土、シルト～極細砂主体、極粗砂～中砂・Fe あり、Mn 粒若干あり(4～2層)
 ⑪2.5Y/1～4/1 灰 粘質土、シルト～細砂主体、粗砂～極粗砂あり、貫状 Fe あり(4～2層)
 ⑫10YR/4/2～5/3 灰黄褐色に近い黄褐色 粘質土、シルト～細砂主体、中砂若干あり、Fe・Mn あり(4～1層)
 ⑬上部2.5Y/6/4 近い黄、下部10Y5/1 灰 細砂～シルト、Mn・Fe 若干あり(6層)
 ⑭⑮と本の混濁
 ⑯⑰の3～8cmのブロック間に赤の砂、(3～4面 45 溝入り砂の理土)
 ⑱2.5Y/2 灰黄～10Y5/1 灰 細砂～中砂、小礫～粗砂とラミナ状に入る、ラミナ・部分的に Fe あり(3～4面 45 溝内洪水埋積層)
 ㉑N4.0 灰 シルト～細砂、ラミナあり、植物遺体わずかにあり(3～4面 45 溝埋積層埋積層)
 ㉒2.5Y/4/1 灰 粘質土、ほぼ⑮と同じ、赤の再堆積(溝内)(4～2面 401 西溝)
 ㉓10YR/1～5/2 和灰～灰黄褐色 粘質土、シルト主体、細砂～中砂・貫状 Fe あり、炭化物わずかにあり(4～2面 401 西溝埋土)
 ㉔2.5Y/4/1 黄褐色 粘質土、シルト主体、中砂・部分的に粗砂あり(4～2面 401 西溝埋積層埋積層)
 ㉕上部10YR/5/3 近い黄褐色(部分的に10YR/5/6 黄褐色)、下部10YR/4/1 和灰粘質土、シルト主体、細砂～極粗砂若干あり、Fe あり、Mn 粒わずかにあり(7層)
 ㉖10YR/3/2～4/2 黄褐色～灰黄褐色 シルト、Fe・Mn あり上部粗砂の降下わずかに

あり、しまり良く、下部は植物根痕多し(8層)
 ㉗赤と赤の混濁、植物による混濁か
 ㉘2.5Y/6/6 明黄褐色 シルト、しまり直し(9層)
 ㉙10YR/5/3 近い黄褐色 シルト、Fe・Mn あり(8層)
 ㉚5Y/1～2.5Y/4 灰に近い黄褐色 シルト(9面(8面?591)溝埋土)
 ㉛赤の3～6cmのブロック間に赤(9面(8面?592)溝埋土)
 ㉜赤と赤の混濁、断面のようなくらくか
 ㉝2.5Y/3/1～4/1 黒褐色～黄褐色 シルト、上部粗砂～中砂の降下あり、Fe・Mn 若干あり(8面(589)溝埋土)
 ㉞2.5Y/4/1 灰 他⑮と同じ(4～2面溝埋土)
 ㉟赤⑮内に赤の3～7cmのブロック(4～2面溝埋土)
 ㊱赤⑮内に赤と10YR/5/1 灰 シルト)の3～8cmのブロック(4～1面溝埋土)
 ㊲赤⑮と10YR/5/1 灰 シルト)と赤の2～5cmのブロック(4～2面 401東溝埋土)
 ㊳上部2.5Y/3/3 黄褐色、下部2.5Y/6/3～7/2 近い黄～灰黄 細砂、上部粗砂の降下あり、シルト若干含む、Fe あり(洪水埋積層4～2面 401東溝埋土)
 ㊴⑳内に赤の2～4cmのブロック若干あり、溝の埋積か?(4～2面 401東溝埋土)
 ㊵赤と赤の混濁(4～2面 401東溝埋土)
 ㊶赤⑮に細砂のラミナあり(4～2面 401東溝埋土埋積層埋積層)
 ㊷赤⑮と赤の混濁
 ㊸10YR/5/3 近い黄褐色 赤と赤の混濁(4～1、2面溝埋土)
 ㊹10YR/2 灰黄褐色 赤と赤の混濁(4～1、2面溝埋土)
 ㊺10YR/4/1～4/2 和灰～灰黄褐色 シルト、貫状 Fe・Mn あり(8面溝埋土)
 ㊻2.5Y/3 近い黄 シルト、Fe あり、Mn 若干あり(9面溝埋土)
 ㊼2.3と同質、木植層か

4～5t.南東壁の4t.部分

①5Y4/1～5/1 灰 粘質土、シルト主体、粗砂・貫状 Fe あり(1～1層)
 ②10YR/2～5/3 灰黄褐色に近い黄褐色 シルト主体、粗砂・貫状 Fe あり、小礫・Mn 粒わずかにあり(1～2層)
 ③2.5Y/3～5/2 近い黄～暗灰黄 粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂・Fe・Mn 粒若干あり(2～4層の薄層の集まり)
 ④2.5Y/3～6/4 近い黄 粘質土、シルト～細砂主体、粗砂～中砂・Fe あり、Mn 粒若干あり(2～2層)
 ⑤2.5Y/3～5/3 近い黄～黄褐色 粘質土、シルト～細砂主体、粗砂・Fe 若干あり、Mn 粒あり、特に上部に多し(3～1層)
 ⑥2.5Y/3 黄褐色 粘質土、シルト～細砂主体、中砂・Mn 粒あり(3～2層)
 ⑦10YR/2 灰黄褐色 粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂・Mn 粒あり(惣地土系3～3層)
 ⑧10YR/5/2～5/3 灰黄褐色に近い黄褐色 粘質土、シルト～細砂主体、極粗砂～中砂・Fe あり、Mn 粒若干あり(洪水系3～3層)
 ⑨10YR/4/2～5/3 灰黄褐色に近い黄褐色 粘質土、シルト～極細砂主体、中砂～粗砂・Fe・Mn あり(4～1層)
 ⑩10YR/2～5/3 灰黄褐色に近い黄褐色 粘質土、シルト主体、極粗砂～中砂・Fe あり、小礫・Mn 若干あり(4～2層)
 ⑪上部10YR/5/3 近い黄褐色(部分的に10YR/5/6 黄褐色)、下部10YR/4/1 和灰粘質土、シルト主体、細砂～極粗砂若干あり、Fe あり、Mn 粒わずかにあり(7層)
 ⑫10YR/3/2～4/2 黒褐色～灰黄褐色 シルト、Fe・Mn あり、上部粗砂の降下わずかにあり、しまり良く、下部は植物根痕多し(8層)
 ⑬2.5Y/6/6 明黄褐色 シルト、しまり直し(9層)
 ⑭上部2.5Y/6/4 近い黄、下部10Y/1 灰 細砂～シルト、Mn・Fe 若干あり(6層)
 ⑮10YR/5/2 灰黄褐色 赤と赤の混濁(4～1、2面溝埋土)
 ⑯10YR/4/1～4/2 和灰～灰黄褐色 シルト、貫状 Fe・Mn あり(8面溝埋土)
 ⑰上部10YR/4/2 灰黄褐色、下部N4.0～2.5Y/3 灰～灰黄 極粗砂～中砂、小礫若干あり、シルト～細砂の1～2cmのブロック若干あり、上部シルトの降下、Mn 多し、クレバススプールの埋積(4～2層)
 ⑱2.5Y/4/2～5/3 暗灰黄～黄褐色 砂質土、細砂～シルト主体、極粗砂～中砂多し、小礫若干あり、上部 Mn・下部貫状 Fe あり、下部⑮の巻き上げ多し(4～2層土砂堆積埋積層)
 ㉑赤と赤の混濁(8面溝埋土)
 ㉒赤と赤の混濁(9面溝埋土)
 ㉓赤と赤の2～5cmのブロック
 ㉔赤と赤と赤の3～8cmのブロック、下部には赤～赤多し(井戸枠内埋土?)
 ㉕5Y/1 灰 シルト(井戸埋積層)
 ㉖赤と赤の4～8cmのブロック(井戸埋積層?)
 ㉗10YR/2 灰黄褐色 粘質土、シルト主体、粗砂～中砂・上部 Fe あり、小礫わずかにあり、植物根痕多し(4～2層)

表3 つづき

6tr. 東～南東壁

- ①2.5Y4/1～10YR5/4 黄灰～に赤い黄褐 粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂・炭状Feあり、Mn粒若干あり(2-1層)
- ②2.5Y6/3 に赤い黄 粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂・Fe・Mn粒あり(2-1層埋埋土)
- ③2.5Y6/4 に赤い黄 粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂若干あり、Fe・Mn粒あり、3～4層の薄層の連なり(2-2層埋埋土)
- ④2.5Y5/3 黄褐 粘質土、シルト～細砂主体、中砂あり、Fe若干あり、Mn粒多し(3-1層埋埋土)
- ⑤2.5Y5/3 黄褐 粘質土、シルト～細砂主体、中砂・Fe若干あり、Mn粒あり(3-2層埋埋土)
- ⑥5Y5/1 灰 粘質土、シルト主体、細砂～粗砂・炭状Feあり(3-4層洪水堆積)
- ⑦10YR5/4～5/6 に赤い黄褐～黄褐 粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂・Feあり(4-2層)
- ⑧上部10YR5/3 に赤い黄褐、下部5Y4/1 灰 シルト～粘土、上部Fe・Mn粒あり(7層)
- ⑨5Y3/1 オリーブ黒 粘土、下面風多し(8層)
- ⑩6Y5/1～6/1 オリーブ灰 粘土(9層)
- ⑪5Y5/1 灰 粘質土、シルト主体、中砂～極細砂若干あり、Mn塊あり、小礫わずかにあり、5-6r.境(2-1面遺構)
- ⑫5Y4/1 灰 粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂・炭状Feあり
砂と⑫2.5Y4/1 黄灰 シルト)のブロック(4-1・2面遺構)
- ⑬2.5Y3/1～5/1 黒褐～黄灰 シルト～細砂、炭状Feあり、4-1面内遺構(4-2面遺構)
- ⑭10Y5/1 灰 細砂～シルト、炭状Feあり、炭化物若干あり、埋層約(4-2面遺構)
- ⑮2.5Y7/4 浅黄 細砂～中砂、シルト若干混じる、Fe・ラミナあり、埋層約(埋層約時堆積)
- ⑯2.5Y7/4～N5/0 浅黄～灰 シルト～中砂、Fe若干あり、ラミナあり、埋層約(6面1335遺構)
- ⑰N5/0 灰 シルト～細砂、炭化物わずかにあり(6面1335遺構埋層時堆積)
- ⑱砂に中砂～粗砂混じる(6面1335遺構埋層時堆積)
- ⑳N4/0 灰 シルト～粘土、炭化物あり(6面1335遺構埋層時堆積)
- ㉑5Y5/1 灰 粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂・上部炭状Feあり、小礫若干あり、下部炭化物若干あり、埋層約(4-2面遺構)
- ㉒5Y6/2 灰オリーブ 細砂～シルト、ラミナあり(4-2面遺構埋層時堆積)
- ㉓5Y4/2 灰オリーブ シルト～細砂、炭状Feあり、埋層約(6面1136遺構)
- ㉔N4/0～5/0 灰 シルト、細砂若干あり、炭化物わずかにあり(6面1136遺構埋層時堆積)
- ㉕2.5Y5/2～5/1 暗灰黄～黄灰 粘質土、シルト主体、細砂・炭状Feあり、粗砂わずかにあり、Mn粒若干あり(埋層土系3-3層)
- ㉖5Y4/2 灰オリーブ 粘質土、シルト～細砂主体、粗砂若干あり、Mn粒上下にあり、炭状Feあり(2-1面遺構)
- ㉗5Y4/1 灰 粘質土、シルト～細砂主体、粗砂若干あり、炭状Feあり(2-1面遺構)
- ㉘10YR4/1 暗灰 粘質土、シルト主体、粗砂～極細砂若干あり、炭状Fe・Mnあり(6・7r.低地部2-1層)
- ㉙2.5Y5/1 黄灰 粘質土、シルト主体、中砂・炭状Fe・Mnあり(6・7r.低地部3-1層)
- ㉚5Y5/1 灰 粘質土、シルト主体、中砂・Mn粒・炭状Feあり、(6・7r.低地部埋層土系3-3層)
- ㉛10YR5/1 暗灰 粘質土、シルト主体、粗砂・Mn粒あり(6・7r.低地部2-2層)
- ㉜5Y5/1 灰 シルト)と5Y3/1 オリーブ黒 シルト)と5Y6/2 灰オリーブ シルト)のブロック(1-1層埋埋土)
- ㉝2.5Y5/2 暗灰黄 粘質土、シルト～細砂主体、粗砂若干あり、Feあり、Mn粒わずかにあり(4-2層)
- ㉞砂と砂との混濁
- ㉟2.5Y5/2 暗灰黄 粘質土、シルト主体、中砂～粗砂あり、炭状Fe・Mn粒若干あり(2-1層)(6・7r.低地部2-1層)
- ㊱砂と砂の混濁
- ㊲砂と砂の3～7cmのブロック間に赤

6・7r.境

- ①2.5Y6/6 明黄褐 粘質土、シルト主体、中砂若干あり、Fe・Mn粒あり)と2.5Y5/1～4/2 黄灰～暗灰黄 粘質土、シルト～細砂主体、中砂・Mn粒あり)の3～12cmのブロック、炭灰(1-1層)
- ②5Y5/1 灰 粘質土、シルト～粘土主体、極細砂～中砂あり、炭状Feあり、Mn粒下平にあり(1-2層耕作土層)
- ③5Y6/2 灰オリーブ 粘質土、シルト主体、粗砂～中砂若干あり、極細砂わずかに

- にあり、炭状Fe・Mn粒あり(2-1層耕作土層)
- ④5Y6/2 灰オリーブ 粘質土、シルト主体、極細砂～小礫わずかにあり、炭状Feあり(3-4面878埋埋土)
- ⑤④内に2.5Y4/1～5/1 黄灰 シルト～粘土)の6～10cmのブロックあり(3-4面878埋埋土)
- ⑥④との4～8cmのブロック(3-4面877・878埋埋土「道跡」遺土)
- ⑦5Y6/2～6/1 灰オリーブ～灰 シルト、粗砂～中砂わずかにあり、炭状Feあり(3-4面洪水堆積層)
- ⑧⑦との3～5cmのブロック(4-1面909段差以西「道跡」遺土)
- ⑨10YR5/1 暗灰 粘質土、シルト主体、中砂若干あり、炭状Feあり(4-1層、7層上部の白灰土層)
- ⑩上部2.5Y6/3～5/2 に赤い黄～暗灰黄、下部5Y4/1～2.5Y3/1 灰～オリーブ灰 粘土～シルト、細砂・Mnあり(7層)
- ⑪5Y3/1 オリーブ黒 粘土～シルト、炭状Mnあり、下面植物根痕など生痕多し(8層)
- ⑫2.5Y6/6～5/3 明黄褐～黄褐 粘土～シルト、8層の層下多し(9層)
- ⑬5Y6/2 灰オリーブ 粘質土、シルト主体、粗砂・炭状Fe・Mn粒あり(3-1面埋埋土)
- ⑭5Y6/1～5/1 灰 粘質土、シルト主体、粗砂～細砂・炭状Feあり(3-4面877埋埋土)
- ⑮2.5Y5/3 黄褐 粘質土、シルト～細砂主体、中砂・Mn粒あり(3-1層)
- ⑯2.5Y5/3 黄褐 粘質土、シルト～細砂主体、中砂あり、小礫わずかにあり、Mn粒多し(3-3面697埋埋土)
- ⑰10YR5/2 灰黄褐 粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂あり、Fe・Mn粒あり(3-4面877埋埋土)
- ⑱5Y5/1 灰 粘質土、シルト主体、粗砂・炭状Feあり、中砂若干あり(3-4面877埋埋土)
- ⑲10YR5/2 灰黄褐 砂質土、細砂～シルト主体、中砂若干あり、Mn・炭状Feあり(4-2面950埋埋土)
- ⑳2.5Y6/3 に赤い黄 粘質土、シルト～細砂主体、粗砂若干あり、Fe・Mn粒あり(2-2層)
- ㉑2.5Y6/3～5/2 に赤い黄～暗灰黄 粘質土、シルト～細砂主体、Fe・Mn粒あり(3-1層)
- ㉒2.5Y5/2 暗灰黄 粘質土、シルト～細砂主体、粗砂・Mn粒・炭状Feあり(3-2層)
- ㉓2.5Y5/1 灰 粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂若干あり、Mn・炭状Feあり(埋層土系3-3層)
- ㉔2.5Y5/1～6/1 灰 シルト、粗砂～小礫～炭化物わずかにあり、炭状Feあり(3-4層洪水堆積)
- ㉕2.5Y5/2～4/2 暗灰黄 砂質土、細砂～シルト主体、中砂・炭状Feあり、上部Fe多し(4-2層)
- ㉖2.5Y6/1 黄灰 中砂～シルト 上部Feあり(6層洪水堆積層)
- ㉗2.5Y5/1 黄灰 粘質土、シルト主体、粗砂若干あり、炭状Feあり(3-4面870埋埋土)
- ㉘10Y5/1 灰 粘質土、シルト主体、中砂・炭状Feあり(4-1面888遺込み埋埋土)
- ㉙2.5Y5/1～4/1 黄灰 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり、炭化物わずかにあり(4-2面951埋埋土)
- ㉚2.5Y5/1 黄灰 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり、炭化物わずかにあり、26の2～3cmのブロック若干あり(4-2面951埋埋土)
- ㉛砂と砂のブロック
- ㉜5Y3/1 オリーブ黒 粘土～シルト(8面遺構)
- ㉝砂と同質、ブロック状構造(3-1層埋埋土)
- ㉞10YR4/2 暗灰黄 シルト)と2.5Y6/4 に赤い黄 粘質土、シルト主体、中砂・Mn粒あり)の2～4cmのブロック(3-3層相当埋埋土?)
- ㉟砂と砂と砂との5～20cmのブロック(4-2面952埋埋土)
- ㊱2.5Y7/3 灰黄 細砂、ラミナあり)内に3～6cmのブロック若干あり(4-2面952埋埋土)
- ㊲砂と砂の混濁
- ㊳5Y5/1 灰 砂質土、細砂～シルト主体、中砂あり、6層に似る(4-2面953埋埋土)
- ㊴砂と砂と38の混濁(4-2面遺構埋埋土)
- ㊵5Y5/2 シルト～細砂(掘り直し)(4-2面954埋埋土)
- ㊶2.5Y5/2 暗灰黄 シルト～細砂に2.5Y7/3 浅黄 細砂)のラミナ(掘り直し)4-2面954埋埋土)
- ㊷2.5Y6/3～6/2 に赤い黄～灰黄 細砂～シルト主体、粗砂若干あり(6面1336埋埋土)
- ㊸2.5Y5/1 黄灰 シルト、炭化物わずかにあり(6面1336埋埋土)

表3 つづき

※9内(炭化物ヲミナシ)に入る (6面 1336 溝埋土)	※9と※と※の混濁
※9内(炭)のブロック (6面 1336 溝埋土)※9内(炭)の2～5cmのブロック	※9と同質、Mnなし、ブロック状構造 (3～2層時短埋盛土)
※2.5Y4/2 暗灰黄 粘質土、シルト主体、粗砂～小礫あり (4～1層)	※ 9と同質、ブロック状構造 (3～2層時短埋盛土)
※2.5Y5/2 暗灰黄 粘質土、シルト主体、粗砂～小礫若干あり (4～2層に似るが6層系か?)	

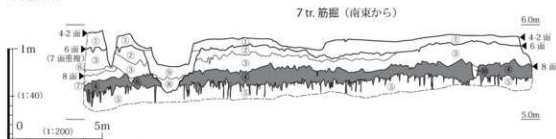


図10 アトレンチ筋掘り 断面(筋掘り位置は図59にあり)

表4 図10土色・土質

7tr. 筋掘り

- ①2.5Y5/2～5/3 暗灰黄～黄褐色(南西端は5B5/1 青灰)粘質土、シルト主体、中砂～細砂・Fe・Mnあり、炭化物わずかにあり (4～2層)
- ②2.5Y5/2～5/1 暗灰黄～黄褐色 シルト主体、細砂～中砂・Fe・Mn・部分的にMnあり (6層)
- ③上部2.5Y6/3～10YR5/2 にぶい黄～灰黄褐色、下部10YR4/2～4/1 灰黄褐色～暗灰 シルト、上部中砂の降下・植物根痕多し、Mnあり (7層)
- ④10YR3/1～2/1 黒褐色～黒 シルト～粘土、粗砂の降下若干あり、Mnあり、下面根痕などの生面多し、しまり直し (8層)
- ⑤2.5Y6/6～5/3 明黄褐色～黄褐色 シルト～粘土、Feあり、根痕で8層の降下盛土 (9層)
- ⑥南西側7・8層間 上、N4/0 灰 シルト
- ⑦南西側7・8層間 下、5Y5/2～4/1 灰オリーブ～灰 シルト～細砂、Mnあり
- ⑧N4/0 灰 シルト、8・9層の1cm弱の小ブロック若干あり、炭化物わずかにあり (1336 溝埋土)
- ⑨2.5Y5/2 暗灰黄 粘質土、シルト主体、細砂～中砂あり、Mn若干あり (1336 溝埋土)
- ※9Y4/1 灰 シルトに⑨の2～4cmのブロック(北東側8面切り込み遺構)

今回の調査では11～13世紀の、特に黒色土器・瓦器・「精良な胎土」(胎土にほとんど砂粒を含まないもの、以下同)の土師器供膳器の出土が多かった。そのため出土量の多い遺構では、実測可能な個体を全て実測し、掲載する事ができなかった。

そこで、個体として、法量・各部の形態・胎土など形式的属性を把握できるものを抽出・記録し、サンプルとした。その中から器種ごとの多様性を提示できる個体が揃うように選び、実測、掲載する事とした。その上で実測しなかったサンプルも含め、属性一覧表として掲載する。

各部の形態や胎土は、ある程度類型化できるため、分類して記号化した。黒色土器と瓦器は両者の比較が可能なように分類基準を同じくし、土師器供膳器は別の分類基準を作り、器種ごとにまとめた。分類は時期的な変化にも対応でき、多様な分析にも基礎資料として利用できるように心がけた。

これらの分類の対象となるものは、第4～2面から第3～4面遺構出土の土師器・黒色土器・瓦器の供膳器である。サンプルを抽出し、属性一覧表を掲載した遺構は930溝・1339井戸・753溝土器群3・768溝土器群1である。それ以外の遺構の対象遺物も統一した分類基準に適合するよう記述している。

黒色土器・瓦器の分類

口径 最大径と最小径を表示、復元径は表には「復〇〇」と記載。センチで小数点第一位まで。

器高 残る部分で底部～口縁の一番高い所を測る。残っていないものは残高を「残〇〇」と表示。

径高指数 口径は最大径と最小径の平均値とし、器高÷口径×100で、小数点第1位まで。

残存率 全体での残り具合をおよそで。最低は「10%以下」、口縁部周などを別記する際は明記する。

高台 断面形で以下のように分類。

- a: 高く、外に踏ん張る形のもの。b: 台形。確実に下面を形成しているもの。c 1: 三角形で高いもの。高さ>幅の1/2。外面がほぼ垂直になるもの多い。c 2: 三角形で低いもの。高さ<幅の1/2。d: 非常に低く、潰れた粘土紐状のもの。剥離で残存していないものは「欠」。

見込暗文の形態 以下のように分類

a 1：直線平行。ほとんど間空かず、空いても2mm以下。a 2：直線平行。間隔2～4mm。a 3：直線平行。間隔5mm以上。b 1：格子状。平均的な間隔5mm未満。b 2：格子状。平均的な間隔5mm以上。c 1：斜格子。平均的な間隔5mm未満。c 2：斜格子。平均的な間隔5mm以上。d：放射状。e：中心で交わる三方向直線群。f：十字の直線群。g 1：螺旋文で、底部を一周するもの。g 2：螺旋文が底部を一方に進行するもの。g 3：螺旋文だが、無秩序に入るもの。g 4：1～2巻きでかろうじて螺旋文と分かるもの。h：ジグザグに入るもの。i：以上のどれとも異なるもの。確実に施文されていないものは「なし」、磨滅などで不明なものは「不明」。

内面ミガキ 平均的なミガキ間の間隔で以下に分類

I：2mm未満。II：2～4mm。III：5mm以上。IV：非常にまばら。V：なし。磨滅で不明なものは「不明」。さらに分割ミガキかどうかを、a：分割あり、b：分割なし、で分類。

外面ミガキ 内面ミガキと同じ。ただし、口縁部ヨコナデ部分のみに入るものは「IV」に含める。

口縁部 a：口縁部内面に沈線あり。b：段状。c：沈線も段もなく、内面が外反。d：沈線も段もなく、丸く収まる。

厚さ 体部中ほどの部分での最大厚が、5mm以上を「厚い」、5mm未満を「薄い」とする。

その他、焼成の硬軟、金属光沢などは、観察所見が磨滅や汚れなどで左右されるので省いた。

土師器供器器の分類

器種 対象機種を坏・碗・皿・小皿とし、各器種で集成する。小皿では特に「て」の字状口縁小皿とコースター形小皿を別に抽出する。

口径・器高・径高指数・残存率 黒色土器・瓦器と同じ。

口縁部 以下のように分類。

a：内側に丸める。b：内側に沈線。c：外反。d：内弯。e：丸く収まる。

調整 内外面に分けて記載。

胎土 基本的に「精良な胎土」である。個体の大部分を占める土色を対象とし、部分的な発色・黒斑などは除く。以下の五つに大別できた。分類で提示した土色は代表的なもので、記載土色が違うものも全体の傾向を見て、どれかに帰属させている。

a：2.5YR6/4～6/8 赤橙～橙色、赤味が強いもの。

b：7.5YR7/6 橙色、一般的な土師器のうち、やや「赤っぽい」もの。

c：10YR8/3～8/4 浅黄橙色、一般的な土師器のうち、やや「白っぽい」もの。

d：10YR8/1 灰白色 「白色土器」に類似するほど白い胎土。

e：10YR6/2 灰黄褐色 ややくすんだ色で「褐色」との印象受けるもの。

全体を通して見ると、a～cは焼成環境の違いによるもので、胎土自体の違いではないようである。

焼成 部分的に暗色を呈するものなどは「低」、赤味が強い部分が多いものや、焼きハゼが見られるものは「高」、それ以外のものを「良」とした。

破片数集計

なお、出土遺物の種別ごと、器種ごとの集計はほとんどの遺構出土遺物で行ったが、比較的出土遺物の多い、930溝・1161土坑・753溝土器群3・753溝全体・283溝のみ「破片数集計表」を作成し、掲載した。破片は2cm以上のものを数え、器種不明のものも種別には加算してある。法量・調整が似る

黒色土器B類と瓦器は、断面に見える胎土内部まで黒いか、灰白色かで区分している。

第2項 第2-1面

試掘調査時点では第1-2層からは近世遺物が出土せず、中世包含層の可能性もあったので、3・4トレンチにおいてその層を人力掘削して包含遺物を取り上げ、第2-1面も平面的に調査した。

結果、第1-2層には染付磁器などが含まれ、近世以降の耕作土層である事が判明した。また、第2-1面に見られる遺構は、ほぼ全て第1-2層床面遺構と分かったので、これ以降の調査では機械掘削を第2-1面までとし、その面の平面的調査は省略し、第2-1・2層の包含遺物を取り上げるのみとした。

ここでは3・4トレンチの第2-1面の状況を簡略に述べる(図版1-1・8-2)。

3トレンチでは、トレンチの位置する現代の土地区画の長辺に平行した溝・鋤溝が大部分であった。長い溝が3本トレンチを縦断する。北西壁沿い中央付近の5cm弱下がる落込みと、トレンチ北東部分には直交する方向の鋤溝が若干見られ、切り合いでは他遺構より新しい。南西側の3本の杭は、現代のものである。

4トレンチでも、トレンチが位置する土地区画の北西辺と平行する溝・鋤溝と、若干のそれに直交する溝・鋤溝が検出された。ただし南東側は、南東辺に平行するように若干角度が変わる。また直交する鋤溝は切り合いに規則性が認められない。トレンチ南西辺沿いに北西～南東方向の溝が集中している。

両トレンチとも長く伸びる溝は、鋤溝よりやや深いが深さ10cmを越えるものはない。また溝同士の間隔も不揃いである。埋土も鋤溝と大差なく、第1-2層系統のものである。

耕作方向が判明し、それが近世段階で現代の耕地区画と変わらない区画が存在していた事を示している。現代の耕地区画が中世以来断絶なく踏襲されていた事が判明したとは言える。

第3項 第3-1面(図11・図版1-2~4-2)

検出遺構のほとんどは第2-2層下面遺構である。ほぼ全面鋤溝の状態で、鋤溝埋土内のMn粒の濃淡によって新旧が推測できる。3・4・5トレンチでは新しい鋤溝だけを図化した。それ以外の遺構が見えないので、5トレンチの南東部から1・2・6・7トレンチではそのほとんどを除去した面で精査した。しかし、Mn粒の形成が濃く、結局、鋤溝以外の遺構はほとんど検出できなかった。

鋤溝は、1~3トレンチではほとんどが北東～南西方向で、耕作方向が一定していたと分かる。4・5トレンチでは切り合いに規則性がなく、度々耕作方向が変わったようである。6・7トレンチでは南ほど北北正方位に近いが、緩く弯曲し、5トレンチに近づくにつれ北東に頭を振る。

1~3トレンチでは、鋤溝を切って長く続く溝群を検出した。断面で確認すると第2-2面切込みの遺構で、埋土は第2-1層である。32溝など直交するものもあるが埋土に切り合いはなく、同時併存である。ほとんどのものは壁が直立し、深さは20cmを越えるものが多い。形態的には第2-1層が耕作土であった時の暗渠と思われるが、中に耕作土以外の何か詰められていた痕跡はない。

5トレンチ南西側の南東壁沿いの2本の溝は、耕地区画溝と思われる。この形態を見ると第3-1面時点では現代より細分された区画であった可能性が高い。

5・6トレンチ境の段差は、6トレンチ北側検出の形と5トレンチ南西端の形が合わないが、これは、5トレンチ側の段差が上面切込みの大型土坑などに切られたからである。本来は6トレンチ側の1139

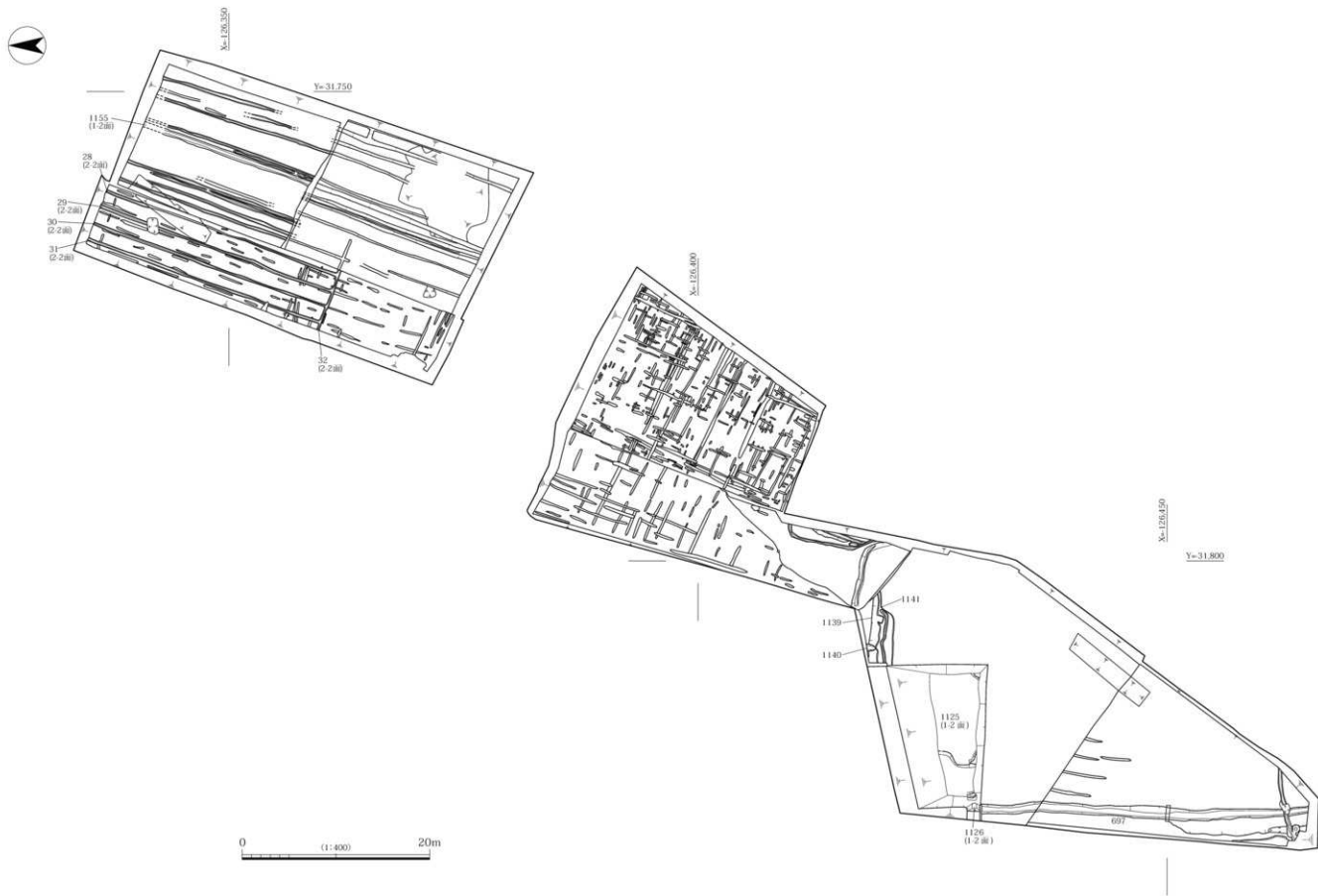


图 11 第 3 - 1 面 全体图

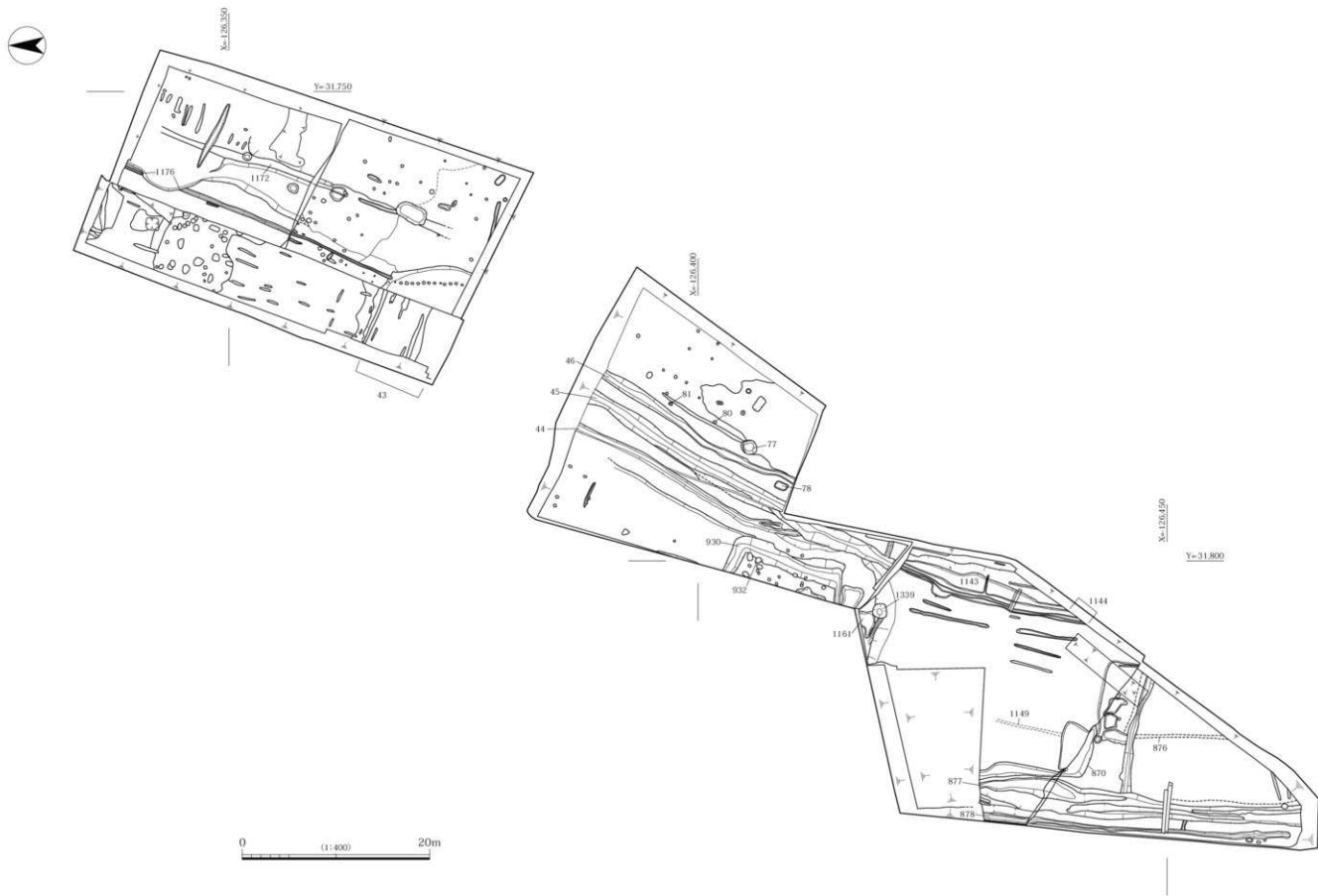


图12 第3-3·4面 全体图

段差を延長した形であったと思われる。1139 段差には 1140 水口があり、段差裾に 1141 溝が走る。

6・7 トレンチの西側にはほぼ南北の方向で 697 溝が走る。溝の東西では西側がやや高く、北側では西が T.P. + 6.55m ほど、東が T.P. + 6.45m ほど、南側で西が T.P. + 6.35m ほど、東が T.P. + 6.15m ほどである。697 溝は若干弯曲し、続く隣の現耕地区画にも弯曲の痕跡が残る。

小結

この面は、中世前半の耕作土層上面だが、遺構の大部分は第 2 - 2 層が耕作土であった時期のものであった。現代の土地区画が中世から踏襲されてきたとは言える。

5・6 トレンチ間の段差は、6 トレンチ側で本来の形に近いものを検出できた。しかし、段差部分では盛り土などの層が多かったようで、6 トレンチ全体の基本層序に対応して、段差部分でも 1 層ずつ面を下げると、第 6 面検出時点で、段差部分では第 3 - 4 面の遺構が検出されるという混乱が生じた。

第 4 項 第 3 - 3・4 面 (図 12・図版 5 - 1 ~ 8 - 1)

1 ~ 3 トレンチでは、第 3 - 4 層が南西部分の 43 侵食痕内にしかなく、第 3 - 4 面相当の面では、大部分で第 4 - 1・2 面が露出した。しかし、第 3 層系の耕作土層の下に、耕地化に伴う整地土系第 3 - 3 層が広い範囲にある。対して、4 ~ 7 トレンチでは整地土系第 3 - 3 層は散在するのみであった。

そのため、調査区全体が耕地化された時点での耕作土床面という要素を重視して、1 ~ 3 トレンチの第 3 - 3 面と 4 ~ 7 トレンチの第 3 - 4 面を一つの全体図とした。

遺構面の概要 1 ~ 3 トレンチ部分は 3 トレンチ北東側の一部で直接に第 4 - 2 面が露出している他は、大体整地土系第 3 - 3 層が認められる。面の高さは、北東側が T.P. + 6.5m ほどで、南西側が T.P. + 6.4m ほど、1・2 トレンチ境付近に段差があったものと思われる。

1176 溝南東側の浅い溝状の地形は、耕地化以降の洪水侵食痕と思われる。1172 道跡は 2 トレンチでは平坦面に切り合いが確認できるのみである。1172 道跡は第 4 - 1・2 面を削り出し、第 3 - 1 層の耕作期間の途中で廃絶したものと考えられる。43 侵食痕は最上層が整地土系第 3 - 3 層で、全体図ではその内部を第 3 - 4 面相当まで下げた状態を示した。第 3 - 3 面と同じ方向の鋤溝 (図版 10 - 1) と、ほぼ南北方向の杭痕列 (図版 8 - 4) が見られた。

4・5 トレンチでは整地土系第 3 - 3 層は 4 トレンチの南側と 5 トレンチ北東部に若干散在するのみである。この部分では 44 ~ 45 溝の通る部分が高く T.P. + 6.35m ほど、その南東の平坦部は T.P. + 6.25m、北西の平坦部は T.P. + 6.20m ほどである。高い部分は 5 トレンチ南西端付近でも同じ高さを保ち、930 溝に「コ」の字に囲まれた部分もその高さである。

5 トレンチから南に段落した 6 トレンチ北東付近の平坦部は T.P. + 6.15m である。しかし、6 トレンチ北壁治いで 1161 土坑や 1339 井戸が乗る高台と、東壁治い高台は、5 トレンチ高所に近い T.P. + 6.3m ほど、6・7 トレンチ西壁治いの高台は、北側で T.P. + 6.4m、南側で T.P. + 6.2m ほどである。

6・7 トレンチ中央の平坦部は、南北の長さはあるが、1149・876 畦畔痕跡の東側が T.P. + 6.15m ほど、西側が T.P. + 6.05m ほどで安定している。

6・7 トレンチ境の一部で段差や浅く不定形な土坑として検出したものは、ブロック土を含み、部分的な整地土系第 3 - 3 層であった。しかし、6・7 トレンチの大部分は第 3 - 4 層直上に第 3 - 2 層が接し、残る遺構は第 3 - 2 層床面遺構が多い。

4・5 トレンチの第 3 - 4 面では調査区全面耕地化以前の遺構も多い。第 3 - 4 面は土壌化の痕跡が

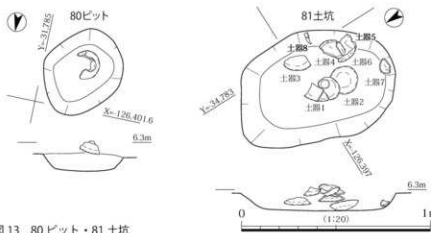


図13 80ピット・81土坑

南西端付近で北西壁に抜ける。南西側の肩部は調査区外だが、3トレンチでは底部が南西端に向けてかなり上がっている。洪水による侵食痕と思われる。流芯はえぐれて最下層として粗砂層が堆積している。その上には遺物を多く含む黒色のシルト層が堆積し、侵食後、沼状の環境になったと考えられる。その上に第3-4層が堆積し、浅い凹地状になり、第3-3面時点で完全に埋め立てられ平坦化している。

80ピット (図13・14・図版28) 4トレンチ中央付近に位置し、やや不整な隅丸長方形のピットである。検出時の深さは0.09mほどだが、遺物出土状況からは0.15m以上あったものと推測される。埋土は7.5Y6/1 灰色、粘質土、シルト主体、中砂～細砂若干ありである。

残存率60%ほどの瓦器椀が1個体出土している(図14-1)。前述のとおり、検出面よりかなり浮いた状態で、やや傾いた倒置状態、西側の部分が欠ける。

内面のミガキはI(本節第1項での属性分類、以下同)。見込み部分は破損と磨滅で不明。口縁端部内面に沈線(a)。外面のミガキは磨滅するがある。ユビオサエは目立たない。高台はa。胎土には2～1mmの黒色粒あるのみで砂粒はない。楕葉型1期でも早い時期、11世紀後半のものであろう。

81土坑 (図13・14・図版10-6・29) 4トレンチで80ピットから9.5mほど北東に位置する土坑である。長軸0.88m、短軸0.57mの不整な楕円形で、深さ0.1mほどだが、出土遺物の高い部分が発出面より0.05mほど突出するので、本来0.15m以上はあったであろう。埋土は80ピットとほぼ同じ。出土遺物は図13にあるもののみで、土器1・3は同一個体の瓦器椀、土器2・4・6は土師器杯、土器5は土師器裏片、土器7は土師器小皿、土器8は土師器杯と思われる小片2片である。土器2が底部に接し正位置、土器5・7・8が壁に接している他はやや浮き、土器1・3は倒置状態である。

図14-2は土器1・3である。完形に接合した。内面ミガキはI、見込みの暗文は磨滅するがh。その上から非常に細い線刻が3本、2本は十字を成す。外面ミガキは磨滅するがII。その下にユビオサエ後ヨコナデの痕跡残る。高台はa。胎土に砂粒はない。口径14.4～15.8cm、器高6.8cmである。楕葉型1期でも早い時期、11世紀後半のものであろう。

図14-3は土器7である。残存率40%。全体にナデ入るが、外面底部はその前にユビオサエ。内外面とも一部に煤付着する。胎土はdで、1mm弱の赤色粒わずかにあり、砂粒はない。

図14-4は土器2である。残存率95%。内面から口縁部外面はナデ、体部外面はユビオサエ後軽くナデ。胎土はcで3～1mmの赤色粒若干あり。砂粒はない。口径14.8～15.1cm、器高3.8cmである。

図14-5は土器4である。残存率45%。磨滅激し。内面底部付近にユビナデ、体部外面はナデ前にユビオサエ。胎土はaで2～1mmの赤色粒あり、砂粒なし。復元口径15.0cm、器高3.2cmである。

弱い。遺構埋土も第3-4層と差があまりないものが多く、検出が難しかった。

4.3 侵食痕 (図版10-2)

第4-1・2面形成ではあるが、この面で検出した。第3-3面・第3-4面での状況は先述のとおりである。2トレンチ南西壁から調査区に入り、3トレンチ

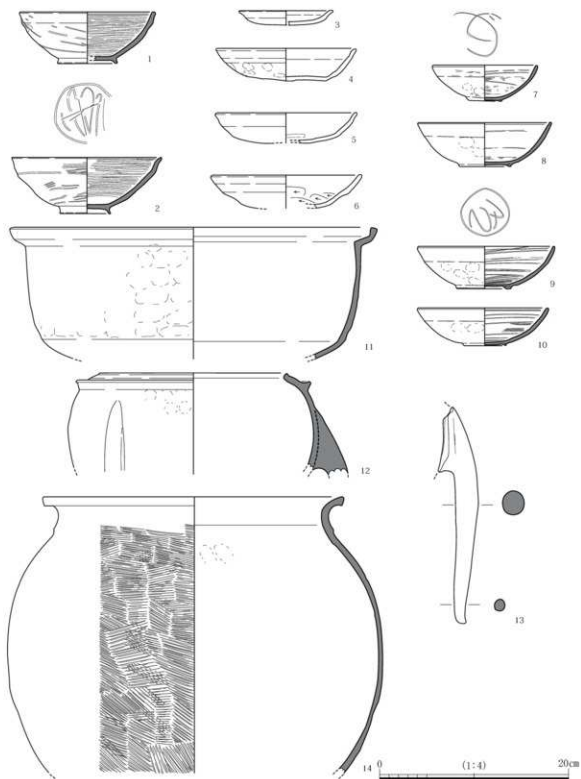


図14 80ピット (1)・81土坑 (2～6)・877溝 (7～14、土器群1：9・10・12～14) 出土遺物

図14-6は土器6である。残存率20%。内面底部と体部の境にヨコユビナデ。外面体部はユビオサエ後ナデである。胎土はcで、0.5mm以下の赤色粒・長石若干あり。

完形品もあるが、一部の破片のみのものもある。土器1・3の瓦器碗は遺構内で割れたものであろう。廃棄土坑か。土器群は11世紀後半のものとして矛盾はない。

44～46溝 (図15・16・図版10-7・8、11-5、12-1) この3本の溝は4・5トレンチ境

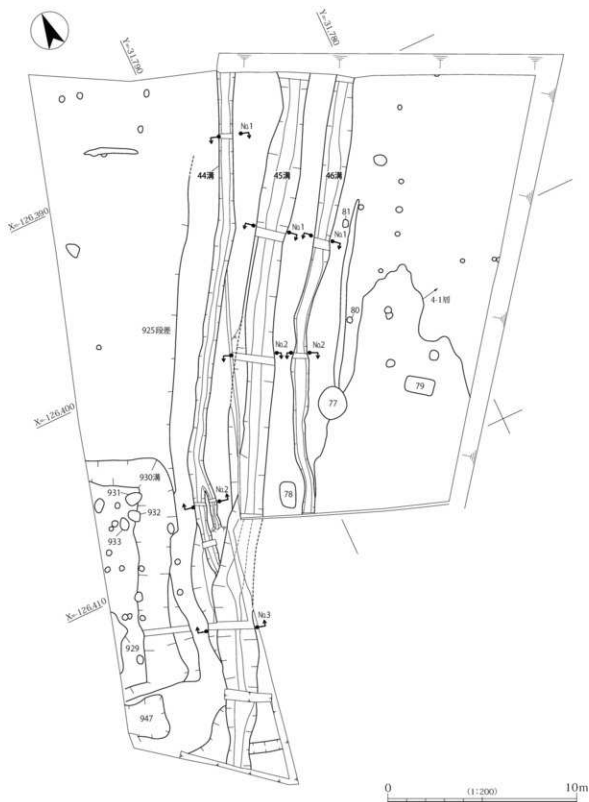


図15 44～46溝

付近の高い部分を北東から南西に走る溝である。底部のレベルは3本とも凹凸はあるが、平均して、44溝がT.P. + 6.15m、45溝がT.P. + 5.60m、46溝がT.P. + 5.95mほどで、どちらかへの傾斜は認められない。

45溝が幅・深さとも大きく、44溝は南西で二股に分かれて45溝に開口する。46溝は4トレンチ

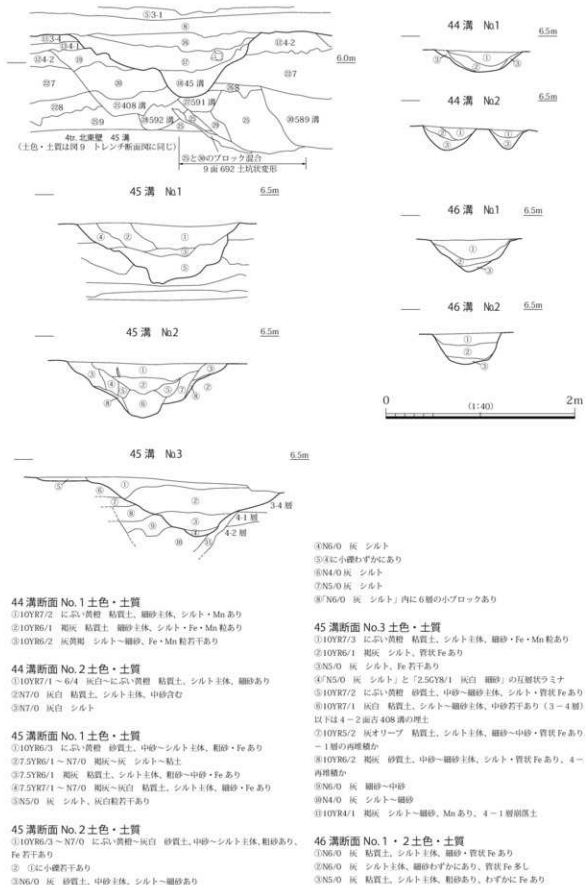


図16 44～46溝 断面

南西外に抜け、6トレンチ東隣の高い地形に伸びていくと考えられる。

45溝は南西6トレンチの1143・1144溝につながる。断面No. 1・2で見ると、掘りなおされた可能性もあり、断面No. 1の③の下面、断面No. 2の②の下面の高さが1143・1144溝の深さに対応する。その理由は1143・1144溝のところで考察する。

北東側1～3トレンチには3本の溝につながるような溝は認められない。よってその北東側の続きは、北西方向に弯曲して井尻遺跡の微高地の北西縁辺を通るか、2・3トレンチと4・5トレンチ間に、水路か水路が存在し、そこから取水しているかであろう。

出土遺物は3本の溝とも多くはなく、破片ばかりで実測できるものはなかった。

外面ミガキが密な瓦器の破片もあるが、瓦質土器の三足羽釜の破片がどれにも見られ、46溝の須恵器東播系こね鉢の口縁形態から、遺物群の示す最新の時期は13世紀前半頃と考えられる。それがこれらの溝の埋設時期の上限となろう。下限が不明確ではあるが14世紀に下る可能性は低いと思われる。

掘削時期を限定する要素はないが、45溝が微地形も含め930溝と平行するので、両者が併存する時期があったのは確実であろう。ならば結論的には溝の掘削が11世紀後半に遡る可能性が高いと言える。

877・878溝 (図14・17・図版13-1・2・30) 878溝は6・7トレンチ西壁沿いの高所に掘られた細い溝で、877溝はそこから東に落ちる段差裾の溝である。どちらも第3-2面まで存続し、877溝は第3-1面ではほぼ同じ位置に697溝が掘りなおされる。

878溝は調査区南端部分が削平されていたが、まだ南に伸びるものと思われる。底部のレベルは北側がT.P.+6.31mほど、南側がT.P.+6.08mほどと、わずかに南に傾斜する。出土遺物は土師器小片2、瓦器破片10片のみである。

877溝は、北側で幅が不整形に広がるのは侵食か。南側は東の肩部が直線的で、それに沿い酸化鉄の沈着が多い畦畔の痕跡が見られた。第3-2層内の畦畔の痕跡であろう。また、西側法面から底部にかけて、幅10cm前後の細い溝状の掘り込みが幾つか見られた。掘削具痕か。底部レベルは北側がT.P.+6.16mほど、南側がT.P.+5.82mほどと、南に傾斜する。

出土遺物は、土師器24片で、坏2・椀2・鍋3・脚1、瓦器椀54片、瓦質土器33片中、甕21、三足羽釜12片、須恵器甕6片、灰釉陶器椀1片、須恵質平瓦1片である。

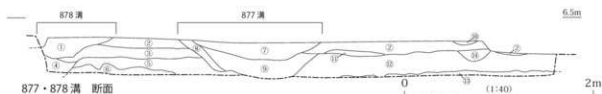
遺物が比較的集中する部分を土器群1とした。図17内出土状況図の溝状表現は877溝底部の小溝状凹凸である。土器は全て底部から浮き、土器1の瓦器椀は正位置状態である。土器2の瓦質三足羽釜は比較的広い範囲に散在していた。土器3の瓦質甕は横置状態の下半分が残存している状況である。

図14-7～14は877溝土器群1及びその周辺溝内で出土したものである。

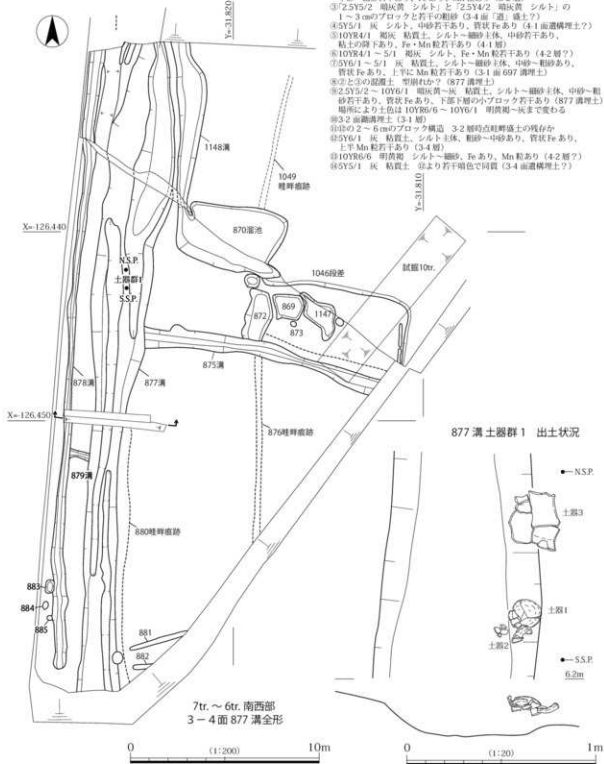
図14-7は小型の瓦器椀、残存率80%である。口径10.9～11.1cm、器高3.8cm。内面ミガキはⅢ、見込みの暗文はg4。口縁端部はd。外面ミガキはⅣ。高台は図のように断面三角形の所は少なく、扁平な粘土紐状である(d)。胎土には1mm弱の長石わずかにあり。浅い器形で外面ミガキが残り、器壁も他より薄い事から和泉型と思われる。和泉型Ⅲ-2～3期、12世紀末葉～13世紀前葉のものか。

図14-8も瓦器椀、残存率95%である。全体に磨滅が激しい。口径13.6～14.3cm、器高5.4cm。内面ミガキはあるが密度不明、見込みの暗文も、外面のミガキも不明。高台はc2。胎土には0.5mm以下の長石・黒色粒若干あり。法量からは楠葉型Ⅲ-2期、13世紀前半のものか。

図14-9も瓦器椀、残存率ほぼ100%、土器群1土器1である。口径14.2～14.6cm、器高4.5cm。内面のミガキはⅢ。見込みの暗文は部分的に磨滅するがg2か。外面のミガキはない(V)。高台は低い

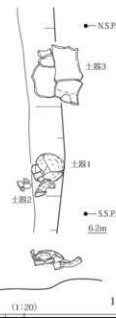


877・878溝 断面



7tr. ~ 6tr. 南西部
3-4面 877溝全形

877溝土器群1 出土状況



- ①2.5Y5/2 暗灰黄 粘質土、シルト～細砂主体、中砂わずかにあり、貫状Feあり、Mnわずかに粘り (878 溝埋土) 3.4～3.2面存続
- ②2.5Y5/6～5/2 黄褐～暗灰黄 粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂若干あり、Feあり、Mn粘りあり (3.2層)
- ③2.5Y5/2 暗灰黄 シルトと2.5Y4/2 暗灰黄 シルトの1～3cmのフロックと若干の粗砂 (3.4面～3.2面 埋土?)
- ④5Y5/1 灰 シルト、中砂若干あり、貫状Feあり (4.1面遺構埋土?)
- ⑤10YR4/1 暗灰 粘質土、シルト～細砂主体、中砂若干あり、粘土の弱下あり、Fe・Mn粘り若干あり (4.1層)
- ⑥10YR4/1～5/1 暗灰 シルト、Fe・Mn粘り若干あり (4.2層?)
- ⑦5Y6/1～5/1 灰 粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂あり、貫状Feあり、上層にMn粘り若干あり (3.1面697溝埋土)
- ⑧②と①の底層土、型附れか? (877 溝埋土)
- ⑨2.5Y5/2～10Y6/1 暗灰黄～灰 粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂若干あり、貫状Feあり、下部下層の小フロック若干あり (877溝埋土) 場所により土色は10YR6/6～10Y6/1 明黄褐～灰まで変わる
- ⑩3.2面遺構埋土 (3.1層)
- ⑪④の2～6cmのフロック構造、3.2層の点群埋土の残存か
- ⑫5Y6/1 灰 粘質土、シルト主体、粗砂～中砂あり、貫状Feあり、上層Mn粘り若干あり (3.4層)
- ⑬10YR6/6 明黄褐 シルト～細砂、Feあり、Mn粘りあり (4.2層?)
- ⑭5Y5/1 灰 粘質土 灰より若干暗色で同質 (3.4面遺構埋土?)

図17 877・878溝

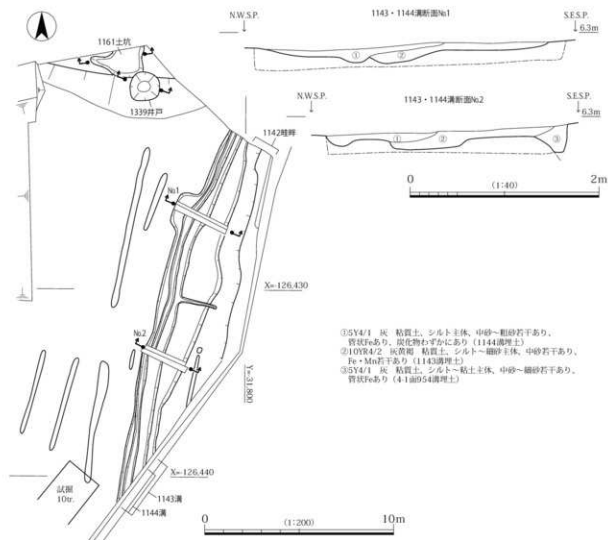


図18 1143・1144溝

がbである。胎土に砂粒はない。桶葉型Ⅲ-2～3期、13世紀のものか。

図14-10も瓦器椀、残存率60%である。口径13.2～13.6cm、器高4.0cm。内面ミガキはⅢ。見込の暗文は磨滅で不明。外面も磨滅あり。高台はc2。胎土には1mm前後の黒色粒わずかにあり、砂粒はない。桶葉型Ⅲ-3期、13世紀後半のものか。

図14-11は瓦質鋼片である。胎土は10YR8/1～5/1灰白～褐色で、石英・長石の砂粒も若干あり。残存率10%前後。内面磨滅で調整不明、口縁は内外面ヨコナデ、体部外面はユビオサエあるがやや磨滅、煤が付着する。復元口径は38.7cmだが、それより小さい可能性がある。13世紀頃のものか。

図14-12・13は瓦質三足羽釜、土器群1土器2で、接合しないが、同一個体の可能性が高い。周辺出土破片も合わせ残存率30%ほどか。内面磨滅で調整不明、外面口縁から鐙はヨコナデ、体部はユビオサエ後ナデ、脚部もナデである。胎土は2.5Y7/1灰白色を呈し、1mm前後の長石あり、石英若干あり、黒色粒わずかにあり。0.5mm以下の砂粒も同じ。13世紀頃のものか。

図14-14は瓦質器、残存率60%、土器群1土器3である。内面は剝離が多いが、残存部分から見れば、頸部直下にユビオサエ、体部にナデが入る。胎土は、器表8YR3/1黒褐色、断面10YR6/2灰黄褐色で、1mm弱の長石あり、1mm前後の石英若干あり。東播系須恵器製の器形に似るが、橋本久和氏から、その系譜に続くもので、13世紀後半のものであろうとのご教示を得た。

遺物は、13世紀前半から後半のものがある。土器群を成すが、瓦器椀などが、一形式段階には取まらない。土器に使用痕の磨滅があり、使用後の廃棄としての時間幅を考えれば、13世紀後半でもやや早い時期の投棄であろう。土器のほとんどが溝底より浮くが、溝内の低い位置から出土した事から、土器群の示す時期は、溝の形成時期から埋没時期の間にあると考えられる。

877・878溝は北東から伸びる水路体系に対し、北から伸びる別の水路体系で、両者が6・7トレンチで接近している。畦畔痕跡や鋤溝から、これらの溝も第3～2層耕作土時点まで存続し、第3～1層時点で廃絶したと考えられるが、掘削時期が、どこまで遡るかは定かではない。

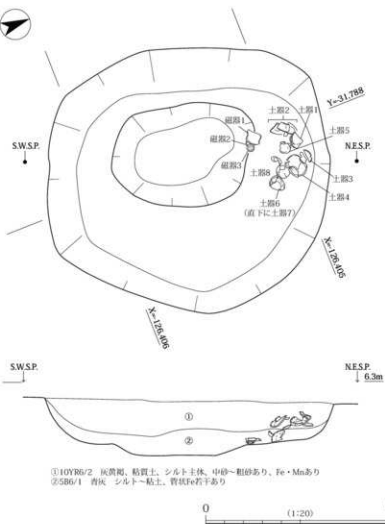


図 19 77土壇墓

1143・1144溝 (図 18) 1143溝は6トレンチで東壁沿いの高い部分からの段差裾部に走る、幅が広く浅い溝であり、1144溝は、1143溝埋没後、その西側肩部に重複して掘りなおされた溝である。

1143溝は、幅不明だが、検出範囲北寄りで広がり、6トレンチ東南壁に抜ける付近は東肩部が直線的で、本来は幅1m前後であったと思われる。膨らむ部分は侵食であろう。

1144溝はその幅の中で、底部に幅0.3～0.4mほどの小溝状に深い部分が蛇行して続く。溝内で常時水流のあった部分と考えられる。東肩部には、東高所からの水口らしき小溝が直角に取りつく。

溝底部のレベルは、1143溝は、北側がT.P.+6.20mほどで、南側がT.P.+6.05mほどと、わずかに南に下がる傾向を見せるが、1144溝は平均してT.P.+6.05m前後で傾斜は認められない。

この二つの溝は、4・5トレンチ45溝の続きだが、底部のレベルが、45溝は平均T.P.+5.60mであり、深さが異なる。トレンチ境では攪乱とトレンチ壁の崩壊で直接のつながりが確認できていない。考える可能性は、一時的な増水による侵食で、高所の4・5トレンチでは溝内の下刻が進行し、低所の6トレンチに出た所で溢流して肩部を侵食し、溝底部の下刻は弱まったという状況である。45溝の掘りなおされた際の深さが、ほぼこれらの溝の深さに対応するのは、増水で下刻された部分を埋め直し、1143・1144溝に水が流れるようにしたと考えれば、整合性がある。

出土遺物は少なく、あまり接合もしない。どちらも古い時期の遺物が若干混じるが、瓦質羽釜が見ら

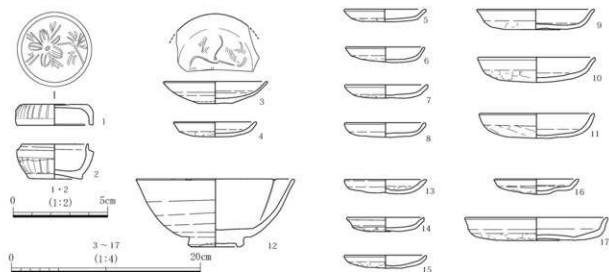


図20 77・78土墳墓（1～11：77土墳墓 12～17：78土墳墓）出土遺物
れ、13世紀頃としか言えない。その期間に1143溝から1144溝への掘りなおしから、1144溝の埋没までがあったのであろう。1143溝の掘削時期は、45溝と同じ、11世紀後半頃であろう。

77土墳墓（図19・20・図版9-1・10-3-4・28） 4トレンチの南西部で、整地系第3-3層が残存する部分にまたがって位置する。整地土系第3-3層が薄く埋土上に被っていたので、この遺構は調査区全体が耕地化される以前のものである。

形態からは土墳墓とは考えにくい、南西3.6mほどの距離にある78土墳墓と、埋土・出土遺物に共通点がある事から土墳墓と判断した。ちなみに東側へ3mほどの79土坑も平面形が土墳墓状だが、整地土系第3-3層上面の切込みで、底部は浅い皿状、遺物も出土せず、土墳墓の可能性は低い。

長軸1.49m、短軸1.41mの不整形である。壁は立ち、底部は一旦平坦になるが、西寄りに長軸0.74m、短軸0.55mほどの範囲で5cmほど深くなる部分がある。埋土は上下2層に分かれ、上層は砂粒を含む粘質土で人為的埋土、下層は淘汰の良いシルト～粘土なので埋葬主体の痕跡と考えられる。

出土遺物は底部の深い部分の北東端から墓壇北東肩部までの間に集中し、下層上面から墓壇底部の間で、南西にある遺物が低く、北東の遺物が高い状態であった。

南西端には磁器1白磁皿と磁器2・3青白磁盒子がある。磁器1は正置で底部より3cmほど浮き、盒子蓋の磁器2は倒置で2cmほど浮く、盒子身の磁器3は蓋の上に、半径分ずれた状態で乗る。そこから10cmほど北東に土師小皿の土器5～8がある。土器6・7が磁器類よりやや高い位置で、2枚重なる。土器5はその北西やや高い位置で、磁器の側に傾く。土器8は南東で、下層上面の高さで土器6側に傾く。さらに土器5を囲むように土師器杯の土器1・2・4がある。土器1は唯一北東側に傾き、土器4は土器6側に傾き、どちらも下層上面の高さにある。土器2は北東側の破片が下層上面、南西側の破片がその7cm下と、大きくずれる。一番北東側では土師器小皿の土器3が、土器4の口縁に乗っている。なお、磁器類と土器6の間には、どの個体とも接合しない土師器片が3片あった。

この状況を見ると、磁器類は埋葬主体内部に置かれていた可能性が高く、土師器類は埋葬主体上面に置かれていたものが、その腐朽と共に転落していった可能性が高い。ただ、磁器1の白磁皿が、半分に割れない破片で、埋土内に他の破片がないのが特異である。

図20-1は磁器2とした青白磁盒子蓋である。完形品。天井部外面には影青技法の草花文が型押しされ、側面上部には縦線が巡る。口縁端面から内面は無軸である。軸はやや青味を帯びる。

図20-2は磁器3とした青白磁盒子身である。ほぼ完形。側面には蓋に対応した縦線が巡る。底面は中央がやや高い。軸は胴部上半のみで、やや青味を帯びる。内面から外面受け部までと、外面胴部下半から底部は無軸。

蓋口径が4.0cmと非常に小さなものである。白磁盒子は北宋後半代から量を増すとされるが、それに続き盒子の量が増える南宋前半頃、12世紀中葉～13世紀前半のものか。

図20-3は磁器1とした邢窯・定窯系白磁皿で、残存率40%である。軸はかなり青味を帯びる。外面底部側面から底部は無軸。器壁は非常に薄い。内面見込みに櫛目文が刻される。枝葉のような表現の刻線は0.5mm以下の細さである。文様を囲むようなラインでわずかに屈曲する。外面も上半ナデ、下半ケズリのため、中位に若干の屈曲があるように見える。胎土は精白だが、わずかに微小な黒色粒が認められる。南宋前半、12世紀中葉～13世紀前半頃のものか。

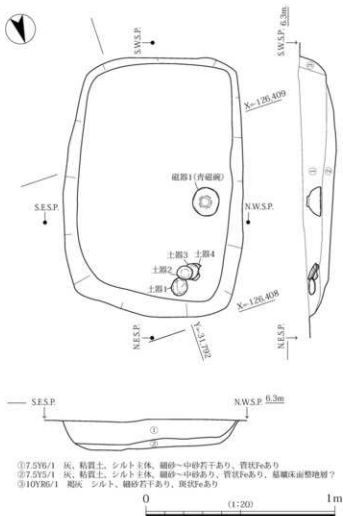


図21 78土墳墓

図20-4は土器3の土師器小皿で、残存率40%である。口径8.6～8.8cm、器高1.6cm。胎土は10YR7/2にぶい黄橙色(e)で、2～1mmの赤色粒を若干含む。5は土器5の土師器小皿で、残存率85%である。口径8.6～8.0cm、器高1.3cm。胎土は2.5Y7/2灰黄色(e)で、1mm弱の赤色粒わずかにあり、0.5mm以下の石英・黒雲母あり。土器3よりやや体部の立ち上がり強い。6は土器6の土師器小皿で、残存率80%で。口径8.0～8.4cm、器高1.6cm。胎土は2.5Y7/2灰黄色(e)で、1mm弱の赤色粒若干あり、0.5mm以下の石英・長石若干あり。土器5と同じタイプである。7は土器7の土師器小皿で、残存率95%。口径8.4～8.8cm、器高1.4cm。胎土は7.5YR8/3浅黄橙色(b)で、1mm弱の赤色粒若干あり、0.5mm以下の赤色粒・石英・長石あり。土器3と同タイプ。8は土器8の土師器小皿で、残存率70%である。口径8.3～8.7cm、器高1.5cm。外面底部はユビオサエ後ナデである。胎土は2.5Y7/2灰黄色(e)で、0.5mm前後の長石・石英あり。

図20-9は土器1の土師器環で、残存率は40%である。口径12.1～12.7cm、器高2.1cm。外面体部下半から底部はユビオサエ後ナデ。胎土は10YR8/3浅黄橙色(c)で、1mm以下の赤色粒若干あり。10は土器2の土師器環で、残存率は75%である。口径11.2～12.4cm、器高2.7cm。外面体部下半から底部はユビオサエ後ナデ。胎土は土器1と同じである。11は土器4の土師器環で、残存率は95%である。口径12.0～12.7cm、器高2.6cm。外面下半はナナムユビナデ、底部はユビオサエ後ナデ。胎

図 22 930 溝

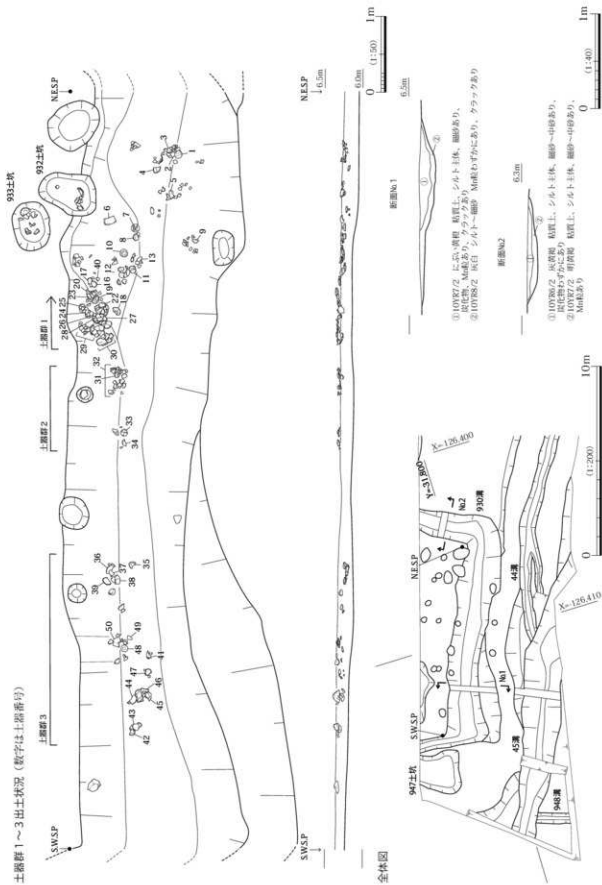


表5 930溝 全体破片数集計表

土器器	種別	片数	備考
569	精良胎土	60	
	506	6	
	血	7	
	小皿	318	ての字 261
粗製胎土	葉	10	
	12羽釜	2	
	台付皿	2	
黒色土器	A類	1	
	柄	260	
	B類	260	
瓦器	柄	152	
	小皿	3	
瓦質土器	6(別遺構?)	6	
須恵器	柄	3	
4	坪	1	
	須恵質	3	
瓦	平	3	
粘土埴	埴土埴	5	
埴		3	

表6 930溝 黒色土器・瓦器属性表

サンプル No.	検出 No.	土器 番号	口径	器高	径高 比率	残存 率	高台	内面 凹凸	外面 凹凸	口縁 形状	厚さ	注
黒色土器B類柄												
1	図24-1	20-1	16.9	16.9	5.6	33.1	20b	a2	1 b	1 a	a	薄い
2	図24-2	20-2	16.6	17.6	5.8	33.9	30b	h	1 b	11 a	a	薄い
3	図24-3	27	16.4	16	5.3	32.7	80c2	h	不明	1 a	a	薄い 高台内縁削
4	図24-4	29-1	15.2	15.8	4.9	31.6	90b	a2	1 b	1 a	a	薄い
5	図24-5	29-2	15.2	14.8	5	33.4	80c2	g2	1 b	1 a	a	薄い
6	図24-6	30	15.5	16.4	5.6	35.1	90b	a2	1 b	1 a	a	薄い 高台内縁削
7	図24-7	32	16.2	16	5.2	32.3	50b	a3	1 b	1 a	a	薄い
瓦器類												
1	図24-8	18	15.1	15.6	5.9	38.5	50b	g2	1 b	1 a	a	薄い
2	図24-9	36	16	16	5	31.3	50a2	a1	1 b	1 a	a	薄い
3	図24-10	38	14.2	14.2	6.2	43.7	48c1	a1	1 b	11 b	a	薄い
4	図24-11	39	16.7	16.2	6.7	40.7	50c2	a2	1 b	1 a	a	薄い
5	図24-12	15	15	15	6.6	44	60b	g3	1 b	1 a	b	薄い
瓦器小皿												
1	図24-13	34	10.2	10.2	2.2	21.6	52	a1	1 b	1 b	d	薄い 外底底部もミガキ

土は2.5Y7/2 灰黄色 (e) で、2mm以下の赤色粒若干あり。

土師器は完形率の悪いものもあるが、検出時に粉砕した破片もある。

遺物から埋葬時期を考えるには、磁器は伝世期間を考慮する必要もあり、土師器小皿・坏はあまり時期を限定できない。しかし、土師器坏が皿との区別が曖昧なもので、小皿も口縁が外反するものはない事から、12世紀末葉から13世紀末頃のものとは言えよう。それなら磁器とも矛盾はない。

遺構としての形態は、密集土壌墓群などの墓塚と比較すると、似ているが、単独性が高く、輸入磁器が埋納されている墓としては違和感がある。

78 土壌墓 (図20・21・図版9-2・10-5・28) 4トレンチ南西端付近で45・46溝に挟まれた位置にあり、溝と長軸方向を同じくする隅丸長方形である。長軸1.37m、短軸0.95m、深さ0.18mを測る。

埋土は上下2層と南西壁に貼りつくシルト層があり、下層は北西壁に立ち上がる。土壌墓底面は丸みがあり、下層上面の方が平坦で、出土遺物もその面に接する。下層は掘削後に整地した層と思われる。上層内の砂粒は土壌化により降下してきたもので、それを差し引けば、むしろこの上層が77土壌墓の下層に似る。その状況からすると、墓塚は本来もっと深く、かなり削平を受けているのであろう。

遺物は墓塚内北西のエリアに集まる。磁器1の青磁碗は最も南西側で、下層上面に接した倒置状態で出土した。内部上半は埋土が入らず空間を残していた。土器1～4の小皿は、土器4の位置に縦に積み重なったものが北東側に倒れたような状況である。土器4が下層上面に接していた。出土状況図にない土師器皿(図20-17)は、遺構検出時、一部の破片が埋土上面に露出し、主に土器1・2周辺に破片が散乱していたらしい。他に遺物は出土していない。

図20-12は磁器1の青磁碗である。完形品で、口径16.6cm、器高7.2cm。釉は褐色がかかった緑色で、貫入が多く見られる。釉は、削り出し高台の上端で止まるが、一部は高台外面下端まで垂れこむ。体部外面は下部3分の2に回転ヘラケズリが入る。口縁には均等な間隔で5ヶ所、幅6mm、深さ1.5mmほどの凹みが作られ、そこから内面中央に向かい、幅2mm弱の白泥象嵌の縦線文を施し、五弁花を表現する。象嵌の先端は底部に至る前に細くなって終わる。内面で、埋土が入り込まず空間が残っていた部分は釉の銀化が進行している。

この青磁碗の時期は、削り出し高台の、高台部分が厚く、高台内の底部が平坦、太い高台の、三要素が揃うのは11世紀後半を遡らないだろう。その中でも、龍泉窯系・同安窯系の青磁が増加し、白磁より優勢になってから、龍泉窯系の外面鎮通弁文の碗が支配的になるまでの間と考えれば、12世紀中葉

から後半頃のものと考えられる。

図20-13は土器1の土師器小皿で、残存率95%である。口径8.7～9.0cm、器高1.7cm。内面に一部ナデ前のユビオサエあり。胎土はcで2mm以下の赤色粒若干あり、砂粒はない。14は土器2の土師器小皿で、完形である。口径8.0～8.3cm、器高1.5cm。口縁は若干外反し、口縁端部はd。胎土はcで、0.5mm以下の長石・石英若干あり。15は土器3の土師器小皿で、完形である。口径8.6～9.0cm、器高1.4cm。外面底部ユビオサエ後ナデで、口縁の立ち上がりは緩い。胎土はeで、0.5mm以下の石英・長石あり。16は土器4の土師器小皿で、残存率80%である。口径8.8～9.0cm、器高1.6cm。底部外面はユビオサエ後ナデ。胎土はeで、0.5mm以下の長石・石英・黒雲母あり。

図20-17は出土状況図にない土師器皿で、残存率60%である。口径14.7～14.9cm、器高2.4cm。外面底部はユビオサエ後ナデ。胎土はcで、2mmの石英1粒の他は1mm前後の赤色粒わずかにあり。

77土壇墓と比較して、土師器小皿にやや多様性があり、外反口縁もある。

墓壇の規模は成人の伸長葬は難しいが、埋土や遺物の状況から木質の埋葬主体があった可能性は高いと思われる。立地は77土壇墓より高所の中心に近く、45・46溝の間という限られた場所なので、77土壇墓より先行する可能性が高い。埋葬時期が12世紀に遡る可能性もある。

この2基の土壇墓は、調査区全面耕地化の際には削平を受けており、それまでに一定の期間があろう。13世紀初頭前後の時期に78土壇墓、77土壇墓の順に、相次いで作られたものとする。二つの土壇墓だけが立地し、両者ともに輸入磁器が埋納されているのは、ある程度の財力を持った有力者の墓と考えられる。そして近接して、遺物に磁器と土師器という共通点はあるながら、それらが、青磁と白磁・青白磁、小皿群+皿と小皿群+坏群、であり、墓壇の形も違うという相違もある。2基の土壇墓の被葬者は夫婦などの関係にあった可能性も考えられよう。

930 溝 (図22・表5～7・図版11-1～4・30・31) 5トレンチの南西側で、北西壁から出て、北西壁に入る。「コ」の字に巡る溝である。1辺が、44・45溝とほぼ平行し、微妙な輪郭の凹凸も対応している事から同時期存在していたと考えられる。それらの溝との間に道を挟むような地形である。

この溝に囲まれた範囲は北東側より高く、44～46溝の通る4・5トレンチの高所と同じ高さである事は先述した。それらの地形や、溝出土遺物からも溝が屋敷地区画溝であった可能性が高いと考える。その場合、1辺が10m強ほどの小規模な屋敷地と考えられる。

南東辺は溝幅1.5～2.1mと広いが、北東辺は1.1～1.4m、南西辺は0.6mほどと狭い。しかし、溝底部の高さは、南西辺がT.P.+6.33m、南東辺は南西がT.P.+6.24m、中央付近がT.P.+6.16m、東角から北東辺がT.P.+6.08mほどで、南西辺から北東辺へ低くなる。

溝埋土は南東辺では、溝機能時の堆積と思われるシルト～細砂の下層と、人為的埋土の可能性のある粘質土の上層に明確に分かれるが、北東辺と南西辺は、下層にも土壌化が強く及び、層の違いが明確でない。後述するが、そのため重なった遺構の存在を見落とし、遺物が混入した可能性もある。

溝と重複するピット・土坑は全て溝埋土を切る。溝に囲まれた部分のピットも、深いものもわずかにあったが、建物があった可能性は認められなかった。

南東辺では土器が大量に出土した。土器群1～3に分けたが、土器番号は通して付与した。遺物は溝に囲まれた側から投棄されたようである。特に土器群1は一括投棄され、その後、破片が若干北東側に散乱したような状態である。全て埋土上層内にある。溝の最終段階頃に投棄されたようである。

土器群1～3以外の溝内出土遺物は少ない。図24-14・15の瓦質三足羽釜は、同器種の3片と共に、

表7 930溝 「精良な胎土」の土師器属性表

サンプルNo.	検出No.	土師番号	口径	器高	径高指数	残存率%	口縁部	調整	胎土	焼成	注
「て」の字状口縁小皿											
1	図23-1	1	9.5 復	9	1.6	17.2	90	a	内:白コナデ, 底ナデ 外:白コナデ, 底ナデ・ユビオサエ	b	低胎土 特微的
2		2	9.5 ~	9.2	1.6	17.1	80	a	内:白コナデ, 底ナデ 外:白コナデ, 底ナデ・ユビオサエ	b	良
3		7	9.9 ~	9.6	1.7	17.4	95	a	内:白コナデ, 底ナデ 外:白コナデ, 底ナデ・ユビオサエ	b	良
4		8	9.4 復	9.4	1.7	18	60	a	内:白コナデ, 底ナデ 外:白コナデ, 底ナデ・ユビオサエ	b	良
5	図23-2	10	9.7 ~	9.7	1.6	16.4	100	a	内:口ナデ, 底ナデ 外:白コナデ, 底ナデ・ユビオサエ	b	良 大b
6	図23-3	11	9.8 ~	9.7	1.6	16.4	100	a	内:白コナデ, 底ナデ 外:白コナデ, 底ナデ・ユビオサエ	b	良 大b
7		13	9.9 復	9.9	1.6	16.1	60	a	内:白コナデ, 底ナデ 外:白コナデ, 底ナデ・ユビオサエ	b	良
8		15	9.1 復	9.1	1.6	17.5	50	a	内:白コナデ, 底ナデ 外:白コナデ, 底ナデ・ユビオサエ	b	良
9	図23-4	16	9.3 復	9.3	2	21.5	80	a	内:白コナデ, 底ナデ・ユビオサエ 外:白コナデ, 底ナデ・ユビオサエ	b	良 小b
10		17	9.9 復	9.9	1.9	19.1	70	a	内:白コナデ, 底ナデ 外:白コナデ, 底ナデ・ユビオサエ	b	低
11		19	9.6 ~	9.4	2	16.8	100	a	内:白コナデ, 底ナデ 外:白コナデ, 底ナデ・ユビオサエ	b	良
12	図23-5	26	9.3 ~	9.2	1.5	16.2	100	a	内:白コナデ, 底ナデ 外:白コナデ, 底ナデ・ユビオサエ	c	良 小c
13		33	9.3 ~	9.1	1.6	17.3	95	a	内:白コナデ, 底ナデ 外:白コナデ, 底ナデ・ユビオサエ	b	良
14		41	9.4 復	9.4	1.2	12.7	80	a	内:口ナデ, 底ナデ 外:白コナデ, 底ナデ・ユビオサエ	b	良 胎土
15		47	9.3 ~	9.1	1.7	18.4	100	a	内:白コナデ, 底ナデ 外:白コナデ, 底ナデ・ユビオサエ	b	良
16		48	9.7 ~	9.4	1.7	17.8	100	a	内:白コナデ, 底ナデ 外:白コナデ, 底ナデ・ユビオサエ	b	良
17			9.5 ~	9.5	1.5	15.7	95	a	内:白コナデ, 底ナデ 外:白コナデ, 底ナデ・ユビオサエ	b	良
18			9.5 ~	9.2	1.7	18.1	90	a	内:白コナデ, 底ナデ 外:白コナデ, 底ナデ・ユビオサエ	b	良
その他小皿											
1	図23-7		9.4 復	9.4	1.6	17	40	e	内:白コナデ, 底ナデ 外:口ナデ, 底ナデ	b	良
2	図23-8		8.3 ~	8.1	1.6	19.5	95	e	内:白コナデ, 底ナデ 外:白コナデ, 底ナデ・ユビオサエ	b	良
3	図23-9		7.6 復	7.6	1.3	17.1	50	c	内:白コナデ, 底ナデ 外:白コナデ, 底ナデ・ユビオサエ	b	良
4	図23-10		8.6 復	8.6	1.3	15.1	40	c	内:口ナデ, 底ナデ 外:口ナデ, 底ナデ	a	良
坪											
1	図23-12	4	15.4 復	1.4	4	25.9	30	c	内:口~体~底ナデ 外:白コナデ, 体~底ナデ・ユビオサエ	b	良
2	図23-13	12	17 復	17	3.9	22.9	50	c	内:口~体~底ナデ 外:白コナデ, 体~底ナデ・ユビオサエ	a	良
3	図23-14	28	14.2 ~	14.2	3.4	23.9	99	c	内:口~体ヨコナデ, 底ナデ 外:白コナデ, 体~底ナデ・ユビオサエ	b	良
4		43	14.4 復	14.4	3.1	21.5	40	c	内:口~体~底ナデ 外:白コナデ, 体~底ナデ・ユビオサエ	c	良
5	図23-15	45・46	15.9 復	15.9	3.9	24.5	50	c	内:口~体~底ナデ 外:白コナデ, 体~底ナデ・ユビオサエ	b	良
6		51	15.6 復	15.6	4.1	26.2	40	c	内:口~体ヨコナデ口縁, 底ナデ 外:口ナデ, 体~底ナデ・ユビオサエ	b	良

溝北東辺の断面 No. 2 より北西側で、集中的に出土した。これだけが溝内遺物で他とかけ離れて新しい遺物である。そのため、溝埋土を切る遺構を見落としたものとするのが、同じ図 24 に掲載しておく。

溝内出土遺物は表5のとおりである。黒色土器 B 類碗と瓦器碗の比率がほぼ 5 : 3 で、それと「て」の字状口縁小皿を主とした大量の小皿がある。しかし、全ての環・碗類と小皿を比較すると、3 : 2 ほどの比率で、それほど小皿も多くない。だが、抽出した個体数(表6・7)では環・碗類と小皿類の比率がほぼ 1 : 1 となる。大きさの異なる器種同士の破片数から、個体数を類推する手がかりになろう。また、極端に調理具、貯蔵具が少ないのも特徴的である。

黒色土器・瓦器は、サンプルとして抽出したものを掲載した(表6)。瓦器碗の法量がややばらつくのは、

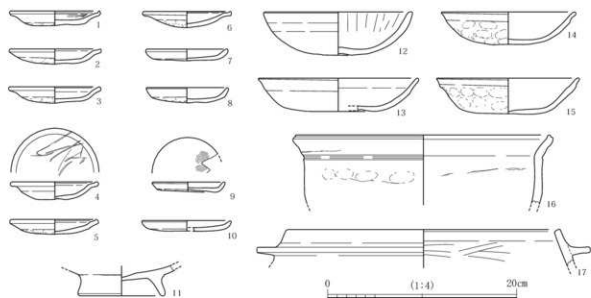


図23 930溝 土師器（8～10は土器群1～3以外）

復元時の歪みも若干影響している。黒色土器B類碗には高台内ミガキや二重高台は見られない。

「精良な胎土」の土師器供膳器は、「て」の字状口縁小皿が個体数でも圧倒的だが（表7）、口径が9 cm台におさまり、10 cmを越えるものはない。大まかに9.5 cm以上のもの（9.7 cm中心）と、未満のもの（9.3 cm中心）に分かれる程度である。底部は丸みがあり不安定なものが多い。胎土もほとんど共通である。坏は口縁端部が外反するものが多く、割と深めの器形が多い。

図23は930溝の土師器で、図23-1～6は「て」の字状口縁小皿である。各属性は表7にあり。

図23-1は土器1である。磨滅激しい。内面にハケメが残る。胎土に砂粒なし。2は土器10である。器表若干剝離。胎土に1 mm前後の赤色粒若干あり。3は土器11である。胎土に1 mm弱の赤色粒あり。4は土器16である。内面に焼成前のヘラ痕が見られる。外面には底部中央から渦巻き状の接合痕が伸びる。胎土に1 mm前後の赤色粒若干あり。5は土器26である。器表若干剝離。胎土に2 mm以下の赤色粒あり。6は土器41である。底部はほとんど丸底のようである。胎土に砂粒なし。

図23-7は土師器小皿、土器群1内出土である。胎土に1 mm前後の赤色粒あり。8も土師器小皿、土器群1～3以外からの出土である。胎土に1～3 mmの石英多し、1 mm弱の長石若干、1 mm弱のチャートわずかにあり。「精良な胎土」とは言い難い。9も土師器小皿、土器群1～3以外出土である。底部と口縁の屈曲強く、内面にはハケメが残る。胎土に1 mm弱の長石・石英あり、0.5 mm以下の黒雲母あり。やや特異な胎土で、精良とは言い難い。10も土師器小皿、土器群1～3以外出土。器表剝離激しく、調整不明。胎土に0.5 mm以下の石英・長石わずかにあり。

図23-11は土師器台付皿片、土器35である。全体にナデ調整。胎土は10YR8/3浅黄橙色(c)を呈し、1 mm前後の赤色粒あり。

図23-12は土師器坏、土器4である。内面にはタテナデの痕跡残る。内外面の一部に薄く煤付着。胎土に1～4 mmの赤色粒若干あり。13も土師器坏、土器12である。胎土に1～2 mmの赤色粒若干、1 mm弱の石英わずかにあり。14も土師器坏、土器28である。体部のユビオサエは横位に2列並ぶ。黒斑あり。胎土に1～4 mmの白色粘土粒あり。1 mm弱の石英わずかにあり。15も土師器坏、土器45・46として取り上げたものが接合した。体部のユビオサエは2列に並ぶ。胎土に1～3 mmの赤色粒あり。

図23-16は土師器鉢、鍋としても良いか。土器6である。残存率20%。磨滅激しい。粘土接合痕

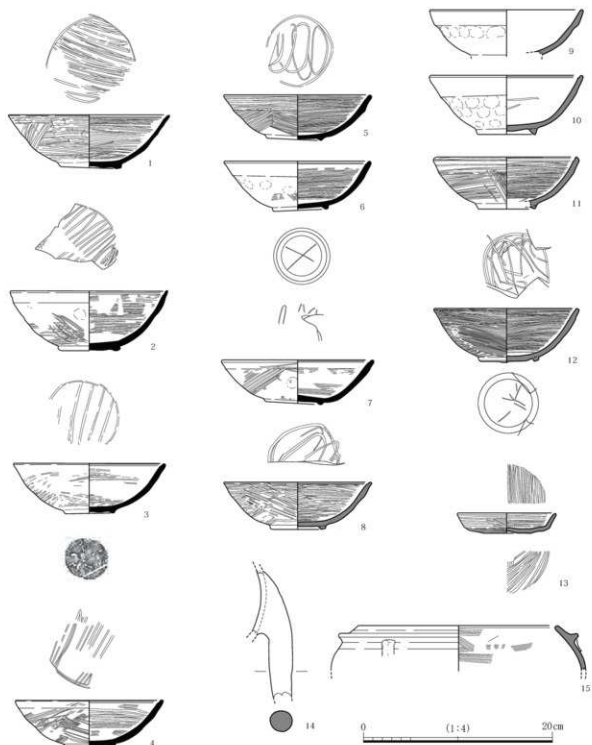


図24 930溝 黒色土器・瓦器・瓦質土器 (14・15は土器群1～3以外)

残る。内面から口縁部外面はナデだが、体部外面はユビオサエのみ残る。胎土は5YR6/8 橙色で、1mm前後の赤色粒多し、1mm弱の石英・チャート若干あり、0.5mm以下、石英、チャート、長石あり。

図23-17は上師器羽釜、土器群1内出土。残存率10%以下。外面煤付着。内面は口縁部のハケ後ヨコナデ。胎土は7.5Y8/4～8/6 浅黄橙色で、1～2mmの赤色粒多し、0.5mm以下、赤色粒・石英あり。

図24は930溝出土の黒色土器・瓦器・瓦質土器である。黒色土器・瓦器の属性は表6にあり。

図24-1は黒色土器B類碗、土器20として取り上げた2個体内、土器20-1である。見込み

の暗文は連続施文された折り返し点が多く確認できる。器壁は薄めである。胎土に0.5mm以下の石英・長石をわずかに含む。2も黒色土器B類椀、土器20-2である。内面見込みには、暗文前に一定方向のナデあり。外面もナデ後ミガキ。高台は断面台形。胎土には、0.5mm以下の石英・黒雲母・輝石わずかにあり。3も黒色土器B類椀、土器27である。内外面磨滅激しく、高台もやや磨滅する。高台内の「十」字の線刻は幅0.5mmの細く鋭いものである。胎土に砂粒はない。4も黒色土器B類椀、土器29として取り上げた2個体の内の、土器29-1である。やや磨滅あり。外面調整は、ナデ後ミガキ。胎土に0.5mm以下の石英・長石わずかにあり。5も黒色土器B類椀、土器29-2である。ミガキは非常に密で、胎土に砂粒なし。6も黒色土器B類椀、土器30である。見込みは磨滅激しく、暗文は、判然としなが、a3である。外面も磨滅する。高台の断面形は実測図の形は部分的である。高台内の線刻は図24-3と同じ。胎土には1mm弱の石英わずかにあるのみ。7も黒色土器B類椀、土器32である。内外面磨滅激しく、図では見込みの暗文の残り悪いが、a3である。胎土に砂粒なし。

図24-8は瓦器椀、土器18である。胎土には、3mmの石英、1mmのチャートが1粒ずつある他は砂粒なし。9も瓦器椀、土器36である。磨滅が激しく、実測時点では調整が見えなくなったが、ミガキ・暗文は表6の通り。外面のユビオサエは横位に並ぶ。胎土には1~2mmの石英・チャートわずかにあり。10も瓦器椀、土器38である。磨滅激しく、実測時点は強く入ったミガキしか残っていなかった。外面ユビオサエは横位に三段並ぶ。胎土には1mm弱の風化礫（白雲母か）わずかにあり。11も瓦器椀、土器39である。他と比べ口縁端部が若干厚い。外面の分割ミガキは、実測図の部分以外は右が左を切る。胎土に砂粒なし。12も瓦器椀、土器群1内のものである。見込みの暗文は無秩序だが、螺旋文の系統か。高台内の線刻は幅1mmほどだが、明確な図象を成さない。胎土に砂粒なし。

図24-13は瓦器小皿、土器34である。底部外面中央にユビオサエあり、そこに向けてミガキが密に入る。胎土には4mmの長石、3mmのチャート、各1粒ある他は、0.5mm以下の石英わずかにあり。

図24-14は瓦質三足羽釜脚部片、おそらく図24-15と同一個体である。脚部はナデ、胴部内面もナデ。胎土に砂粒なし。

図24-15は瓦質三足羽釜片、残存率10%以下である。外面はナデ、内面はハケ後緩くナデ。胎土に1mm弱の石英・長石・黒色粒わずかにあり。

この図24-14・15の2点は、先述したように、混入と考えられるものである。

出土遺物を全体で見る時、後述する第4-2面753溝土器群3の遺物との対比が必要になる。黒色土器B類椀の二重高台や高台内ミガキの不在、それに瓦器椀も加えた見込みの暗文での放射状・十字・格子状の不在は、新しい傾向か、753溝土器群3のバリエーションの中での量的欠落かは問題である。また、図上では身の浅いものが出現したように見えるが、実際の径高指数ではそれは認められない。外面ミガキも基本的に密なものばかりである。瓦器小皿も黒色土器系統の古色を示す。

土師器小皿類では口径10cmを越えるものがなくなり、9.5cm未満のものが増加するという、若干小型化の傾向が読み取れるが、坏類ではむしろ753溝土器群3より径高指数が高いものが多い。

つまり、遺物からは753溝土器群3の遺物群と形式段階的な差は明確でない。しかし、若干の古色の欠落はあり、瓦器椀の、黒色土器B類椀との比率が高まっているのは様式段階的に新しいと言える可能性はある。また、黒色土器と瓦器椀の量的に多い共伴が、753溝から第3-4層堆積を経て、新たな遺構面のこの溝でも続く事は、その状況が瓦器椀出現以前から以降のまでの長期的遺物の集積の結果ではなく、そのような共伴をする時期が、様式段階としてある可能性を示す。瓦器椀の桶葉型I期、



図25 1161土坑

11世紀後半の中でも早い時期の事と言えよう。

1161土坑 (図25・表8・図版12・2・32) 6トレンチの北壁際にかかり検出された土坑である。この部分は北隣の耕地区画に向けて、各遺構面で上がる段差があり、その段差に伴う斜面堆積や盛り土などが重なっていた。6トレンチで第3-4面を検出した際のこの段差上の面は、後に検討すると第3-1面相当の面であった。1161土坑は6トレンチで第4-2面を調査した際に検出した。

しかし、この土坑検出の時は、南側段差斜面で斜面堆積層に覆われていた1339井戸が、第6面検出時に発見され、実はそれが一部この土坑を切っていた事が判明した。1339井戸の遺物群は第3-4面遺構の中でも最新のものである。さらに、一番近い5トレンチ北西壁断面の南西端で見ると、第3-4面が北東側から安定してT.P.+6.3mほどで、土坑検出面は高さ的にも第3-4面に適合する。

以上の事から、1161土坑は第3-4面遺構と判断した。

土坑の北側は調査区外、南側は1339井戸や溝に

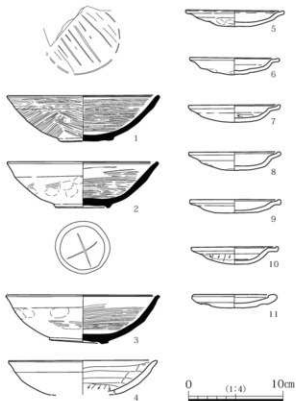


図26 1161土坑 出土遺物

表8 1161土坑 破片数集計表

土師器	精良胎土	坏	23	
149	145	碗	6	
		小皿	55	ての字 コースター
				1
	粗製胎土	甕	101	
	161	羽釜	46	
黒色土器	B類	碗	65	
磁器	白磁	碗	1	
粘土埴		埴土壺	5	

切られ、全体形は不明である。西側に突出部があり、東肩部は直線的で北端がやや東に広がる。東西幅は2.72m、深さ0.15m。底部はほぼ平坦で、東側がやや低い。遺物は東側に多く、底部に接するものが多いが、検出面より高いものもある。

出土遺物の破片数を表8で見ると、坏・碗類と小皿の比率はほぼ2:1である。小皿は「て」の字状口縁小皿が圧倒的である。

瓦器は見られない。調理器の数は多いが、甕も羽釜も数個体の破片が混在し、接合はほとんどしない。

図26は1161土坑出土遺物である。図26-1は黒色土器B類椀で、土器3として取り上げた2個体の内、土器3-1としたものである。残存率60%。復元口径16.0cm、器高4.9cmである。高台は低いがb。胎土に砂粒はない。2も黒色土器B類椀、土器3-2である。残存率40%。復元口径15.8cm、器高4.8cm。内面底部は磨滅激しいが、見込み暗文はa3、外面も磨滅激しいが、わずかに残るミガキは1aである。高台は磨滅したc2。高台内部の十字の線刻は最大幅1.5mmほどである。胎土に砂粒なし。3も黒色土器B類椀で、土器5である。ほぼ完形。口径16.0~16.4cm、器高5.1cmである。見込みの暗文は磨滅で不明。外面も磨滅、残るミガキはIで、分割ミガキかは不明。胎土に砂粒なし。

図26-4は土師器坏である。土器番号はなし。残存率20%。内面は細い単位のヨコナデを重ね、最後の口縁部のナデはナデ上げる。底部は同方向直線ナデを重ねる。外面は若干磨滅するが、ユビオサエ後ナデか。胎土はcで、1mm弱の赤色粒わずかにあり。

図26-5~10は土師器「て」の字状口縁小皿である。図26-5は土器1で、残存率60%である。口径10.1cm~10.6cm、器高1.7cm。胎土はeで、1mm弱の赤色粒わずかにあり。6は土器2で、残存率80%である。口径9.4~9.6cm、器高1.8cm。胎土はeで、1~2mmの赤色粒・黒雲母わずかにあり。底部は丸みがあり不安定である。7は土器4で、完形。口径9.7~10.1cm、器高1.8cm。内面底部は湾曲したナデが入る。外面底部はユビオサエ後ナデで丸みあり。胎土はeで、1~2mmの赤色粒、1mm弱の石英わずかにあり。8は土器6で、ほぼ完形。口径9.6~9.7cm、器高1.9cm。外面底部はユビオサエ後ナデで丸みを帯びる。胎土はeで、1mm弱の赤色粒・黒雲母わずかにあり。9は土器7で、残存率60%である。口径9.6~9.8cm、器高1.4cm。外面底部はユビオサエ後ナデか。胎土はbで、1~2mmの赤色粒若干あり、1mm弱の石英1粒あり。10は土器8で、完形。口径9.2~9.3cm、器高1.8cm。外面底部はユビオサエ後、中心に向かうナデで、丸みあり。胎土はcで、1~2mmの赤色粒若干あり、0.5mm以下のチャートわずかにあり。

図26-11はコースター形土師器小皿である。残存率30%。外面底部周縁にユビオサエが入り、やや上がる。胎土はeで、0.5mm以下の長石若干あり。

黒色土器B類椀は930溝より全体的に径高指数が低いが、3個体では何とも言えない。外面ミガキは密なままである。土師器坏は細いナデ単位が特異である。土師器「て」の字状口縁小皿は、底部が丸く不安定なものが多いが、直径の平均は930溝より大きい。

930溝とほぼ同時期と言え、位置的な関係からも、屋敷地外側に付随する土坑である可能性が高い。**1339 井戸** (図27~29・表9・図版12-3~8・32~34) 6トレンチ北壁沿い高所から、南に下る斜面に位置し、1161土坑の南東肩部をわずかに切る。先述のとおり6トレンチ第6面調査時に検出した。出土遺物からは、第3-4面から遡る事はないが、时期的に下る可能性はある。ただ、第3-1面では、1339井戸の上に溝がある事は確実なので、そこまで下る可能性はない。

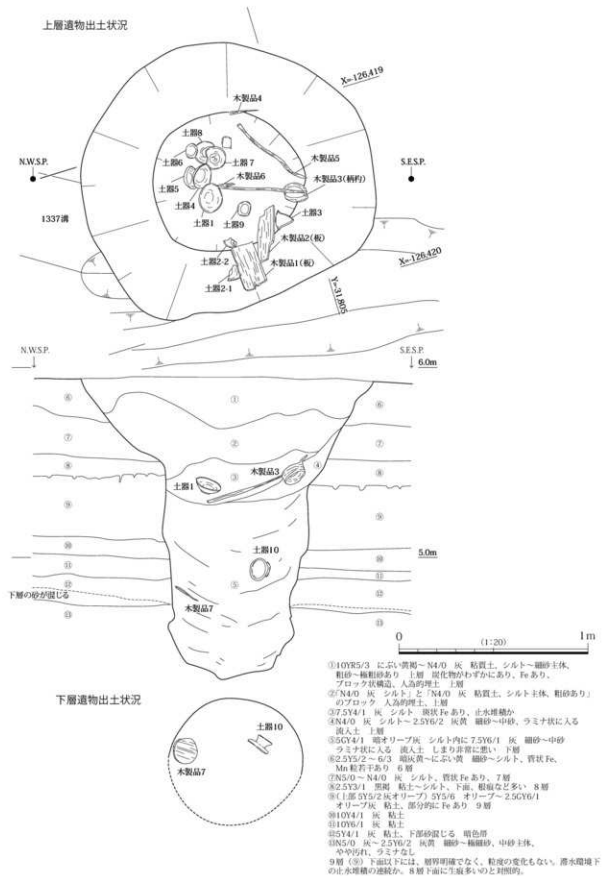


図27 1339井戸

表9 1339井戸 瓦器属性表

サンプル No.	土器 種類	口径	器高	容量 推定	保存 率%	高さ	見込 み	内面 ミガキ	外面 ミガキ	口縁 形状	厚さ	注
1	段28-1	1 13.6	13	5.1	38.3	100	c2	ii b	V	d	薄い	楕
2	段28-2	2-1 12.4	12.4	4.1	33	40	c2	ii b	V	d	薄い	楕
3	段28-3	2-2 14.4	14.6	4.5	31	50	c2	ii b	V	d	薄い	楕
4	段28-4	4 14	13.8	4.8	34.5	100	c2	ii b	V	a	薄い	楕
5	段28-5	5 13.5	14.1	4.9	35.5	100	c2	ii b	IV	a	薄い	楕
6	段28-6	7 12.5	13.1	4.5	33.6	100	c2	ii b	V	a	薄い	楕
7	段28-7	8 13.8	13.2	4.6	34	100	c1	ii b	V	d	薄い	楕
8	段28-9	9 9.6	9	2.1	22.5	100	h	V	V	d	薄い	小楕
9	段28-8	13.5	13.5	4.6	34.1	30	c2	ii b	V	d	薄い	楕

図27は第6面で検出した状態で、上部をかなり削平した状況である。それでも平面形は段差下端部にあたる南側が若干直線的に潰れた不整な円形となっている。1161土坑の南側を切っていた1337溝を切

る。径は1.41～1.56m、第8層(断面図の⑧)のあるT.P.+5.5m付近から上は大きく開くが、下は壁がほぼ垂直で径約0.75mとなる。T.P.+5.05m付近で小段があり、若干狭くなり、砂層(断面図の⑬)に達してからは壁がえぐれる。検出面からの深さは約1.6mで、6トレンチ第3-4面底所からの深さは1.8m、5トレンチの第3-4面からの深さは2.15mほどに復元できる。

埋土は、最下層(⑤)が下半の細い部分をほぼ埋める。中心に向かい下がるラミナがあり、シルトに砂が入った締りの悪い層で、洪水による流入土か。遺物取り上げの際、これを下層とした。

その上に別の砂の流入土層があり(④)、止水堆積らしきシルト層(③)がある。上層遺物のほとん

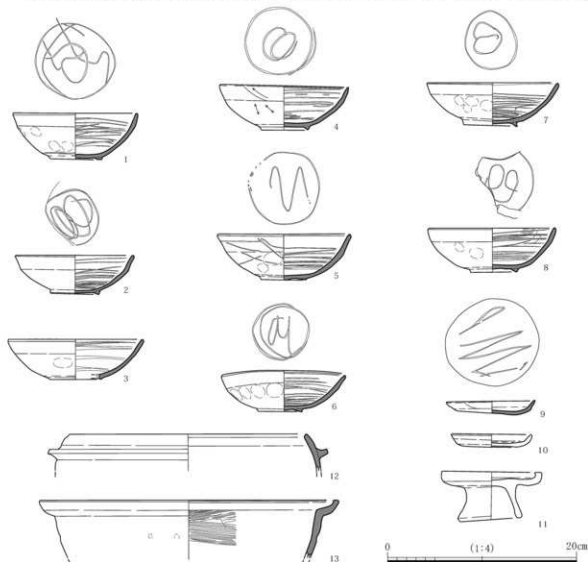


図28 1339井戸 土器

どがこの層内にあり、木製品1・2はこの層上面に貼りつく。その上には人為的埋土のブロック土層②が堆積する。北側で一部この層が検出面まで上がり、そこで、黒褐色土のブロックが混じるのが分かる。最上層は粘質土だが①、ブロック土状の構造があり、これも人為的埋土である。強いて言えば第3～4層に似るが、粗砂～極粗砂が混じるのが異なる。

出土遺物を破片数で見ると、完形品が多いが、瓦器椀25片、瓦器小皿1点、土師器8片の内、坏2、小皿3、黒色土器B類椀1片、瓦質土器5片の内、三足羽釜3、鉢1、青磁碗1片、弥生土器らしき小片3片。木製品は点数で8点の内、柄杓1、曲物底板2、板2、棒状3。他に木片1である。

出土状況は、上層遺物では、木製品1・2が南側壁沿いに斜めにあるが、③の層の上面に位置する。その下に破片の土器2・3が散らばる。北西側に完形の土器が集中し、土器1・4・5は、重なっていたのが南東側に倒れたようであり、土器7・8も重なっていたのがずれたようである。土器5・8の底部が上層下面に接する。完形土師器小皿の土器6は土器8の口縁に重なり、完形瓦器小皿の土器9は孤立した位置で、土器1と同じ高さにある。木製品3～5は、ほぼ土器群と同じ高さで、③の層の中ほどにある。土器1・4～9は、人為的に置かれた可能性が高い。

下層では土器10も木製品7も層の中ほどで、土器10は横置状態、木製品7はほぼラミナと同じ傾きである。埋土と共に流入したのであろう。磨滅はほとんどなく、遠くから流れてきたものではない。

図28は1339井戸出土の土器である。1～9の瓦器の属性は表9にあり。

図28-1は土器1である。見込みの暗文は類型化できない。高台は図では断面台形状だが、大部分はc2である。胎土に1mm弱の黒色粒若干あり、0.5mm以下の石英わずかにあり。2は土器2が2個体であった内の土器2-1である。体部のユビオサエ後のナデは強めである。胎土には0.5mm以下の黒雲母若干あり。3は土器2-2である。胎土に1mm前後のチャート・石英わずかにあり。4は土器4である。口縁部ナデ上げは内外面同位置である。体部外面ユビオサエ後ナデはタテナデである。胎土に砂粒なし。5は土器5である。外面に非常にまばらに、当たりも弱くミガキが入る。胎土に0.5mm以下の石英わずかにあり。6は土器7である。胎土に1mm前後のチャート3粒あり。7は土器8である。内面下半のミガキ下に、ハケあり。胎土に1mm弱のチャート・黒雲母わずかにあり。8は上層出土である。内面ミガキ下にハケあり。胎土に0.5mm以下の黒色粒・石英わずかにあり。9は土器9である。器表の炭素の残りは悪い。口縁部ヨコナデは内外面同位置でナデ上げ、外面底部はユビオサエ後不定方向のナデである。胎土に砂粒はない。

図28-10は完形の土師器小皿、土器6である。外面底部はユビオサエ。胎土はbで、1mm前後の石英わずかにあり、0.5mm以下、石英・長石・チャートあり。

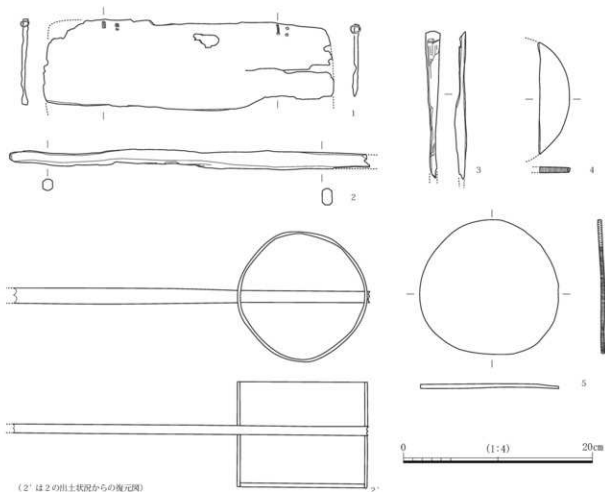
図28-11は完形の土師器台付皿、土器10である。全面ナデである。皿部がコースター形をしている。胎土はbで、1mm前後の石英・赤色粒わずかにあり、0.5mm以下の石英・長石・チャート・赤色粒あり。

図28-12は瓦質三足羽釜片、上層出土である。残存率は10%ほど。外面鈎より下は煤の付着のため調整不明、内面は口縁のヨコナデより下もナデである。胎土に0.5mm以下の長石・石英あり。

図28-13は瓦質鉢片、土器3である。残存率10%以下か。外面から口縁内外面ナデ、内面はヨコハケ。外面煤付着。胎土に0.5mm以下の長石・石英若干あり。

図29は1339井戸出土の木製品である。1～3は上層出土。

図29-1は木製品1である。最大厚4mmほどの薄い板で、やや破損が見られるが、図の左右と上部の辺は原状を留める。下辺も破損多いが、一番上下幅のある部分が、本来の幅である。長さ30.8cm、幅9.2



(2' は 2 の出土状況からの復元図)

図 29 1339 井戸 木製品

cmで、両端はやや丸みを帯る。上辺左右に縦に 2 個の穿孔が 2 組あり、一部に縦の孔をつなぐように桜樹皮の紐が残る。何らかの容器の蓋と思われるが、類例を知らない。

図 29-2 は木製品 3 で柄杓である。曲物部分は取り上げ前に崩壊し、破片を回収したのみである。底板はなかった。出土状況時点での観察を基に復元図を作成し 2' とした。柄は削りて、左側持ち手部分が断面円形、右側は左右が平面、上下が丸い断面形である。曲物を固定するためであろう。両端を欠損するがどちらも端部に近い感じである。残長 38.2 cm。曲物部は、径 13.5 cm 前後で、柄より上側にも破片が残っていた。高さ 11 cm ほどに復元できる。

図 29-3 は木製品 4 である。棒状に削られるが、板状の断面形になる方向が、図上下で 90 度異なる。ほぼ全長を留めるようで、長さ 15.5 cm、上部は最大幅 1.6 cm、厚さ 0.8 cm、下部は最大幅 1.2 cm、厚さ 0.5 cm で図左辺に反りがあるが、その辺にも面があり、刃部にはなっていない。性格不明。

図 29-4 は下層出土の曲げ物底板片である。端面はやや斜めになる。厚さ 0.6 cm、復元すると径 14 cm ほどで、図 29-5 とほぼ同じ大きさか。

図 29-5 は木製品 7、下層出土の曲物底板である。径 14.2 ~ 14.8 cm、厚さ 0.5 cm である。図 29-2 の柄杓曲物部の復元径に近いが、井戸内の堆積状況からはその底板であった可能性は低い。

図化した他のものは、木製品 2 は木製品 1 に似た板材で、破損は多かったものの幅約 9 cm、最大長約 30 cm と、大きさも似ていた。ただ、取り上げ時にばらばらになり、図化できなかった。

木製品 5 は長さ約 45 cm、径約 2 cm の棒状であるが、枝状の材の樹皮を剥いただけのような状態で、

特に加工はなく、図化しなかった。

木製品6は、長さ約9cm、径約2cmの樹皮のない枝状で、片方の端部が炭化している。特に加工はないため図化しなかった。火をつける「つけ木」の燃えさしであろう。

遺物群の時期を瓦器椀で見ると、図28-4の口縁端部内面の沈線や、図28-5の外面のミガキなどの古色を例外的とすれば、口縁端部内面の沈線消滅、外面ミガキ消滅、内面ミガキと見込み暗文の粗雑化、法量で、桶葉型Ⅲ-3期、13世紀後半と考えられる。第3-4面遺構で最新のものである。

上層遺物の完形の瓦器椀5個体と瓦器・土師器の小皿は、上層底面に重ねて置かれた状態に復元できるので、投棄とは考えにくく、祭祀的遺物である可能性が高い。

他の完形率の悪い土器片は流入したものであろう。上層の木製品は完形土器類と同じ層内にある事を考えれば、埋戻し祭祀に使われたものの可能性もある。

祭祀的遺物の可能性があるので、供膳器が多い事で居住域に近いとは言えない。ただ、下層にも磨滅のない完形土器がある事は軽視できない。この井戸が居住域に伴うものなら、6トレンチ北隣、5トレンチ西隣の部分に、930溝より新しい屋敷地があるだろう。

しかし、調査区全面耕地化に伴い整形された段差の斜面にある立地からすれば、耕作地内の野井戸である可能性もある。だが、井戸下層が洪水堆積なら、相当する洪水堆積層は洪水系第3-3層で、井戸は調査区全面耕地化より前に廃絶した事になり、耕地に隣接した野井戸の可能性は低くなる。

小結

第3-4面は、11世紀後半に、第4-1・2面から、第3-4層を堆積した洪水を経ても間断なく遺構が形成され、13世紀後半代に洪水系第3-3層を堆積した洪水を契機に、整地土系第3-3層などで整地され調査区全面が耕地化される時点まで続いた遺構面である事が判明した。

しかし、遺構を出土遺物から見れば、11世紀後半代と13世紀代に分かれ、12世紀が空白になる状況がある。11世紀後半の遺構は930溝に代表されるように、居住域であった事を示す。13世紀代の遺構の代表は、77・78土墳墓と、1339井戸であり、判然とはしないが居住域が遠くない印象を受ける。

その中で、44～46・1143・1144溝の、北東から南西に伸びる水路体系は、930溝と平行する事から併存の可能性が高く、77土墳墓が溝間で長軸方向を合わせて立地する事や、出土遺物を見ても、13世紀前半代まで存続し、両時期をつなぐ遺構と言える。この水路体系は1144溝が、整形された東側段差斜面に水口状の枝溝を伸ばすので、調査区全面耕作地化後もしばらく存続している。

そして13世紀後半代で洪水系第3-3層の堆積があり、整地土系第3-3層の成立を経て、調査区全面が耕作地化する。1～3トレンチの大部分はかなり削平され、43侵食痕が埋められる。整地土系第3-3層の多くはその削平土由来であろう。第4-1層らしき黒褐色ブロック土も見られる。

6・7トレンチでも、東・北・西側の段差整形での削平があったと考えられる。この部分の遺構は、整地土系第3-3層は部分的にしかないが、ほとんどが実質第3-3面の遺構と言える。その当時の耕地区画が分かりやすい。方形を基調としながら、一区画は比較的狭く、やや不整形で、方位性が次第にずれていく。条里制プランを持った耕地開発ではない事が知られる。

6・7トレンチでは、877・878溝による南北方向の水路体系があり、北東～南西方向の水路体系と併存する。しかし、前者が第3-1面でも697溝として掘りなおされて維持され、現代まで踏襲されていくのに対し、後者は第3-1層成立時点では廃絶している。

第5項 第4-1・2面(図30~32・図版13-3・14・15・16・17)

第4-1層は自然土壌層なので、第4-1・2面両面の検出遺構は基本的にこの面切込みである。しかし、実際に第4-1面で検出できる遺構は、第3-4層が埋土として入った遺構のみである。

1~3トレンチでは、第4-1面検出遺構を台状に残し、続けて第4-2面で遺構を検出し、同時調査した(図32)。4~7トレンチでは、第4-1面で、浅い、耕地区画関係の溝や落込みが検出され、第4-1面を単独で調査した(図30)。さらに4トレンチでは、第4-2層も土壌化が激しく、第4-2面検出遺構を全掘後、再精査すると、大型の溝が4本、新たに検出された。溝の一つが、5トレンチから7トレンチまでつながるため、その検出時の平面図を「4トレンチ第4-2面古」として全体図(図32)に取り込み、その前の平面図を「4トレンチ第4-2面新」として単独で掲載する(図31)。

第4-1面検出遺構の状況(図30)

第4-1面検出の遺構群は、多くは細く浅い溝で、他に落込みや段差・畦畔・鋤溝などがある。細く浅い溝は、耕地区画内や区画同士の水回しに関わるものであろう。

4トレンチでは北西側T.P.+6.3mほどの高い部分にはほとんど遺構がない。T.P.+6.2m弱の南東側平坦面の溝は、円弧を描き方向を変える溝などが、直線的でない耕地区画の存在を推測させる。

5トレンチ側の高さはT.P.+6.1mほどで、溝群は若干弧を描くものが多い。4トレンチ北西側高所の北西裾を通る溝がトレンチを縦断し、耕地区画沿いの溝と推測される。

6トレンチのT.P.+5.8mほどの低地平坦部では南北で鋤溝の方向が変わる。東西方向の1180溝が耕地区画に伴うようである。この溝がつながる888落込みは深さ約20cmで、小規模な溜池と思われる。7トレンチには895・897落込みがある。深さは2~3cmほどで、どちらも西側の889溝に水口を開け、耕地区画であろう。平坦部は6トレンチから変わらず、T.P.+5.8m前後を保つ。6・7トレンチでは、既に西端高台上に890溝、その段落ち裾部に889溝と、南北方向の水路体系が出現している。

1~3トレンチでも第4-1面遺構は分別可能である(図32)。1172道跡の削り出し基部はこの面で明確に検出されるが、整地土系第3-3層形成時の遺構である。第4-1面遺構はT.P.+6.50m前後と高い北西側にはなく、1・2トレンチ南東側に集中する。1334畦畔とそれにつながる段差、771溝とそれにつながる溝などである。この部分の高さは、北東端は北西側の高さに近いT.P.+6.5mほどで、1334畦畔両側付近、その南西側と段階的に下がる平坦面があり、771溝より南西側はT.P.+6.2mほどである。771溝は北西側で、43侵食痕につながり、侵食痕が排水に利用されている。

第4-2面の状況(図31・32)

第4-2面は古土壌層を除去した面で、高さに意味はない。ただ、4トレンチの第4-2面新(図31)では、南東側に耕地区画に伴ううらしき溝や段差が見られた。耕作関連遺構のない北西部や、段差付近にピット・土坑が若干ある。この検出時に第4-2面古の401東・西溝、408東・西溝の4本の溝を検出できなかったのは、この部分的な耕地化の時点では、それらの溝が廃絶していた事も示す。

1~3トレンチ第4-2面は遺構密度が高く、かなり見落とした遺構もあるのは確実である。ほぼ中央を768溝が縦断し、その北西隣高所に平行して753溝が走る。768溝は肩部がはっきりしないが、侵食を受けこの形態になったと思われる、その結果、753溝が新たに掘られた可能性もある。

753溝は北東側の直線的な部分と289溝が直角につながり、屋敷地区画溝の可能性が高い。また、かなり削平されているが、1227溝と1313溝も、方形に巡る溝の一辺の中央が途切れる形であった可能性が高く、屋敷地区画溝の候補とできる。

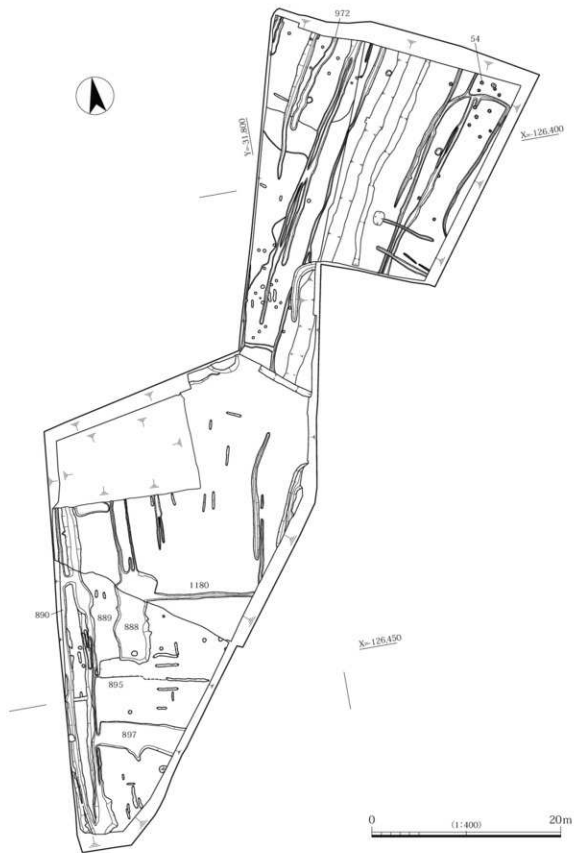


図30 第4-1面(4~7トレンチ)全体図

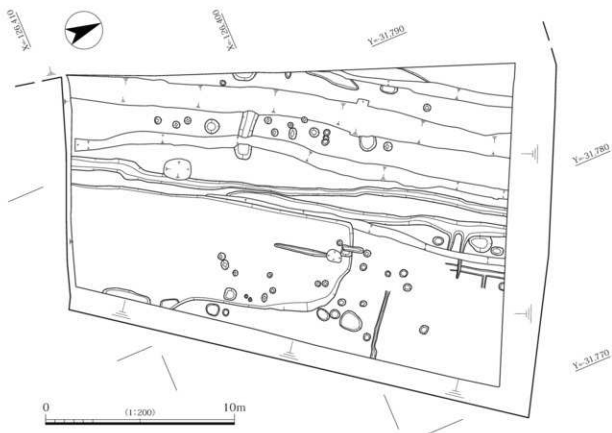


図31 第4-2面新 4トレンチ全体図

4トレンチ第4-2面古(図32)の401・408溝は両者とも検出時は一つの溝に見えたが、埋土最上層を除去すると2本ずつの溝だったので、東・西を名称に加えた。401東西溝は、753・768溝につながっても無理はないが、この間に、流路などが存在した可能性があり、つながる前提で推測できない。

408溝は5トレンチを抜けて、6・7トレンチで、952溝として950～955溝の溝群につながる。6・7トレンチのこれらの溝群は、第6面の溝群をある程度踏襲している。それが408東・西溝の新旧関係に対応し、5・6トレンチ間に基本層序の不整合がある。6・7トレンチ側の第4-2層の堆積は、それより北東側の第4-2面遺構形成開始時期より後になるのであろう。

753溝土器群3(図33～38・表10～12・図版18～20・36～39) 753溝は1・2トレンチで検出された。1～3トレンチ部分の中央を縦断する768溝の北西隣の高所に、平行して走る溝である。768溝と蛇行の形状を一致させるが、283溝につながる部分から北東側は直線的な形状である。南西側では43侵食痕の肩部を通るが、第4-1面の771溝などに切られ、それまでに廃絶していたと分かる。

幅0.6～1.3m、深さ0.6～0.8mほどで、形状が整った部分では幅0.8m、深さ0.6mほどである。溝底部のレベルは、大部分で約T.P.+6.0mだが、2トレンチ南西半部分でT.P.+5.8mほどになる。埋土は、溝機能時に堆積した黒泥土や壁崩落土、流入土が重なる下層と、第4-1層由来の黒褐色土のブロックを多く含む人為的埋土の上層とに分かれる。

北東側の直線的部分は、埋土が共通する283溝と直角につながり、その地点から南西側に、後述する土器群3がある。283溝と共に屋敷地区画溝の一部ともなっていたと考えられる。

試掘調査では11トレンチで検出され、108溝としていた。283溝との合流点から北東へ3mほどの

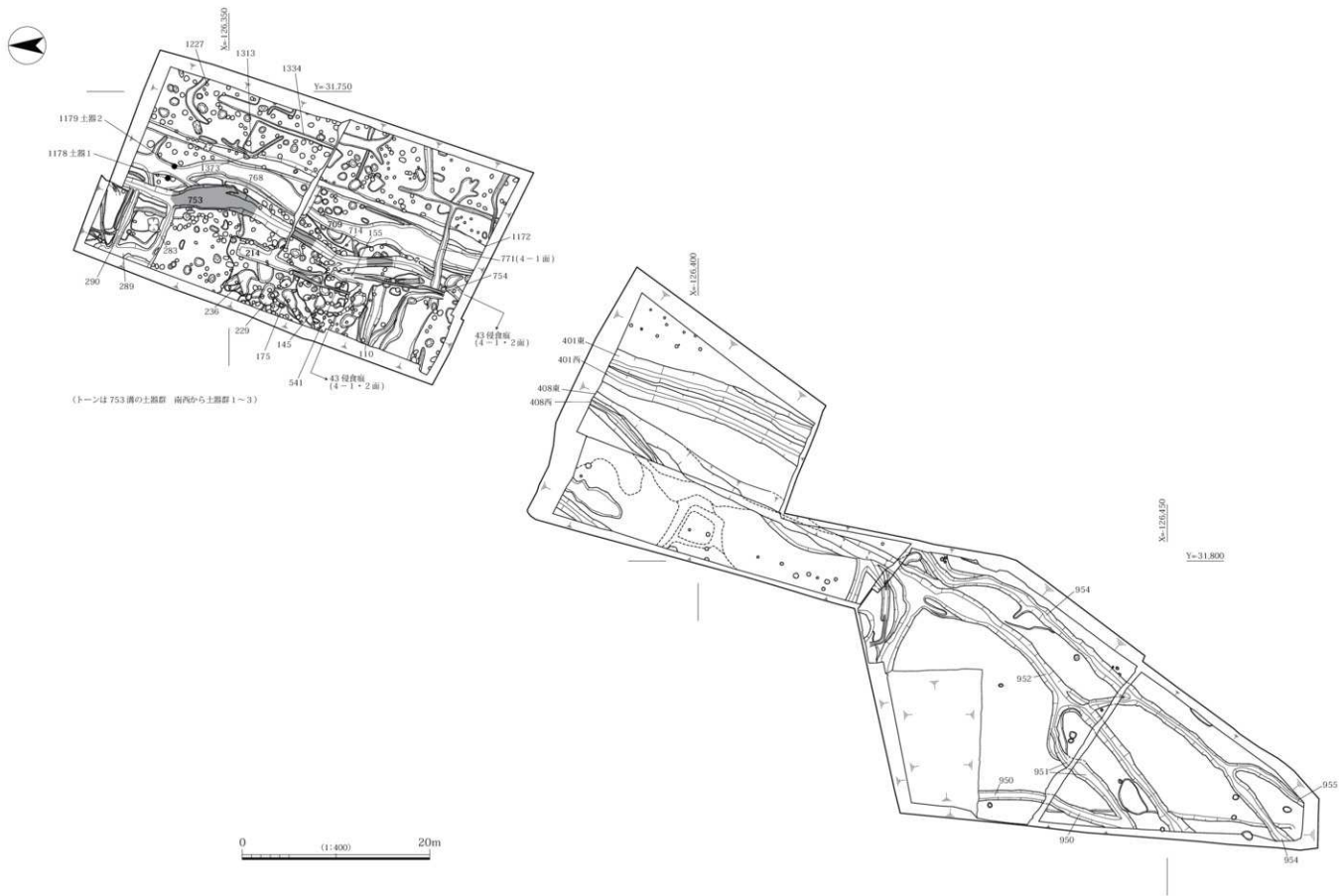


図32 第4-1・2面（1~3トレンチ）、第4-2面（4~7トレンチ）全体図

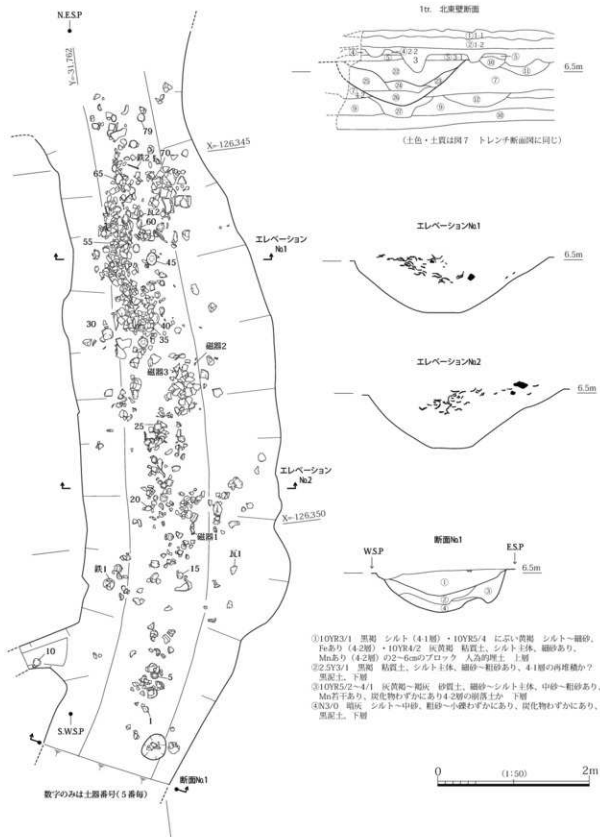


図33 753溝 土器群3

範囲で、コンテナ1箱ほどの遺物が出土したが、南西に隣接する土器群3ほどの密度はなかった。

土器群3は今回の調査で最大の遺物群である。先行した2トレンチ部分の調査では、上下層の掘り

表10 753溝 土器群3 破片数集計表

土器群 2606	精良加土 2197	杯	197	の字 コースター 792 24
		碗	64	
		皿	21	
		小皿	1025	
		台付皿	1	
	粗製加土 101	甕	64	
		羽釜	29	
		鉢	1	
		高坪	1	
		肥土	5	
黒色土器 1250	A類	碗	3	
	B類	碗	1234	
瓦器 461	1240	小皿	6	
		碗	436	
		小皿	9	
須恵器 259		甕	187	
		甕	43	
		碗	9	
		坪	8	
		鉢	6	

磁器	白磁	碗	0
	8	8	皿
灰釉陶器	5	碗	3
		鉢	1
緑釉陶器	3	碗	3
		常滑	1
陶器	平	土師器	3
		須恵器	1
		土師器	2
瓦	丸	土師器	1
		須恵器	1
鉄製品	3	須恵器	5
		新製品	ミニチュア
土製品	3	三方鉢	1
		石製品	磁石
灰	22	粘土塊	22
		灰	3

分けができなかったが、1トレンチでは、この土器群の検出に伴い、上下層の境界が追えて、遺物が上層に留まる土器群3の調査後、下層の調査をし(図42・図版20-8)、遺物も分別できた。土器群3の出土状況は最初に検出した遺物の取り上げ後、残りの遺物の出土状況を再度記録した(図版20-6・7)。

土器番号は南側から順に、1個体と判別できるものに付したが、全番号は掲載できず、5の倍数ずつ表示した。土器番号は最初の検出で土器79まで、二回目の検出も続き番号

で土器109に達した。

283溝との合流点から南側は溝の蛇行でほぼ南北正方位に近い。合流点から南に約8mまでの間に土器が密集する。金属器・磁器・瓦片・焼土・礫なども混じる。特に北側で密度が濃く(図版18)、溝の西側に偏り、遺物の高さも北寄り、西寄りが高い傾向にあり(図版20-2)、東では低く上下にばらつく。重い礫や甕の破片などは東側に多い(図版20-3)。溝西肩部から投棄したような状況である。その南側はやや密度が薄く、土器20付近から磁器2・3付近まで、土器18(図37-6)の須恵器甕の破片が広がる(図版20-5)。この付近も一つの投棄の単位であろう。エレベーションNo.2のライン付近以南はさらに密度が低い(図版19)。東肩部近くの高位位置にある遺物は、礫など重いものが多い。多くは上層下面が凹んだ部分に厚く堆積する。この付近も一つの投棄の単位か。西側から投棄して、重いものが遠くにあるように思える。南端では土器5付近に小規模な群がある。

破片数を集計したのが表10、接合を経て、個体をサンプルとして抽出したものが表11・12である。椀環類と小皿の比率は、破片数で1934:1040片、サンプル数では55:77点である。破片数で2:1に近く、サンプル個体数はおよそ5:7と小皿が多い。930溝で推測した、椀環類と小皿の破片数比率と個体数比率の関係より、かなり小皿の個体数が多い。

黒色土器B類椀と瓦器椀の比率は、破片数1234:436片、サンプル数28:10点と、どちらもほぼ3:1になる。同じ大きさの器種なら、破片数比と個体数比は整合すると言える。930溝より瓦器の比率が低いのは、瓦器椀が出現して、黒色土器B類椀と共存する期間中での古色とできる可能性がある。他に東播系須恵器の甕や椀、白磁破片もあるのは居住者の性格を考える資料となる。また、第4-1・2面遺構によく見られる、焼土塊や炭片もある。なお、常滑の甕口縁の小片が1片見られたが、13世紀後葉頃のもので、時期的にも孤立している。なんらかの混入と思われる。

接合してみると完形率の悪いものが多かった。ほとんどの供膳器に磨滅や傷などの使用痕が見られた事や、調理器・貯蔵器も完形率が悪い事から、完形での投棄ではなく、一定期間使用して破損したものを、集積してから投棄した土器群である可能性が高い。

表11で、黒色土器B類椀は器高4.6~5.5cmの範囲にほとんどが入り、口径は例外的なもの以外15cm台で、径高指数は34前後に集中する。径高指数平均は32.4である。他の属性も見込みの暗文に若干の多様性ある他は、極めて型的に共通性が高く、形式段階的には幅が狭いと言える。また、約3

表11 753溝 土器群3 黒色土器・瓦器属性表

サンプルNo.	検出No.	土器番号	口径	器高	径高指数	残存率%	高台	見込み	内面ミガキ	外面ミガキ	口縁部	厚さ	注
黒色土器A類碗													
1	図35-9		14.4	14.4	5	34.7	70	欠	不明	1b	1b	a	薄い
黒色土器B類碗													
1	図35-1	11	14.5	~ 14.2	5	34.8	98	c2 a1	1b	1a	a	薄い	高台内ミガキ
2		36	16.2	~ 14.8	4.7	30.3	85	c2 a2	1b	1a	a	薄い	高台内ミガキ
3	図35-2	45	16.1	~ 15.2	5.4	34.5	99	c2 a2	1b	1a	a	薄い	
4		47	15.6	復 15.6	5.4	34.6	55	b a1	1b	1a	a	薄い	
5		48	15.2	復 14.6	4.7	31.5	65	b g3	1b	1a	a	薄い	
6		51	16.8	復 16.4	6.1	36.7	70	b a3	1b	1a	a	薄い	
7	図35-3	54	15.5	復 14.6	5.1	33.9	75	c2 f	1b	1a	a	薄い	
8	図35-4	58	15.6	復 15.6	5.8	37.1	45	b b2	1b	1a	a	薄い	
9		59	16.5	復 16.4	5.1	31	55	b g1	1b	1a	b	薄い	
10		84	15.4	復 15.2	5.5	35.9	75	b a2	1b	1a	a	薄い	高台内ミガキ
11	図35-5	90	14.8	復 14	4.8	33.3	95	c2 g1	1b	1a	a	薄い	高台内ミガキ
12		94	15.6	復 15.2	5	33.6	55	b a2	1b	1a	a	薄い	
13	図35-6	103	15.6	復 15.6	5.5	35.2	35	c2 g1	1b	1a	a	薄い	
14	図35-7	106	15.2	復 15.2	4.7	30.9	65	欠 d	1a	1a	a	薄い	高台内ミガキ、 見込み線刻
15		16.3	~ 15.2	5.7	36.2	80	c2 a2	1b	1a	a	薄い	高台内ミガキ	
16		15.8	復 14.4	5.3	35.1	50	b a2	1b	1a	a	薄い	高台内ミガキ	
17		16.2	復 16.2	5.5	33.9	70	b 不明	1b	1a	a	薄い		
18		16.7	復 15.4	5.2	32.4	75	b a2	1b	1a	a	薄い		
19		15.7	復 14.4	5.4	35.9	85	b a2	1b	1a	a	薄い		
20		16	復 15.2	5.2	33.3	75	b a1	1b	1a	a	薄い		
21		16.2	復 16	5.2	32.3	75	b a3	1b	1a	a	薄い	高台内ミガキ	
22		14.8	復 14.8	4.6	31.1	55	c2 a1	1b	1a	a	薄い	高台内ミガキ	
23	図35-8	15.4	~ 15.4	4.8	31.1	55	d a2	1b	1a	a	薄い		
24		15.5	復 15.2	5.2	33.9	50	b a1	1b	1a	a	薄い		
25		16.4	復 14.6	5.7	36.8	75	b a2	1b	1a	a	薄い		
26	図35-10	16.2	~ 16.2	5.4	33.3	50	b e	1b	1a	a	薄い	二重高台	
27		16.3	復 15.8	5.4	33.6	60	b a1	1b	1a	a	薄い		
28		17.2	復 17.2	5	29.1	50	c2 a1	1b	1a	a	薄い		
黒色土器B類皿													
1	図35-12	100	9.8	9.8	1.8	20.4	25	h	1b	1b	c	薄い	
2	図35-13		10	9.8	1.4	14.1	65	a2	1b	1b	c	薄い	
瓦器碗													
1	図34-10	3	15.6	復 15.6	不明	不明	50	b h	1b	1b	a	薄い	高台内線刻
2	図34-11	4	15.5	~ 15.4	5.7	36.8	90	b g2	1b	1a	a	薄い	
3	図34-2	6	15	復 15	5.9	39.3	50	b a1	1a	1a	a	薄い	
4	図34-3	8	16	復 16	6	37.5	50	c2	1a	1b	a	薄い	
5	図34-4	13	15.6	復 15.6	5.2	33.3	50	b a3	1b	1a	a	薄い	
6	図34-5	82	15.4	~ 14.6	5.6	37.3	90	b d	1b	1a	a	薄い	内外面いせ
7	図34-6	85	16	~ 14.7	5.2	33.9	60	欠 a3	1b	1a	a	薄い	高台内線刻
8	図34-7	15	復 15	5	33.3	25	b h	1b	1a	a	薄い		
9	図34-8	16	復 16	5.2	32.5	40	b g2	1b	1a	a	薄い		
10	図34-9	15.6	復 15.6	5.9	37.8	30	b a3	1b	1a	a	薄い	外口縁部沈線	

分の1の個体に高台内ミガキが見られる事や、二重高台の存在が注目できる。

瓦器碗も黒色土器B類碗とあまり変わらない口径だが、器高が5.0～5.9cmの範囲とやや高く、径高指数は32.5～33.3と36.8～39.3の二つに分かれる傾向が見られる。平均値は35.7と黒色土器B類碗より高い。見込み暗文が多様な他は、各属性は黒色土器B類碗より統一性が高い。

黒色土器B類碗の方が調整は丁寧で、その分、やや古色を保つものも残るが、瓦器碗は新しい瓦器としての型式傾向に集約しているのであろう。930溝のものより、両者の比率や、型式属性の統一性の高さと言う点で古色があると言えるが、形式段階として分けられるかは検討を要する。

表12で土師器「て」の字状口縁小皿は、930溝のものと同じく、口径9.5cm前後を境に9cm台の中で大小に分かれる。ただし、口径10cmを越えるものもあるのは古色か。器高は0.9～2.0cmの中でばらつき、径高指数は意味がなさそうである。小型のものに胎土aの高温で焼けたものが多い傾向があり、一定数、胎土自体が異なるeが存在する。器壁の厚さは薄いものと厚いものがあり、胎土a・bには薄いものが多く、胎土eは全て厚い部類に入るようだが、明確な分類はできなかった。

土師環は径高指数21～23に集中し、他に19～20、26以上が少数ある。平均値は21.8となる。口径だけで見れば、15.6～16.2cmを最多として、13.9～14.2cm、13.1～13.4cm、12.4～12.6cm

表12 753溝 土器群3 「精良な胎土」の土器器属性表

サンプル No.	検出No.	土器 番号	口径	器高	径高 指数	保存 率%	口縁 部	調整	胎 土	焼 成	注
1		1	9.3 復 8.6	1.5	16.7	80	a	内: □ヨコナデ, 底直線ナデ 外: □ヨコナデ, 底直線ナデ・ユビオサエ	b	良	
2	図36-1	5	10 ~ 9.8	1.6	16.1	100	a	内: □ヨコナデ, 底ユビオサエ 外: □ヨコナデ, 底直線ナデ・ユビオサエ	a	良	小a
3	図36-2	10	9.7 ~ 9.5	1.3	13.5	100	a	内: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ 外: □ヨコナデ, 底直線ナデ・ユビオサエ	a	良	小a
4		12	9.6 ~ 9.6	1.7	18.1	90	a	内: □ヨコナデ, 底直線ナデ・ユビオサエ 外: □ヨコナデ, 底直線ナデ・ユビオサエ	b	良	
5	図36-3	15	9.7 ~ 9.4	1.8	18.8	99	a	内: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ 外: □ヨコナデ, 底直線ナデ・ユビオサエ	e	良	小e
6	図36-4	17	9.1 ~ 9.5	1.7	18.2	99	a	内: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ 外: □ヨコナデ, 底直線ナデ・ユビオサエ	e	良	小e
7		19	9.6 ~ 9.6	1.6	16.6	99	a	内: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ 外: □ヨコナデ, 底直線ナデ・ユビオサエ	b	良	
8		22	9.5 ~ 9.5	1.3	13.6	99	a	内: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ 外: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ	c	良	
9		23	9.8 ~ 9.5	1.7	17.6	100	a	内: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ 外: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ	b	良	黒斑あり
10		24	9.4 ~ 9.4	1.5	15.9	95	a	内: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ 外: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ	b	良	
11		25	9.5 ~ 9.1	1.6	17.2	99	a	内: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ 外: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ	b	良	
12		26	9.5 ~ 9.1	1.8	19.3	100	a	内: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ 外: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ	b	良	
13	図36-5	28	10.3 ~ 10.1	1.9	18.6	95	a	内: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ 外: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ	b	良	大b
14		32	9 復 9	1.1	12.2	50	a	内: ナデ 外: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ	c	良	
15		34	9.8 ~ 9.5	1.5	15.5	95	a	内: □ナデ, 底ナデ・ユビオサエ 外: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ	b	良	
16		38	9.6 ~ 9.5	1.4	14.7	99	a	内: □ナデ, 底ナデ・ユビオサエ 外: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ	a	良	
17		42	9.7 ~ 9.4	1.7	17.8	60	a	内: □ナデ, 底ナデ・ユビオサエ 外: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ	b	良	
18		43	10.1 復 10	1.2	11.9	70	a	内: □ナデ, 底ナデ・ユビオサエ 外: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ	b	良	
19		46	9.5 ~ 9	1.2	12.9	50	a	内: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ 外: □ナデ, 底ナデ・ユビオサエ	b	良	
20		53	9.2 復 9.4	1.2	12.9	90	a	内: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ 外: □ヨコナデ, 底直線ナデ・ユビオサエ	b	良	
21		56	10.5 ~ 10.4	1.5	14.3	100	a	内: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ 外: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ	b	良	
22		57	9.4 ~ 9.2	1.7	18.2	100	a	内: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ 外: □ヨコナデ, 底直線ナデ・ユビオサエ	b	良	
23		59	9.8 ~ 9.6	1.4	14.4	100	a	内: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ 外: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ	b	良	
24	図36-6	60	10.1 ~ 9.8	1.9	19.1	90	a	内: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ 外: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ	b	良	大b
25		62	9.1 ~ 8.9	0.9	10	100	a	内: □ヨコナデ, 底ユビオサエ 外: □ヨコナデ, 底ユビオサエ	b	良	
26		63	9.8 ~ 9.5	1.7	17.6	100	a	内: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ 外: □ヨコナデ, 底直線ナデ・ユビオサエ	b	良	
27		64	9.5 復 9.6	1.2	12.5	60	a	内: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ 外: □ヨコナデ, 底直線ナデ・ユビオサエ	b	良	
28		66	9.7 ~ 9.5	1.5	15.6	100	a	内: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ 外: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ	b	良	
29		67	9.7 ~ 9.4	1.7	10.4	100	a	内: □ヨコナデ, 底直線ナデ・ユビオサエ 外: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ	b	良	
30		68	10.5 ~ 10.2	1.5	14.4	100	a	内: □ヨコナデ, 底直線ナデ・ユビオサエ 外: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ	b	良	
31	図36-7	71	9.6 復 9.8	1.6	16.4	80	a	内: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ 外: □ヨコナデ, 底ユビオサエ	e	良	大e
32	図36-8	73	10.1 ~ 10	1.6	15.9	100	a	内: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ 外: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ	e	良	大e
33		74	9.7 ~ 9.7	1.5	15.4	100	a	内: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ 外: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ	b	良	
34		76	9.4 ~ 9.4	1	10.6	100	a	内: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ 外: □ヨコナデ, 底直線ナデ・ユビオサエ	b	良	
35		77	9.5 ~ 9.5	1.1	11.5	95	a	内: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ 外: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ	b	良	
36		80	10 ~ 10	1.4	14	100	a	内: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ 外: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ	b	良	
37		83	10 ~ 9.8	2	20.2	99	a	内: □ヨコナデ, 底直線ナデ・ユビオサエ 外: □ヨコナデ, 底ナデ・ユビオサエ	b	良	黒斑あり

表12 753溝 土器群3 「精良な胎土」の土師器属性表

サンプルNo. 「て」の字状口縁小皿	押印No.	土器番号	口径	器高	容積指数	残存率%	口縁部	調整	胎土	質	注	
38		88	9.8 ~ 9.1	1.1	11.6	100	a	内: 口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ 外: 口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ	e	良		
39		92	9.9 ~ 9.8	1.2	12.1	99	a	内: 口ヨコナデ、底直線ナデ・ユビオサエ 外: 口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ	b	良		
40		95	9.7 ~ 9.7	1.3	13.4	100	a	内: 口ヨコナデ、底直線ナデ・ユビオサエ 外: 口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ	b	良		
41		96	9.9 ~ 9.8	1.6	16.2	99	a	内: 口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ 外: 口ヨコナデ、底直線ナデ・ユビオサエ	b	良		
42		97	9.5 ~ 9.4	1	10.5	100	a	内: 口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ 外: 口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ	b	良		
43		101	9.5 ~ 9.2	1.1	11.7	100	a	内: 口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ 外: 口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ	b	良	寸 あり	
44		102	9.3 ~ 9.3	1	10.7	100	a	内: 口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ 外: 口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ	b	良	磨減	
45		104 ~	19	18.2	70	a	内: 口ナデ、底ナデ・ユビオサエ 外: 口ヨコナデ、底直線ナデ・ユビオサエ	b	良			
46	図36-9	8.5 復	10	1.2	12.9	60	a	内: 口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ 外: 口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ	b	良		
47	図36-10	11 復	1.3	11.7	60	a	内: 口ナデ、底直線ナデ・ユビオサエ 外: 口ヨコナデ、底直線ナデ・ユビオサエ	a	高	特大a		
48		9.3 ~ 9.2	1.6	17.2	98	a	内: 口ヨコナデ、底直線ナデ・ユビオサエ 外: 口ヨコナデ、底直線ナデ・ユビオサエ	b	良			
49		9.8 復	10	1.2	12.1	65	a	内: 口ヨコナデ、底直線ナデ・ユビオサエ 外: 口ヨコナデ、底直線ナデ・ユビオサエ	b	良		
50		9.5 復	9.6	1.1	11.5	95	a	内: 口ヨコナデ、底直線ナデ・ユビオサエ 外: 口ヨコナデ、底直線ナデ・ユビオサエ	b	良		
51		9.7 ~ 9.5	1.7	17.7	100	a	内: 口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ 外: 口ヨコナデ、底直線ナデ・ユビオサエ	b	良			
52		9.8 ~ 9.7	1.4	14.3	98	a	内: 口ヨコナデ、底直線ナデ・ユビオサエ 外: 口ヨコナデ、底直線ナデ・ユビオサエ	b	低			
53		9.6 復	9.4	1.3	13.6	50	a	内: 口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ 外: 口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ	b	低	磨減 あり	
54		9.4 復	9.8	0.9	9.3	50	a	内: 口ヨコナデ、底直線ナデ・ユビオサエ 外: 口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ	b	良		
55		9.5 復	9.5	1.3	13.6	50	a	内: 口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ 外: 口ヨコナデ、底直線ナデ・ユビオサエ	b	良	磨減 著しい	
56		10 復	10	1.4	14	65	a	内: 口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ 外: 口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ	b	低		
57		9.2 復	9.4	1.7	18.2	60	a	内: 口ヨコナデ、底直線ナデ・ユビオサエ 外: 口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ	b	良		
58		9.2 復	9.6	1.5	15.9	50	a	内: 口ナデ、底ナデ・ユビオサエ 外: 口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ	b	良		
59		9.3 復	9.2	0.9	9.7	55	a	内: 口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ 外: 口ヨコナデ、底直線ナデ・ユビオサエ	b	良		
60		9.7 復	9.6	1.2	12.4	50	a	内: 口ナデ、底ナデ・ユビオサエ 外: 口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ	b	良		
61		9.8 復	9.6	1.4	14.4	55	a	内: 口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ 外: 口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ	b	良		
62		9.5 復	9.6	1.5	15.7	70	a	内: 口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ 外: 口ヨコナデ、底直線ナデ・ユビオサエ	b	低		
63		10.1 ~ 9.9	1.7	17	99	a	内: 口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ 外: 口ヨコナデ、底直線ナデ・ユビオサエ	b	良	磨ハゼ あり		
64		10.3 ~ 10	1.3	12.8	100	a	内: 口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ 外: 口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ	b	良			
65		9.4 ~ 9.3	1.2	12.8	90	a	内: 口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ 外: 口ヨコナデ、底直線ナデ・ユビオサエ	b	良			
66		9.4 復	9.4	1.3	13.8	55	a	内: 口ナデ、底ナデ・ユビオサエ 外: 口ナデ、底ナデ・ユビオサエ	b	良		
67		9.9 復	9.6	1.8	18.4	80	a	内: 口ナデ、底直線ナデ・ユビオサエ 外: 口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ	b	低	磨減 あり	
68		9.2 復	9	1.4	15.3	50	a	内: 口ナデ、底ナデ・ユビオサエ 外: 口ナデ、底ナデ・ユビオサエ	b	良		
69		10.3 復	10.4	1.2	11.5	50	a	内: 口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ 外: 口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ	b	良		
コースター形小皿												
1	図36-11	9	10.2 復	10	1	9.9	50	a	内: 口直線ナデ 外: 口ヨコナデ、底ヨコナデ・ユビオサエ	b	良	
2	図36-12	20	9.8 復	9.6	1.1	11.3	50	a	内: 口ヨコナデ、底ヨコナデ・ユビオサエ 外: 口ヨコナデ、底ユビオサエ	b	良	
3	図36-13	79	10 ~ 9.5	1.2	12.3	100	a	内: 口ヨコナデ、底直線ナデ・ユビオサエ 外: 口ヨコナデ、底直線ナデ・ユビオサエ	b	低		
4	図36-14	87	9.8 ~ 9.7	0.9	9.2	100	a	内: 口ヨコナデ、底直線ナデ・ユビオサエ 外: 口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ	b	低		

表12 753溝 土器群3 「精良な胎土」の土器器属性表

サブ 小No.	横位No.	土器 番号	口径	器高	径高 指数	残存 率%	口縁 端部	調整	胎 土	磨 滅	注
外反口縁小皿											
1	図36-16	72	9.8 ~ 9.8	1.7	17.3	100	c	内：口ヨコナデ 外：口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ	b	良	
その他小皿											
1	図36-15	21	10.3 復	10	2.3	22.6	70	e	内：口ヨコナデ 外：口ヨコナデ、底直線ナデ・ユビオサエ	b	良
作											
1		29	15.6 復	15.6	3.4	21.7	55	e	内：口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ 外：口ヨコナデ、底直線ナデ・ユビオサエ	b	良 黒斑 あり
2	図36-18	33	13.3 ~ 13.1	2.8	21.2	100	c	内：口ナデ、底直線ナデ・ユビオサエ 外：口ヨコナデ、底直線ナデ・ユビオサエ	b	良	
3	図36-22	35	16.1 ~ 16.1	3.8	23.6	95	c	内：口ヨコナデ、底直線ナデ・ユビオサエ 外：口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ	b	良	
4		37	15.6 復	15.6	3.3	21.1	50	c	内：口ナデ、底ナデ・ユビオサエ 外：口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ	a	高 黒斑 あり
5		40	16 ~ 16	3.8	23.7	99	c	内：口ナデ、底ナデ・ユビオサエ 外：口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ	b	良	
6		41	16.2 復	16.2	3.4	20.9	60	c	内：口ナデ、底ナデ・ユビオサエ 外：口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ	b	低
7	図36-19	52	14.2 ~ 14.2	2.7	19	95	c	内：口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ 外：口ヨコナデ、底直線ナデ・ユビオサエ	b	良	
8	図36-21	61	15.1 ~ 15	3.2	21.2	80	c	内：口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ 外：口ヨコナデ、底直線ナデ・ユビオサエ	b	良	
9		99	13.4 ~ 13.4	2.7	20.1	50	c	内：口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ 外：口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ	b	良	
10		104	14.3 ~ 13.9	2.6	18.4	90	c	内：口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ 外：口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ	b	良	
11		105	16 ~ 15.9	3.4	27.5	70	c	内：口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ 外：口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ	b	良	
12	図36-17		12.6 ~ 12.4	2.4	19.2	85	c	内：口ヨコナデ、底直線ナデ・ユビオサエ 外：口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ	b	良	
13			14.6 復	14.6	3.1	21.2	50	c	内：口ナデ、底ナデ・ユビオサエ 外：口ヨコナデ、底直線ナデ・ユビオサエ	b	良
14	図36-20		14.2 ~ 13.9	3.1	22	85	c	内：口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ 外：口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ	b	良	
15			15.6 復	15.6	4.2	26.9	45	e	内：口ナデ、底ナデ・ユビオサエ 外：口ヨコナデ、底ナデ・ユビオサエ	b	低
16	図36-23		15.4 復	15.4	3.3	21.4	45	e	内：口ヨコナデ、底ナデ 外：口ヨコナデ、底ナデ・底直線ナデ	a	高 黒斑 あり

と、数を減らしながらまとまりがあるようである。器高は3.1～3.4cmを最多として、上は3.8～4.2cm、下に2.4～2.8cmにまとまりがある。胎土はほとんどがbである。径高指数の低いものは、皿との分別をつけにくい法量であり、器種区分の崩壊期の影響を残しながら、法量分化の傾向も見られると言えようか。

図34は瓦器である。個々の属性は表11にあり。図34-1は土器4である。胎土に1mm弱の石英数個のみあり。2は土器6である。内外面磨滅激しい。3は土器8である。内外面磨滅激しい。胎土に1mm弱の黒色粒若干あり。4は土器13である。胎土に砂粒なし。5は土器82である。胎土に1mmのチャート1粒あり、1mm弱の黒色粒あり。6は土器85である。見込み暗文は連続施文である。胎土に0.5mm以下の黒色粒若干あり。7は土器11～17周辺出土。高台内に十字の焼成後線刻あり、幅は0.5mmほどと細い。胎土に1mm弱の黒色粒あり。8は土器11～17周辺出土。内外面に磨滅あり。胎土に0.5mm以下の黒色粒わずかにあり。9は土器27～43周辺出土。部分的に磨滅あり。口縁端部外面にも沈線あり。胎土に0.5mm以下の黒色粒若干あり。10は土器3である。高台内に線刻6本、非常に細く、幅0.5mmもない。高台に粘土紐接合痕が残る。胎土に0.5mm以下の黒色粒わずかにあり。11は土器群3検出時に出土。見込み暗文の下にハケメ残る。胎土に1mm弱の黒色粒あり。12も土器群3検出時に出土。見込み暗文は三方向の直線で、龍目文か。胎土に1mm弱の黒色粒あり。13は土器11～17周辺出土、外面高台内部に粗いがミガキがある。胎土に砂粒なし。14は土器4である。小型の瓦器碗で、残存率10%程度である。破片が歪みの強い部分で、復元法量には疑問が残る。胎土に0.5mm以下の石

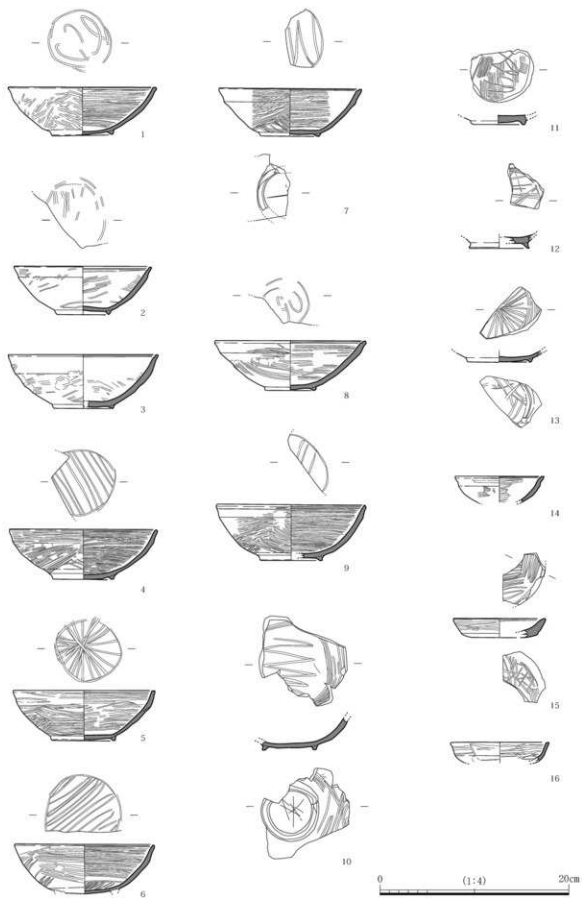


图 34 753 清 土器群 3 瓦器

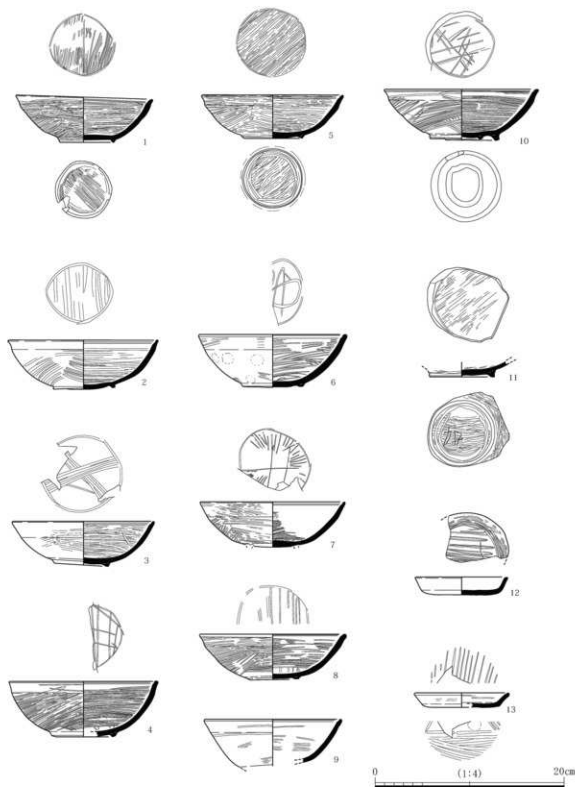


図 35 753溝 土器群3 黒色土器 (9はA類、他はB類)
英わずかにあり。

図 34 - 15 は土器群3 検出時出土。瓦器小皿である。胎土に1mm弱の石英わずかにあり。16も土器群3 検出時出土の瓦器小皿である。残存率10%。ミガキはやや粗雑だが、器壁は薄い。胎土に砂粒なし。

図 35 は黒色土器である。9がA類、他はB類である。個々の属性は表 11 にあり。

図 35 - 1 は土器 11 である。胎土に砂粒なし。2 は土器 45 である。外面と、内面見込みに磨滅あ

り。見込みの暗文は幅がかなり太い。胎土に砂粒なし。3は土器54である。外面は磨滅あり。胎土に2mmの石英1粒あり、0.5mm以下、石英・白雲母わずかにあり。4は土器58である。見込み暗文は土器群3では極少ない格子文(b2)で、かなり粗い。胎土に砂粒なし。5は土器90である。胎土に0.5mm以下の石英・長石・黒雲母あり。6は土器103である。外面磨滅激しい。見込み暗文は螺旋文が丸く巡る(g1)が、かなり粗く、不整形。胎土に砂粒なし。7は土器106である。内面の磨滅激しい。見込みに、使用痕の傷とは異なる細い焼成後線刻がある。胎土に砂粒はない。8は土器44～80周辺出土。内外面若干の磨滅あり。胎土に0.5mm以下の黒雲母・石英・長石あり。

図35-9は土器44～80周辺出土、土器群3で唯一の黒色土器A類碗である。内外面磨滅激しい。外面残存部下端にヨコナデあり、高台付きか。外面口縁以下は10YR7/2にぶい黄橙色で、胎土に2～1mmの赤色粒・1mm弱の長石あり、1mm弱の石英若干あり、2～1mmのチャートわずかにあり。

図35-10は土器89～100周辺出土である。見込み部分磨滅激しい。暗文は判然としないが、直線が3方向で、籠目文か。二重高台は、双方の高台下端面が同じ高さである。胎土に0.5mm以下の黒色粒・石英・長石あり。11は土器44～80周辺出土。高台内に焼成後線刻あり。「加」とも読める。胎土に砂粒なし。12は土器100である。外面磨滅あり。実測前の観察では、口縁外面にわずかにミガキが見えた。胎土に0.5mm以下の石英・長石わずかにあり。13は土器群3検出時出土である。外面ミガキが入るが、内面より太い。胎土に0.5mm以下の石英・黒色粒・長石若干あり。

図36は「精良な胎土」の土師器の小皿と坏である。小皿は、1～10が「て」の字状口縁、11～14がコースター形、15・16がその他の小皿である。17～23は坏とした。個々の属性は表12にあり。

図36-1は土器5である。胎土に1mm前後の石英若干あり、3～1mmのチャート・1mm弱の長石わずかにあり。例外的に砂粒多い。2は土器10である。器表剝離あり。胎土に1mm弱の石英・チャートわずかにあり。3は土器15である。内外面煤付着。胎土に砂粒なし。4は土器17である。底部中央から口縁部に向かう粘土接合痕あり。胎土に砂粒なし。5は土器28である。磨滅・傷多し。胎土に4～1mmの赤色粒あり、1mm弱の黒雲母わずかにあり、0.5mm以下の石英あり。6は土器60である。1mm前後の赤色粒若干あり。7は土器71である。口縁端部外側に沈線巡る。0.5mm以下の赤色粒わずかにあり。8は土器73である。胎土に1mm弱の石英わずかにあり、0.5mm以下の石英・長石あり。9は土器1～17周辺出土。胎土に2～1mmの赤色粒若干あり、1mm弱の石英わずかにあり。10は土器27～43周辺出土。胎土に1mm弱の赤色粒わずかにあり、0.5mm以下の赤色粒・石英・長石あり。

図36-11は土器9である。コースター形小皿。磨滅激しい。口縁端部に水平面あり。胎土に1mm前後の石英・1mm弱の長石あり、2～1mmのクサリ礫・1mm前後のチャートわずかにあり。例外的に砂粒多い。12は土器20である。口縁端部は内側に丸めるが、上部に水平面あり。11と同じタイプである。胎土に2～1mmの赤色粒若干あり。13は土器79である。断面形が緩く反るコースター形で、口縁端部は内側に丸め込む。胎土に0.5mm以下の長石若干あり。14は土器87である。13と同じタイプのコースター形である。胎土に0.5mm以下の石英・長石わずかにあり。

図36-15は土器21で、その他の小皿である。体部のヨコナデは断続的。胎土に3～1mmの赤色粒あり、1mm前後の石英・長石・チャートわずかにあり。16は土器72である。口縁外反タイプの小皿で、外面に底部中央から口縁に伸びる粘土接合痕残る。胎土に0.5mm以下の石英若干あり。

図36-17は土器81～88周辺出土の坏である。内面底部にナデ前のハケメ残存。胎土に1mm弱の石英・長石・チャートわずかにあり。18は土器33である。内面磨滅で調整不明。底部外面に煤付着。

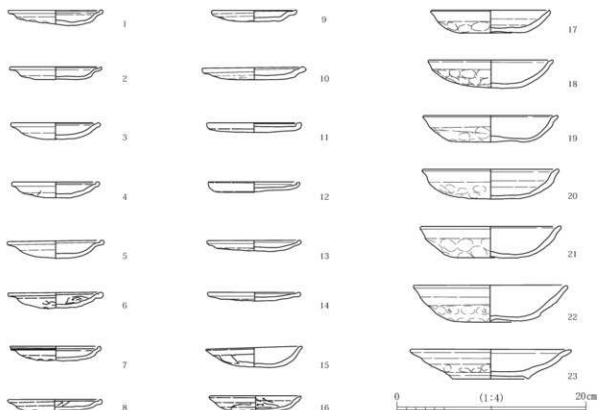


図36 753溝 土器群3 土師器小皿・坏

胎土に2～1mmの石英・長石わずかにあり。0.5mm以下のチャートわずかにあり。19は土器52である。内面磨減激しい。体部に粘土接合痕残る。胎土に1mm前後の石英・赤色粒わずかにあり。20は土器53である。外面底部の一部に煤附着。胎土に1mm前後の石英・長石・チャートわずかにあり。21は土器61である。内面磨減激しく、ユビオサエ残る。胎土に1mm弱の石英・長石わずかにあり。22は土器35である。内面磨減のため調整不明。外面ユビオサエ内にハケメ残る。胎土に2～1mmの赤色粒若干あり。

図36-23は土器44～80周辺出土。高台坏としたが、器形は9世紀代の灰釉陶器の段皿の模倣形のように、皿とすべきか。しかし、須恵器でも9世紀代に見られるのみの器形で、時期的に合わない。内面にも一部ユビオサエ残る。胎土に2～1mmの赤色粒若干あり。

図37は須恵器(1～7)、白磁(8・9)、緑釉陶器(10)である。図37-1は土器27～43周辺出土。椀で、残存率45%、東播系か。胎土は10Y6/1灰色だが、口縁部内外面のみN5/0灰色で、4～2mmの流紋岩・3～1mmのチャートわずかにあり、1mm弱の石英若干あり。2は土器1～17周辺出土。椀で、残存率30%、東播系か。内面に粘土接合痕残る。平高台外側面に沈線状の調整あり。胎土はN6/0灰色だが口縁部付近のみN5/0灰色で、4～1mmの黒色粒わずかにあり、0.5mm以下の石英・長石あり。3は土器81～88周辺出土。椀で残存率30%、東播系か。外面にはヨコナデを切るナデや、それより細かいナデがランダムに散在する。胎土は7.5Y6/1灰色だが、口縁部のみN4/0灰色を呈し、1mm前後の石英・長石・チャートあり。

以上の3点は、11世紀に須恵器環類が減少するのに代わり増加するものである。平安京域に東播系須恵器が増加する時期で、口縁部の黒色化の特徴からも東播系と考えられる。高台側面の調整が弱く、口縁部が外反しないものが2点あるので、11世紀後葉頃の様相か。

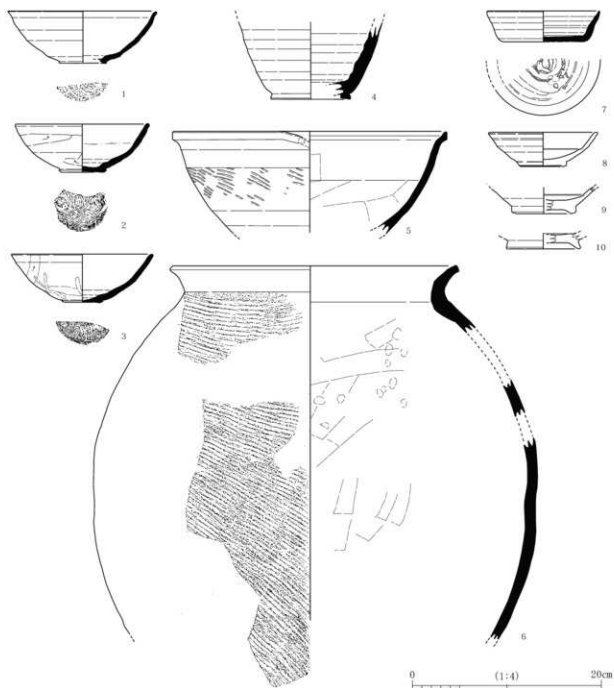


図37 753溝 土器群3 須恵器・白磁・緑釉陶器（8・9：白磁 10：緑釉陶器）

図37-4は土器19～26周辺出土。高台付壺片で、残存率10%か。内面底部に自然釉あり。胎土はN6/O灰色を呈し、2～1mmの黒色粒あり、1mm前後の長石・石英わずかにあり。10世紀中葉以前のものか。古い遺構を破壊して入ったものであろう。

図37-5は土器44～80周辺出土。赤味強く、軟質だが、タタキから須恵器と判断した片口鉢である。二次的被火を受けたか。残存率15%。全面ナデだが、一部タタキ残る。胎土は7.5YR8/3浅黄橙色を呈し、1mm弱の石英多し、1mm弱の長石あり、1mm前後のチャート若干あり。12世紀以前のものか。

図37-6は土器18で、土器群3の中で同一個体片が広範囲に広がっていた裏である。全破片で残存率40%以上はあるが、接合するものは少ない。外面肩部と口縁上部に降灰痕あり。胎土はN6/O灰色を呈し、3～1mmの黒色粒あり、1mm前後の石英・長石若干あり。東播系須恵器裏であらう。

図 37-7 は土器 107 の坏である。残存率 30%。底部外面回転ヘラ切りの面に微小な粘土塊が付着する。胎土は N6/O 灰色で、2~1mm の長石わずかにあり、0.5mm 以下の長石・黒色粒・石英若干あり。平安時代前期、9 世紀前半頃のものか。他の遺物よりは古いものである。

図 37-8 は土器群検出中に出土。那窯・定窯系白磁皿で、残存率 20% である。内面に段あり、外面高台より少し上から露胎。胎土は精白である。削り出し高台の形態と内面の段からすれば、10 世紀後半から 11 世紀中頃のものか。

図 37-9 は磁器 1 で、華南沿岸窯系白磁碗片、残存率 10% である。内面、体部と底部の境に沈線。外面残存部分は露胎。胎土には微細な黒色粒わずかにあり。11 世紀後半から 12 世紀前半頃のものか。

図 37-10 は土器 27~43 周辺出土の、緑釉陶器碗片で、残存率 10% 以下、高台の周は 20% 残る。外面高台内まで軸あり、調整はナデ。胎土は 7.5YR8/3 浅黄橙色を呈し、1mm 前後のチャート若干あり、0.5mm 以下石英・長石あり。高台が断面三角形で、近江産の終末に近い時期、11 世紀前半頃のものか。小片のみなので古い遺構からの混入の可能性が高い。

図 38 は土師器の羽釜 (1・2)、甕 (3~5)、瓦片 (6)、土製品 (7)、砥石 (8)、金属製品 (9~11) である。

図 38-1 は土器 81~88 周辺出土、残存率 30% である。内外面煤付着。内面はナデ。胎土は 10YR8/3 浅黄橙色を呈し、1mm 前後のチャート多し、石英あり、長石若干あり。2 は土器 69 である。残存率 40%。外面煤付着、内面下半に炭化物付着。胎土は 2.5Y7/2 灰黄色を呈し、1mm 弱の石英・長石多し。

以上二つは在地の羽釜である。甕の高さが口縁と同じものの出現は 10 世紀末葉以降であろう。

図 38-3 は土器群 3 検出時出土で、残存率 10% 以下、口縁周残存は 20% である。外面煤付着。内面ヨコハケ後ナデ、外面ユビオサエ後ナデである。胎土は 10YR7/3 にぶい黄橙色を呈し、2~1mm のクサリ礫わずかにあり。胴部が口縁より大きい扁球形になる 10 世紀末葉以降のものか。4 は土器 86 である。残存率 15%。胴部内面は極めて粗い目のヨコハケ。内外面煤付着。胎土は 2.5YR6/3 にぶい橙色を呈し、4~1mm のクサリ礫わずかにあり、1mm 前後の石英・チャートあり、長石若干あり。5 は土器 70 である。残存率 40%。外面煤付着、内面底部炭化物付着。胎土は 10YR7/3 にぶい黄橙色で、1mm 前後のチャート多し、長石・クサリ礫あり、石英若干あり、黒雲母わずかにあり。

5・6 は、在地の甕で、器壁厚く、作りも粗いものである。今回の調査で破片の出土も多い。

図 38-6 は瓦 2 である。土師質丸瓦片で残存率 10% ほどか。下面は布目にわずかにナデ、上面ナデ、端面はヘラケズリである。胎土は 10YR7/4 にぶい黄橙色を呈し、1mm 弱のクサリ礫若干、泥岩わずかにあり。今回の調査では瓦の出土は少ないが、さらに丸瓦は極端に少ない。

図 38-7 は土器 44~80 周辺出土の土師質土製品である。ユビオサエでやや不整な 6 面体を作る。サイコロ状と言えるか。胎土は 5Y7/1 灰白色を呈し、0.5mm 前後の長石あり。

図 38-8 は土器 1~17 周辺出土の砂岩製砥石である。図下と側面一つを欠く。上面は自然面で、隣接面が皆丸味をもってこの面につながるのだから本来の形であろう。幅広の 2 面に擦痕あり。

図 38-9 は鉄器 1 である。棒状で、断面は上が 4×5mm、下が 3×3mm である。上下を欠く。中ほどから下が徐々に細くなるが、関部などの造作は認められない。ノミかヤリガンナか。

図 38-10 は鉄器 2、釘である。下部先端を欠く。断面は上が 7×13mm、下が 5×7mm で、断面長方形になる。

図 38-11 は土器 27~43 周辺出土の、鉛製ミニチュア碗である。口縁を若干欠損する。全体に白

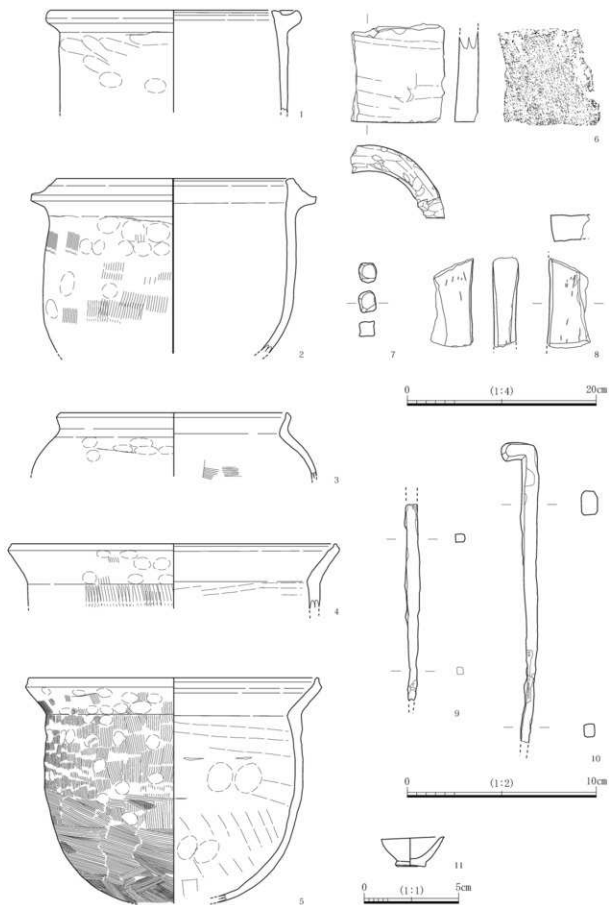
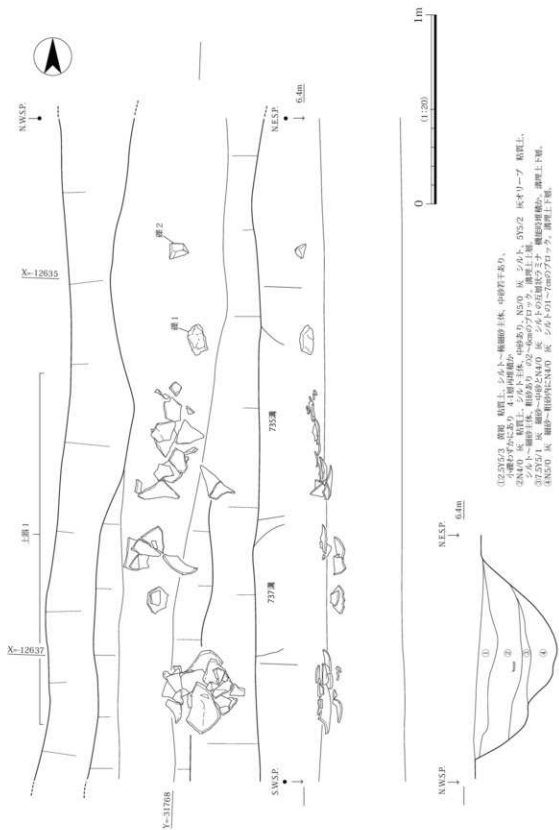


图 38 753 溝 土器群 3 土師器 甕・羽釜・他

図39 753溝 土器群1



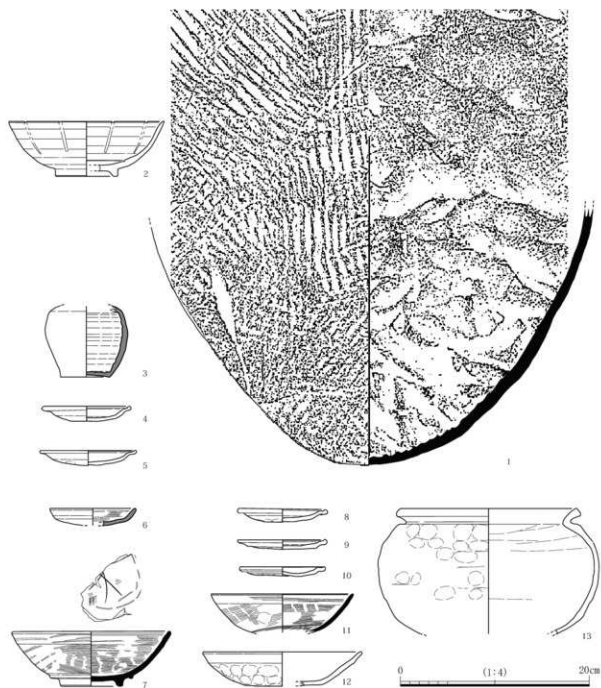


図40 753溝 土器群1・2・他 出土遺物(1～3:土器群1、4・5:土器群2、
6・7:土器群以外上層、8～13:試掘11tr.部分)

い跡が浮く。口径1.6 cm、器高0.8 cm、高台径0.8 cmである。類例を知らない。

753溝土器群3の遺物群の投棄時期は、11世紀後半でもかなり初めの時期に限定できそうである。

特に、瓦器と黒色土器の相伴関係から見れば、その比率で930溝の遺物群より古色を示し、様式段階的には分けられるであろう。両者の調整の面で見ても、930溝より若干の古色を示し、それも型式属性のばらつきが少ない状況は、形式段階としても分別して設定できる可能性もある。

黒色土器B類碗は、高台内ミガキがないものも多く、二重高台も見られる段階の様相だが、さらに瓦器が出現した段階と、形式段階で2段階以上に渡る遺物の集積と考えるのは、一つの廃棄土器群として

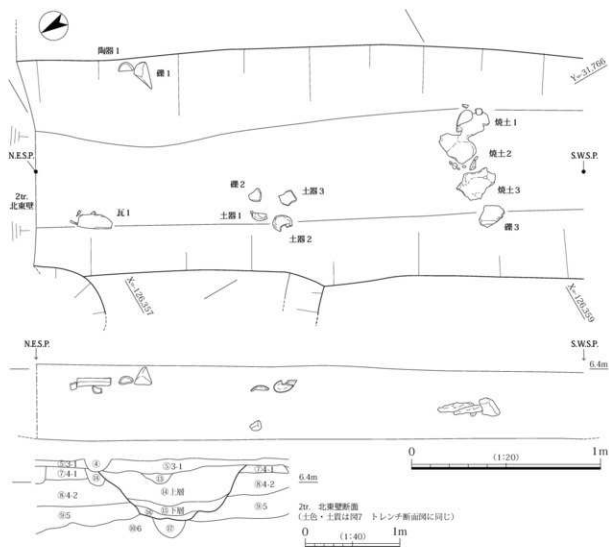


図41 753溝 土器群2

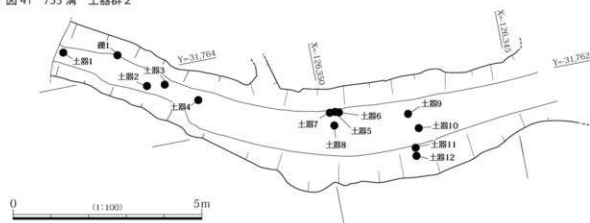


図42 753溝 下層

はやや長い感じを受ける。また、この溝の廃絶後、洪水堆積を経て新たに成立した930溝でも同じように黒色土器と瓦器の共伴が見られ、消費地の様相として、このような遺物構成の様式段階が存在したと考える方が理解しやすいように思う。

瓦器が出現期に、黒色土器B類が多数を占める中に共伴する段階が設定できるなら、この遺物群はそ

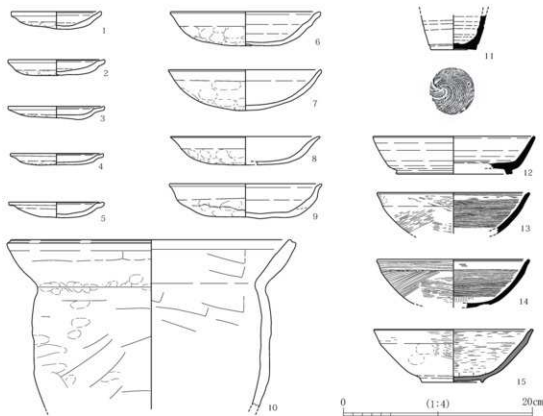


図43 753溝 下層(1トレンチ部分) 出土遺物

の中でも古い段階の可能性があり、まさに瓦器出現当初の状況を示しているのかもしれない。

土師器供膳器はほとんど坏と小皿のみと言える。「て」の字状口縁小皿が多量にある状況は京風とも言えるが、ここでの器壁が薄いタイプが、平安京城では厚手のタイプであろう。坏は皿との器種区分があいまいなまま、法量分化の傾向を内包しているような、過渡期的状況である。

須恵器では、東播系の椀や甕が平安京で増加する状況に、この地域も関係した事を示すように思える。それと白磁製品の存在は、交易で財力を蓄えた居住者の存在を想定させる。

それに対し、在地の土師器羽釜・甕は粗雑で、羽釜の鈎の形態も同時期にかなり多様である。燃料効率の悪さが心配なほど器壁が厚い調理器の存在は、いかなる状況を示しているのだろうか。

753溝が、灌漑用水路であると同時に、屋敷地方形区画溝の一部でもある事は、この土器群3の遺物の器種構成や量からも裏付けられよう。土器群3の遺物は、屋敷地存続期間の内でも廃絶前の一時期に集積され、屋敷地廃絶時に投棄されたものと考えても大過あるまい。

753溝土器群1 (図39・図版21-1・34・35) 753溝の2トレンチ部分でほぼ中央に位置する土器群である。遺物の主体は溝検出面よりやや浮くほどの高さで散乱する須恵器甕片で、その北東側の断面図で見れば、人為的埋土の上層(②)より上の、二次堆積層(①)にあったのかもしれない。遺物は上下層の分別ができなかったが、他の遺物も溝内下半にはなく、同じ層か上層に含まれていたと思われる。

出土遺物破片数は、土師器14片中、「て」の字状口縁小皿1、コースター形小皿1、甕2、羽釜1、

表13 283溝 破片数集計表

土師器	精良土師	坏	19	
208	117	小皿	9	
	粗制土師	甕	31	ての字 30
		羽釜	35	
黄色土器	A類	甕	4	
	32 B類	甕	28	
瓦器		甕	2	
須恵器		甕	2	
緑釉陶器		甕	1	
瓦	平	須恵甕	1	
粘土塊		須恵土塊	6	

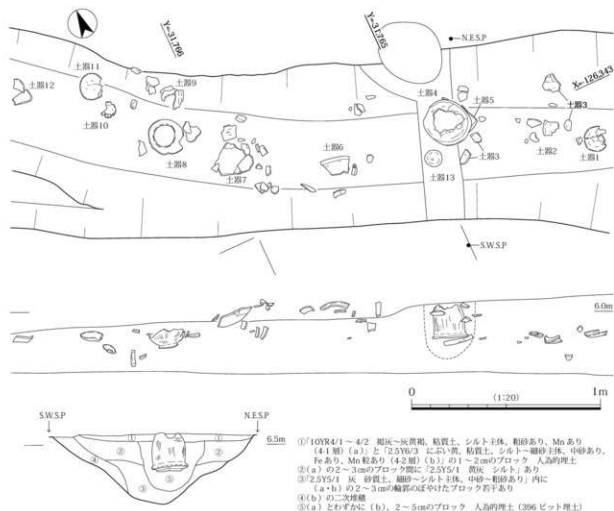


図44 283溝

須恵器甕65片、黒色土器B類椀3片、瓦質小壺2片、青磁碗2片、炭片5、焼土塊3、礫3である。

図40-1が土器1、須恵器甕である。接合しない破片も多いが、甕下半部のみで、残存率40%。外面タタキは格子目、内面は底部に強く無文内当て具痕が残り後ナデである。胎土は2.5Y7/1灰白色を呈し、2～1mmの石英・1mm弱の長石若干あり。岡山県亀山窯産と思われる。2は白磁碗片、残存率20%である。外面に縦の沈線が刻まれ、内面同一部分は稜を成す。その間隔だと6弁の蓮弁か。高台下端面軸ハギ、高台内無軸。胎土にはわずかに黒色粒あり。10世紀後半から11世紀後半頃のものか。3は瓦質小壺で、残存率50%である。外面は磨滅激しい。調整・形態は須恵器だが、内外面に炭素吸着して軟質である。胎土断面は5Y8/1灰白色を呈し、1mm弱の黒色粒・クサリ礫若干あり。須恵器なら、10～11世紀のものである。

土器1が、753溝廃絶後のものだとすれば、屋敷地廃絶後も人の活動があった証拠になる。

753溝土器群2 (図40・41・図版21-2・35) 753溝2トレンチ部分の北東端に位置する。土器群と言っても多いのは大小の焼土塊であった。出土レベルから、ほとんどが溝埋土上層に位置すると思われる。出土遺物破片数は、土師器20片中、小皿8(「て」の字7)、椀1、黒色土器B類椀2片、瓦器椀8片、瓦器小皿1片、灰釉陶器片1、須恵甕2片、土師質平瓦1片、礫4、焼土塊11である。実測可能なものは以下の土師器「て」の字状口縁小皿2点のみであった。

図40-4は土器1で、残存率40%である。復元口径10.2cm、器高1.7cm。内面磨滅、外面底部は



図45 283溝 (4・5・8～11:試掘11tr.部分 18～22:土器4(15)内)出土遺物

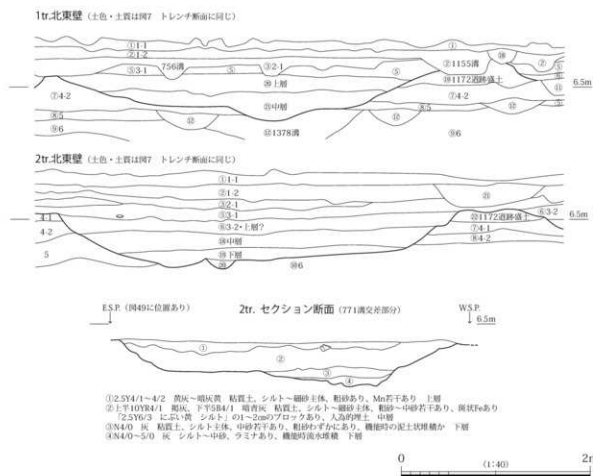


図46 768溝 断面

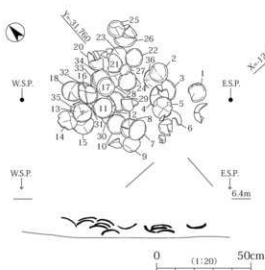


図47 768溝 土器群1

面やや磨滅。胎土に0.5mm以下の黒色粒わずかにあり。

図40-7は2トレンチ上層出土の黒色土器B類碗で、残存率30%である。復元径16.6cm、器高5.8cm。見込みの暗文はb1か。その上に線刻あり。二重高台は外のものが短い。胎土に砂粒なし。

図40-8~13は試掘11トレンチで108溝とした部分から出土した。上下層の分別はできていない。8~10は土師器「て」の字状口縁小皿である。

ユビオサエ後ナデ。胎土はcで、砂粒なし。5は土器2で、残存率80%である。口径9.0~9.4cm、器高1.6cm。外面底部はユビオサエ後ナデ。胎土はbで、1mm前後の石英・1mm弱の長石若干あり。

焼土はナデの見られるものもあり、かなり厚いものもあった。時期は土器群3と同じと見てよからう。

753溝上層群以外上層・試掘11トレンチ出土遺物
 (図40・図版34・40) 土器群以外の上層出土の土器と試掘11トレンチ部分で出土の内、実測できたものを掲載する。

図40-6は1トレンチ上層出土の瓦器小皿、残存率25%である。復元径9.0cm、器高1.8cm。外

表14 768溝 土器群1 土師器小皿属性表

サンプルNo.	検出No.	土器番号	分類型式	口径	器高	径高指数	残存率%	胎土	
1		1	a	10 ~ 9.4	2.5	25.8	90	7.5YR 7/4	
2		2	a	10 ~ 9.8	2.2	22.2	100	7.5YR 7/4	
3		3	a	10 ~ 9.6	2.5	25.5	100	7.5YR 7/3	
4		4	a	9.9 ~ 9.4	2.2	22.8	90	7.5YR 7/4	
5	図48-1	5	a	10.6 ~ 10.4	2	19	90	7.5YR 7/4	
6		6	a	9.8 復	9.6	2	20.6	70	7.5YR 7/3
7		7	a	9.7 ~ 9.4	2.2	23	90	7.5YR 7/4	
8		8	a	10 ~ 9.9	1.9	19.1	90	7.5YR 7/3	
9	図48-2	9	a	9.6 ~ 9.4	2.2	23.2	100	7.5YR 7/4	
10	図48-13	10	c	10.5 ~ 10.3	2	19.4	100	7.5YR 8/4	
11		11	a	10.1 ~ 9.8	2.4	24.1	100	7.5YR 7/4	
12		12	a	10 ~ 9.7	2.2	22.3	100	7.5YR 7/4	
13		13	a	9.9 ~ 9.6	2.1	21.5	100	7.5YR 8/4	
14		14	a	9.4 ~ 9.2	2.1	22.6	90	7.5YR 7/4	
15		15	a	10 ~ 9.6	2.1	21.4	100	7.5YR 7/4	
16		16	a	9.7 ~ 9.5	2	20.8	90	7.5YR 7/4	
17	図48-3	17	a	10 ~ 9.6	2.3	23.5	100	7.5YR 8/4	
18		18	a	9.9 ~ 9.6	2.1	21.5	100	7.5YR 7/6	
19		19	a	9.7 ~ 9.5	2.1	21.9	100	7.5YR 7/4	
20	図48-10	20	b	9.8 ~ 9.6	2.1	21.1	100	10YR 7/3	
21		21	a	10 ~ 9.8	2.4	24.2	100	7.5YR 8/6	
22		22	a	10 ~ 9.6	2.6	26.5	100	7.5YR 7/4	
23		23	a	10 ~ 9.8	2.1	21.2	100	7.5YR 7/4	
24		24	a	9.9 ~ 9.6	2	20.5	100	7.5YR 8/4	
25		25	a	9.8 ~ 9.7	2.2	22.6	100	7.5YR 8/4	
26		26	a	10.4 ~ 10.3	2.1	20.3	99	7.5YR 7/4	
27		27	a	9.9 ~ 9.7	2.1	21.4	80	7.5YR 7/4	
28	図48-4	28	a	9.9 ~ 9.8	2.2	22.3	100	7.5YR 7/4	
29		29	a	10.1 ~ 9.6	2.3	23.4	100	7.5YR 7/4	
30		30	a	9.7 ~ 9.5	2.1	21.9	100	7.5YR 7/3	
31	図48-14	31	c	9.7 ~ 9.4	1.6	16.8	70	7.5YR 7/3	
32	図48-11	32	b	9.3 ~ 8.8	2.1	23.2	100	10YR 7/3	
33		33	a	9.9 ~ 9.5	2.2	22.7	100	7.5YR 7/4	
34	図48-5	34	a	9.9 ~ 9.6	2.4	24.6	100	7.5YR 7/4	
35		35	c	9.8 ~ 9.2	2	21.1	80	7.5YR 7/4	
36	図48-6	36	a	10 ~ 9.8	2.2	22.2	100	7.5YR 7/4	
37	図48-12	37	b	9.4 復	8.8	1.9	20.9	60	7.5YR 7/3
38	図48-15	38	c	9.8 復	9.2	1.6	16.8	60	7.5YR 7/4
39	図48-7	39	a	9.6 復	8.6	2.2	24.2	80	7.5YR 8/4
40	図48-8	40	a	9.6 復	8.8	2.1	22.8	50	7.5YR 7/3
41	図48-9	41	a	10 復	10	2.1	21	80	7.5YR 7/4
42	図48-16	42	c	9.9 復	10	1.5	15	40	7.5YR 7/4

図40-8は完形で、口径9.2～9.4cm、器高1.0cm。胎土はbで砂粒なし。9も完形で口径も同じ。器高1.4cm。胎土はbで、1mm以下の赤色粒若干あり。10も完形で、口径8.9～9.3cm、器高1.0cm。胎土はbで0.5mm以下の赤色粒わずかにあり。

図40-11は黒色土器B類椀で、残存率20%である。復元径14.8cm。内外面やや磨滅し、高台剥離痕あり。見込み暗文はb2である。胎土に1mm弱の石英1粒のみあり。

図40-12は土師器環で、残存率75%である。口径16.6～16.8cm、器高3.6cm。胎土はcで砂粒なし。

図40-13は土師器裏で、残存率40%である。復元口径18.6cm。内面ヨコナデ、外面ユビオサエで粘土接合痕残る。胎土は10YR7/2にぶい黄橙色を呈し、2mm前後の石英・長石わずかにあり、1mm前後の黒雲母あり。0.5mm以下の角閃石わずかにあり。

753溝下層 (図42・43・図版20-8・40) 1トレンチで、土器群3検出をきっかけに上下層の掘り分けができたので、下層の出土状況を把握する事ができた。底部に付くものはなく、下層の中でも土の方にあるものが多い。出土遺物破片数は、土師器210片中、小皿68(「て」の字65、コースター形2)、環18、椀4、高環4、羽釜11、甕13、黒色土器A類椀1片、黒色土器B類椀64片、瓦器椀8片、須恵器24片中、甕16、環1、壺4、椀1、土師質平瓦1片、炭片3、焼土塊3である。

図43は1トレンチ部分の753溝下層出土遺物である。1～5は土師器「て」の字状口縁小皿である。

図43-1は土器1で完形である。口径9.4～9.7cm、器高1.85cm。胎土はcで3mmの石英1粒あり。2は土器2で残存率95%である。口径10.0～10.2cm、器高1.7cm。胎土はaで1mm弱の赤色粒わずかにあり。3は土器3でほぼ完形である。口径10.0～10.9cm、器高1.4cm。胎土はbで1mm弱の長

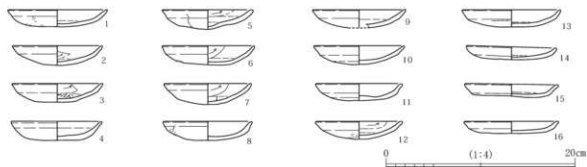


図 48 768 溝 土器群 1 出土遺物

石 2 粒のみあり。4 は土器 6 で残存率 70% である。口径 9.7 ~ 9.9 cm、器高 1.2 cm。胎土は c で 2 mm の石英 1 粒のみあり。5 は土器 7 で完形である。口径 9.8 ~ 10.2 cm、器高 1.6 cm。胎土は c で、1 mm 前後の石英あり、長石若干あり、チャートわずかにあり。

図 43 - 6 ~ 9 は土師器環である。

図 43 - 6 は土器 5 で完形である。口径 15.6 ~ 16.0 cm、器高 3.6 cm。外面のユビオサエは放射状。胎土は c で 3 ~ 1 mm の赤色粒多し、0.5 mm 以下の石英・長石若干あり。7 は土器 8 で残存率 90% である。口径 15.8 ~ 16.2 cm、器高 4.3 cm。胎土は c で 1 ~ 4 mm の赤色粒多し。8 は土器群 3 より北東側の下層出土で残存率 40% である。復元径 15.8 cm、器高 3.0 cm。内面は磨滅する。外面のユビオサエは放射状。胎土は c で 1 mm 前後の赤色粒あり。9 は土器群 3 の下の下層出土で残存率 35% である。復元径 16.0 cm、器高 3.6 cm。外面下半に横位の粘土接合痕あり。胎土は c で 0.5 mm ほどの石英わずかにあり。

図 43 - 10 は土器 4、土師器裏で残存率 25% である。復元径 30.4 cm。口縁端面には辻線あり、外面はユビオサエ後ナデで煤付着する。内面は下部の磨滅激しく、一部に炭化物付着。胎土は 10YR4/3 に近い黄褐色で 9 ~ 1 mm の花崗岩（石英 + 長石）と 1 mm 弱の石英・長石多し、1 mm 前後のチャート若干あり、0.5 mm 以下の黒雲母わずかにあり。

図 43 - 11 は須恵小壺片で残存率 30% である。底部径 4.8 cm。底部に静止糸切り痕残る。胎土は N5/0 灰色で 0.5 mm 以下の長石わずかにあり。12 は須恵環片で残存率 10% である。復元径 17.1 cm、器高 4.0 cm。胎土は 2.5GY6/1 オリーブ灰色で 0.5 mm 以下の長石わずかにあり。

図 43 - 13 は黒色土器 B 類碗で残存率 80% である。口径 15.9 ~ 16.2 cm。胎土に 1 mm 弱の石英わずかにあり。14 も黒色土器 B 類碗で残存率 40% である。復元径 16.0 cm。見込み暗文は a 2。胎土に 1 ~ 2 mm の石英若干、1 mm 弱の長石わずかにあり。

図 43 - 15 は瓦器碗で残存率 30% である。復元径 16.6 cm、器高 5.6 cm。見込み暗文は a 3。外面磨滅するがミガキは I a である。胎土に 1 mm 弱の黒色粒あり。

土器 10 は須恵壺片、土器 11 は須恵裏片、土器 12 は土師器羽釜片だが、実測できなかった。

下層出土遺物は、量も多くなく、投棄のような集中も見られない。完形品が数個まとまるような状況は、祭祀的な行為であろうか。溝が、存続期間中にはゴミ捨て場にはならなかったと言える。

出土遺物全体で見ると、古い須恵器も破片で混じるが、上層土器群 3 と時期差は見られない。少ないが瓦器碗も既に見られ、溝の存続期間はひとつの様式段階の中に納まるものと考えられる。

283 溝 (図 44・45・図版 21 - 3 ~ 5・40・41) 753 溝に直角に取りつき、方形区画溝の一部を成すと思われる溝である。そのまままっすぐ北西に伸び、289 落込みにつながるが、南西肩部は 3 トレンチ北西壁まで直線的に続き、むしろ 289 落込みがこの溝の北東側に付随するとも言える。幅 0.9m、

深さ 0.4m ほどで、底部は T.P. + 5.65m ほどで平坦である。埋土は、流入土（断面図の④）以外はブロック土で、下半は滞水状態でブロック土が入り輪郭がぼやけたような層である（③）。出土遺物は多いが散在し、大部分が溝内上半に位置している。その中でも特殊なものは土器 4・5 で、埋土に 396 ピットを掘削し、その中に平瓦片の土器 5 を敷き、そこに完形の羽釜土器 4 を倒置で被せた形である。ピットの傍らには土器 13 が置かれ、土器 4 内からは幾つかの土器（図 45-18~22）が出土した。ピットを埋めた後に、薄く土を敷いていたので、上面ではピットの輪郭が見えず、ピットと土器 4・5 が偶然断面観察用のアゼの位置に重なっていたので判明した。

出土遺物を破片数で見ると（表 13）、椀環類と小皿の比率は 2 : 1 に近い。黒色土器と瓦器の比率では 753 溝土器群 3 より瓦器の比率がかなり低く、753 溝下層よりも低い。

図 45 が 283 溝出土遺物で、1~5 は土師器「て」の字状口縁小皿である。

図 45-1 は土器 10 で残存率 75%。口径 8.9~9.2 cm、器高 1.3 cm。胎土は c で砂粒なし。2 は土器 12 で残存率 60%。口径 9.8~10.0 cm、器高 1.1 cm。胎土は c で 0.5 mm 以下の石英・長石若干あり。3 は土器 13 で完形。口径 9.8~10.0 cm、器高 1.4 cm。内面見込みにハケ残る。胎土は c で 1 mm 前後の石英・長石わずかにあり。4 は試掘 11 トレンチで 111 溝とした 283 溝部分出土のもので完形。口径 9.7~10.1 cm、器高 1.5 cm。胎土は c で砂粒なし。5 も試掘 11 トレンチ部分出土で残存率 90%。口径 8.6~10.1 cm、器高 1.5 cm。胎土は c で 1 mm 前後の石英わずかにあり。

図 45-6 は土師器環で残存率 80%。口径 14.3~14.6 cm、器高 3.0 cm。外面のユビオサエは放射状。胎土は c で 0.5 mm 以下の長石わずかにあり。7 は土器 2 で、環より皿とすべきか。残存率 20%。「て」の字状口縁である。胎土は c で砂粒なし。8 は試掘 11 トレンチ部分出土で残存率 80%。口径 17.1~17.4 cm、器高 3.8 cm。胎土は c で 1 mm 前後の赤色粒若干あり。9 も試掘 11 トレンチ部分出土。土師器椀か鉢か。残

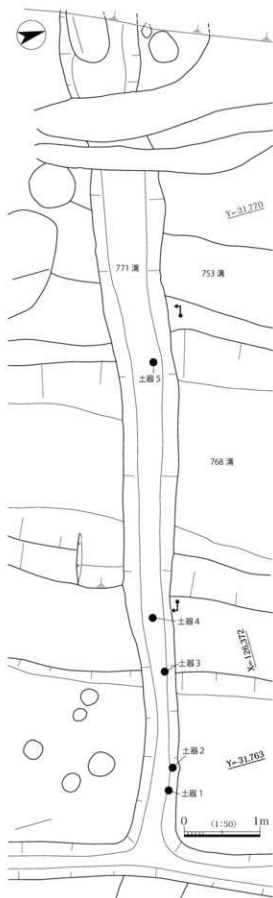


図 49 771 溝

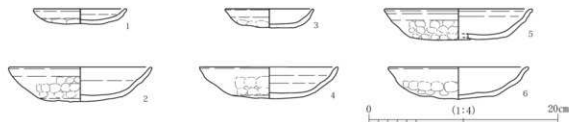


図50 771溝 出土遺物

存率40%。内外面ともナデで、底部外面一部に煤附着。胎土はbで1mm前後の石英わずかにあり。10も試掘11トレンチ部分出土。土師器碗片で残存率10%。内面ハケ後ミガキ散在、煤附着。胎土はcで1mm強の石英わずかにあり。

図45-11は試掘11トレンチ部分出土の黒色土器A類碗片で、残存率10%以下。胎土はcで1mm弱の石英・長石若干あり。12は土器11の黒色土器B類碗で、残存率85%。口径15.1～15.4cm、器高6.1cm。見込みの暗文はdで高台はc1。胎土に砂粒なし。

図45-13は土器8の土師器裏、残存率20%。復元口径14.5cm、内面はケズリ後ナデ、外面は器表剥離するがユビオサエ後ナデか。胎土は7.5YR7/6 橙色で3～1mmの石英多し、1mm前後の長石あり、3～1mmのチャートわずかにあり。14は土器9の土師器裏で残存率20%。復元径18.0cm。肩部は内外面ユビナデ。外面煤附着。胎土は7.5YR7/4にぶい橙色で砂粒は13と同じ。

図45-15は土器4の土師器釜で残存率90%。内面ナデで、粘土接合痕があり、下半部炭化物附着。外面鈹部以下煤附着。胎土は10YR6/4にぶい黄橙色で3～1mmの石英多し、1mm前後の長石・チャートあり。16は土器6・7が接合したもので土師器釜である。残存率40%。体部外面煤附着。胎土は10YR7/4で1mm前後のチャート・長石・石英あり。

図45-17は土器5とした須恵質平瓦である。残存率60%ほどか。上下面ともナメハケ後タテナデ、端面は糸切り後ナデか。胎土はN6/0 灰色で2～1mmの長石・石英・チャートあり。

図45-18～22は土器4内出土である。

図45-18は土師器器蓋片で残存率10%以下である。外面鈹部以下煤附着。胎土は10YR7/3にぶい黄橙色で1mm前後のチャート・石英多し、長石あり。19は土師器「て」の字状口縁小皿で完形。口径9.6～9.8cm、器高1.5cm。胎土はcで0.5mm以下の石英若干あり。20は黒色土器A類碗片で、残存率25%。復元径17.6cm、器高5.3cm。見込みは磨滅するが暗文a1。胎土は5YR7/3にぶい黄橙色で1mm弱の長石・石英・チャートわずかにあり。21は土師器坏底部を打ち欠き、円盤状にしたものである。内面に擦痕あり、強めの磨滅。胎土はcで1mm弱の長石・石英・チャートわずかにあり。22は須恵器裏片で、図の下・右辺は割れ口を磨いて滑らかにしている。内面は摩擦で非常に滑らか。碗に転用か。胎土は10BG5/1 青灰色で、3～1mmの長石あり、1mm前後の石英わずかにあり、灰白色粘土の粒・縞状模様あり。

土器3は土師器裏胴部5片だが接合せず、実測できず。土器6・7と同一個体の可能性が高い。

土師器器の形態は10世紀後葉から11世紀代、黒色土器A類碗が、外面を密に磨く新A類で、11世紀前葉から中葉のものであろう。高台が高い土師器碗など、他のものも矛盾はない。瓦器の出現があくまでも11世紀後半を遡らないならば、この溝が埋められた時期は11世紀中葉と後半が重複する期間に限定できる。それが753溝土器群3の投棄時期も示す事になる。また、土器4・5とその内部出土の遺物は、特異なものとして注目できるが、土器片を転用したものなどが何を意味するのか評価は難しい。

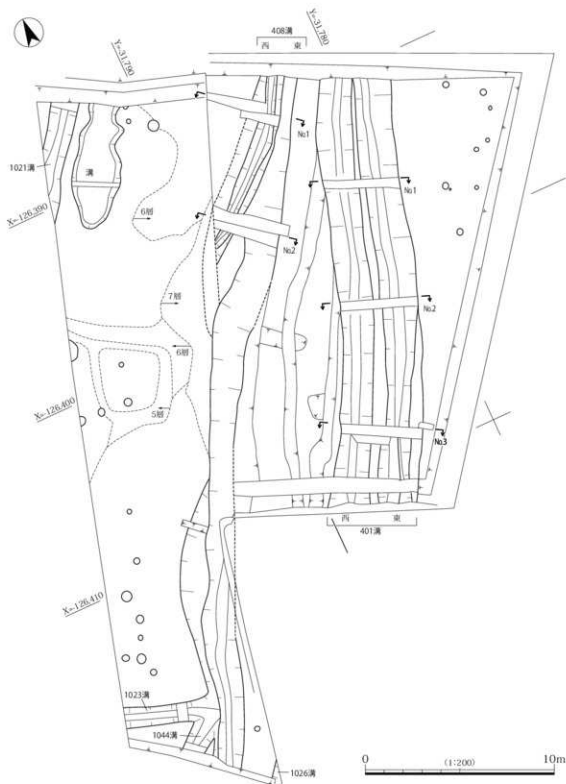


図 51 401・408 溝

768 溝 (図 46～48・表 14・図版 41・42) 1～3 トレンチのほぼ中央を蛇行しながら北東から南西に走る溝である。肩部が不明確で、広く取れば北西側高所と 1172 道跡の間となり、多くのピット・土坑が肩部に切られている事になる。第 4-1 面 771 溝が上を横切り、それまでには埋没していた。流水堆積の下層は薄く残り、その中に後述の土器群 1 もあった。人為的埋土は厚く、中層・上層に分かれるが、2 トレンチ北東壁断面では、第 3-2 層らしき層が上層となり、この溝の上が一つの耕地区画に

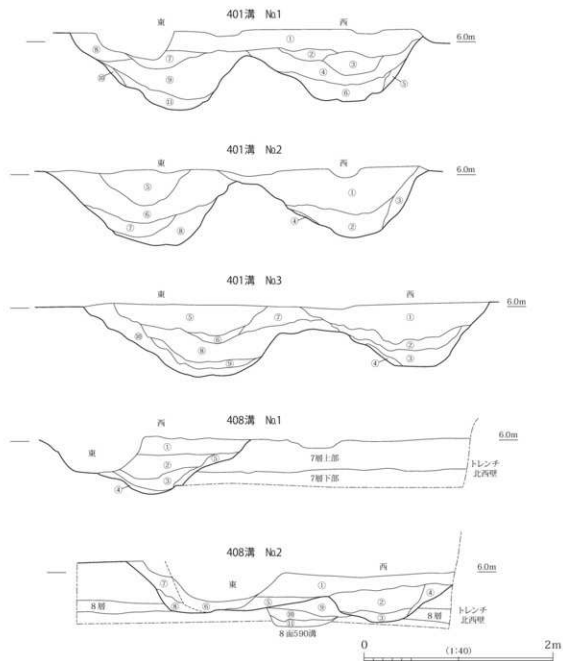


図52 401・408溝 断面

なっていた可能性もある。当初は用水路で、侵食が進み、代わりに753溝が掘られたものと考えられる。

出土遺物は、土器群1以外も土器群1周辺に限られ、少ない。土師器29片中、竈1、高坏11、小皿17、瓦器小片2片、須恵器甕1片である。竈1片は約6m北東側の溝肩部の1178土器1と接合した。

土器群1(図47)は1トレンチ南西側で溝底部に付き、密集した土師器小皿群である。50%以上残存したものを数えても42個体ある。形態・法量・胎土もほとんど同じような小皿である。しかし、少数、若干違うタイプのもも見られたので、この土器群内で以下の3タイプに分け、表14にまとめた。

- a: 7.5YR7/4 にふい橙色 (b) で赤色粒含む。丸底で、内面は中心までヨコナデ。
- b: 10YR7/3 にふい黄橙色 (c) で赤色粒含む。小さく平底作り、内面はその部分やや凸で、直線ナデ。
- c: a と胎土同じ、広く安定した平底で、器高は低め。

a が図48の1～9で34個体、b が10～12の3個体、c が13～16で5個体であった。溝を埋め

表 15 図 52 401・408 溝 土色・土質

401 溝断面 No.1

①10YR5/2～5YR4/4 灰黄褐色にぶい赤褐色 粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗り、4～2層の再堆積か

②Fe・Mn あり、4～2層の再堆積か

③7.5YR5/2 灰褐色 中砂～粗砂

④N4/0 灰 中砂～シルト、Fe 若干あり

⑤N5/0 灰 (Fe ある部分は7.5YR8/3 浅黄褐色) 中砂～シルト、ラミナ・部分的に Fe

あり

⑥N5/0 灰 粘質土、細砂～シルト主体、粗砂～中砂あり、Fe 若干あり、崩落土か

⑦N4/0 灰 シルト～細砂

⑧10YR7/6～10YR6/1 明黄褐色～灰褐色 細砂～中砂、ラミナあり

⑨10YR7/1 灰白 シルト～細砂、管状 Fe あり

⑩N4/0～5/0 灰 シルト～細砂、上部に Fe あり

⑪③に似る、ややシルト多し

⑫⑧に似る、ラミナ若干あり

401 溝断面 No.2

①上部 10YR5/3 にぶい黄褐色、下部 10YR8/2 灰白、シルト～細砂、下部に中砂～粗砂のラミナ、断面 No.1 の③～⑤に対応か、上部は4～2層の再堆積か

②N4/0～10YR8/1 灰～灰白 シルト～中砂、細砂～中砂のラミナわずかにあり、断面 No.1 の⑥に対応か

③N4/0 灰 粘質土、中砂～細砂主体、シルトあり、Fe 若干あり、崩落土か

④10YR5/4～N4/0 にぶい黄褐色～灰 粘質土、中砂～粗砂主体、細砂～シルトあり、①10YR6/4 にぶい黄褐色 シルト～細砂、Mn 緑・管状 Fe あり、4～2層の再堆積か

⑤10YR5/0～N6/0 にぶい黄褐色～灰 粘質土、細砂主体、粗砂～中砂～シルトあり、②N5/0～5Y5/4 灰～オレンジ シルト

断面 No.1 の⑦に対応か

⑥N4/0～5/0 灰 シルト～細砂、炭化物上層にラミナ状にあり、左右上部に Fe あり、③N5/0～5Y5/4 灰～オレンジ 粘質土、シルト主体、中砂～細砂あり、崩落土

断面 No.1 の⑧に対応か

⑦10YR7/1～N5/0 灰白～灰 シルト～細砂、ラミナ・部分的に Fe あり、断面 No.1 の⑨に対応か

⑧N5/0 灰 シルト～細砂、部分的に Fe あり、断面 No.1 の⑩に対応か

401 溝断面 No.3

①10YR5/3 にぶい黄褐色 粘質土、中砂～細砂主体、シルトあり、4～2層の再堆積か、断面 No.1 の①に対応か

②10YR8/2 灰白 中砂～細砂、ラミナあり

③N4/0～10YR8/1 灰～灰白 シルト～中砂、細砂～中砂のラミナわずかにあり、断面 No.2 の②に対応か

④10YR5/4～N4/0 にぶい黄褐色～灰 粘質土、細砂～シルト主体、粗砂～中砂あり

⑤7.5YR6/1 灰褐色 粘質土、細砂～シルト主体、中砂あり、4～2層の再堆積か、断面 No.2 の③に対応か

⑥③に「7.5YR4/2 灰褐色 シルト(4～1層系?)」のブロックあり

⑦10YR6/1～7/6 黄褐色～明黄褐色 シルト～細砂、7層の再堆積か

⑧N4/0～7/0 灰 シルト～細砂、断面 No.2 の④に対応か

⑨10YR7/1～N5/0 灰白～灰 シルト～細砂、ラミナあり、断面 No.2 の⑦と対応か

⑩N5/0 灰 シルト～細砂、断面 No.2 の⑧と対応か

408 溝断面 No.1

①10YR7/3 にぶい黄褐色 シルト～細砂、管状 Fe あり

②①に「N6/0 灰 シルト」のブロックあり

③N5/0 灰 シルト・2.5GYR/1 灰白 細砂の互層状ラミナ、炭化物わずかにあり

④N5/0 灰 シルト・2.5GYR/1 灰白 細砂の互層状ラミナ、Fe あり

⑤2.5Y6/4 にぶい黄 シルト

上記全て、408 溝西側に向く。408 溝東側が切れる。

408 溝断面 No.2

①10YR6/4 にぶい黄褐色 シルト～細砂、Mn 緑・管状 Fe あり、4～2層の再堆積か

②N5/0～5Y5/4 灰～オレンジ シルト

③N5/0 灰 シルト・2.5YR/1 灰褐色 細砂の互層状ラミナ

④②～④は 408 溝西側土

⑤④に似る、やや粘性高い

⑥N5/0～5Y4/4 灰～暗オレンジ 粘質土、シルト主体、中砂あり

⑦10YR7/6 明黄褐色 粘質土、シルト主体、中砂あり、色以外は⑥に似る

⑧N6/0 灰 粘質土、シルト主体、中砂あり、色以外は⑥に似る

⑨N5/0 灰 粘質土、シルト主体、中砂あり、粗砂～小礫若干あり

⑩10YR4/4～6/1 黄～灰褐色 シルト～細砂

⑪10YR4/3～6/1 にぶい黄褐色～灰褐色 シルト～細砂

⑫⑩は 8 面 500 溝埋土

る前の祭祀的行為の跡と思われる、このために一括して入手されたものであろう。

771 溝 (図 49・50) 2 トレンチ南西側の第 4-1 面で検出された溝である。1～3 トレンチ部分で、753・768 溝の水路体系が廃絶した後、第 3-4 層堆積までに部分的な耕地化がなされた事を明確に示す遺構と言え、その時点で 43 侵食痕は存続していた事も示す。南東側の溝とつながり、耕作地から 43 侵食痕への排水路として機能していたのであろう。幅 0.4～1.0m、深さ 0.3m ほどの溝である。

ほぼ完形の土器がいくつか出土したが、それ以外の遺物は少ない。土師器で甕 6 片、高環 2 片、黒色土器 B 類椀と瓦器椀の小片が各 1 片、須恵甕 1 片ほどである。

図 50-1 は土器 1 の土師器小皿で残存率 90%。口径 9.6～9.8 cm、器高 1.6 cm。胎土は b で 2～1 mm の赤色粒あり。2 は土器 2 の土師器環で完形。口径 14.9～15.3 cm、器高 3.7 cm。底部に薬の圧痕数条あり。胎土は b で、2～1 mm の赤色粒あり。3 は土器 3 の土師器小皿で残存率 70%。欠失は上層の削平による。口径 9.2～9.4 cm、器高 2.0 cm。胎土は b で 2～1 mm の赤色粒あり。4 は土器 4 が、破片が散乱した状態で、土師器環 2 個体あった内の一つである。土器 4-1 とした。残存率 90%。底部は未調整で薬の圧痕あり。胎土は b で 1 mm 前後の赤色粒あり。5 は土器 4-2 の土師器環で残存率 40%。復元径 15.4 cm、器高 3.3 cm。胎土は b で 2～1 mm の赤色粒あり。6 は土器 5 の土師器環でほぼ完形。口径 14.5～14.9 cm、器高 3.4 cm。底部未調整で薬の圧痕あり。胎土は b で 1 mm 前後の赤色粒あり。

胎土がほぼ共通し、環は底部の薬圧痕も共通する。753 溝の土師器環より径高指数が高いが、その中の新色の要素にまともまっているという状態であらう。11 世紀後半のものである。

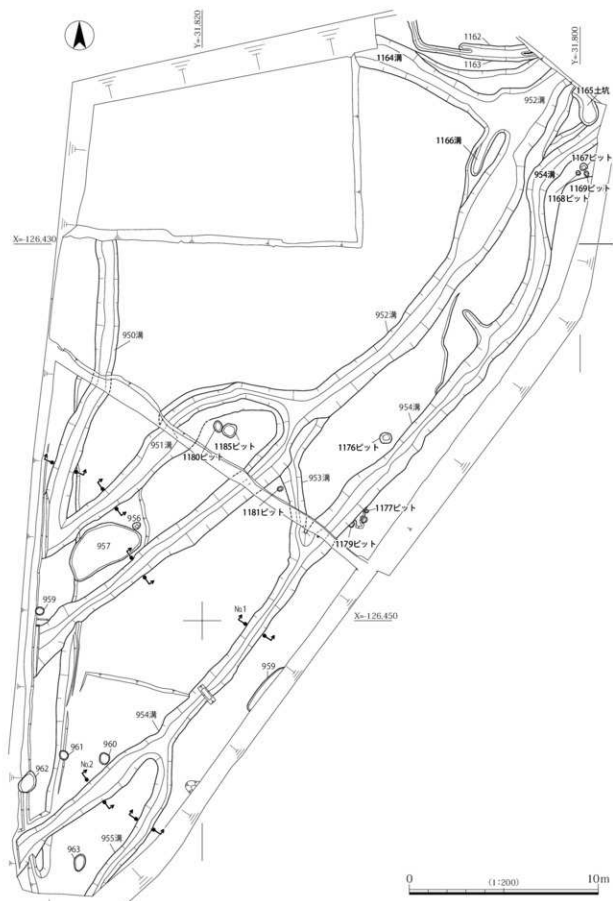


図 53 950～955 溝

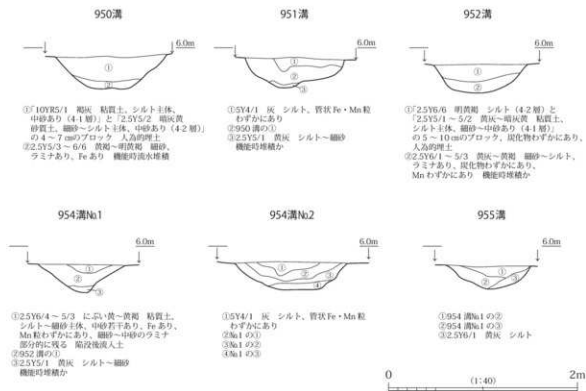


図54 950～955溝 断面

401 東西溝 (図51・52・図版21-6～8) 4トレンチ中央を北東から南西へ縦断する。検出時点では幅5.5mほどの溝に見えたが、最上層を掘削すると、中央に基盤層が露出し、幅2mほどの溝が2本並んでいると分かった。そのため、同一遺構番号で東溝と西溝に分けた。

どちらも逆台形の断面形で深さ0.7～0.8mほど。底部レベルは東溝がT.P.+5.3m、西溝がT.P.+5.4mほどで傾斜はない。断面No.1・2で西溝が東溝埋土を切るが、東溝が掘りなおされた、断面No.1の⑦、No.2の⑤、No.3の⑤・⑥は、西溝と併存していた可能性を残す。

出土物には弥生土器29片が含まれ、土師器203片もほとんどが古墳時代のものだが、西溝から瓦器破片が1片出土している。いずれも大きな破片はなく接合もしない。

11世紀代の溝と考えられ、調査区内では6トレンチの954溝とつながる可能性があるが、こちらが幹線で、954溝は分水路であろう。

408 東西溝 (図51・52・図版22-1) 402東西溝の北西側を走り、5トレンチ南東側から6トレンチ952溝につながる。4トレンチでは東西の溝が並ぶが、5トレンチ南西部では重なる。切り合の上東溝が西溝を切り、併存はない。5トレンチでトレンチ壁面が崩壊し、西溝の一部が図化できなかった。東西溝共、幅1m、深さ0.6mほどの溝であったようだ。底部レベルは4トレンチ部分で西溝がT.P.+5.4mほど、東溝がT.P.+5.5mほど、5トレンチ部分では第3-4面45溝の掘削のため不明。

遺物は東溝から土師器二重口縁壺が9片出土した他、土師器16片、弥生土器5片で、調査時は古墳時代の溝とも考えたが、952溝につながる事からも11世紀から13世紀のものと考えられる。

950～955溝 (図53～55・図版22-2・3) 6・7トレンチの溝群である。形が崩れた部分もあるが、平均してどれも幅1m前後、深さ0.3m前後である。先行調査した7トレンチでは第6面の検出の際、各溝の肩部がさらに広がるような形が検出され、第4-2面で土壌化のため見落とした古い肩部かと考えたが、6トレンチ調査の際、第6面の溝群から、一部形を変えて、他はほぼ踏襲した溝群が第

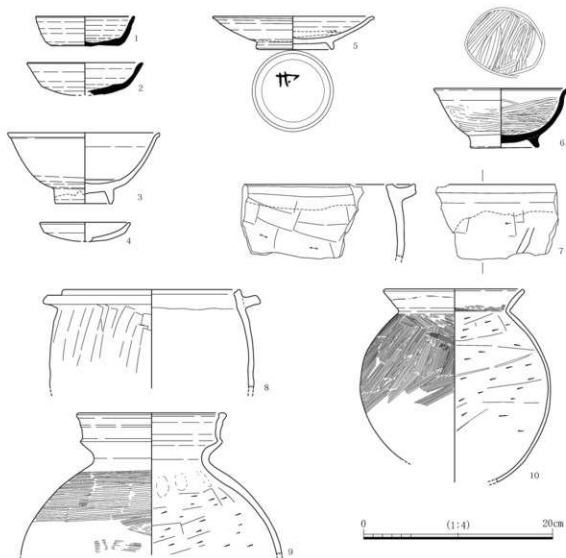


図55 第4-2面見落とし遺構(1・2)・541ピット(3・4)・709ピット(5)・1373土坑(6
 ~8)・952溝(9)・954溝(10) 出土遺物

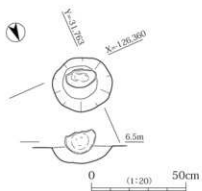


図56 709ピット

遺構からの混入の可能性は低い。

図55-9は952溝出土で残存率30%、口縁周は50%残存。胴部内面肩部~頸部はタテユビナデ。胎土は10YR8/2灰白色で1mm前後の石英・長石・チャートあり。布留式期前期頃のものか。10は954溝出土で完形率70%。外面胴部下半は剝離激しく煤付着。胎土は5YR7/6橙色で3~1mmの石英

4-2面で掘りなおされている事が判明した。埋土に切り合いなく、全て併存していると思われるが、951・953溝が各溝をつなぐ形態の機能が理解しにくい。また、950~954溝がいずれも西側高所を突っ切っていく形態を示し、6・7トレンチ中央の低所から南東方面へ給水する遺構はない。

遺物は950溝で土師器直口壺20片、951溝でTK208の須恵甕1片、952溝で土師器二重口縁壺、954溝で庄内式甕、と古墳時代のものが多いが、952溝で瓦器椀6片、954溝で瓦器椀1片も出土している。第4-1面の遺構密度からも、見落とし

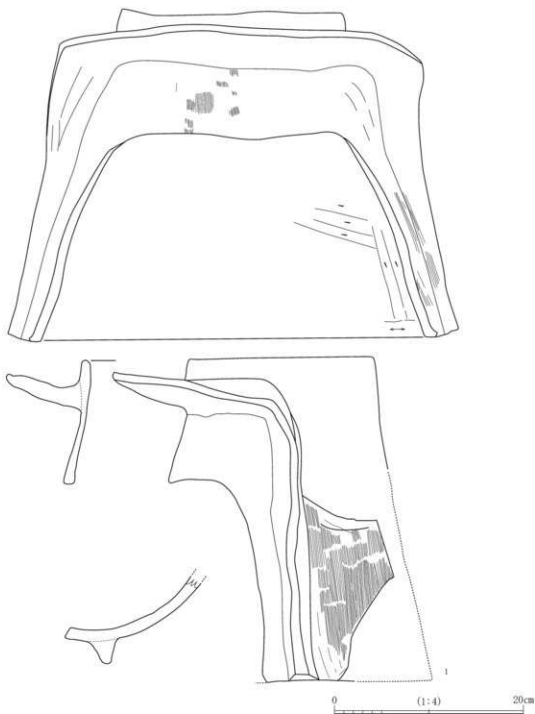


図57 1178土器1

多し、2～1mmの長石・チャートあり、1mm弱の黒雲母わずかにあり。布留式期平行の庄内式甕か。

残存率の高い古墳時代遺物が入った理由が不明だが、調査区全面耕作地化以前、この部分の北・東・西の段差が整形される前の水路体系である。

1178土器1 (図32・57・図版22-5) 1トレンチ北東側の268溝北西肩部付近で、面に貼り付く形で出土した土師器移動式甕片である。1片が南西へ約6m離れた768溝土器群1付近から出土し、接合した。14片のみだが、掛け口から下端部まであり、焚口と底部は復元可能であった。図57が復元図である。外面タテハケで、庇はナデ。内面ヨコケズリで、焚口付近はタテケズリ。下端部内面と掛け口内外面はヨコナデ。内面上半に煤付着。胎土は5YR6/6 橙色で1mm弱の石英・長石若干あり。768

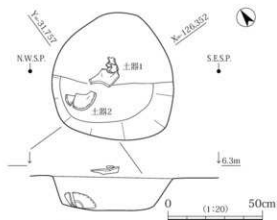


図 58 1373 土坑

溝と同時期だと 11 世紀代だが、その時期の、層位的に確実な移動式竈の類例はほとんどない。付け底で、タガなどがないのは奈良時代のもとの共通するが、内面ケズリは特異である。

709 ビット (図 55・56・図版 22-4・42)

2 トレンチ北東側で 768 溝の南東肩部付近にあったビットである。灰軸陶器皿が出土した。出土位置の上部を欠くが、第 3-2 層から 1 片接合し、耕作による破損と思われる。図 55-5 がその灰軸陶器皿である。残存率 95%。調整は高台

内が回転ヘラ切りの他は回転ナデ。内面は軸ハケメリの塗り残し部分が丸く巡り、重ね焼き高台の溶着がわずかに残る。外面の軸は高台直上まで、高台内に「寺」を略したとも思われる墨書が薄く残る。9 世紀後半のもので、第 4-1・2 面遺構の最古の時期を示すものである。

1373 土坑 (図 55・58・図版 22-7) 1 トレンチ中央付近で、この面では見落とし、第 6 面で検出した遺構である。1313 溝に切られる。底部から黒色土器 A 類碗 1 個体、上部から土師器羽釜片が出土した。図 55-6 が土器 2、黒色土器 A 類碗である。破片は散乱していたが、ほぼ完形に復元。口径 14.0~14.3 cm、器高 7.0 cm。外面は 10YR6/3 に近い黄橙色を呈し、2~1 mm の長石あり。11 世紀のものか。7 は土器 1・2 以外の土師器羽釜片。鈎部に煤付着、外面に 2 条の焼成前線刻あり。胎土は 10YR6/2 灰黄褐色で、2~1 mm の石英多し、1 mm 前後の長石・チャート若干あり。8 は土器 1 で残存率 10% ほどか。外面はタテケズリ後ナデで煤付着。胎土は 7.5YR8/3 浅黄褐色で、0.5 mm 以下の石英・長石・チャート・黒雲母あり。今回の調査では、完形の黒色土器 A 類碗の見られる唯一の遺構である。

541 ビット 3 トレンチの径 0.2m ほどのビットだが、華南沿岸窯系白磁碗が出土した。図 55-3 (図版 42) である。残存率 60%。破断面が埋土上面に露出し、上層耕作により欠失か。軸はやや灰色で、高台外面まで垂れる。内面に段あり。逆台形の輪高台で、玉縁は小さいが境は明瞭であり、11 世紀後半から 12 世紀前葉のものと思われる。4 は同ビット出土の土師器小皿、残存率 30%、胎土は b で、1 mm 前後の赤色粒あり。

小結 第 4-1・2 面の始まりは 9 世紀頃と思われる。だが、しばらくは遺構形成の散漫な時期があり、爆発的に遺構が増加するのが 11 世紀後半の早い時期と言える。しかし、283・753 溝と 1227・1313 溝などの屋敷地の成立時期がどこまで遡るかはやや不明確な点があるし、それらと 4~7 トレンチの水路体系の成立時期が同時かという事も確定はできない。ただ、画期と考えれば、屋敷地の成立と広域の水路体系の成立が同時の可能性が高い。それも 11 世紀後半の内に廃絶するので、おそらく I 世代に満たない期間であろう。その後、調査区の一部が耕地化するが、すぐに第 3-4 層を堆積させる洪水がある。しかし、第 3-4 面では 930 溝に見るように屋敷地が再び現れる。11 世紀後半にこの微高地を居住域とした集団は、1 世代単位で微高地上を移動しながら、開発を継続したのだろうか。その中核には輸入陶磁器を入手できる富裕層が存在し、交易にも関与していた可能性があると考えられる。

もう一つの問題点は 753 溝土器群 3 に見られる、黒色土器 B 類碗と瓦器碗の共存である。今までの編年観では、瓦器出現直前と思われる黒色土器 B 類碗の形式的様相と瓦器の出現期の様相が、一つの土器群に併存していると言える。遡る溝下層でも、遺構面まで異なる 930 溝でも両者の共存が継続し

ている事から、複数の形式段階をまたいだ遺物の集積とも考えにくい。また、この地域特有の現象とすべきか、黒色土器から瓦器へ移行していく過程で、ある程度普遍性を持ったものなのかを検討を要する。

第6項 第5・6面(図59・66・図版23～25)

第5層は第6層上に形成された自然土壌である。残存が少ないので、記述は第6面として進めるが、遺構は本来第5面切込みである。なお1トレンチでは、遺構全掘後、再精査すると、新たな遺構が検出されたので、それを「第6面古」(図64)として報告する。

第6面の概況 1～3トレンチ部分では、1トレンチ東隅付近が最も高くT.P.+6.4mほど、南西へは2トレンチ南西端がT.P.+5.9mほどまで下がる。3トレンチでは南西端がT.P.+6.1mほど、中央部がT.P.+6.0mほどだが、北東はT.P.+5.8mと低い。1トレンチでは1339・1399・1440・1441溝や段差・落込みの存在から、緩傾斜面に小区画水田の存在が復元できる。3トレンチ中央付近は土坑・ピットの集中域で、耕地区画の痕跡はない。2トレンチは東隅に第7面が露出し、その面の遺構である1071土坑が検出された。その南西には、第6層との間に、土器片混じりの間層が薄くはさまる。

4トレンチは、上面からの攪乱で残る面積が少ない。高さは2トレンチ南西端と同じ。5トレンチは、T.P.+5.8m前後で平坦。中央で第5層による畦畔が検出され、小区画水田の存在が確認できた。この部分は、やや低いため、第5層が遺存したようである。6・7トレンチの大部分はT.P.+5.7m前後だが、東壁付近の一部と西壁沿いは、どちらもT.P.+5.9mほどである。6・7トレンチ部分の第6面には古墳時代の遺構はなく、第4～2面相当の遺構しかない。第4～2層の堆積が遅いだけでなく、古墳時代頃には、遺構が形成される状況ではなかったのかもしれない。以下主要な遺構のみ述べる。

1105土坑(図60・61・図版26-1・44) 2トレンチ西側で1081溝を切る。長軸3.94m、短軸1.86mの土坑で、深さは0.42mほどである。埋土は上下2層に分かれ、遺物はほとんど下層内にある。

図61が出土遺物である。土器9は須恵器甕胴部2片、土器10も須恵器甕胴部1片、土器11は土師器甕か1片、土器12は土師器甕胴部4片で、いずれも他とは別個体で図化できなかった。

図61-1は土器1、須恵器壺で頸部以上を欠く。胴部の波状文の上下は各2条の沈線。胎土はN5/0灰色で、1mm弱の長石若干、1～2mmの石英・1mm弱の黒色粒わずかにあり。2は土器3、須恵器杯蓋片で残存率30%。胎土はN6/0灰色で、1mm弱の石英・長石若干あり。3は土器6、土師器高杯で残存率45%。外面ヨコナデ。胎土は5YR7/6橙色で、1～2mmの長石・石英あり。4は土器番号なしで、土師器杯底部か。磨滅で調整不明。胎土は5YR6/6灰色で、1mm前後の石英・長石多し、0.5mm以下のチャートわずかにあり。5は土器5、土師器甕で残存率20%。胎土は10YR7/4にぶい黄橙色で1～4mmの石英あり、1mm前後のチャートわずかにあり。6は土器番号なしで、土師器直口壺、残存率30%。外面煤付着。胎土は2.5YR7/6橙色で1mm前後の赤色粒多し、1～2mmの長石若干あり。7は土器2で、土師器甕、残存率40%。胎土は5YR7/8橙色で3～1mmの石英・長石あり。8は土器13で土師器甕、残存率60%。胎土は10YR8/2灰白色で1mm前後の石英・長石あり。9は土器4で土師器甕、残存率60%。底部にもハケメがあるが径7cmほどの平底である。胎土は7.5YR7/4橙色で1～3mmの石英若干あり、1～2mmのチャート・長石わずかにあり。10は土器7で土師器甕、残存率30%。胎土は2.5Y7/2灰黄色で3～1mmの石英多し、1mm前後の長石・チャートわずかにあり。11は土器8で土師器甕、残存率90%。外面のハケはナデで半消し。胎土は5YR8/4淡橙色で1mm前後の石英・長石・赤色粒あり。長胴化した布留式甕である。

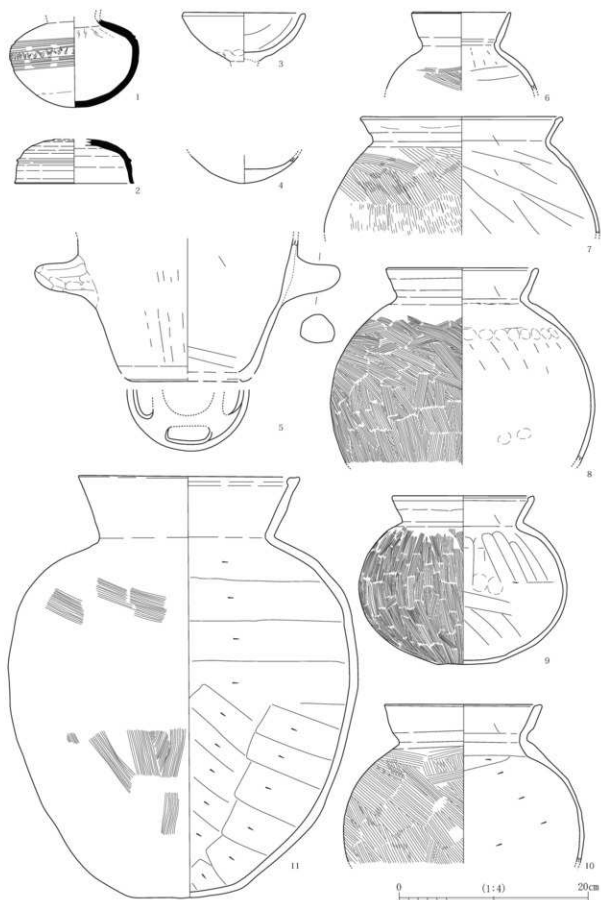


图61 1105土坑 出土遗物

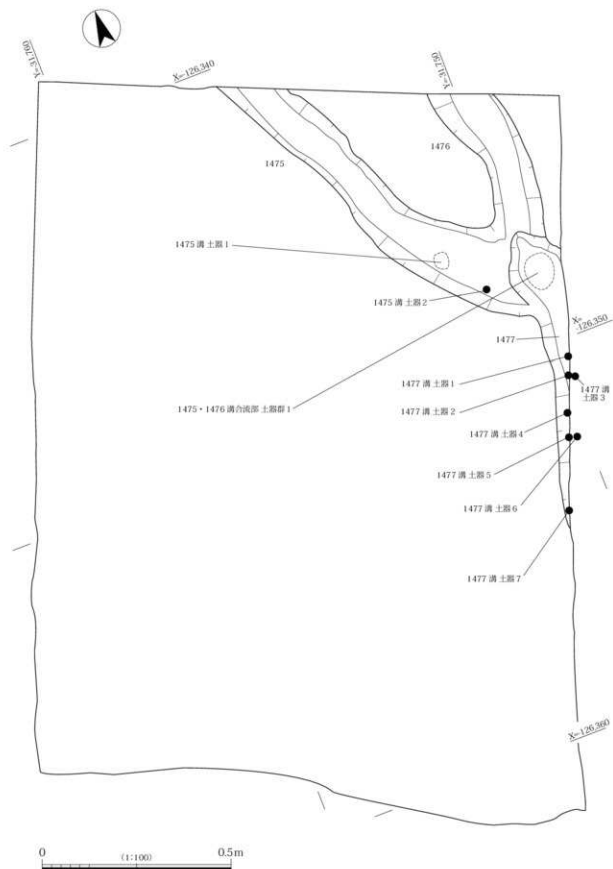


図 62 第 6 面古 1 トレンチ全体図



図63 1475・1476溝合流部

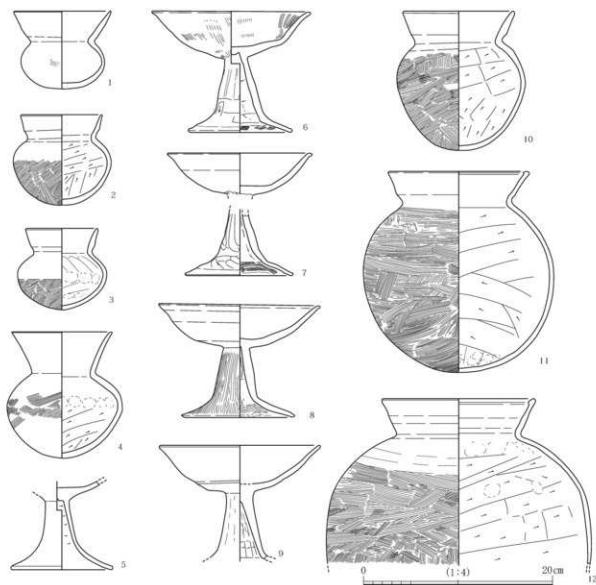


図64 1475・1476溝合流部 出土遺物

須恵器が裏片も含めTK208段階に限定でき、土師器も甔があり、甔が布留式からの過渡的状況で、時期的に一致する。5世紀中葉のもので、この面では最新の遺物群である。

6・7トレンチ1335・1336溝・1344～1367ピット列 (図59・図版24-2・25-2) 1335・1336溝は第4-2面の952・954溝の前身となるが、北東端の形が異なる。954溝は1335溝の北東端から曲げて1336溝につなげている。952溝は新たに成立した408溝を1335溝につなげた形である。1340溝は951溝に引き継がれ、950・955溝はほとんど形を変えない。遺物は土師器の破片少量だが、状況的に11世紀頃の溝と考えられ、この部分ではそれまで第4-2層の堆積がなかったようである。

それらの溝に切れ、馬蹄形に近い形に並ぶ1344～1367ピット列がある。どれも径、深さとも0.2m前後のピットで、幾つかは径7cmほどの柱痕が確認された。東側の形状が不明だが、長軸約15m、短軸約10mの範囲を囲む柵列か。遺物はないが、1～5トレンチ部分の第4-2面の古い時期、9～10世紀頃のものかと推測される。耕地化が進む以前、牧関連の施設の可能性もあるかもしれない。

第6面占1475～1477溝 (図62～65・図版26-7・8・45～48) 1トレンチで第6面を再精査すると東側で3本の溝が検出された。1475・1476溝はともに幅1.2～1.4m、深さ0.2mほどで、

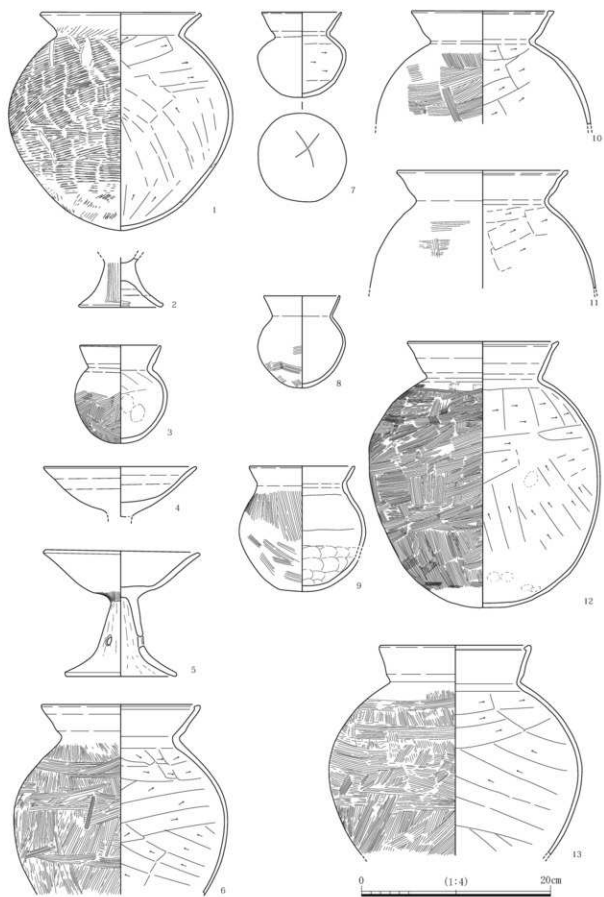


图65 1475 (1·2)·1476 (3~6)·1477 溝 (7~13) 出土遺物

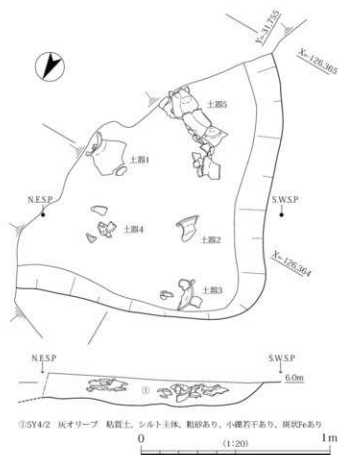


図66 1071土坑

の土師器である。1は土器10の小型丸底壺で完形。胎土は7.5YR7/8黄橙色で1~3mmの石英・チャートわずかにあり。2は土器13の小型丸底壺で、完形。肩部外面ヨコナデ。胎土は10YR8/3浅黄橙色で1mm前後の石英・長石若干あり。3は土器19の小型丸底壺で完形。肩部外面ヨコナデ。胎土は10YR7/2にぶい黄橙色で1mm前後の長石・石英・チャート若干あり。4は土器11の直口壺で完形。胎土は10YR8/4浅黄橙色で1mm前後の石英・長石多し、チャートあり。5は土器番号なしの高環で、脚部は完形。胎土は2.7YR7/6橙色で1mm前後の長石・石英多し、チャートあり。6は坏部土器3、脚部土器6で接合した高環で、残存率80%。胎土は7.5YR7/4にぶい橙色で1~2mmの長石・石英あり、チャート若干あり。7は坏部が土器4、脚部が土器5で、接合しないが同一個体と思われる高環。残存率70%。胎土は7.5YR7/6橙色で1~3mmの石英・長石あり、チャート若干あり。8は土器9の高環で残存率85%。胎土は7.5YR7/6橙色で1~2mmの石英・長石あり。9は土器17の高環で残存率70%。胎土は7.5YR6/4にぶい橙色で1mm前後の長石・石英あり。10は土器18の小型甕で完形。底部外面に煤と剝離あり。胎土は7.5YR8/4浅黄橙色で2~1mmの長石・石英あり、チャートわずかにあり。11は土器8の甕で残存率90%。底部外面煤付着。胎土は10YR7/3にぶい黄橙色で1mm前後の石英・長石あり、チャート若干あり。12は土器15の甕で、残存率60%。外面煤付着。胎土は10YR7/2にぶい黄橙色で1mm前後の石英・長石多し、チャートわずかにあり。全体に甕の調整は丁寧で、高環に稜がない布留式期中頃、4世紀中葉前後のものか。図65-1・2は1475溝土器1・2である。1は庄内式甕で残存率70%。内面底部炭化物付着。胎土は2.5YR8/2灰白色で1mm前後の石英あり、長石若干あり。2は弥生高環脚部片。ミガキあり。胎土は7.5YR6/4にぶい橙色で1mm前後の石英・長石

合流する部分は深さ0.4mほどにえぐれる。そこから1477溝が南西に伸びるが、北西肩部しか検出されなかった。

1475溝では土器1・2が出土した。土器1は横置状態で口縁を南西肩部に向ける。1476溝は土師器が散在し、器種は高環19片、小型丸底壺15片、甕120片である。1475・1476溝合流部には土器が集中し(図63)、土師器の高環56片、甕389片、壺52片である。3器種の個体がある。図化できなかったものは以下の通り。土器1は布留式甕86片だが3個体以上が混じる。土器2は高環、土器7・12は小型丸底壺片、土器14は壺底部片、土器16は布留式甕口縁片である。1477溝では土器が点々と出土した。個体把握できるが、破片の足りないものも多い。

図64は1475・1476溝合流部出土の

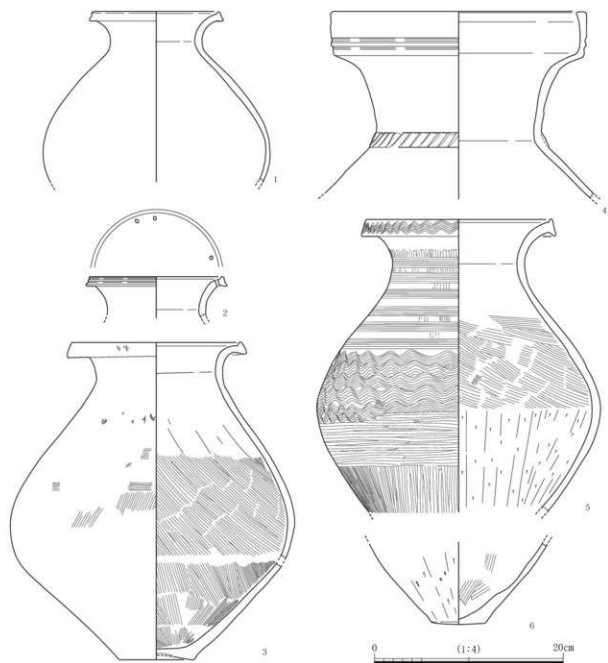


図67 1071土坑 出土遺物

り、チャートわずかにあり。中期頃のものか。土器1からは古墳時代初頭、3世紀後半頃と思われるが、1475・1476 溝合流部の遺物と時期差がある。図65-3～6は1476 溝出土の土師器である。3は小型丸底壺で完形。肩部はナデ。胎土は10YR7/3にぶい黄橙色で1～2mmの石英・長石あり、チャートわずかにあり。4は高環坏部。胎土は10YR7/4にぶい黄橙色で1mm前後の石英・長石・チャートあり。5は高坏で残存率90%。坏部内外面はヨコナデ。胎土は5YR7/8 橙色で1～2mmの石英・チャート・長石あり。6は甗で残存率40%。胴部外面煤付着。胎土は10YR7/2にぶい黄橙色で1～3mmのチャート・石英・長石あり。1476 溝の遺物は合流部のものと同時期である。

図65-7～13は1477 溝出土の土師器である。7は土器1の小型丸底壺で完形。ヘラ描きは焼成前。胎土は5YR7/6 橙色で1～3mmの長石多し、1mm前後の石英あり、チャートわずかにあり。8は土器3の小型丸底壺で残存率85%。外面煤付着。胎土は7.5YR8/4 浅黄橙色で1～2mmの石英・長石あり、

チャートわずかにあり。9は土器1の小型甕で残存率80%。胎土は10YR8/3浅黄橙色で1~2mmの石英・チャート多し、長石あり。10は土器4が2個体で、土器4-2とした甕で残存率20%。胎土は7.5YR7/4にぶい橙色で1~3mmの石英多し、チャートあり。11は土器7の甕で残存率10%。胎土は7.5YR7/4にぶい橙色で1mm前後の石英・長石あり、チャート若干あり。12は土器5・6が接合した甕で、残存率70%。外面煤付着。胎土は2.5Y7/2灰黄色で1mm前後の石英・長石・チャートあり。13は土器4-1の甕で残存率60%。胎土は2.5Y7/2灰黄色で、1~3mmの石英・長石あり、チャート若干あり。1477溝は12・13の胎土がやや異質で、9の小型甕もあり、12は若干長胴である。1475・1476溝合流部の遺物より少し新しいかもしれない。

第7面 1071土坑 (図66・67・図版27-4) 2トレンチ東隅部分で第6面が第7面が露出した部分で検出され、出土遺物から第7面遺構と判断した。今回の調査で唯一の弥生時代の遺構である。トレンチ南東壁にかかり、全体形は不明だが、隅丸方形か。側溝掘削時にこの位置で出土した土器も、この土坑のものとして判断した。図化したものの他、甕が83片、鉢が3片出土している。

図67が出土弥生土器で、全て壺である。1は土器1で残存率40%。磨滅し口縁部ヨコナデのみ判明。胎土は10YR8/4浅黄橙色で1~3mmの石英・長石あり、1mm弱の黒雲母・チャートわずかにあり。2は側溝出土、残存率10%。口縁部の穿孔は2個一組が四方に配置か。胎土は10YR8/2灰白色で、1mm前後の石英・チャート若干あり。3は土器2・3・5が接合し、残存率60%。外面磨滅するが肩部に櫛描の直線文2帯、波状文2帯、口縁にも波状文。胎土は10YR8/2灰白色で1~3mmのチャート・石英多し、1mm前後の長石・赤色粒あり。4は側溝出土で残存率10%。頸部は貼り付け刻み目突帯。胎土は10YR8/3浅黄橙色で1~2mmの石英・長石あり。5も側溝出土で残存率40%。胎土は10YR7/2にぶい黄橙色を呈し、1mm前後の赤色粒・石英あり、長石わずかにあり。4は胎土が粗く、他は緻密である。全体にⅢ様式の終わりからⅣ様式の初めの時期のものと言える。

小結 第6面は1475溝の庄内式甕を最古のものとして、古墳時代初頭3世紀後半から始まると言えよう。その後の古墳時代前期の遺物も1476溝や1475・1476溝合流部、1477溝だけでなく、他の遺構でも認められる。そして、1105土坑の中期中葉5世紀中葉の遺物が最新のもので、これも同時期の遺物が出土する遺構が幾つかある。小区画水田の存在が確認できたのは大きな成果だが、微高地上の部分的な耕地化と言え、それらにつながる水路も大規模で広域的なものとは思えない。遺構密度は居住域的な部分もあるが、出土遺物群は数器種に限定されたものが多く、小型丸底壺が多いなど、居住域で投棄される土器群の組成とは異なる。

第7項 第8・9面 (図68・図版27-1)

4トレンチのみで調査した。第8層は今回の調査で最古の古土壌で、断面確認では調査区全域でT.P.+5.6m前後の高さに分布している事が知られる。6トレンチ第3-4面1339井戸の断面でも確認できたように、水域から陸化して最初の土壌層であり、微高地形成以前の状況にあると考えられる。遺物は第7層で時期不明の土器小片1片があるのみで、時間的には弥生時代中期以前としか言えない。

第9面で幾つかの溝らしきものを検出した。587・596溝は平行する2本の溝のようで、ややずれて第8面でも存続しており、人為的なものの可能性が高いと考える。それ以外は遺構と言えるかどうか判然としないものが多い。なお、この面で平面的に確認できた692土坑状変形は断面で確認すると第4-2面408東溝底部での地震変形で、11世紀頃のものである。

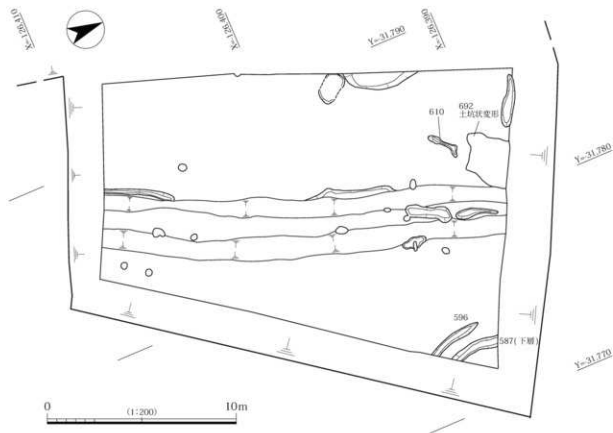


図68 第9面 4トレンチ全体図

なお、6トレンチで、南東壁断面、第6面1335・1336溝底部、7トレンチとの境の断面で、第9面に第8層が埋土に入った溝を確認しており、つなげると直線的になりそうである（図59点線）。18m近く直線的に伸びるとすれば、遺構と言えるであろう。

第8・9面は、今回の調査では人為的痕跡のある遺構面とは確定できなかったが、第8層からイネの植物珪酸体が検出されている事もあり、今後も調査の必要はあるだろう。

第4章 自然科学分析

第1節 分析の目的と成果

第1項 花粉・珪藻・植物珪酸体分析

今回の調査で最古の土壌層である第8層は、無遺物のため、時期が特定できなかった。今後の調査の可能性のためにもその形成時の稲作の有無、植生による時期の推定の必要性があった。また、第3-4層が洪水堆積層と考えられ、以下、第4-2層・第6層・第7層などの堆積環境も科学的な分析による裏付けが必要であった。また、第3-3面で調査区全域が耕地化する以前の、耕地化の進行度合いや環境の変化も第6面・第4-2面でどのように進行していくかを確認する必要があった。

結果として、花粉・珪藻・植物珪酸体も高率での検出はなかったが、第8層が陸生珪藻もあり、ヨモギ属やイネ科の花粉があり、周辺にヨシがある低湿な環境ながら完全に陸化していた事が確認され、イネの植物珪酸体が検出された事から、時期的にも稲作開始以降と推定できるようになった。十分に遺構・遺物が存在する可能性があると言える。また第7層堆積後、ヨシ属の植物珪酸体が減少し、珪藻もほとんど見られなくなるのは、微高地の成立と結びつく。第6面の小区画水田も乾田であったのだろう。また、第4-2層や第6層が洪水堆積らしい堆積速度の速い層と推定されたのも成果である。そして、第3-4層でのイネの植物珪酸体の増加は、全面耕地化に向けての開発の進行を裏付ける。

第2項 蛍光X線・薄片法胎土分析

第4-2面753溝土器群3で、黒色土器B類碗と瓦器が多量に共伴し、両者の法量・調整に共通性が高かった事が分析の発端である。珍しい事例であるだけでなく、黒色土器の技法を瓦器が受け継ぐのに際し、同一生産地で行われたか否かを科学的に確認できる可能性のある資料と思われた。

結果としては、黒色土器と瓦器の胎土に使用する粘土は確実に異なり、それぞれ生産地が異なると考えられる。技術伝承は同一生産地で行われたのではないという資料になる。

分析結果では、それ以外に注目すべき成果が得られた。まず、蛍光X線分析で、黒色土器と瓦器が、それぞれ非常にまとまりの良い化学組成を示した事である。この状況は、同一の粘土を材料に使用した、つまり、生産地が同じと考えて良いと思われる。点数が各7点と少ないきらいはあるが、肉眼観察でもこの土器群では、黒色土器B類碗も瓦器も、各々異なる胎土と認識できるものはほとんどない状況であった。消費地遺跡であるが、黒色土器も瓦器もほぼ単一の生産地から入手していたのであろう。当時の土器生産体制から流通の貴重な資料となろう。また、将来的に生産地が特定できる可能性も考えられる。

次に薄片法において、どちらも珪藻化石などの微化石が検出され、胎土となる粘土が沼沢地のような場所で堆積した有機質粘土であると分かった事である。これは、段丘崖下や開析谷内でなく、沖積平野の低湿地が粘土採掘場所であった可能性を示すと考えられる。また、瓦器の方が若干乾燥した環境で堆積し、ヨシ属の植物珪酸体を多く含むのは、淀川沿岸のような環境を想像させる。

なお、両分析とも、受領した報告には顕微鏡写真が掲載されていたが、今回、割愛している。ご容赦願いたい。なお、分析報告書は当センターで保管している。

第2節 井尻遺跡（その1）発掘調査に伴う花粉・珪藻・植物珪酸体分析

第1項 自然科学分析の概要

井尻遺跡の発掘調査では、2トレンチ北東壁と7トレンチ北東壁の土層断面において、11世紀から弥生時代中期以前までの層準について分析試料が採取された（図70～72の土層柱状図）。ここでは、各層準における堆積当時の植生や環境および農耕等に関する情報を得る目的で、植物珪酸体分析、花粉分析、珪藻分析を行った。分析試料は、以下の9点である。7トレンチ、2トレンチとも北東壁より採取された。なお、試料は遺跡調査の担当者によって採取されたものである。

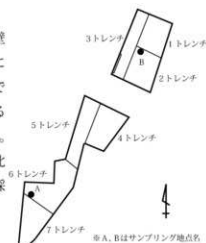


表16 分析対象一覧

区	分析No.	層序	土壌性状	時期・時代
7トレンチ	1	9層	明黄褐色粘土～シルト	不明（縄文?）
	2	8層	黒褐色粘土～シルト	不明（縄文?）
	3	7層下部	青灰色～黄褐色シルト～粘土	弥生時代中期以前
	4	7層上部	青灰色～黄褐色シルト～粘土	弥生時代中期以前
	5	6層	シルト混中～細砂	弥生時代中期～古墳時代初頭
	6	4-2層	シルト～細砂（土壌化）	古墳時代中期
	7	4-1層	褐色土	古墳時代中期～11世紀
	8	3-4層	明灰色シルト～細砂	11世紀
2トレンチ	9	5層	黒褐色細砂～シルト	古墳時代初頭～中期

図69 サンプリング地点図

第2項 植物珪酸体（プラント・オパール）分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（ SiO_2 ）が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山, 1984）。

2. 分析方法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原, 1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対し直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加（0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42kHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分

の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる(杉山、2000)。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

3. 分析結果

(1) 分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表17および図71に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ、イネ(穎の表皮細胞由来)、ムギ類(穎の表皮細胞)、ヨシ属、シバ属型、キビ族型、ススキ属型(おもにススキ属)、ウシクサ族A(チガヤ属など)、Bタイプ

[イネ科—タケ亜科]

メダケ節型(メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、チマキザサ節型(ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など)、ミヤコザサ節型(ササ属ミヤコザサ節など)、未分類等

[イネ科—その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来)、未分類等

[樹木]

ブナ科(シイ属)、その他

(2) 植物珪酸体の検出状況

1) 7トレンチ北東壁

下位の9層(Na1)では、ヨシ属、キビ族型、ウシクサ族A、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、および樹木(その他)などが検出されたが、いずれも少量である。8層(Na2)では、ヨシ属がやや増加し、イネ、ミヤコザサ節型、ブナ科(シイ属)が出現している。イネの密度は700個/gと低い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/gを下回っている。7層(Na3、Na4)では、イネがやや増加しているが、密度は2,000~2,500個/gと比較的低い値である。6層(Na5)から4~1層(Na7)にかけては、イネをはじめ多くの分類群が減少しており、ヨシ属、キビ族型はほとんど見られなくなっている。イネの密度は800~1,500個/gと低い値である。3~4層(Na8)では、イネやネザサ節型が増加し、ムギ類(穎の表皮細胞)、シバ属型が出現している。イネの密度は6,000個/gと高い値である。ムギ類(穎の表皮細胞)の密度は600個/gと低い値であるが、穎(籽殻)が栽培地に残される確率は低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。おもな分類群の推定生産量によると、9層(Na1)から7層(Na3、Na4)にかけてはヨシ属、3~4層(Na8)ではイネが優勢となっている。

2) 2トレンチ北東壁

5層(Na9)では、イネが5,200個/gと高い密度で検出され、イネの籽殻(穎の表皮細胞)、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族A、メダケ節型、ネザサ節型、およびブナ科(シイ属)、樹木(その他)など

も認められた。おもな分類群の推定生産量によると、イネが優勢となっている。

4. 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

(1) 7トレンチ北東壁

下位の9層(No.1:時期不明)から7層(No.3、No.4:弥生時代中期以前)にかけては、おおむねヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、周辺の比較的乾燥したところにはキビ族、ウシクサ族、メダケ属(メダケ節やネザサ節)などのイネ科植物が生育し、遺跡周辺にはシイ属など何らかの樹木が分布していたと推定される。また、8層(No.2)から7層(No.3、No.4)にかけては、比較的少量ながらイネが検出されることから、調査地点もしくはその近辺で水田稲作が行われていた可能性が考えられる。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

6層(No.5 洪水堆積層:弥生時代中期~古墳時代初頭)では、河川の影響など何らかの原因でイネ科植物の生育にはあまり適さない環境であったと考えられるが、少量ながらイネが検出されることから、周辺で水田稲作が行われていた可能性が考えられる。4-2層(No.6 洪水堆積層:古墳時代中期頃)および4-1層(No.7:古墳時代中期~11世紀)でも、おおむね同様の状況であったと考えられる。

3-4層(No.8:11世紀)では、おもに水田稲作が行われていたと考えられ、ムギ類の栽培が行われていた可能性も認められた。同層の堆積当時は、ヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、周辺の比較的乾燥したところにはシバ属、ウシクサ族、メダケ属(メダケ節やネザサ節)などのイネ科植物が生育していたと推定される。

(2) 2トレンチ北東壁

5層(No.9:古墳時代初頭~中期)の堆積当時は、ヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。また、周辺の比較的乾燥したところにはスキ属、ウシクサ族、メダケ属(メダケ節やネザサ節)などのイネ科植物が生育し、遺跡周辺にはシイ属などの樹木が分布していたと考えられる。

第3項 花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。しかし花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2. 方法

花粉の分離抽出は、中村(1967)の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1cm³を採量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム(12水)溶液を加え15分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置

5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸 9：濃硫酸 1 のエルドマン氏液を加え 1 分間湯煎）を施す

6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理

7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレバート作製

8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 300～1000 倍で行った。花粉の分類は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（—）で結んで示した。同定分類には所有の現生花粉標本、鳥倉（1973）、中村（1980）を参照して行った。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。

3. 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉 7、樹木花粉と草本花粉を含むもの 1、草本花粉 10、シダ植物胞子 2 形態の計 20 である。これらの学名と和名および粒数を表 21 に示し、周辺の植生を復原するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図 72 に示し、また、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。

[樹木花粉]

モミ属、スギ、カバノキ属、クリ、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、トチノキ

[樹木花粉と草本花粉を含むもの]

クワ科—イラクサ科

[草本花粉]

イネ科、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、アカザ科—ヒユ科、カラマツソウ属、アブラナ科、セリ亜科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

[シダ植物胞子]

単条溝胞子、三条溝胞子

(2) 花粉群集の特徴

下位より花粉構成と花粉組成の変化の特徴を記載する。

1) 7 トレンチ 9 層～3—4 層 (No 1～No 8)：縄文?～11 世紀

下部の 9 層 (No 1) では、密度が極めて低く花粉はほとんど検出されないが、わずかにコナラ属コナラ亜属、カヤツリグサ科、ヨモギ属が出現する。8 層 (No 2) では、密度は低いものの草本花粉が 57%、シダ植物胞子が 36%、樹木花粉が 5% を占める。草本花粉のヨモギ属が卓越し、次にイネ科多くセリ亜科、キク亜科が伴われる。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属を主にモミ属、クリ、トチノキが低率に出現する。7 層～3—4 層 (No 3～No 8) では、密度が極めて低く花粉はほとんど検出されない。草本花粉のイネ科、ヨモギ属が連続して出現し、アカザ科—ヒユ科、アブラナ科、セリ亜科、樹木花粉のコナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属などがわずかに出現する。

2) 2 トレンチ 5 層 (No 9)：古墳時代初頭～中期

花粉密度が極めて低く、コナラ属アカガシ亜属、ヨモギ属がわずかに出現するのみである。

4. 花粉分析から推定される植生と環境

1) 7トレンチ 9層～3-4層 (No.1～No.8)：縄文?～11世紀

いずれの時期も花粉密度は極めて低く、花粉などの有機質遺体が分解される乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境であったか、堆積速度がはやかったと推定される。8層 (No.2) で卓越するヨモギ属はやや湿った土壌から乾燥を好む人里雑草で、伴われるイネ科、キク亜科、セリ亜科なども乾燥から湿潤な環境まで多様な環境に生育する。またヨモギ属、イネ科は下部から上部まで連続して出現し、いずれの時期も堆積地ないし周囲はこれらの草本が生育する陽当たりのよい乾燥した環境であったとみなされる。

2) 2トレンチ 5層 (No.9)：古墳時代初頭～中期

この5層の時期には、密度が極めて低く、花粉などの有機質遺体が分解される乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境であったか、堆積速度がはやかったと推定される。

第4項 珪藻分析

1. はじめに

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復原の指標として利用されている。

2. 方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

- 1) 試料から1 cm³を採量
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら1晩放置
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドを水洗(5～6回)
- 4) 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下して乾燥
- 5) マウントメディアによって封入し、プレパラート作製
- 6) 検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡によって600～1500倍で行った。計数は珪藻被殻が200個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

3. 結果

(1) 分類群

試料から出現した珪藻は、貧塩性種(淡水生種)16分類群である。破片の計数は基本的に中心域を有するものと、中心域がない種については両端2個につき1個と数えた。表19に分析結果を示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定した珪藻ダイアグラムを図70に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性はLowe(1974)の記載により、陸生珪藻は小杉(1986)により、環境指標種群は海水生種から汽水生種は小杉(1988)により、淡水生種は安藤(1990)による。

[貧塩性種]

Achnanthes crenulata, *Achnanthes inflata*, *Cyclotella* spp., *Eunotia minor*, *Hantzschia amphioxys*, *Navicula clementis*, *Navicula cohnii*, *Navicula confervacea*, *Navicula cuspidata*, *Navicula goeppertiana*, *Navicula mutica*, *Neidium alpinum*, *Nitzschia palea*, *Pinnularia borealis*,

Pinnularia subcapitata, Surirella ovata

(2) 珪藻群集の特徴

1) 7トレンチ 9層～3-4層 (No.1～No.8) : 縄文?～11世紀

いずれの試料も密度が極めて低く、珪藻はほとんど検出されない。わずかに出現する珪藻は、貧塩性種(淡水生種)で、流水不定性種ないし陸生珪藻で占められる。下部の9層 (No.1) では、陸生珪藻の *Navicula cohnii*, 8層 (No.2) では陸生珪藻の *Navicula cohnii*, *Neidium alpinum*, *Pinnularia borealis*, 真・好止水性種の *Achnanthes crenulata*, *Eunotia minor*, 真・好流水性種の *Achnanthes*

表 17 井尻遺跡における植物珪酸体分析結果

分類群		学名		7トレンチ北東壁								2トフ					
				9層		8層		7層		6層		4-2層		4-1層		3-4層	
				No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.9				
イネ科	Gramineae																
イネ	<i>Oryza sativa</i>				7	20	25	15	8	8	60					52	
イネ初期殻(穎の表皮細胞)	<i>Oryza sativa</i> (husk Phytolith)															7	
ムギ類(穎の表皮細胞)	<i>Triticum-Hordeum</i> (husk Phytolith)											6					
ヨシ属	<i>Phragmites</i>			20	40	27	25				8	12				13	
シバ属型	<i>Zoysia</i> type											6					
キビ属型	Paniceae type			7	20	7	6										
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type									8						7	
ウシクサ族A	Andropogoneae A type			13	40	7	6	8	8			6				7	
Bタイプ	B type			7													
タケ亜科	Bambusoideae																
メダケ節型	<i>Pleoblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>			7	7	7	6	8	8	8	12					33	
ネザサ節型	<i>Pleoblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>			13	34	33	50	8	45	15	78					46	
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.			7	13				8	8	6					7	
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>				7	7	6	8	8	8	6					7	
未分類等	Others			39	34	40	56	15	8	15	24					13	
その他のイネ科	Others																
表皮毛起源	Husk hair origin			13	20	20	6				8	12				39	
棒状珪酸体	Rod-shaped			104	148	113	119	15	15	15	91					59	
未分類等	Others			91	108	113	81	30	38	23	157					124	
樹木起源	Arboreal																
ブナ科(シイ属)	<i>Castanopsis</i>					7	6									7	
その他	Others			7	7		12		8		6					7	
(湖輪骨針)	Sponge spicules			26	101	53	37			30	8	48				26	
植物珪酸体総数	Total			326	491	392	406	105	158	113	483					424	
おもな分類群の推定生産量 (単位: kg / m ² ・年) : 試料の乾比量を1.0と仮定して算出																	
イネ	<i>Oryza sativa</i>				0.20	0.59	0.73	0.44	0.22	0.22	1.77					1.53	
ヨシ属	<i>Phragmites</i>			1.24	2.55	1.68	1.58				0.47	0.76				0.82	
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type									0.09						0.08	
メダケ節型	<i>Pleoblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>			0.08	0.08	0.08	0.07	0.09	0.09	0.09	0.14					0.38	
ネザサ節型	<i>Pleoblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>			0.06	0.16	0.16	0.24	0.04	0.22	0.07	0.38					0.22	
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.			0.05	0.10				0.06	0.06	0.05					0.05	
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>				0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02					0.02	
タケ亜科の比率 (%)																	
メダケ節型	<i>Pleoblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>			40	22	30	22	60	23	37	24					57	
ネザサ節型	<i>Pleoblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>			33	45	62	72	25	57	30	65					33	
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.			26	28				15	24	8					7	
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>				6	8	6	15	6	9	3					3	
メダケ率	Medake ratio			74	66	92	94	85	79	67	89					90	

表 18 井尻遺跡における花粉分析結果

分類群	和名	7トレンチ北東壁								2トフ
		9層	8層	7層	6層	4-2層	4-1層	3-4層	5層	
学名		No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9
Arboreal pollen	樹木花粉									
Abies	モミ属		1							
Cryptomeria japonica	スギ			1						
Betula	カバノキ属								1	
Castanea crenata	クリ		1							
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	4	5	2	1				1	
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属			1	2	1				1
Aesculus turbinata	トチノキ		1							
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉									
Moraceae-Urticaceae	クワ科・イラクサ科		3							
Nonarboreal pollen	草本花粉									
Gramineae	イネ科		11	5	7		1		2	
Cyperaceae	カヤツリグサ科	1								
Monochoria	ミスアオイ属			1						
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アザケ科・ヒユ科			1					1	
Thalictrum	カラマツソク属				1					
Cruciferae	アブラナ科			3					2	
Apioidae	セリ亜科		1		1				1	
Lactucoideae	タンポポ亜科			1						
Asteroidae	キク亜科		1	1						
Artemisia	ヨモギ属	4	80	19	16			1	3	2
Fern spore	シダ植物胞子									
Monolate type spore	単葉溝胞子	5	57	10	6				1	2
Trilate type spore	三葉溝胞子	1	2	1	2		2			
Arboreal pollen	樹木花粉	4	8	4	3	1	0	0	2	1
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	3	0	0	0	0	0	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	5	93	31	25	0	1	1	9	2
Total pollen	花粉総数	9	104	35	28	1	1	1	11	3
Pollen frequencies of 1cm ³	試料 1cm ³ 中の花粉密度	7.7 X10	7.5 X10 ²	2.3 X10 ²	1.9 X10 ²	1.2 X10	0.6 X10	0.6 X10	7.8 X10	2.1 X10
Unknown pollen	未同定花粉	2	3	3	3	1			2	
Fern spore	シダ植物胞子	6	59	11	8	0	2	0	1	2
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Stone cell	石細胞	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)
Digestion remains	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal・woods fragments	微細炭化物・微細木片	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(-)

表 19 井尻遺跡における珪藻分析結果

分類群	7トレンチ北東壁								2トフ
	9層	8層	7層	6層	4-2層	4-1層	3-4層	5層	
	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9
異帯性種 (淡水生種)									
Achnanthes crenulata		1	3					1	1
Achnanthes inflata		1							1
Cyclotella spp.			3						1
Eunotia minor		1							
Hantzschia amphioxys									4
Navicula clementis									1
Navicula cohnii	1	2							
Navicula confervacea									1
Navicula cuspidata			1						
Navicula goeppertiana		1							2
Navicula mutica									1
Neidium alpinum		1							
Nitzschia paleis									3
Pinnularia borealis		1							
Pinnularia subcapitata									1
Suzirella ovata									1
合計	1	8	7	0	0	0	0	1	17
未同定			1						1
破片		12	17	1				12	14
試料 1cm ³ 中の殻数密度	2.0 X10 ²	1.6 X10 ³	1.6 X10 ³					2.0 X10 ³	3.6 X10 ³

inflata、流水不定性種の *Navicula goeppertiana* が出現し、7層下部 (No. 3) では、真・好止水性種の *Achnanthes crenulata*, *Cyclotella* spp., 流水不定性種の *Navicula cuspidata* が出現する。7層上部 (No. 4) ~ 4-1層 (No. 7) では、珪藻は検出されず、3-4層 (No. 8) では、真・好止水性種の *Achnanthes crenulata* が出現する。

2) 2トレンチ 5層 (No. 9) : 古墳時代初頭~中期

珪藻密度は極めて低く、陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys*, 流水不定性種の *Nitzschia palea*, *Navicula goeppertiana* がやや多く、他に陸生珪藻の *Navicula confervacea*, *Navicula mutica*, *Pinnularia subcapitata*, 流水不定性種の *Navicula clementis*, *Achnanthes crenulata*, 真・好流水性種の *Achnanthes inflata*, *Surirella ovata*, 真・好止水性種の *Cyclotella* spp. がわずかに出現する。

4. 珪藻分析から推定される堆積環境

1) 7トレンチ 9層~3-4層 (No. 1~No. 8) : 縄文?~11世紀

いずれの試料も密度が極めて低く、珪藻が生育しにくい乾燥した堆積環境であったか、堆積速度が速かったと推定される。8層 (No. 2) でわずかに陸生珪藻が検出されるが、湿った土壌の環境および珪藻の生育しにくい小刻みに変化する不安定な環境が示唆される。

2) 2トレンチ 5層 (No. 9) : 古墳時代初頭~中期

密度が極めて低く、異なる環境に生育する多様な種がわずかに出現することから、珪藻が生育しにくい乾燥した堆積環境であったか、乾湿を繰り返し小刻みに変化する不安定な環境であったと考えられる。

第5項 まとめ

7トレンチ北東壁では、下位より9層 (No. 1: 時期不明) から7層 (No. 3, No. 4: 弥生時代中期以前) にかけておおむねヨシ属が生育し、8層 (No. 2) ではヨモギ属の生育と陸生珪藻の生育が認められ、ヨシ属やヨモギ属の草本がおもに生育する湿った土壌の環境が示唆された。8層 (No. 2) から7層 (No. 3, No. 4) は調査地点もしくはその近辺で水田稲作が行われていた可能性が考えられた。6層 (No. 5 洪水堆積層: 弥生時代中期~古墳時代初頭)、4-2層 (No. 6 洪水堆積層: 古墳時代中期頃)、4-1層 (No. 7: 古墳時代中期~11世紀) は各植物遺体に乏しく、速度の速い堆積環境が推定される。3-4層 (No. 8: 11世紀) では、おもに水田稲作の盛行が示唆され、本地点も水田であった可能性が高い。2トレンチ北東壁の5層 (No. 9: 古墳時代初頭~中期) は堆積当時ヨシ属が生育し後に水田化されるが、花粉の分解が行われ珪藻が生育しにくい湿った程度か乾湿を小刻みに繰り返す環境が示唆された。また、本遺跡周辺の乾燥地にはイネ科植物が生育し、シイ属など何らかの樹木が分布していたと推定された。

参考文献

- 杉山直二・藤原宏志 1986「機動細胞珪藻体の形態によるタケ亜科植物の同定—古墳環境推定の基礎資料として—」『考古学と自然科学』, 19, p.69-84.
杉山直二 1999「植物珪藻体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史」『第四紀研究』 38(2), p.109-123.
杉山直二 2000「植物珪藻体 (プラント・オパール)」『考古学と植物学』同成社, p.189-213.
藤原宏志 1976「プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) —数種イネ科植物の珪藻体標本と定量分析法—」『考古学と自然科学』 9, p.15-29.
藤原宏志・杉山直二 1984「プラント・オパール分析法の基礎的研究 (5) —プラント・オパール分析による水田址の探査—」『考古学と自然科学』 17, p.73-85.
金原正明・金原正子 2013「植生と農耕における土壌層分析の実証的研究」『日本文化財科学会第30回大会研究発表要旨集』, p.112-113.
金原正明 1993「花粉分析法による古墳環境復原」『新版古代の日本 第10巻 古代資料研究の方法』角川書店, p.248-262.
島倉巳三郎 1973「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録』第5集, 60p.

- 中村純 1967 『花粉分析』古今書院, p.82-102.
 中村純 1974 『イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として』『第四紀研究』13, p.187-193.
 中村純 1977 『稲作とイネ花粉』『考古学と自然科学』第10号, p.21-30.
 中村純 1980 『日本産花粉の標識』『大阪自然史博物館収蔵目録』第13集, p.91
 Hustedt, F. 1937-1938 『Systematische und ologische Untersuchungen über die Diatomeenflora von Java, Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda Expedition.』『Arch. Hydrobiol. Suppl.』15, p.131-506.
 Lowe, R.L. 1974 『Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms.』
 『National Environmental Reserch. Center』 p.333
 K. Krammer + H. Lange-Bertalot. 1986-1991 『Bacillariophyceae · 1-4』
 Asai, K. & Watanabe, T. 1995 『Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophytic and saproxenous taxa.』『Diatom』10, p.35-47.
 安藤一男 1990 『淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用』『東北地理』42, p.73-88.
 伊藤良永・堀内誠示 1991 『陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用』『珪藻学会誌』6, p.23-45.
 小杉正人 1986 『陸生珪藻による古環境解析とその意義—わが国への導入とその展望—』『植生史研究』第1号, 植生史研究会, p.29-44.
 小杉正人 1988 『珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用』『第四紀研究』27, p.1-20.
 渡辺仁治 2005 『淡水珪藻生態図鑑 群集解析に基づく汚濁指数 DAI_{po}, pH 耐性指数』内田老鶴館, 666p.

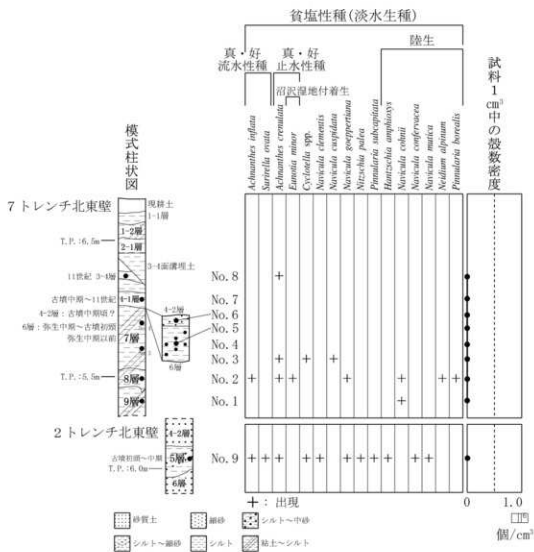


図70 井尻遺跡における主要珪藻ダイアグラム

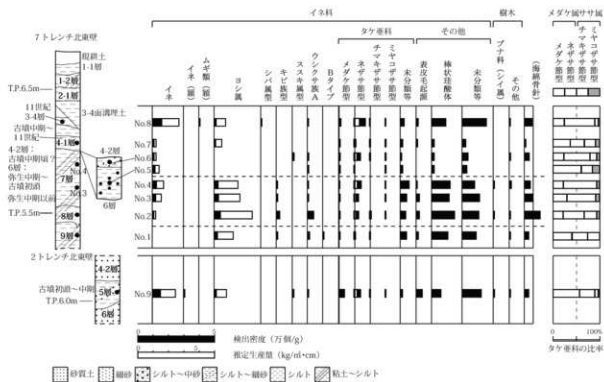


図 71 井尻遺跡における植物珪酸体分析結果

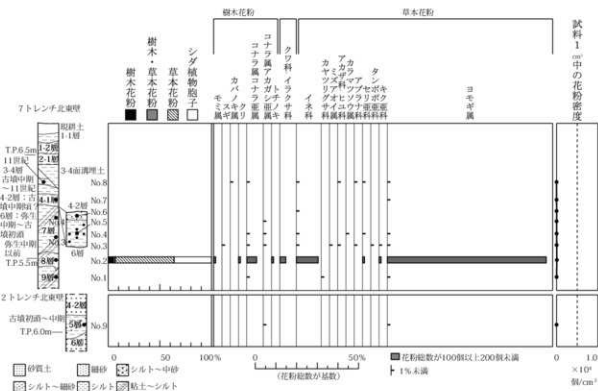


図 72 井尻遺跡における花粉ダイアグラム

第3節 井尻遺跡（その1）発掘調査に伴う蛍光X線・薄片法胎土分析

第1項 はじめに

埴輪や土師器などの胎土分析は、一般的には製作地の推定を目的として行われる場合が多い。しかしながら、例えば胎土中に含まれる岩石片の鉱物組成から、砂粒物の示す地域がいずれであるかを推定するのは容易でない。焼物は、基本材料として粘土と砂粒などの混和材から構成されるが、粘土材料が比較的良質とも思える粘土層から採取されていたことが、粘土採掘坑の調査から推察される（藤根・今村、2001）。また、粘土自体に珪藻化石やプラント・オパール、放散虫化石が混在している場合があり、材料の粘土が生成された時の環境がわかる。

一方、混和材としての砂粒物は、粘土層から粘土を採取する際に、粘土層の上下層や周辺に分布する砂層などから採取されたと予想される。東海地域の弥生時代後期の赤彩を施したバレススタイル土器では、3分の1程度の土器に、砂粒物として火山ガラスが多量に含まれている（藤根、1998；車崎ほか、1996）。これらの火山ガラスは、粘土採取場所の上下層や周辺に分布するテフラ層由来と考えられる。このように胎土分析においては、粘土や混和材について微化石類およびテフラなどの鉱物を含めて検討する必要がある。

ここでは、井尻遺跡から出土した黒色土器および瓦器について、蛍光X線分析および薄片の偏光顕微鏡観察を行い、化学組成および粘土の種類と砂粒組成等の特徴について調べた。

第2項 分析資料出土遺構と分析試料の概要

今回の胎土分析の資料となる黒色土器B類椀・瓦器椀が出土したのは1トレンチ第4～2面の753溝土器群3である。753溝土器群3には、多量の土師器小皿・黒色土器椀・瓦器椀があり、時期は11世紀後半である。破片数で黒色土器B類椀が1234片、瓦器椀が436片が出土している。その中で、残存率50%前後以上接合し、確実に1個体が存在すると把握できたものは、黒色土器B類椀28個体、瓦器椀7個体であった。この土器群は、両者が多数共存する点でも珍しく、まさに瓦器椀出現期の特異な状況であり、古代的土器様相と中世的土器様相の接点となる資料と言える。

瓦器椀は、黒色土器椀の製作技術を受け継いだものと言われているが、この、753溝土器群3の資料で胎土分析を行い、同じ産地の胎土であれば、原材料の粘土を同じくする、つまり、同じ地域・工房で技術の伝承が行われた事になる。異なれば、両者の生産体制は別々のまま、技術の移入が行われた事になる。そのような社会的産業の構造が科学的分析によって解明できる可能性が考えられた。

今回の分析は、以上のような理由により、この土器群の黒色土器B類椀と瓦器椀の胎土分析を行うものである。

第3項 試料と方法

分析対象は、黒色土器B類椀7点（分析No. 1～7）と瓦器椀7点（分析No. 8～14）の計14点である（表20）。時期は、11世紀後半とみられている。分析No. 1とNo. 8の2点は薄片の偏光顕微鏡観察と蛍光X線分析を行った。その他12点は蛍光X線分析のみ行った。なお、偏光顕微鏡観察は藤根と米田、蛍光X線分析は竹原がそれぞれ担当し、藤根、竹原がまとめた。

表 20 分析対象一覧

分析 No.	出土遺構	種別	器種	土器番号	登録番号	色調	時期	分析項目	
								薄片観察	蛍光X線
1	753溝	黒色土器	椀 (B類)	48	989	黒 (N 2 /)	11世紀 後半	○	○
2				51	992	黒 (N 2 /)		○	○
3				75	1016	黒 (N 2 /)		○	○
4				44~80周辺	1023	暗灰 (N 3 /)		○	○
5				44~80周辺	1023	暗灰 (N 3 /)		○	○
6				89~109周辺	1056	暗灰 (N 3 /)		○	○
7					828	黒 (N 2 /)		○	○
8		瓦器	椀		828	灰 (N 6 /)	○	○	
9						灰 (N 6 /)	○	○	
10						灰白 (N 7 /)	○	○	
11						灰白 (7.5 Y 7 / 1)	○	○	
12						灰白 (N 7 /)	○	○	
13						灰 (N 6 /)	○	○	
14						灰白 (N 7 /)	○	○	

薄片の偏光顕微鏡観察

薄片作製は、(1) 試料は、はじめに岩石カッターなどで整形し、恒温乾燥機により乾燥させた。全体にエポキシ系樹脂を含浸させ、固化処理を行った。これをスライドガラスに接着し、接着面と反対の面に平面を作製した後、同様にしてその平面の固化処理を行った。(2) さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作製した後、スライドガラスに接着した。(3) その後、精密岩石薄片作製機を用いて試料を切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02mm前後の薄片を作製した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

薄片は、偏光顕微鏡を用いて薄片全面にみられた微化石類(放散虫化石、珪藻化石、骨針化石など)と大型粒子の特徴およびその他の混和物について、観察と記載を行った。

なお、以下に、土器胎土中粒子を同定または分類する際の各分類群の特徴を示す。

[放散虫化石]

放散虫は、放射飯足類に属する海生浮遊性原生動物で、その骨格は硫酸ストロンチウムまたは珪酸からなる。放散虫化石は、海生浮遊生珪藻化石とともに外洋性堆積物中に含まれる。

[珪藻化石]

珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、大きさは10~数百 μm 程度である。珪藻は、海水域から淡水域に広く分布する。小杉(1988)や安藤(1990)は、現生珪藻に基づいて環境指標種群を設定し、具体的な環境復元を行っている。ここでは、種あるいは属が同定できる珪藻化石(海水種、淡水種)を分類した。

[骨針化石]

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状からなる。海綿動物の多くは海産であるが、淡水産としても23種ほどが知られ、湖や池あるいは川の底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。したがって、骨針化石は水成環境を指標する。

[植物珪酸体化石]

主にイネ科植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、長径約10~50 μm 前後である。一般にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本やスゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在する。

[胞子化石]

胞子は、直径約 10～30 μm 程度の珪酸質の球状粒子である。胞子は、水成堆積物中に多く見られるが、土壌中にも含まれる。

[石英・長石類]

石英および長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち、後述する双晶などのように、光学的な特徴をもたないものは石英と区別するのが困難である場合が多く、一括して扱う。

[長石類]

長石は、大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶（主として平行な縞）を示すものと累帯構造（同心円状の縞）を示すものに細分される（これらの縞は組成の違いを反映している）。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの（パーサイト構造）と格子状構造（微斜長石構造）を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶（微文象構造という）である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶（斑晶）に見られることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石は、花崗岩などケイ酸分の多い深成岩などに産出する。

[雲母類]

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で、風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開（規則正しい割れ目）にそって板状に剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。花崗岩などのケイ酸分の多い火成岩に普遍的に産し、変成岩類や堆積岩類にも産出する。

[輝石類]

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は、肉眼的にビール瓶のような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。ケイ酸分の少ない深成岩類や火山岩類、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩類に産する。単斜輝石（主に普通輝石）は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主としてケイ酸分の少ない火山岩類やケイ酸分の最も少ない火成岩類や変成岩類中にも産出する。

[角閃石類]

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は、細長く平たい長柱状である。閃緑岩のような、ケイ酸分が中間的な深成岩類や変成岩類あるいは火山岩類に産出する。

[ガラス質]

透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄く湾曲したガラス（バブル・ウォール型）や小さな泡をたくさんもつガラス（軽石型）などがある。主に火山噴火により噴出した噴出物（テフラ）である。

[片理複合石英類]

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、片理構造を示す岩石である。

[砂岩質・泥岩質]

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、基質部分をもつ。構成粒子の大きさが約 0.06mm 以上のものを砂岩質、約 0.06mm 未満のものを泥岩質とした。

[複合石英類]

複合石英類は、石英の集合している粒子で、基質（マトリックス）の部分をもたないものである。個々

の石英粒子の粒径は、粗粒から細粒までさまざまである。ここでは便宜的に、個々の石英粒子の粒径が0.01mm未満のものを微細、0.01～0.05mmのものを小型、0.05～0.10mmのものを中型、0.10mm以上のものを大型と分類した。微細結晶の集合体である場合には、堆積岩類のチャートなどに見られる特徴がある。

[石灰質類]

微小～小型～大型の方解石から構成され、結晶度は低いものから高いものまで見られる。結晶度、構成粒子の大きさなどの構造に基づいて分類される。

[斑晶質・完晶質]

斜長石や輝石・角閃石などの結晶からなる斑晶構造を示し、基質は微細な鉱物やガラス質物からなる岩石である。

[流紋岩質]

石英や長石などの結晶からなる斑晶構造を示し、基質は微細な鉱物やガラス質物からなり、流理構造を示す岩石である。

[凝灰岩質]

ガラス質で斑晶質あるいは完晶質構造を持つ粒子のうち、結晶度が低く、直交ニコルで観察した際に全体的に暗い粒子である。

[不明粒子]

下方ポーラーのみ、直交ポーラーのいずれにおいても不透明な粒子や、変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明粒子とした。

蛍光 X 線分析

蛍光 X 線分析では、土器のガラスビードを作製し、ガラスビード法による分析を行った。まず採取した土器破片を、表面の汚れ等の影響を排除するため、岩石カッターで表面を削った後、さらに精製水で超音波洗浄を行った。試料をセラミック乳鉢で粉末にして、るつぽに入れ、電気炉で750℃、6時間焼成した後、デシケータ内で放冷し、1.8000g 秤量した。これを、無水四ホウ酸リチウム $\text{Li}_2\text{B}_4\text{O}_7$ と、メタホウ酸リチウム LiBO_2 を 8:2 の割合で調製した融剤 3.6000g と十分に混合し、白金製のるつぽに入れ、ビードサンプラーにて約 750℃ で 250 秒間予備加熱、約 1100℃ で 150 秒間溶融させ、約 1100℃ で 450 秒間揺動加熱してガラスビードを作製した。

分析は、フィリップス社製波長分散型蛍光 X 線分析装置 MagiX (PW2424 型) にて、検量線法による定量分析を行った。標準試料には、独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センターおよび米国標準技術研究所 (NIST) の岩石標準試料計 15 種類を用いた。定量元素は、酸化ナトリウム (Na_2O)、酸化マグネシウム (MgO)、酸化アルミニウム (Al_2O_3)、二酸化ケイ素 (SiO_2)、五酸化リン (P_2O_5)、酸化カリウム (K_2O)、酸化カルシウム (CaO)、酸化チタン (TiO_2)、酸化マンガン (MnO)、酸化鉄 (Fe_2O_3) の主成分 10 元素と、ルビジウム (Rb)、ストロンチウム (Sr)、イットリウム (Y)、ジルコニウム (Zr) の微量成分 4 元素の計 14 元素である。

第 4 項 結果および考察

以下に、土器胎土薄片の顕微鏡観察および蛍光 X 線分析結果について述べる。

胎土中の粒子組成については、微化石類や鉱物・岩石片を記載するために、プレバート全面を精査・

英類が片岩類 (A/a)、複合石英類が深成岩類 (B/b)、複合石英類 (微細) や砂岩質が堆積岩類 (C/c)、斑晶質や完晶質が火山岩類 (D/d)、凝灰岩質が凝灰岩類 (E/e)、流紋岩質が流紋岩類 (F/f)、ガラス質または軽石質がテフラ (G/g) などである。

土師器の砂粒組成は、表 23 の組み合わせに従って概ね 1 群に分類された。以下に、胎土中の砂粒物の岩石組み合わせについて述べる。a) 主に堆積岩類とテフラからなる Cg 群 (2 試料)

表 23 岩石片の起源と組み合わせ

		第 1 四象群								
		A	B	C	D	E	F	G		
第 2 四象群	a	片岩類								
	b	深成岩類								
	c	堆積岩類								
	d	火山岩類								
	e	凝灰岩類								
	f	流紋岩類								
	g	テフラ								
	h	片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ		
	i	片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ		
	j	片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ		

少ないものの複合石英類 (微細) からなる堆積岩類、火山ガラスからなるテフラを含む。ただし、全体的に粗粒砂が少なく、砂粒物は混和されていない可能性が高い。

蛍光 X 線分析

表 24 に、蛍光 X 線分析の測定結果を示す。

表 24 蛍光 X 線分析結果 (mass%)

分析 No.	種別	Na ₂ O (%)	MgO (%)	Al ₂ O ₃ (%)	SiO ₂ (%)	P ₂ O ₅ (%)	K ₂ O (%)	CaO (%)	TiO ₂ (%)	MnO (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	Total (%)	Rb (ppm)	Sr (ppm)	Y (ppm)	Zr (ppm)	分析 No.
1	黒色土器	1.01	0.64	21.5	64.5	3.523	1.87	1.28	0.80	0.109	3.96	99.2	86	300	36	163	1
2		1.07	0.85	23.3	63.1	3.084	2.09	1.30	0.90	0.177	3.48	99.4	105	308	41	186	2
3		1.25	1.05	22.3	62.6	2.823	2.29	1.35	0.86	0.320	4.44	99.1	112	239	43	179	3
4		1.14	1.00	23.2	62.2	2.749	2.30	1.35	0.86	0.177	3.99	99.0	117	294	41	173	4
5		1.17	1.00	22.3	62.8	3.084	2.00	1.40	0.91	0.100	4.54	99.3	113	311	49	198	5
6		1.16	1.40	24.3	58.9	3.057	2.12	1.43	0.93	0.138	5.76	99.2	139	295	45	167	6
7		1.15	1.02	22.9	61.0	3.374	2.26	1.32	0.88	0.138	4.66	98.7	108	254	42	172	7
8	瓦器	0.65	0.95	25.5	64.8	0.470	1.86	0.58	0.97	0.103	4.75	100.6	103	112	40	143	8
9		0.83	1.03	23.9	63.3	0.350	2.05	0.62	0.96	0.057	7.01	100.1	104	106	43	163	9
10		0.88	0.96	24.3	65.5	0.698	2.10	0.75	0.95	0.053	4.28	100.5	120	133	49	189	10
11		0.94	0.77	24.1	65.4	0.137	1.95	0.59	0.95	0.054	5.32	100.2	96	99	41	167	11
12		0.96	1.13	23.6	65.1	0.497	2.40	0.72	1.01	0.047	4.74	100.2	123	114	46	193	12
13		1.00	1.15	24.5	65.2	0.319	2.32	0.70	1.07	0.059	3.95	100.3	116	109	45	187	13
14		1.03	1.29	22.8	64.5	0.483	2.37	0.79	0.95	0.058	6.18	100.5	125	119	45	188	14
最小値		0.65	0.64	21.5	58.9	0.137	1.86	0.58	0.80	0.047	3.48	98.7	86	99	36	143	最小
最大値		1.25	1.40	26.5	65.5	3.523	2.40	1.43	1.07	0.320	7.01	100.6	139	311	49	198	最大

分析の結果、黒色土器は、Na₂O が 1.01 ~ 1.25%、MgO が 0.64 ~ 1.40%、Al₂O₃ が 21.5 ~ 24.3%、SiO₂ が 58.9 ~ 64.5%、P₂O₅ が 2.623 ~ 3.523%、K₂O が 1.87 ~ 2.30%、CaO が 1.28 ~ 1.43%、TiO₂ が 0.80 ~ 0.93%、MnO が 0.100 ~ 0.320%、Fe₂O₃ が 3.48 ~ 5.76%、Rb が 86 ~ 139ppm、Sr が 239 ~ 311ppm、Y が 36 ~ 49ppm、Zr が 163 ~ 198ppm であった。また、瓦器は、Na₂O が 0.65 ~ 1.03%、MgO が 0.77 ~ 1.29%、Al₂O₃ が 22.8 ~ 25.5%、SiO₂ が 63.3 ~ 65.5%、P₂O₅ が 0.137 ~ 0.698%、K₂O が 1.86 ~ 2.40%、CaO が 0.58 ~ 0.79%、TiO₂ が 0.95 ~ 1.07%、MnO が 0.047 ~ 0.103%、Fe₂O₃ が 3.95 ~ 7.01%、Rb が 96 ~ 125ppm、Sr が 99 ~ 133ppm、Y が 40 ~ 49ppm、Zr が 143 ~ 193ppm であった。

図 73 に各元素の分布図を種別ごとに示す。

黒色土器 (分析 No. 1 ~ 7) と瓦器 (分析 No. 8 ~ 14) の化学組成を比較すると、Na₂O、P₂O₅、

CaO、TiO₂、MnO、Srといった複数の元素において、分布が明瞭に異なった。

第5項 土器材料の特徴

黒色土器(分析No. 1)および瓦器碗(分析No. 8)の胎土について薄片の偏光顕微鏡観察と蛍光X線分析を行った。薄片観察では、粘土材料が、微化石類によりいずれも淡水成粘土に分類された。また、砂粒組成の特徴から、いずれもa)堆積岩類とテフラからなるCg群に分類された。

分析No. 1の黒色土器胎土中には、湖沼浮遊生指標種群や湖沼沼沢湿地指標種群の珪藻化石、骨針化石が非常に多く含まれていた。また、砂粒物は、堆積岩類とテフラ起源の粒子を僅かに含む胎土であった。このことから、砂粒物を混和していない可能性が高く、かつて湖沼～湖沼沼沢湿地環境において堆積した地層粘土をそのまま利用したと考えられる。また、胎土中には植物遺体を多く含むことから、有機質な粘土と考えられる。

一方、分析No. 8の瓦器胎土中には、沼沢湿地付着生指標種群や陸域指標種群の珪藻化石が多く含まれていた。また、砂粒物は、堆積岩類とテフラ起源の粒子を僅かに含む胎土であった。このことから、砂粒物を混和していない可能性が高く、かつて沼沢湿地環境で堆積した地層粘土をそのまま利用したと考えられる。また、胎土中にはヨシ属の葉身に見られる植物珪酸体を多く含むことから、有機質な粘土と考えられる。

蛍光X線分析を行った黒色土器と瓦器では、黒色土器7点においてNa₂O、P₂O₅、CaO、MnO、Srが共に高い値を示すのに対し、瓦器7点ではこれら元素が共に低い値を示すなど、共通した化学組成を示す。分析No. 1とNo. 8以外は薄片観察を行っていないが、黒色土器、瓦器それぞれ共通した化学組成を示すことから、黒色土器、瓦器ごとに類似した胎土材料が利用された可能性を示している。一方、黒色土器と瓦器の化学組成は明らかに異なっており、法量、調整は共通する両者であるが、焼成方法と共に材料的にも変化があったと考えられる。

第6項 おわりに

井尻遺跡から出土した黒色土器B類碗と瓦器碗について、薄片の偏光顕微鏡観察と蛍光X線分析を行った。薄片の偏光顕微鏡観察では、いずれの土器も淡水種珪藻化石を多く含み、黒色土器B類碗が湖沼～湖沼沼沢湿地成粘土、瓦器碗が沼沢湿地成粘土を利用したと推定された。また、蛍光X線分析では、黒色土器、瓦器のそれぞれの化学組成に共通した特徴が見られたことから、それぞれ類似した胎土材料が利用された可能性が示された。一方、黒色土器と瓦器の化学組成を比較すると明らかに異なっており、材料的な違いが認められた。

参考・引用文献

- 安藤一「東海地域(伊勢-三河湾周辺)の弥生および古墳土器の材料」東海考古学フォーラム
岐阜大会実行委員会編「土器・墓が語る：美濃の独自性・弥生から古墳へ」：108-117、東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会。
藤根 久・今村美智子 2001「第3節 土器の胎土材料と粘土採掘坑対象埋植物の特徴」群馬県埋蔵文化財調査事業団編「波志江中宿遺跡」：262-277、日本道路公団・伊勢崎市・群馬県埋蔵文化財調査事業団。
小杉正人 1988「珪藻の環境指標種の設定と古環境復原への応用」『第四紀研究』27、1-20。
車崎正彦・松本 完・藤根 久・菱田 量・古橋美智子 1996「土器胎土の材料-粘土の起源を中心に-」日本考古学協会編「日本考古学協会第62回大会研究発表要旨」：153-156、日本考古学協会。

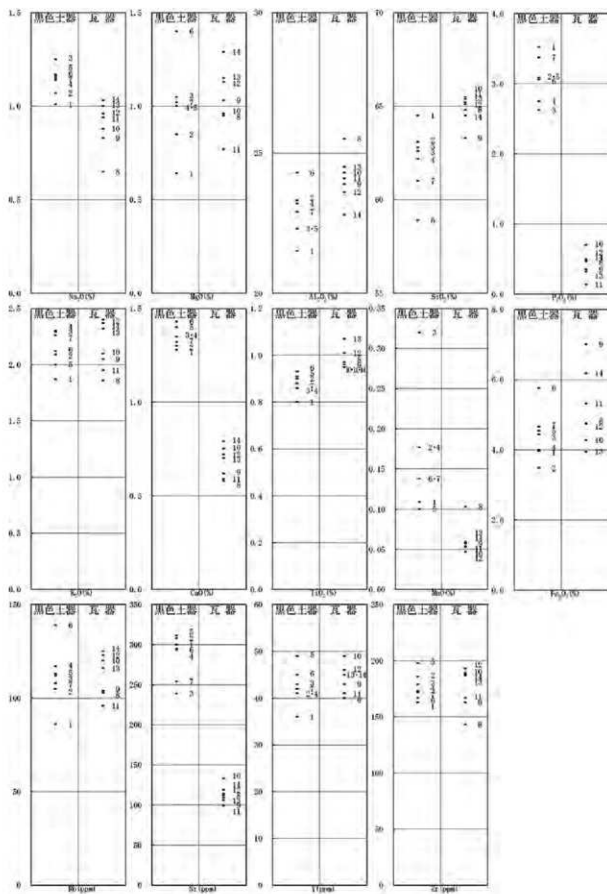


图 73 元素分布图

第5章 総括

今回、試掘調査を経て「井尻遺跡」が認定され、本調査に至り、豊富な資料が得られたが、遺跡の存在自体も、周辺の周知の遺跡と合わせ、平野部の小規模な微高地上に遺跡が散在する、この地域の状況を明確にしたと言える。

いまだ人為的痕跡は明らかではないが、弥生時代中期以前に淡水域から陸化し、やがて微高地の形成が始まり、侵食・堆積を繰り返しながら発達していく状況も明らかになってきた。

今回は遺構の検出が一つのみであったが、弥生時代中期には、既に人がその微高地に進出している事も判明し、古墳時代には部分的にでも水田を開発し、恒常的に利用していた事も分かった。

ただ、古墳時代後期から、飛鳥・奈良時代がほぼ空白期になっている理由は不明のままである。

平安時代前期も遺構密度が低い、この周辺が「牧」として利用されていた時期であろうか。やがて11世紀代に爆発的な遺構・遺物の増加が見られるのがこの遺跡の特質と言って良いかもしれない。

その中でも第4-2面 753 溝土器群3と第3-4面 930 溝で見られる、多量の黒色土器B類碗と瓦器碗の共伴が、考古学的な問題として最注目できる。この状況が土器編年上の一段階と認定できるか、数段階のものが混じった一括性の低いものと見るかによって、古代的な黒色土器から中世的な瓦器への変化に関わる歴史像まで異なるであろう。調査者としては、層位的にも一括性は高いと考える。

それらは屋敷地からの投棄と見られ、土器群内にも白磁碗などが混じる。さらに第3-4面 77・78 土壌墓では中国製青磁・白磁・青白磁の副葬品が見られ、経済力のある階層の居住が推測される。耕作地の開発も充分ではない段階で、経済力を持つという点で、立地からして、淀川の水運に関わる者の居住が想定できる。東播系須恵器や備前亀山窯の須恵器も、他地域との交流を示す。

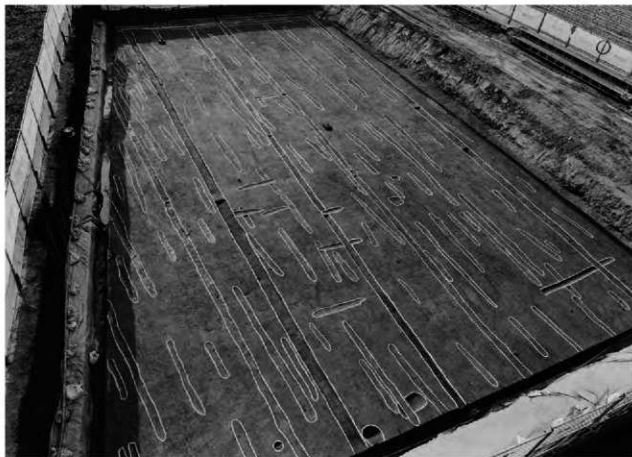
11世紀後半から続いたその状況も、13世紀後半には一変し、調査区内全面が耕地化する。それ以前から複雑な水路体系が存在し、部分的な耕地化はなされていたが、これは大きな画期であろう。一円的な、大規模な再開発があったと見て良い。時期的には淀川周辺の藤原氏の牧・荘園が春日宮領になっていく時で、それとの関連と推測される。また、それでも条里制地割の痕跡が認められないのは、この地域の特色と言えるであろう。

ただし、その時点で成立した耕地地区画が、一区画が大きくなり、平坦化が進行するとは言え、現代の土地区画にまで踏襲されているのは、その水路体系の完成度の高さを示すのであろう。微高地や旧水路の痕跡を利用し、複雑に張り巡らされた水路が今に残るのも、一つの歴史的景観と言える。

参考文献

- 原口正三 1973年『高槻市史』第6巻 高槻市役所
天坊幸彦 1953年『高槻通史』高槻市役所
橋本久和 1980年『上牧遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会
中世土器研究会編 1995年『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
古代学協会・古代学研究所編 1993年『平安京提要』角川書店
續伸一郎 2007年『瓦器から瓦貫へ―堺市域の出土資料を中心として』大阪歴史学会考古部会レジュメ
橋本久和 2012年『増補版 わたしの中世土器研究』真陽社

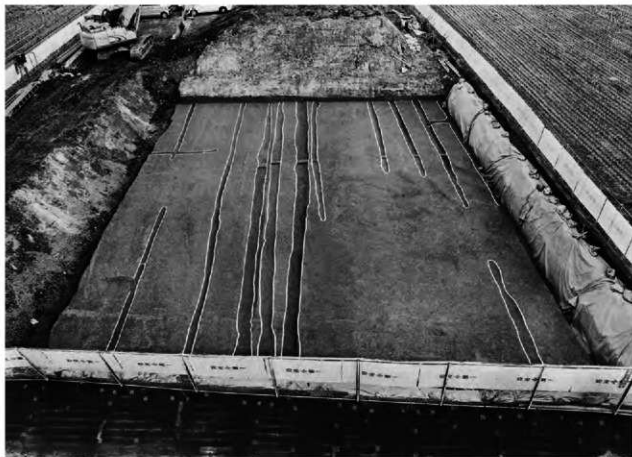
写 真 图 版



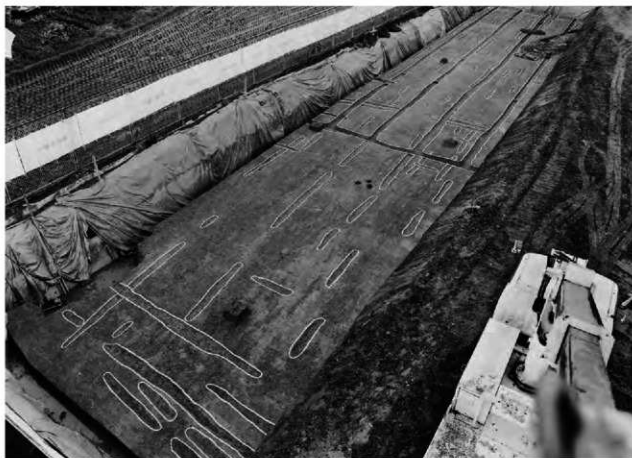
1 4tr. 第2-1面 北東から



2 1tr. 第3-1面 南西から



1 2tr. 第3-1面 南西から



2 3tr. 第3-1面 南から



1 4tr. 第3-1面 北東から



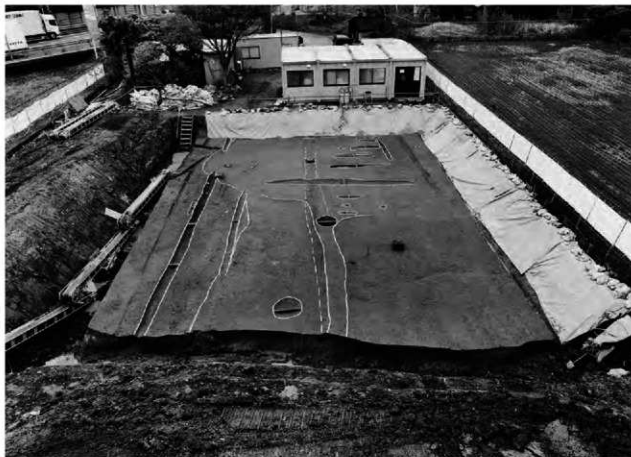
2 5tr. 第3-1面 南西から



1 6tr. 第3-1面 北東から



2 7tr. 第3-1面 南西から



1 1tr. 第3-3面 南西から



2 2tr. 第3-3面 南西から



1 3tr. 第3-3面 北東から



2 3tr. 第3-3面 南西から



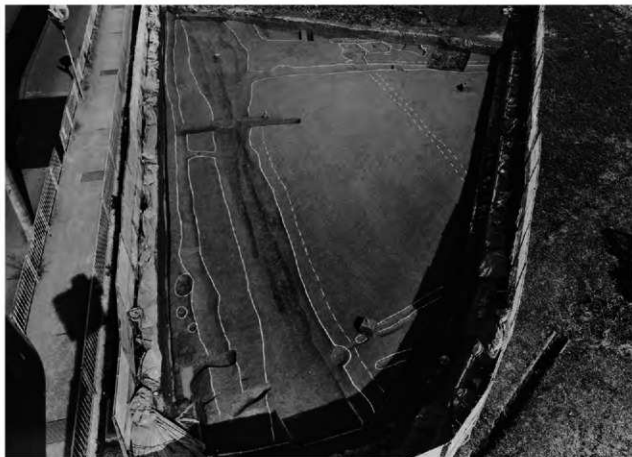
3 4tr. 第3-4面 南西から



1 5 tr. 第3-4面 南西から



2 6 tr. 第3-4面 北東から



1 7tr. 第3-4面 南西から



2 3tr. 第2-1面 北東から



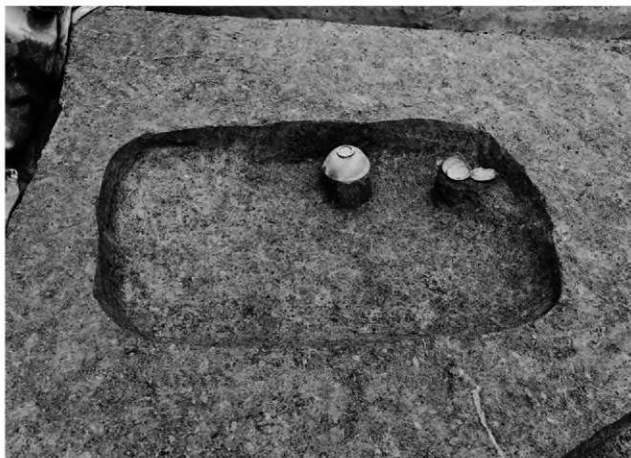
3 6tr. 第1-2面 1125大型土坑 東から



4 2tr. 43侵食痕内 第3-4面 北東から



1 4tr. 第3-4面 77土墳墓 南東から



2 4tr. 第3-4面 78土墳墓 南東から

図版 10



1 3 tr. 43 侵食痕内 第3-4面 東から



5 4 tr. 78 土塚墓 断面 北西から



2 3 tr. 43 侵食痕内 第4-2面 東から



6 4 tr. 81 土坑 南東から



3 4 tr. 77 土塚墓 断面 南東から



7 4 tr. 46 溝 断面 北東から



4 4 tr. 77 土塚墓 遺物出土状況 南東から



8 45 溝 断面 南西から



1 5 tr. 930 溝 北東から



2 930 溝土器群 1~3 出土状況 北東から



4 930 溝土器群 3 南東から



3 930 溝土器群 1 北東から



5 5 tr. 44 溝 断面 南西から



1 4 tr. 46 溝 断面 南西から



5 1339 井戸 上層 遺物出土状況 南から



2 6 tr. 1161 土坑 南東から



6 1339 井戸 下層 断面 南から



3 6 tr. 1339 井戸 上層 断面 南から



7 1339 井戸 下層 遺物出土状況 南から



4 1339 井戸 上層 遺物出土状況 南から



8 1339 井戸 完掘状況 南から



1 7 tr. 第3-4面 877 溝土器群1 南から



4 1 tr. 第4-2面 768 溝土器群1 南東から



2 7 tr. 877・878 溝 断面 南東から



5 2 tr. 第4-1面 771 溝土器1~3 南東から



3 3 tr. 第4-2面 北東から



6 2 tr. 771 溝 土器4 北西から



7 2 tr. 771 溝 土器5 北東から



1 1tr. 第4-2面 南西から



2 2tr. 第4-1・2面 西から



1 4tr. 第4-1・2面 東から



2 4tr. 第4-2面古 東から



1 5 tr. 第4-1面 南西から



2 5 tr. 第4-2面 南西から



1 6tr. 第4-1・2面 北東から



2 7tr. 第4-1面 南から



3 7tr. 第4-2面 南から



1 1tr. 第4-2面 753 溝土器群3 北東から



2 753 溝土器群3 北東半 東から



1 753 溝土器群3 南西半 東から



2 753 溝土器群3 南西から



1 1 tr. 753 溝 断面 南西から



5 753 溝土器群 3 土器 18 周辺 東から



2 753 溝土器群 3 部分 南東から



6 753 溝土器群 3 検出 2 回目 北東から



3 753 溝土器群 3 部分 北東から



7 753 溝土器群 3 検出 2 回目 南西から



4 753 溝土器群 3 鉄器 1 出土状況 南西から



8 1 tr. 753 溝 下層 遺物出土状況 南西から



1 2 tr. 753 溝土器群1 南西から



5 283 溝 土器4・5埋納ビット 南東から



2 2 tr. 753 溝土器群2 西から



6 4 tr. 第4-2面古 401 溝断面No.1 北東から



3 3 tr. 第4-2面 283 溝 南東から



7 4 tr. 401 溝 断面No.2 北東から



4 283 溝 断面・土器4・5 南東から



8 4 tr. 401 溝 断面No.3 北東から



1 4 tr. 408 溝 断面 北東から



5 1 tr. 1178 土器 1 南東から



2 7 tr. 950 溝 断面 南西から



6 1 tr. 1179 土器 2 南東から



3 7 tr. 954 溝 断面 南西から



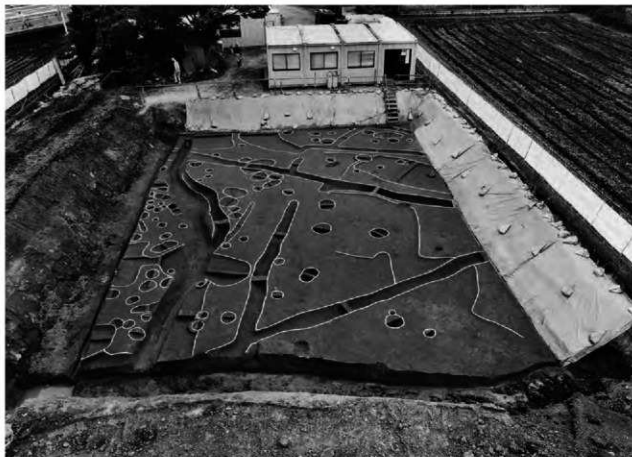
7 1 tr. 1373 土坑 南西から



4 2 tr. 709 ビット 南東から



8 3 tr. 236 落込礫群 1 東から



1 1tr. 第6面 南西から



2 2tr. 第6面 南西から



1 3tr. 第5・6面 北東から



2 7tr. 第6面 南から



3 4tr. 第6面 (左側のみ) 北東から



1 5 tr. 第6面 南西から



2 6 tr. 第6面 北東から



1 2 tr. 第6面 1105 土坑 西から



5 4 tr. 第6面 395 土坑 西から



2 3 tr. 第6面 106 土坑 北西から



6 5 tr. 第6面 1030 ビット 北西から



3 4 tr. 第6面 193 ビット 南東から



7 1 tr. 第6面古 1475 溝土器1 北西から



4 4 tr. 第6面 191 土坑 北西から



8 1 tr. 第6面古 1475・1476 溝合流部 北から



1 4tr. 第8・9面 東から



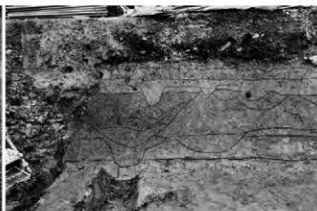
2 6tr. 第6面 1335溝 断面 南西から



4 2tr. 第7面 1071土坑 北西から



3 6tr. 第6面 1336溝 断面 南西から



5 1tr. 北東壁

図版 28

3-3 層



77 土壇墓



20-3



20-1

20-2



20-10

20-7

78 土壇墓



20-14

20-15

20-17

80 ビット

20-12

14-1

(遺物の番号は挿図番号)

81 土坑



14-4

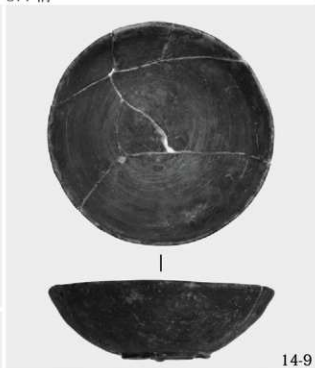


14-3



14-2

877 溝



14-9



14-7



14-8



14-10

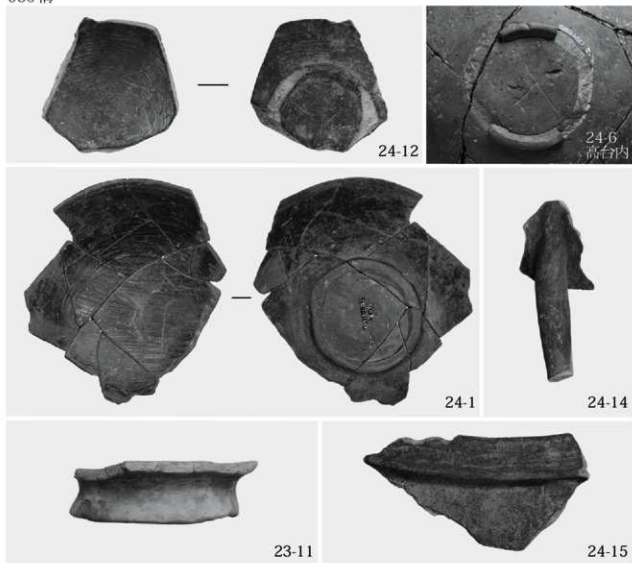


14-12

图版 30
877 沟



930 沟



930 溝



24-8



24-4



24-5



23-13



23-14



24-13



23-1



23-4



23-6



23-8



23-9

图版 32

1161 土坑



26-1



26-3



26-8



26-10

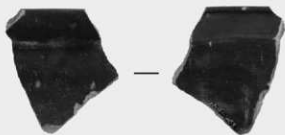


26-2



26-11

1339 井戸



28-13



28-2



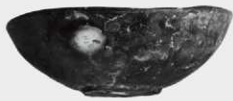
28-12



28-1



28-6



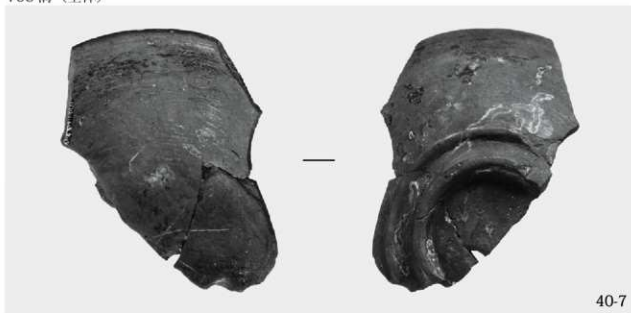
28-5



28-7



753 溝 (全体)



753 溝土器群 1



753 沟土器群 1



40-3



40-1



40-1 底部内面

753 沟土器群 2



40-5



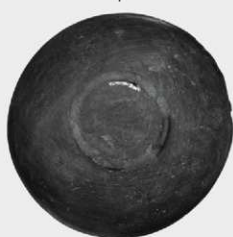
34-1



34-3



34-5



35-2



35-5



|



35-10



36-2



36-8



36-9



36-15



|



36-1



|



36-16



|



36-4



|



36-14



36-11



36-18



36-22



36-21



35-9



37-1



37-2



34-10



35-11



35-12

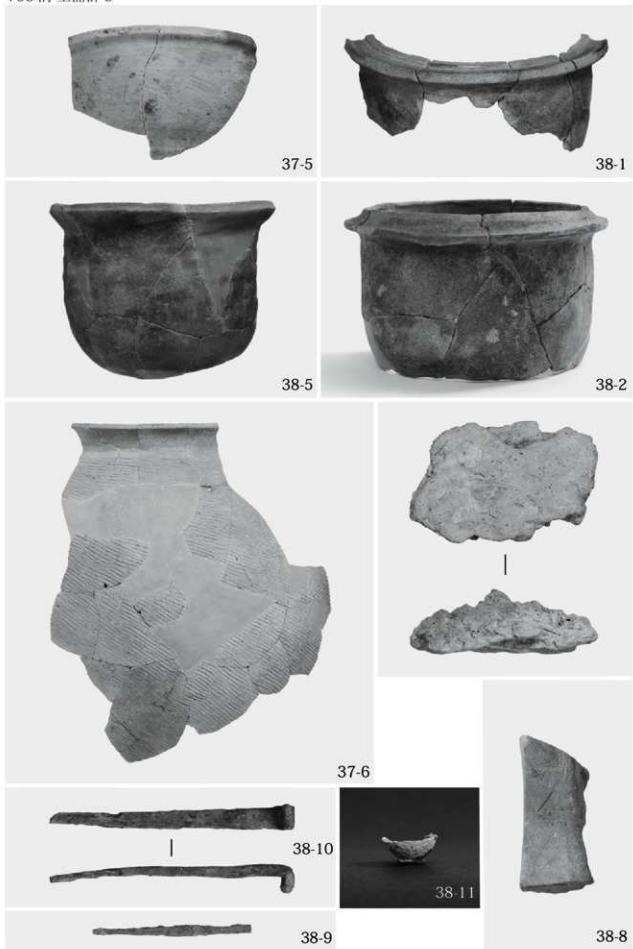


35-13



37-8

753 沟土器群 3





43-1



43-2



43-3



43-5



43-6



43-7



43-11



43-10

753 溝 (試掘 108 溝)



40-8



40-12

283 溝 土器 4 内



45-21

45-22

283 溝



768 土器群 1



図版 42

768 土器群 1



709 ピット



541 ピット



106 土坑



1373 土坑



55-8



55-6



55-7

395 土坑



419 土坑





1105 土坑



61-11



61-5



61-1



61-2

422 沟



455 沟



1475 沟



65-1



65-2

1476 沟



65-3

图版 46
1476 沟



1475 · 1476 沟合流部土器群 1



1475 · 1476 溝合流部土器群 1

1477 溝



图版 48
1477 沟



報告書抄録

ふりがな	いじりいせき							
書名	井尻遺跡							
副書名	一般国道170号(十三高槻線)道路築造事業に伴う埋蔵文化財調査							
巻次								
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第255集							
編著者名	三宮 昌弘							
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 In072(299)8791							
発行年月日	2015年3月20日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
いじりいせき 井尻遺跡	おおさか府 大阪府 たかのつねし 高槻市 いじり 井尻1丁目	27207	9580	34° 86′ 04″	135° 65′ 24″	平成25年11 月1日～平 成26年5月 30日	2480㎡	一般国道170号 (十三高槻線) 道路築造
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
井尻遺跡	集落	古代～ 中世	屋敷地区画溝・水路・土 坑・ピット・落込・段 差・井戸	黒色土器・瓦器・土師器・須恵 器・青磁・白磁・金属器		屋敷地区画溝に大量の黒色土 器・瓦器・土師器の共存。		
	水田	古墳	土坑・ピット・落込・溝	土師器・須恵器		古墳時代前期～中期の小区画 水田		
	水田	中世	水路・水田・土坑・ピッ ト・溝・畦畔・段差	瓦器・瓦質土器・土師器・須恵 器・白磁・青磁		現代にまで踏襲される水路・ 耕作地が鎌倉時代に成立。		
要約	11世紀後半の、屋敷地と考えられる方形区画溝が複数検出され、大量に投棄された黒色土器・瓦器・土師器の共存が見られた。瓦器出現期の貴重な資料と言える。完形の青磁碗や青白磁盒子などを副葬した土壇墓が2基発見された。他に13世紀の瓦器と木製品が共存した井戸もある。13世紀後半には、現代に踏襲される水路・耕地区画が成立する。その他、古墳時代や弥生時代中期の土坑も検出した。							

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第255集

井 尻 遺 跡

一般国道170号(十三高槻線)道路築造事業に伴う調査

発行年月日 / 2015年3月20日

編集・発行 / 公益財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台3丁目21番4号

印刷・製本 / 株式会社 中島弘文堂印刷所
大阪市東成区深江南2丁目6番8号